
呉藍の雪～海兵さんの奮闘記～

リード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

呉藍の雪々海兵さんの奮闘記

【Nコード】

N8295N

【作者名】

リード

【あらすじ】

根は真面目だが愉快犯という相反する一面を持つ、祖父譲りの偏屈で理屈屋で浮世離れた雰囲気若干する本好きの専門学生が寝て起きたら大海賊時代でしたなんて嘘の様な本当の話を体験し、赤ん坊からの人生リセットにいらいらしつつも愉快痛快（本人的）に生きる主人公の話。

オリジナル要素が濃いです。

初めの方、少し改造しました。

一話 起きたらone pieceの世界とかどんなドッキリ？（前書き）

この話は捏造がされています。

作者の若干ご都合主義が入るかもしれません。

文章が下手ですが宜しく願います。

一話 起きたら one piece の世界とかどんなドッキリ？

SIDE：シャルロッテ

シャルロッテ・アルトウル・フォン・エーデルシュタイン。

ドイツ語の読みのそれが私の現在の名前である。

舌をかみそうな、中身日本人外見外国人な私につけられたこの世界での私の名前。

しかし、未だによく分からない。

もともと私は日本の学生だった。

明日から学校だと布団に入って寝たら、赤ん坊になっていて正直たちの悪い冗談にしか思えなかった。

というより泣いた。

そりやもうわんわんと、夢だと思ったら夢じゃなかったってそれどんな胡蝶の夢？

排せつとか食事とか人の手を借りないといけないなんて、正直精神が崩壊しそうだった。

しかも、何日か過ぎて耳がようやく普通に聞こえるようになった時、ありえないことを聞いた。

私がいるの“東の海”^{イストブルー}ってどこなんだって。

本当に、ありえない。お祖父ちゃんなら、「この世には不思議なことなど何もないのだよ」なんて言いそうだけど、自分の身にその不思議な事が起こってるわけで、

本当に現実か・・・！とげんなりしたのはもう5年も前の事。
人間って開き直らないとやってらんないよね・・・！

なんて精神的にタフになりつつも原作なんて私には関係ねーや。
と、地味に開き直って本を読んで過ごしていたが、ある時に食べた
果物が悪魔の実なんて小説にもないようなべたなおちをやらかして、
暴力をふるわれる日々。

顔も見たことのないし名前も知らない父親譲りの深紅ともいえる濃
い赤の髪のせいで、

外見が同じくらいの子供に赤い悪魔とか名づけられるし、
私が普通の子供だったら性格が悪くなりそうないじめを受けた。

それからは島の殆どの皆から虐げられても、前世での記憶と経験を
生かし

ふてぶてしく流し、いじめてくる奴は言葉で十倍返しにしながら
結構愉快痛快（私的には）に過ごしていたけど・・・

島が海賊に襲われ、皆を殺していった海賊に悪魔の実の能力者とい
うことがバレて、どこかに売り飛ばすために船底に閉じ込められて
る。

しかも、この海賊団に能力者を力を封じ込める海楼石なんて高級な
ものはない。

その結果、能力者であるという理由だけでまだ五歳なのに両足と右
腕を折られた拳句、肋骨も何本か折られ、狭い牢屋の中で折られな
かった左腕を鎖でつながれ転がっているところだ。

少しでも船が揺れるたびに骨が軋むし、傷が痛む。
しかも頭も殴られたし、割れた額からも血がぼたぼたと流れている。

．．．もういつその事氣絶でもした方がましだろこれ。

能力を満足に使えないようにするためだろうか、この船に乘せられてから

だいたい二十日、水は与えられていたがまともな食事なんて与えられない。

朦朧とする意識の中で今までに体験した様々な出来事が走馬灯のよう
に流れ出した。

小さい頃に亡くなったお父さん、お母さん、猫のざくろが見える。

あ、今回はマジでヤバいかも。

三途の川ぽいに見えるし、彼岸行きかも……

1. \angle 2. \backslash 3. \circ 4. \angle

声がしたので、ゆっくりとそっちの方向に痛む体を向ける。

(なんで・・・)

上等なスーツを着ている私を買いに来たであろう人間に私は苛立ちを籠めて、

体中から力を振り絞って作り出した氷を叩き付けた。

SIDE：青キジ

はあ、めんどくさいねエ。

イーストブルー
東の海に来て、ようやく休みがとれたと思ったら海賊退治か・・・

俺の顔を見て、何で青キジがこんな所にとか叫ばれてるけど気にしない。

気にしすぎるのもめんどくさいし、偽装してあるけどこれは海賊船だし、積荷を守れ！という声も聞こえてるから、奴隷もしくは強奪した品物を積んでいる可能性がある。

こんなに罪が明白なら、だらけきつた正義をしつかり行使するしかないだろう。

「めんどくさいから、とつとと終わらせようか」

連行してく船が無いから斬りかかってくる奴は問答無用で凍らせていく。

能力を使いながら下まで降りて行って船底に近い船室のドアを開けたら、

そこには俺が睨んだとおり法によって禁止されている製品や凶鑑ヒューマンショップに載っているような希少な動物、そして人間屋に売る気だったのだろう、水槽に入れられ枷を付けられた女の人魚が一人。

その檻に入れられていた動物、人魚の健康状態はまあまあ良かった。

そりゃそうだろう、五体不満足であったり、死にかけであったならば高い値は付かない。

さつき凍らせた奴からとつた鍵を使い、檻を開け放ち動物達を解放する。

水槽にいれられていた人魚を海に帰し、ほぼ全てを解放し終わり、やれやれと伸びをしている俺の耳に、じゅらりと、微かに鎖の音が

聞こえた。

檻は全て解放し終わったと思ったから、驚いた。けどもう一度耳を凝らすとこの音はどうやらこの部屋の下から聞こえてくるらしい。

部屋を見回し発見した、隅の狭い階段を通って下に降りる。するとそこには、明りの無いくらい部屋の中でも分かるくらいの赤い髪をした小さな子供が鎖に繋がれて狭い檻の中に入れられていた。

微かに呻^{うめ}いているから生きていることは分かったが子供はひどい状況だった。

逃げない様に折られている足や、腕に、頭から流れる血。服から出ている部位のあちこちにある擦り傷切り傷があまりにも痛々しい。

・・・庇護しなければならぬ年齢である子供の痛ましい姿に思わず眉を顰^{ひそ}める。

「おいおい、大丈夫かい。」

声をかけながら子供に近寄ると、その子供はゆっくりとこちらを向いた。

煉獄の様に真っ赤な髪に青みをおびた花緑青の瞳を持つ子供がそこにはいた。

そいつは俺をその綺麗な瞳で睨みつけた後、思い切り氷と冷気を叩

きつけてきた。

その子供の能力に思わず瞠目する。

ロギア
自然系の能力者？

驚いた理由の一つに、こんな小さな子供が能力者というのもあったが、

俺がそれよりも驚いたのは、この子供が俺とほぼ同じ能力を持つ子供だということ。

思わず唖る。

何で、ちよつとチャリで散歩に出かけたただけなのにこんなめんどくさいことが起きるのかなあと、半ば八つ当たり気味に神を恨んだ。

子供は能力を使って力尽きたのか気絶して動かないし、その子供が動かなくなる前に見せた全てを警戒する瞳が頭を過る。子供が俺や医者を警戒し治療を拒否しないかと思ったが、緊急事態だ背に腹は代えられない。

「つたく、早く医者に見せないとねえ」

牢屋のカギを開き、子供につけられていた重い枷をとき、あつちこつち痛んでいる子供の体を傷つけないようにしっかりと抱きあげ、甲板に放っていたチャリに跨る。

目指すは、俺の軍艦^{ふね}。自分のできる最高の速度^{スピード}でチャリをこぎ出した。

一話 起きたらone pieceの世界とかどんなドッキリ？（後書き）

閲覧頂きありがとうございました。

青キジが大将になったばかりの頃を捏造して書いています。
誤字脱字などありましたら、気軽にコメントください。

主人公

シャルロット・アルトゥル・フォン・エーデルシュタイン

赤髪緑色の目の少女。

自然系悪魔の実、ユキユキの実を食べた雪人間。

（OPの世界に来る前は中禅寺秋奈、京極堂の孫でした。（捏造）

二話 一体何がとち狂ったらこつなるのさ!?(前書き)

こつやって少しずつ勘違いされていく主人公です。
NOTチートですので、最強ではありません。

二話 一体何がとち狂ったところなるのさ!?

SIDE：青雉

帰りたくないです。・・・それにあの島は嫌いです。そう少女は答えた。

それが昏睡状態から回復した少女が海軍本部の病室でした最初の会話だった。

俺が軍艦^{ふね}に連れていき医師に診せたところ、見かけよりも重症だったらしく、

少女は軍艦^{ふね}よりも設備がいい本部に連れていった。

(幸い、こちらの海での仕事は全て終わらせていたからだ)。

そして、少女の治療をした若い医師は苦い表情で、

「栄養失調に軽度の水分不足。額は割られ頭を強打した恐れがあります。」

何か後遺症が残るかもしれません。

両足、右腕は単純骨折で他の怪我に比べたら大したことはありませんが、

三本折れていた肋骨の内一本は臓器に刺さっています。

・・・もう少し保護するのが遅かったらこの子は死んでいたでしょう」

そう言った後、寝かしてある傷だらけの少女の髪を撫ぜた。

少女は髪を触られても目をさますことなく眠っている。
死人の様な青白い肌に棒の様な細い手足。

呼吸が微かに聞こえるから生きていると判断できるが
少女は死んでいるようだった。

きつと笑顔の方が似合うだろう可愛らしい顔を包帯やガーゼだらけ
にして、

服からのぞく手足はあざや細かい傷だらけで、
保護された少女の体軀は同じ年頃の子供と比べて明らかにやせ細っ
ていた。

「じゃあ、この子は任せたよドクター。俺はこれからセンゴクさん
達にこの子の事、報告しに行くようなんだわ」

それだけ言うと、センゴクさん達のもとに向かう。
たまたま会議が終わってすぐだったらしく、時間もあるようだった。
会議室にいたサカズキやボルサリーノさんおツルさんに挨拶もそこ
そこにセンゴクさんに話しかける。

「青キジ、早かったな」

少し驚いているセンゴクさんにあちらでの仕事が早く終わったこと
を告げ、少女の事を説明する。

報告が進んでいくにつれ、会議室に残っていた人達の顔がどんどん
顔が陰しくなっていく。

俺達は海兵だ。

ある程度、上に登ってきた海兵は政府の闇を垣間見たこともあれば、
天竜人の人間に対する扱いも目の前で見た時がある。

俺はあの子の今までの人生は限りなく悲惨でもそのどん底でないと

は分かっている。

知っている。だけど、まだ幼い子供が体験するのは悲惨の一言に尽きた。

俺の報告が終わった後、おツルさんが口を開いた。

「その子はどうするんだいクザン？」

「俺が面倒見ようと思ってるよ」

俺がそう言つと、話を聞いていた奴らのほとんど全員が啞然とした表情を見せた。

あんな、ちよつと酷いんじゃないの？

「お前じゃあ、子供の世話なんか出来んじやろ。親元に帰したほうがええ」

サカズキがそう言つと、ほとんどの人たちがうんうんと頷いた。

俺、子供好きなんだけどなあ・・・。

一人の子供の面倒くらい見れるんだけど。

「俺だって最初は帰そうと思つたさ、けどあれは酷過ぎると思つたんだよ」

「どういふことじゃ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・あの子、島民に売られたんだよ」

また、ざわつく会議室。

あの子を親元に帰そうとして、あの海賊船の航海日誌を読み、

襲撃した島を探し、あの子の故郷に部下をやって分かった事。

悪魔の実を食べた幼い少女は島の人間から迫害され、

襲撃を生き延びようとした島民に海賊に引き渡された。

少女が島民や海賊に抵抗できなかった原因であろう少女の実の母親も襲撃の時の傷がもとで死んでいる。庇護してくれる母親もいない島に、悪魔の実を食べてしまっただけで子供を迫害するような島に、あんなにボロボロの少女を帰せない。

「それに、俺と同じような能力なんだ。俺が引き取った方がいいと思うんだわ」

俺の言った最後の一言で、会議室がまた喧騒に包まれたのはまた別の話。

おまけ

SIDE：シャルロッテ

帰りたいかとか母の事を聞かれて、

「帰りたくないです。・・・それにあの島は嫌いです」

と背の高い私が勘違いして攻撃してしまった男の人に答えただけで

何がどうなったのか、

「そう、じゃ君の名前は？」

「シャルロッテ。・・・なんでそんなこと聞くんですか？」

「だって、俺と君、今日から義親子だし。あ、俺はクザン。お父さんとも呼んでくれたらうれしい。・・・シャルロッテ、宜しくね」

「へ、！？」

訝しげに尋ねたら予想していなかった答えをかえされて、おもわず間の抜けた声をあげた。

家族の中で一番お祖父ちゃんに似て冷静だと言われるけど、流石にこれは無いだろう。

初めてあった人に、かぶっていた猫が盛大にはがされた瞬間だった。

何でだコレ！！

二話 一体何がとち狂ったらこいつなるのさ!?(後書き)

応援ありがとうございます。
これからも頑張ります!!

三話 髪の色はほつといてくれませんか？（前書き）

この小説には赤毛（赤髪）に対するちょっとした差別の言葉があります。

苦手な方は読まないことをお勧めします。

あとがきにソレの由来というか、調べた結果を載せておきます。

三話 髪の色はほっといってくれませんか？

SIDE：シャルロッテ

めんどくさいことになった。

溜息をつき、折れていない方の腕で髪をかきあげる。

なんでもクザンさん。もといお父さん曰く。

書類も受理されて義親子になってるからだそうでそれは良いんだけど。

（いや、迷惑掛けてると思うけど、今の子供の体で手続きの変更は出来ないし）。

実際故郷に愛着もないから、渡りに船の状況だったし。

「これは、ないだろう」

足が治ってから引き取られたお父さんの家で私は呻いた。

私が、見て思わず呻いたソレは・・・

テーブルの上に置き去りにされている書類である。

前の世界よりも情報の伝達手段が整っていないこの世界では重要と言っても過言でない。

なのに、重要なはずなのに忘れられていつている書類を見て驚いたと同時に呻いたのだ。

忘れ物なんぞしているのを見たことのない祖父に育てられたと言っ

ても過言ではない私はどうしたらいいのか途方に暮れた。

（え、なんであの人こんな重要なもの忘れてんの？どうしたらいいのコレ？）

思わず別の次元にいるであろうお祖父ちゃんに助言を求めた。

思わず呆けてしまった。

だが、早く届けに行くべきだろうと茶封筒に入っている書類を小脇に抱える。

おつきくて持ちにくい。

体が小さくなったことをこんな些細なことで思い知らされる。

実年齢を考えると少し、なさけない。

「行くのはいいんだけど・・・一般人って本部の中って入れるんだっけ？」

深紅や、煉獄の燃える炎と例えられる真っ赤な髪（ここに来てから一番のコンプレックスだ）を隠すために大きいキャスケット帽をかぶりながら呟いた。

（入れたよ、最近の軍って一定の場所までは書類にサインすれば入れるんだ・・・）

傍から見れば、キャスケット帽を被ってきよろきよろしている妖しい子供だろうな・・・。

その光景を想像して、ひきつった笑いの出てきそうな口元を引き締める。

しかも、

「ここ何処・・・」

どこもかしこも似たような廊下だったために結構奥の方まで迷い込んでしまったらしい。

（この歳で迷子なんて!!）

自分の昔ではありえなかった行動。

それに半ば、愕然とする。

（本気でないな。うん）。

自分の情けなさの不甲斐なさに軽く涙腺が緩んできた。

（このからだが小さいからって精神まで引つ張られて幼児化しなくてもいいのに・・・!）

それでも、お父さんを探すために顔をあげて道を探す。

しかし、私はその第一歩を踏み出す事はなかった。

「ガキがこんな所で何をやってるのだ!!」

という甲高い耳障りな声によって。

SIDE：ドレーク

俺の目の前には、信じられない光景が広がっていた。

この海軍本部の広い廊下に結構大きな人だかりができています。

その人だかりの中で起きているのは、まだ幼い子供を俺より階級が上の大人が

ヒステリックに怒鳴りつけていることだった。

おそらく一般人の子供が、間違っってこんな奥の方に迷い込んでしまったのだろつ。

大きな帽子を被った少女は小さな体をさらに小さくして俯いてしまつてゐる。

こんないたいけな子供を怒鳴りつけて何が楽しいのか!?

きつと、人だかりになつて事態を見ている上官や同期の海兵や部下達は

俺と同じように齒がゆい思いをしているのだろつ。

（怒鳴りつけてゐる大人がこの中で位が一番上の少将なのだから! !）。

「しかも、何だその髪の色は! ! この海軍本部にけがらわしい娼婦の娘が入るなんぞ許しがたいことだ! ! さつさと立ち去れ! !」

それは、古くにあつた迷信や法律の一つで、未だに信じてゐる人間がゐるのを知つてゐた。

確かに仕事柄様々な土地の様々な人々を見る俺でも見たことのないくらい、

その子供の髪は真つ赤だったが、上官だからと言って人間として言つたら悪いことがある。

後の事も考えず子供の事を助けようと口を開こうとしたが、その前に子供が口を開いた。

「確かに、間違つてこんなに奥に入ってしまったことは謝罪しますが、かつてに人の生い立ちを決めつけしないで欲しいですね。近頃の

研究で赤毛は遺伝子の突然変異によって引き起こされる劣性遺伝であると考えられているということをご存知ないのですか？」

俯いていた顔をあげ、僅かに涙ぐみながらも毅然として上官の意見に反論した。

それは理路整然とした、真っ直ぐな返答で。

反論もされないような、グウの音も出ないようなしつかりとした意見だった。

幼い子供に真っ向から反論を叩きつけられた屈辱で顔を真っ赤にして押し黙っている上官。

「・・・ああ、なるほど古くからある迷信、法律、風習を信じ切つて私と私の親を侮辱なさったのですか。海軍本部の将校殿はなかなか愉快的性格と頭をなさっているようですね？」

その少女は、その綺麗な緑の目に冷めた光を帯びて痛烈な皮肉を浴びせかけた。

「うるさい小娘が!!」

かつとなったのだろう、上官に思い切り頬を叩かれよろめいた少女。もう一回少女を叩こうとした上官と少女の間に入りこんで上官の手を掴み、止めた。

「何をする、ドレーク少佐!!」

顔を赤くしたまま、唾を吐き散らす上司に溜息を吐きそうになる。が、ここを退いて少女を殴らせるわけにはいかない。

（腕に包帯を巻かれているから怪我をしているようだ）。

「ビル少将、貴方こそ何をしているのですか？私には若い少女になり散らす品位に欠けた行いにしか見えなかったのですが？」

俺の言葉を聞いて少将はさらに顔色を赤くしたが、大きな声で

「私はこの生意気な子供をしつけているのだ！！だいたいこんな気味悪い赤毛の子供を持つ親なぞ馬の骨に決まっている！！」

その言葉を上官が言った瞬間、この場のざわめきが大きくなり、気温が猛烈に下がった。

その場を支配するような、ちりちりとした覇気が起こる。

カツリ、カツリと海軍本部の石でできた廊下をゆつくりと海軍本部大将の青雉と赤犬が現れた。

ビル少将はその顔を見て青ざめさせ、人だかりのざわめきは大きくなる。

「・・・お父さん」

叩かれた頬を赤くしながら少女は、大将青雉を見て呟いた。

「シャル・・・、大丈夫かい？」

「うん、お父さんが書類忘れてたから届けに来ただけで、邪魔だったかな？」

「いや、あともう少ししたら会議だから助かったわ、ありがとう」

大将令嬢を傷付けたと知り、さらに顔を青ざめさせていくビル少将と驚きにざわめいている人だかりはシャルと呼ばれた少女の血縁関係に驚いている。

大将青雉と少女はほのぼのとした親子の会話をくり広げている。

「ドレーク少佐」

「はっ！」

今度は大将赤犬に声をかけられる。

何かされるのかと思わず声がこわばるが、予想より斜めに飛んだ言葉をかけられた。

「本日の業務は終了しておるか？」

「終了しています」

「ならば、命令じゃこの娘を医務室に連れていった後、会議の終わるまで護衛せよ。わしらはこやつを連れていく」

「了解しました」

大将達に敬礼をした後、思いもよらないことに目を白黒させているシャルと呼ばれた少女を抱きあげ、周りの人だかりを抜けて医務室に連れていった。

俺と少女が曲がり角を曲がった瞬間、聞こえた悲鳴は気のせいだと思いたい。

SIDE：赤犬

なんじゃこれは・・・

わしは呆れた表情をすることしかできんかった。

幼い子供が誤って奥に入り込んだだけじゃのに、怒鳴りつける馬鹿。

しかも、調子にのって子供の髪色や親の事まで侮辱しだした。

呆れていたわしも、流石にこれはやりすぎじゃあと、

その馬鹿を止めようとしたらその子供は目を冷たく光らせながら淡々と反論していく。

幼いのに此処まで賢い子供がいるんかと感心していると青雉が来た。

「あらら、あの馬鹿少将。人の娘に何言ってるんだろうね」

・・・目が笑ってないうえに、冷気が漂い始めちよる。

「落ちつけクザン」

「なあに言ってるんのサカズキ。俺は落ち着いてるよ」

ああ、これはキレかけちよるな。

子供を侮辱し続けとるバカに冷めた視線を送っているクザンを見て溜息をついた。

クザンがこのありさまじゃと。

なんじゃ、あの海兵の面汚しと考え憤っていたわしの頭の方が冷静に冷える。

それでも、わしらは大将。

騒ぎを大きくせんように見守ることしかできん、そのうえこの騒ぎに割って入ることもできん。

クザンも、子供の事を思いつつも耐えているようじゃし、X・ドレーク少佐が止めに入ったからこの騒ぎも収まるじやろうと思っちゃったわしの考えは甘かった。

あんの馬鹿、こともあろうに子供を最後まで罵りおった。

民間人に手を上げるとは・・・降格決定じゃの。

クザンはキレちようし、ドレーク少佐と子供は固まっちゃるし、人だかりも驚愕しちやるしのお。

わしは溜息したいのを堪えてドレーク少佐に命令を下し、クザンの娘をこの場から遠ざけた。

まあ、その後の馬鹿の結末は哀れなものじゃったと言っておこう。

三話 髪の色はほつといてくれませんか？（後書き）

昔の西洋圏、特にヨーロッパの方には「赤毛には近づくな、噛んでくるから」といった風潮や、「娼婦は髪を赤く染め赤い肩掛けをまとい」といった法律があつたそうです。他にも赤い髪は地獄の炎の色、赤い髪は地獄に近づきすぎたせいという話もありましたし、フランスやヨーロッパの一部で残っていた言い伝えでは「母親が月のある時に身籠ったこどもは赤毛になる。そして血にまみれてできた子だからこそ血が流れるのを好む。赤毛が近くにいるだけで、傷がふさがらなくなるといふのはその為だ」。

ワンピースの世界ではまだこの様なことがありそうと思って文中の様に表現しました。不快な気分にしたのなら申し訳ございません。これからも応援よろしくお願いします。

ビル少将

金とコネで上にまで登ってきた、無能少将。周囲の目撃もあり、青雉の娘（一般市民）に暴力をふるったとされ、赤犬の手によって二等兵まで降格された。（青雉がそのあと何をしたのかは明らかになっていない）

セリナ・エレネ・フォン・エーデルシュタイン

シャルロッテの母親。金髪碧眼の美女。

家格の高い貴族の娘だった。（伯の爵位持ちで世界政府の成立時からある名門貴族の直系）（捏造）

貴族一の美貌と称されるような美しい人だった。シャルロッテを身ごもった際に勘当されている。

四話 ころやって地味に広がる勘違いの輪（本人無自覚）（前書き）

PV6 500アクセス達成しました！

ありがとうございます！！

四話 こうやって地味に広がる勘違いの輪（本人無自覚）

SIDE：シャルロッテ

なんで、こうなるの・・・と、呆然と目を見開いた。

お父さんの役に立つために書類を届けに来たのに、絡まれて殴られた。

しかも現場を見られて逆にお父さんに迷惑をかけるなんて・・・

意味無くない私の行いって・・・

お父さんに引き取られる前までいた医務室に連れて行かれて、治療を受けている最中にそんな事を考えた。

骨折していた腕の包帯もついでにかえてもらい、中庭に連れてかれた。

いくつかあるベンチの一つに腰掛ける。

「大丈夫か・・・？」

暖色の髪色をした水色の様な青い目の海兵さんに尋ねられた。

「大丈夫です」

それだけ答え、頬に当てたぬるい氷嚢の中にユキユキの実の能力を使って氷を作りだす。

「そうか・・・」

それだけ言ったあと、少佐と呼ばれていた人は黙り込んでしまった。

気まずい沈黙が続く。

耐えきれずに言葉を紡いだ。

「・・・ごめんなさい。少佐さん、私のせいで迷惑をかけてしまつて」

座ったまま頭を下げる。

「謝るのならこちらの方だ。・・・少将を止められずに怪我をさせるなんて」

そつと俯いていた顔をあげられ、まだ少し赤みの残っている頬をツウと撫でられた。

優しく生真面目でいい人なんだなこの人・・・。
おもわず目元を緩める。

「いえ、その、迷い込んでしまった私が悪いので・・・」

気付かれない様にそつとその優しい色をした真っ直ぐな瞳から目をそらす。

真っ直ぐすぎて、全てを見抜かれそうな気がした。

そつという目は苦手だ、祖父を思い出す。

あの人も全てを見透かす真っ直ぐな瞳をもっていた。

この世界に生を受けてもう五年、おそらくもう帰れないだろう。

そう、帰れないことぐらいというの昔に知っている。

（否、理解してしまった）。

だから、もう帰ることなんて諦めた。

それなのに、この人の目の真っ直ぐさの種類はもう会えない“祖父”と

もう帰れない“故郷”^{ふるさと}を思い出させる。

・・・だから苦手だ。それとなく話を変える。

「あの、そう言えば少佐のお名前は？叩かれそうになった時に助けてもらったのに名前を知らないなんて失礼ですよね」

謝るのではなく、お礼を、感謝の言葉を伝えるべきだと思った。そう言っと、少佐は少し驚いたような顔をしたがすぐに笑顔になって、

「X・ドレーク少佐です。・・・可愛らしい少女、^{レディ}貴女の名前は？」^{ディエス}

最初のほうは真面目に最後の方にはちやめつけが混じった言葉を聞いて。

おもわず笑顔が零れる。

「私はシャルロッテといいます。助けてくれてありがとうドレークさん」

その後、ドレークさんは面白い話をたくさんしてくれた。空を飛べる粉を持つ妖精の話、擦れば中から願いをかなえる魔人^{ジン}が

出てくるというランプ。

水中に沈んでいるという黄金郷の話もしてくれた。

空島という、空の上にあるという島の話もだ。

（正直、どこぞの天空の城かと思った）。

私は、遺伝なのかもしれないが本を読むのが好きだ。

歴史に哲学、エッセイ、雑学、ファンタジー、おとぎ話に民俗学。

フロイドに関口巽の目眩に昔の古文書だって読んだことがある。

祖父譲りの乱読家にして書痴と評したお爺ちゃんの友人の方もいた。知識を知るということが好きなのだ。

これだけはいくら持っていて損なんてしないから。

だから、ドレークさんの不思議な話を聞けたのがうれしかった。

楽しかった。初めて聞く話だった。

何より私のために話してくれるのがうれしかった。

顔が笑顔になるのを感じた。

ドレークさんはお父さんが私を迎えに来るまで話してくれた。

お父さんに、楽しかったか？と聞かれて、満面の笑顔でうん！と答えた。

その様子が、少し子供の様で恥ずかしかったのはその後、ソレに氣付いた私だけの秘密である。

SIDE：ドレーク

ああ、よかった。

この少女もこんな顔ができるのかと安心した。

その少女が笑顔になったことにひどく安心した自分がいるのに気付

いた。

医務室に連れて行く間も、キャスケット帽を深くかぶり、僅かに見える顔もほとんど無表情と言ってもいいくらいだった。

医務室で赤くなった頬を冷やすためいやいや帽子をぬいだ時は、眉間にしわが寄っていたが・・・

俺は少女が帽子を脱いだ時に完全にあらわになった綺麗な真つ赤な髪と

あどけなさが残るがそれでも美しいといえる顔に目を奪われた。

今は可愛いらしいお嬢さんだが十年後には美しいという言葉が似合うような淑女になるだろう。

しかし、無表情だった。

あまり感情の出ない性質らしい。

ソレにも驚いたが、淡々と自分の怪我について語っていくさいの瞳の光の無さにも驚いた。

彼女が腕の包帯を変えている間に、

彼女の怪我の処置をしている医者とは別の医者には彼女の事に聞いた。

曰く、少女はシャルロッテという名前で、自然系ユキユキの実の能力者でその能力のために人間屋に売られそうになっていたところを

ヒューマンショップ

大將青雉に助けられ養女として引き取られた。

自分の母親は死にかけて意識が飛んで守ってくれる人物がいない間に海賊から逃れたい島民によって売られ海賊にはボロボロにされ。

売られる以前は悪魔の実を食べてしまった為に迫害を受けていたという。

その子の瞳はただぼんやりとした光しか宿していなかった。

ビル少将に、親の事を出された時は苛烈な光を宿していたのに、今はただぼんやりと治療している医師の治療の手順を眺めているだけだ。

・・・この子はまだ子供なのに世の悪意を垣間見、闇の深淵を覗いてしまったのか。

医師の治療が終わった後、少女の気分転換になればと海兵たちの憩いの場でもある中庭に連れだした。
ぼんやりとした少女を中庭に設置してあるベンチに座らせる。

「大丈夫か・・・？」

おもわず深紅の髪に翡翠の目をした少女に尋ねた。

「大丈夫です」

少女はそれだけ答え、頬に当てた氷嚢に手をやっていた。

「そうか・・・」

少女は相変わらずの顔で、俯いた。

気まずい沈黙が続く。

耐えきれずに俺が何かを話そうとした時に、

少女は、シャルロッテは俺に謝罪の言葉を紡いだ。

「・・・ごめんなさい。少佐さん、私のせいで迷惑をかけてしまっ

て」

座ったまま頭を下げられた。

「謝るのならこちらの方だ。・・・少将を止められずに怪我をさせるなんて」

少女に謝られ俺はそつと俯いていた少女の顔をあげさせ、赤みの残っている頬をツウと撫でた。

少女は少し驚いたようだが、薄ら^{うつつ}表情を和らげた。

「いえ、その、迷い込んでしまった私が悪いので・・・あの、そう言えば少佐のお名前は？叩かれそうになった時に助けてもらったのに名前を知らないなんて失礼ですよね」

少女は少し慌てて話を変えた。それには少し驚いたが俺はすぐに笑顔になって、

「^{ディエス}X・ドレーク少佐です。・・・可愛らしい少女^{レディ}、貴女の名前は？」

最初のほうは真面目に最後の方には少しちゃめつけが混じった言葉を聞いた少女の顔から笑顔が零れた。

「私はシャルロッテといいます。助けてくれてありがとうドレークさん」

少女いや、シャルロッテは少し揶揄ったそうな笑顔を見せた。

その日は、ずつと俺が故郷の北の海で聞いたことのあるおとぎ話や、^{グランドライン}“偉大なる航路”での不思議な話を話していくと、シャルロッテの

どこか強ばった表情はどんどん和らいでいき、満面の笑顔を見せてくれるようになった。

俺には妹はいないが妹の様だと思い、ほんわかした気分になった。俺に笑顔を向けてくれて少し嬉しかったりもする。

・・・それを迎えに来た大将青雉に見られて、絡まれるようになったのはまた別の話。

おまけ

SIDE：クザン

シャルが、ドレーク少佐に笑いかけているのを見た。
綻ぶような笑顔はああいうことをいうんだなあと思った。

するとドレーク少佐が俺に気づいたらしくシャルに何事かを伝えた。
それを聞いてシャルは俺の方にはっと笑顔を見せた。

「お父さん！！」

ああやつぱ可愛いなあ、この娘は！！

シャルの目をキラキラさせてこんな満面の笑顔を見せてくれたドレーク少佐にはお礼を言いたい。

でも、やっぱり父親としては初めての満面の笑顔は自分の手で見せたかったもので、

ドレーク少佐にこれから少しちょっかいを出してやることを心に決めた。

四話 こうやって地味に広がる勘違いの輪（本人無自覚）（後書き）

シャルロット本人は気付いてませんが、瞳は無気力のように見え、自分も周りを警戒しています。（アラバスタまでの知識がなく周りは知らない人ばかりだったら気を張ります）

義父であるクザンとドレーク少佐にはやや心を開いているようです。自分をしっかりと見てくれるので。

応援ありがとうございます。これから頑張ります。

五話 南の海が、初めて来ました。
(前書き)

色々、巻き込まれるシャルロット。
最近、流すことも覚えたようです。

五話 南の海が、初めて来ました。

SIDE：シャルロッテ

能力者って、大変なんだね……。そんなことをしみじみ思った。

お父さんが長期任務で“新世界”に行くようだった為に私は南の海サウスブルーの海軍を退役した友人に預けられた。

マリンフォードは子供も少ないし、私があまり知っている人がいないからという理由で…

確かに、預けられた島の治安もまあいいし、綺麗なところです。

でも、預けるんだったら北の海ノースブルーにして欲しかった。

だって、私は雪ですよお父さん。

能力を使えば温度を下げられるとはいえ、制御がまだ完璧じゃないから

暑いのが駄目なんですよ、結構きついんです。

預けられた退役海兵の夫妻は優しいけど、この髪の色のせいで悪ガキに目をつけられたし…

何でも、この近所に住んでる赤毛の少年に似ているからなんだそう

だ。
特に生意気そうな目つきと態度がそっくりらしい、私の知ったことじゃあない。

巻き込まれるのが正直めんどくさいと思った。

こんな赤髪、お父さんが綺麗だねなんて言わなきゃ速効黒に染めたのに。

赤の原因である顔も知らない血縁上の父親に苛立ちを感じながら、内心舌打ちをした。

目の前には私が無視し、流していた悪ガキ達が気持ち悪い笑顔を浮かべてジワリジワリと近づいてくる。

後ろは結構大きい水路。こいつらは知らないが私は悪魔の実の能力者だ。

落ちるのは本気で遠慮したい。

お父さんに、能力の使い方や制御の仕方教えて貰ったけど、島の人たちにバレてまたあんな目に会うのはごめんだ。

でも、これ以上下がったら落ちる。

能力も使えない。

近戦も教えて貰ったけどこれは海軍の格闘術で一般人特に子供に使っていいもんじゃない。

というより銃とかの扱いの方が得意。

でもコレは絶対に使えない。

そんな事を考えている間に近づいてきた奴に

トン　　と　　押　　さ　　れ　　て　　、　　墮　　ち　　た

ゆっくりと視界が変わる、ニヤニヤ笑う悪ガキが消え、街並みが沈み、私の眼前にはただ青い蒼い空。

バシャンとどこか遠くで水音が聞こえた気がした。

ガボツ、気管に水が入り、吐息が水に溶けていく。

もう随分昔に体験したことのある水特有の痛みが体を襲って、

苦しいなあと感覚の鈍ってきた頭でふと思った。

そんな事を思っている間にもどんどん体が沈んでいく。

体から力が抜けていって指も、瞼さえも自分で動かせなくなって、トントンと背中が底についた。

もう私にみえるのはゆらりゆらりと揺れる水面に反射して光る青い蒼い光しかなくて。

死んじゃうのか、と可笑しくなって笑った私の目の前に、鮮やかな赤が現れた。

その赤の持ち主は私の腕を掴んで水面に引^{すいめん}つ張った。

顔が水の上に出る。私と同じ赤い髪の少年に岸の上に連れてかれる。

服が素肌に張り付いて気持ち悪い、

そしてキャスケット帽はどこかに流されている。

最悪な気分だ。

岸の上が上がって、せき込んだ。

水を少し飲んでいたらしく気持ちが悪い。

それでも思い切り息を吸い込んだ。

「・・・ありがとう」

助けてくれた赤い髪の少年に声をかける。

「お前、とろくせえ。そんなだから絡まれるんじゃないの?」

助けてくれた男の子に罵られた。

え、流石にム力つくんだけどどうしよう。

SIDE：赤毛の子供

俺の目の前で川に落とされた奴を助けた。
この町では見たことのない奴でデカイ帽子をかぶってるのが特徴の
小さな奴。

そいつは川底に沈んでいてピクリとも動いていなかったけど、俺を
見て微かに笑ったんだ。

それが何故か胸に響いて、水の上に引つ張り上げた。

全身ずぶぬれになって服もぐちゃぐちゃで気持ち悪いけど
こいつを助けたのは俺にしてはいい判断だったと思う。

「お前、とろくせえ。そんなだから絡まれるんじゃないの？」

なあああああああ！！？俺の馬鹿！！？

気づけば、ずぶ濡れの少女に憎まれ口を叩いていた。

俺はどうも女子相手だと素直に言葉を紡げない性分らしく、キラ
ーに随分心配されていたのに。

口に出してから、しまったと思ったたら

「キミに言われたくないよ。そして、私はとろくさくないから」

不機嫌そうに言い返してきた。

俺の顔にビビることなく素早く言い返してきた。

大抵の女子は俺の言葉や態度に泣いたりするのに、・・・
啞然とした顔でそいつを見てると

いきなりそいつは、立ち上がると俺の手を掴んだ。

「な、何すんだ!？」

「君は聞いてなかったのか?ここは南の海だがそのままなら風邪をひく。助けて貰ったのにずぶ濡れで帰すのも失礼だろ?」

そこで、初めて真正面から初めてそいつを見た。

そいつは水ん中じゃよく分からなかったけど、俺と同じような真っ赤な髪に、

俺の目と違ってこいつの目は、色のついたガラス玉みたいな綺麗な目をしてる。

可愛いくて、小さかった。

「だから家まで来てくれ、シャツとシャワーくらい貸せるからな」

そいつの手を握り返し、俺も真正面からそいつを見る。

「そっぴゃ、お前この辺の奴じゃないよな?なんて名前なんだ?」

「ああ、こちらは名前を知っているのにそちらに名前を教えないのは失礼だな。シャルロッテだ。宜しく、ガキ大将のユースタス・キッド君」

そいつは面喰った顔をした後、クスリと笑った。

(そっぴゃ、なんで川に落とされたんだ?)

(・・・君の髪色と態度に似ているせいで生意気だと川に落つことされたんだよ)

(・・・なんか悪いな^{わり})

(いや、・・・気にしないで欲しい)

五話 南の海が、初めて来ました。（後書き）

読んでくださってありがとうございます。
これからも頑張ります！！

六話 赤へのコンプレックス（前書き）

応援ありがとうございます。

これから頑張ります。

僅かですが赤毛についての差別表現があります。
苦手な方はお気を付け下さい。

六話 赤へのコンプレックス

ぺらり、ぺらり、と。

古ぼけた本が山積みになれて、狭くごちゃごちゃした薄暗い部屋の中に本をめくる音だけが響く。

ブラインドの隙間から光が入りこみシャルの紅い髪をキラキラと照らす。

どこか神秘的な雰囲気漂う中、俺は本の頁を^{ページ}めくる真っ白な指先を見つめていた。

（白えな。^{サウスブル}南の海ではこんなに白い肌をした奴はいない。皆、日に焼けた肌だ）

シャルはその小さい体とそれに似つかわしい細い腕に、似合わない古く分厚い本をいつもより少し顔を綻ばせて読んでいる。その嬉しそうな顔を見て、文句を言おうとした口を閉じる。

（俺が、ここに連れて来たんだけど、気に入らねえな）

俺がこいつを家から引きずり出して連れてきたんだが、一時間もこんな状況が続いてるんだ。

俺が怒ってもいい状況だと思う。

シャルがこんな嬉しそうな顔をしているのにそれを邪魔するのはどうも気が引ける。

なので俺はずっと文句を口の中に押し込んでじっとシャルの観察をしているわけだ。

（なあ、俺をもつと見るよ）

「おい、シャル」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・シャル」

「ん~~~~」

「聞いてんのか！」

「っ！・・・キッド君？」

声をかけても上の空でイラッとした俺は大きい声で話しかけた。
本を落としかけ、驚いたようにガラスの様な緑色の目をまん丸にしている。

溜息を吐きたくなつたがそれを押し込める。

「二十三回目だ」

「な、なにが？」

「やっぱり気づいてなかったのかよ・・・」

「だから何が？」

「俺が、今までにシャルを呼び掛けた回数」

俺がそう言つとシャルはばつの悪そうな表情になって、本を閉じ傍らに置いて俺の方を向いた。

「・・・ゴメン。本がおもしろくて全然気付かなかった」

「そんな事だろうと思ってたぜ・・・」

「・・・本当にごめん」

「謝んなよ」

俺は顔をそらしてそれだけ言った。

シャルはあどけなさではなく顔の可愛さの方が目立つ、そんな顔をしていて。

朝焼けみたいな真つ赤な髪に青みを帯びた緑のきれいな目は、この部屋に差し込む光のせいか色が濃くなって群青色に近くなっている。

思わず手を伸ばし、肩まであるサラリとした紅い髪に触れる。ビクリッとシャルの体が震えて顔がこわばっていたが気にしない。

（やつぱきれーだよな。さわり心地もいいし）

「キ、キッド」

シャルはこの紅い髪が嫌いみたいだった。俺もキラーがいなかったらこの色は大嫌いだったと思う。

キラが言うには本来の赤毛というのは金色よりもやや濃い茶色の髪とか、茶混じりの金とか茶色に赤みのある髪（赤茶色や紅茶色とかだ）をいうらしい。だから、オレンジ色や橙色というのが本来赤毛を表すには相応しいんだそうだ。逆に純粋な赤色や朱色、紅色は少ない。

しかし“赤髪”のシャンクスの印象が赤毛と聞けば燃えるような紅色を想像する。俺もシャルもその“赤髪”のシャンクスと似た業火の様な紅い髪をしている。恐ろしい海賊の髪色に似た子供が周りの奴らに何を言われるか想像してみたい。

この色のせいで母親にも見捨てられた。キラと一緒にじゃなかったら死んでいたかもしれない。シャルも似たようなもので母親が死にかけている間に島民に売られ、父親に助けられたらしい。

「なあ、シャル」

「な、なに？」

お前は嫌ってるが俺はよお、と髪をなでながら喋る。

「お前の髪の色好きだぜ」

シャルは目を丸くした後、クシャリと顔を歪めた。いろんな感情が混ぜこぜになった顔で、

「キッド。私は、この色嫌いだよ」

「俺は好きだ。お前が嫌っててもな」

「嫌いだ。こんな髪」

「じゃあ、俺の髪も嫌いなのか？」

俺は卑怯だ。

こんなこと言ったら否定するのを知っているくせに、それを口に出す。

「そんなことない！私はキッドの髪は好きだ！！嫌いなんかじゃない！！」

「でもよ、俺の髪とお前の髪はほとんど同じ色だぜ」

「でも、キッドの髪はとっても綺麗な色だ」

私の色とは違う・・・、と俯いて黙り込んでしまった。

（こりゃ、相当コンプレックスの塊だな。俺は本当に綺麗な色だと思っのに）

「俺はシャルの髪の方が綺麗だと思うし好きだぜ、朝焼けの色みたいじゃねえか」

「・・・嘘だ」

「嘘じゃねーよ！」

「嘘だ！！」

シャルロッテが叫んだ、瞳を涙でうるませて、

目じりを赤くして自分が叫んだのに悲しそうな顔をして、初めて聞くぐらいの声をあげて。

「海軍の人には赤毛のせいで娼婦の娘と嘲笑され！大人に意味も無く罵られたこともある！！こんな髪、綺麗なわけないじゃないか！！！？」

瞳からボロボロと涙をこぼして、手をぎゅっと握りしめて叫んだ。その声が、悲しそうで辛そうな感情が籠っていて、思わず俺はシャルを抱きしめた。

「やあ！！もっ、離してよ！！」

ぽかぽかと背中を叩いてくる。

全然力が籠ってないソレにかまわず背中にまわした腕に力を込める。

「嘘じゃねえ！！シャルはきれーだ。俺は嘘なんかつかねえよ！！」

「本当の父親が分からないからって“赤髪”の娘だって噂が立てられて、そのせいで皆から罵倒されて、こんな髪ヤダ！！嫌いだあ！！」

ただ俺の胸で泣いて、泣いて、泣いて、叫んで、泣きやんだら糸の切れたように眠ってしまった。

目元を真っ赤にして眠っているシャルを背負う。

シャルがこれから悲しむことが無いように俺は願った。

（俺をもう少し頼るようになって欲しい、シャルの過去の出来事とこれから待ち受ける未来から守ることができる力が欲しい）

そう、思っのはいけないことだろうか？

六話 赤へのコンプレックス（後書き）

主人公がナーバスでネガティブになって、トラウマ発動。

もともと髪の色が嫌い、キッドの髪は好き。

キッドは主人公の髪の方が好き。結果堂々巡り。

なお話。この二人＋キラー（出てきてないけど）は色々あったけど仲良くなりました。

キッドへのフォローは次話。

お楽しみに！！

誤字脱字などがありましたら教えてください。お願いします！！

七話 友人のコンプレックス（前書き）

応援ありがとうございます！！

七話 友人のコンプレックス

丘の上の古いベンチに座っている少女の横に腰を下ろした。

少女は本を開いていて、ちょこんと座っていた。

だが、俺が隣に座ったのを見て口を開いた。

私はさ、

「・・・嫌だっただけじゃあないんだ」

光を受けて煌めく真つ赤な髪に

光の加減からか明るいう緑色に見える目をした少女がぽつりとつぶやいた。

「シャル」

シャルは本を眺めてはいるが、そのページはさっきから進んでいなかった。

「ねえ、キラー。私が赤毛だから嫌われてたって言ったことがあるだろう」

「ああ」

「最初は、母さんや島の人私の事嫌ってなかったんだ」

静かに相槌を求めるシャル。

おそらく、もうシャルの中では結論は出ているのだろう。
なら、俺は話を聞いて相槌だけを打ってやればいい。

シャルが分かっているのなら俺がとやかく言うことではないのだから。

「あの日、山に木の実を取りに行つてあの実を食べてからだな・・・
、この色を馬鹿にされるようになったのも貶されるようになったのも」

何かを思い出したのか顔をゆがめた。

「まあ、それは置いといてもいいことだ。この色を嫌われるようになる前にも気味悪いと思つていた人たちがいてね。母さんは守ってくれたけど、皆に罵られたり罵倒されたりした」

彼女は木々の隙間からもれる太陽の光に眩しそうに目を顰めた。

「そうになるとね、もう止まらないよ。

仲の良かった人たちにもいじめというか迫害を受けたしね。

自分の色も嫌いになるし、誰も私の事を見てないし声を聞いてくれないんだ。

だから、何も否定しなくなった。

流石に化け物とか妖怪とかについては言い返せたけど、髪の色はどうしようもなかったから・・・」

「そうか」

「うん、そうなんだ」

「だからさ、キッドが我がことのように怒ってくれたのが嬉しくて

さ、自分ではもう怒るのも否定するのも諦めてたから。・・・最悪だよね私」

自分の為に身を投げ打ってくれたと。

それほど自分を思ってくれた、と。

それを聞いて喜ばないほうがおかしいと俺は思う。

それが好きな（キッドが向ける気持ちと同じなのかは分からないが）相手なら尚更。

「それは、違う。シャルは・・・」

俺の言葉を遮る様にシャルは

「違うよ」

俺がそれ以上言うことを拒絶した。

俺達の間を風が通り抜ける。

俺の返事を妨げたシャルは僅かに表情を変えて尋ねる。

「あのさ、」

「なんだ・・・？」

「キラーはさ、紅い色は好き？」

（私のさっきの言葉を聞いても？）。

そう問われている気がした。

だが、こいつは何を分かり切ったことを聞く、馬鹿なのか？

一番頭がいい癖に、変な所で凄く馬鹿だ。

俺ははつきりところ答えた。

「ああ、好きだ。キッドの色もシャルの色もな」

俺がそう言つとシャルは泣きたそうな嬉しそうなのかよく分からない感情を籠めた顔をした。

目を伏せながら小さい声で、君達はおんなじこと言うんだね、と言う。

「ちがいない」

「じゃあさ、私もこの色を好きになれるように努力するよ。キッドとキラーが言ってくれるなら、自信ないし好きになれるか分からないけど善処する」

それだけ言つと、立ち上がった。

「じゃあ、私は帰るよ。キラー聞いてくれてありがとう。」

「これぐらいなら、何時でも聞いてやる」

そっか、ありがと、とシャルは、

「あとさ、」

「なんだ？」

ふふ、と笑いながら、片手をあげ

「横の木の上にいる人にも言つていてね、キラー!!」

くるりと踵を返し颯爽と立ち去っていった。

「気付かれてたか・・・」

キッドが木の上から飛び下りてきた。

「違うない」

「善処するか　　、そこは好きになるって言いきれよな」

横にいるキッドはそう言っでシャルが去っていった方向を見つめている。

その目は海の事や海賊の事や伝説を話したりする時とは違った鮮烈な紅い光を宿していて。

こいつらは、と溜息をつきたくなるのを抑える。

「キッド、シャルが忘れていった本を持って行け」

そう言っで本を渡す。

「あ、何で俺が・・・」

ああ、そうか無自覚かキッド、お前がシャルの事を好きだろ、気づいてなかったのか・・・

「シャルと直接会っで話して来い。直接会っで話す方がお互いにすつきりする」

それだけ言つとキッドの背を向け、家に行っている小屋に歩き出す。
そう、願うなら、不器用な将来の船長が繊細で賢いあいつを守れる
ように、
柄にもなく何かに祈った。

七話 友人のコンプレックス（後書き）

これから更新頑張ります！！

二人が何を話したのかは二人の秘密です。

次の話では少し時間が流れて大きくなります。

次も頑張ります！！

八話 いつも自分が知らないうちに巻き込まれる（前書き）

オリキャラとかいろいろ出てきます。

士官学校の設定とかは結構捏造はいつてます。

では、どうぞー！

八話 いつも自分が知らないうちに巻き込まれる

SIDE：シャルロッテ

サウスルー
南の海から帰ってきてお父さんに友達ができたと言うと凄く嬉しそうな顔をした。

なんで、お父さんが嬉しそうな顔をするんだろうと、サカズキさんに聞いたら、
そりゃ最初に此处に来るまでにいろいろあったからじゃると頭をなでられた。

この身体の大きさになってからよく頭をなでられるようになった。
お父さんとかサカズキさんとかおツルさんとかモモンガ中將とかストロベリー中將とか上層部の人に。
なでられやすい大きなんだろうか？
いやでも、わざわざしゃがんでなでるし・・・それってどうなんだろう。

見かけ六歳でも、中身2 代前半なんだけどな・・・

そうやってしゃがまれたりして気付いた。

皆さん、身長高くない？

大人だからっていう理由ではないよね、ないですよね？

大人にしたら些細なことだ。

しかし、気づいたら赤子になって身長が縮んでいた私にしたら重大な問題だ。

そつえば、キッドとキラーも高かったな・・・。

って違う、私の周りの人達が高いんだ。

私が低いわけじゃない！

私は平均だ！

へ・い・き・ん！！

そう、平均ということにしておこう。

隣に座っている年上の少年の身長が昔の自分とほぼ同じだとしても

来る前の自分より年下でも

それに気づいて地味にダメージを受けている自分がいたとしても

私が今話している少年がサイファーボールCPの人物だとしても

・・・話していてなんだけど、君、仕事は？

え、噂の少女に会いに来た？

噂ってなに？何時の間に流れてるの？

なにそれ、怖いんだけど・・・

私のプライバシーはどこに行ったのさ、個人情報保護法はどこに？

（この世界って・・・）

SIDE：ロブ・ルッチ

不思議な少女を見つけた。

最初に遭遇したのはたまたま海軍本部で訓練の時の事だ。
海軍本部の荘厳とすら言える廊下に子供が資料室の中に消えていく
のが見えた。

その時は目の錯覚だと思い、そのことはすぐに忘れた。

その次に会ったのはマリンフォードの港で、目に鮮やかな紅が目に入
った。

肩までの紅い髪を淡いブルーのリボンで一つにくくり、翡翠の様に
綺麗な瞳をした、可憐と言う表現がぴったりと当てはまる顔立ちを
した美少女だった。

軍艦から降りて来た後、気配を隠す訓練をしていた俺と目があい目
礼をして去っていった。

これには、驚いた。

自分の姿を目立たない様にする術すべ（存在感を薄れさせる術すべとも言う）
は、サイファーボールCPの諜報員の必須事項だ。なのに年端もいかない少女に気付
かれたのだから。

・・・自分にしては本当に珍しいことに興味を覚えた。

その次にあつたのはユニエス・ロビーで大将青雉と一緒にいたのを
見た。

俺が見たのは帰るところだったらしいので、そこまでじろじろ見れ
なかった。

だが、それについて報告のついでに長官に聞くとその少女は大将青
雉の娘でシャルロッテという名前であることが分かった。

そうして興味を持った少女の事を調べてみたが、
その少女を探って出てきたのは嘘か本当か分からない類たぐいの噂話だっ

た。

曰く、書類を運ぶのを手伝ってくれる。
気づいたらいなくなりいつの間にか現れる。

甘いもの（うるおいのあるもの）を好む。

あまり使われていない書庫や倉庫を綺麗にしてくれる。

中庭に夕暮れになると現れる。

どこぞの貴族のご落胤らしい。

いや上司の隠し子だ。

そんなバラエティに富んだいろいろな噂話が蔓延していた。

そして今日、任務の説明に海軍本部に来て、少女に出会い話しかけることに成功した。

偶然を装い尋ねてみるといきなり話しかけたからか最初は少し動揺した様子だったが、

すぐに持ち直すと大人顔向けの知識を垣間見せた。

まだ、六歳なのに恐ろしいぐらい、頭の回転も早いうえに言葉も達者だ。

サイファーボール

CPに所属させたいぐらいの素晴らしさだ。

港で出会った時に何故、俺に気付いたのか聞いてみると

「何となく、視線を感じたので」

と答えられた。

シャルロット（自己紹介した際に名前と呼んで欲しいと呼ばれた）は、

先天的か後天的かは分からないが、視線やそういう類のものに聡く、そして別に運動神経が悪いわけではないようだ。

頭が良くて、運動神経もまあまあ良く、体質のせいか勘も良い。

鍛えたら海軍でも上の方に行ける資質を持っていた。

今のうちにCPに引き込めないか、真剣に大将青雩に相談したい。

SIDE：クザン

CP9のルッチ君に、シャルをCPにサイファーボールくれないかと真剣な表情で言われた。

娘を諜報員なんかにするか、と内心の思いを隠して、
当たり障りなく断っておいたけどもその理由を聞いて、やっぱりか・
・、と思った。

確かに、悪魔の実の能力の制御方法を教える時もそんな兆候があった。

遠くにいたサカズキの気配に気づいたり。

だいたい何人ぐらいがどの方向から来るのか分かったりする程度には鋭い子供だった。

そのせいか日常生活ではだいぶ苦勞をしていた。

俺に足音が傍で聞こえて怖いから一緒に寝て欲しいと

頼みにくるくらいには人の気配に敏感になっっていたらしい。

なんでも、昔はこうじゃなかったとばやいてた。

俺の仕事で帰れない時は耳せんをすることでどうにかしていたらしい。

南の海サウスブルーに預けた時はマリンフォードよりも静かで楽だった、と笑顔で言われた。

友達もできたとも言っていて親としては心配事が減って安心したし、

嬉しかったりもしたが…

その能力が、ルツチ君（諜報員）に見つけられたとなると話は別だ。俺が言うのもなんだがシャルはとても頭が良い。

運動神経も悪くないし、口も達者だ。

何より聞きわけもいい。

自分が大人だと認めた人間の言うことは聞く。

そして、貴族一と言われたエーデルシュタイン家の令嬢の血が濃く出た綺麗な顔立ち。

貴族の血も引いているし、中央の貴族や王侯の交渉も訓練すれば可能だ。

悪魔の実の能力者でもある。

そんな将来有望な子供を政府や海軍がほっておくわけがない。

現に、影ではきな臭い空気が漂っている。

今はサカズキと中将達とで抑えているけど何かが起こるのは時間の問題だ。

シャルを一般人のままにしておくのはもう不可能だ。

だったら、海軍に引き込んでしまえばいい。

血は繋がっていないが自分の大切な娘だ。

世界政府にヤル気など毛頭ない。

俺、戸籍上は実の父親になっているし、娘の事、すごく愛しちゃってるし

「ねえ、シャル。海兵になる気はあるかい？」

「え、」

シャルは、驚いた顔をしている。

あたりまえだ、前触れも無くそんなこと言われたらいくら聡い子でも驚くだろう。

「あるか、と言われたら、あります、と答えるけど何でいきなり！？」

訂正、口調も乱れていた。頭のいい分突発的な出来事に弱いのかもしない。

いつも、冷静な何かがどこかに吹っ飛んでいき。

瞳には、何で、どうして、いきなり、と言った疑問視であふれかえっている。

その瞳を見ていきなり意見を押し付けた罪悪感がわく。

だけど、今から、説明することは重要なことだ。

海軍が直接経営している士官学校付属の幼年学校に入れよう。

海軍が直接管理しているから政府側の人間が何かしようとしたらすぐに分かるし、安全だ。

幼年学校は飛び級ができるけど、士官学校では四年間飛び級なしで生活するようだから。

その間に、俺はシャルを利用しようと思っている奴らをつぶせるし、シャルは友達を作ることができるし将来の安全を勝ち取ることができる。

そう、シャルに告げるとシャルはどこか戸惑ったような顔をしながら頷いた。

そうと決めたら、エーデルシュタイン卿に言わないとな。

あの人、表に出さないけど、孫馬鹿だし。

シャルの身が利用されそうになっていると知ったら賛成してくれる

だろう。

そうやって、その日は過ぎていった。

八話 いつも自分が知らないうちに巻き込まれる（後書き）

何時も応援ありがとうございます。

誤字脱字などございましたら報告をお願いします。

次も頑張ります。

九話 水路の都で買い物を（前書き）

オリキャラが結構出てきます。
オリジナルな街も出てきます。

では、どうぞ。

九話 水路の都で買い物を

SIDE：エーデルシュタイン卿

初めて己の孫にあつた時に思ったのは、娘のセリナに似ている、それだけだった。

孫の業火の様な紅い髪が、美しい金色の髪をしたセリナとは違ったが、それしか違わないとも言える。

愛くるしい顔立ちも、翡翠の様な青みを帯びた緑色の瞳も真っ白な肌もあの娘にそっくりだった。

娘の昔の姿を見ているようで、胸が痛くなる。

あの娘は婚姻も結んでいない状況で、とある海の男の子を身ごもり姿をくらませた。

その時は勘当したが、その一方で己の“影”に娘がどこに行つたか分からぬよう証拠を隠滅させた。

我が家は伯爵の地位にあり、“最古の騎士”、“聖騎士”という名でも呼ばれている。

あの娘は後継ぎでは無かったからこの家から離れさせることができた。

あの娘を他の貴族から守るために情報を錯綜させあるいは抹消させ、分からないようにした。

娘の孕んだ子の父親のことも隠した。

娘以外で知っているのは私とあの娘の乳母だけだったから隠すのは簡単だった。

その男は当時ただのルーキーでとある船の見習いもしていた男だったが、

今は海賊の中でも高名な人物になっている。

それに気付いても、大抵はエーデルシュタインの権力で口出しができないだろう。

そして何よりシャルロッテの戸籍上の父親にして、養い親で唯一の家族と言っている男。

・・・青雉は孫を守るだろう。

あの男はセリナに惚れていたのだから。
惚れた女にそっくりな娘。

最初はそれに気付かず生活をし、愛情を注いでいくうちに気付いた。

今なら、母親がセリナだ、ということ差し引いてもあの男はシャルロッテを守るだろう。

もうすでに、あの男は心の中にシャルロッテを入れてしまっているのだから。

なら、安心だ。あの男は自分の内に入れたものには情が深いということを知っている。

己の孫は幸せになれるのだろう。

まあ、職業選択の自由がほぼ無いとも言えるが・・・

私は娘を最後まで守ることは出来なかったが、あの男はシャルロッテを守りきれだろう。

だらけきっているように見えるが、中身は意外と熱い男だ。

懸念することがあるとすれば、あのウォーロック家の長男が幼年学校に入ると聞く。

・・・少しは疲れるが孫のためだ、手を回すことにするか。

敵対するのなら容赦はしない。

・・・取り合えず、キャメロット幼年学校の制服を着たシャルロツテの写真を送ってもらおう。
孫の写真をもらうことぐらい祖父の特権だろう。

S I D E：シャルロツテ

私がキャメロット幼年学校に入ると決めたら、お父さんが凄かった。
買い物に行くよと言われて自転車に乗せられついたのは偉大なる航路イシのなかでも有名な商人の国。
前半の海のものならほとんど全て揃うと謳われるような島。

そこに連れて来られた。

有無を言わず、強引に何処で打ち合わせをしていた！？と思うほど手際よく。

海運国家ヴェネチアーナ。

どこかで聞いた気がするのは気のせいだ。
気のせいだ。

それからは、恐ろしかった。

この子に似合う服を持ってきて、とお父さんが店員の人に言って持
って来させた服の値札を見ておもわず目を見開いた。

桁がひとケタ違う。

祖父も私の着物とかは高いものを買っていたけど、
ここの相場は知らないけど高い方だと思う。

礼おじい様にもらった洋服よりも高いかも・・・

「ああ、シャル。制服は注文してあるから、私服とか部屋着とか寝巻とか選ぶからね」

What?

え、今のじゃ駄目なの？

「今は海軍で支給されたやつとか、地味な奴ばつかでしょうが。寝巻なんて俺のシャツとかだし」

「でも、お父さん」

「値段なら大丈夫。俺、一応海軍大将よ。コレくらいの買い物全然平気だよ」

卿から、お金も預かっているしさあ。

それを聞いて、祖父よ貴方は何をやっているのですか、と思っ
てしまった私はきつと悪くない。

あと帽子と靴と傘とか筆記用具に靴、その他小物類、
父の声も半ば強制的に閉じた。シャットダウンと言っている

シヨウウィンドウから見える、流水の美しい水路の街を眺めながら
私は溜息をついた。

（現実逃避？わかってますよそんな事！！）

SIDE：クザン

シャルが幼年学校に行くを決めたら、
すぐに買い物をしに海運国家ヴェネチアーナにチャリで連れて行った。

流水の島。

もつとも高貴な国とも呼ばれる美しい水の王国。
街のあちこちに水路が掛けられ、それそのものが宝石のように美しい。

そこを、シャルと手をつなぎながら歩いていた。

シャルの格好を見て、もったいないと思う。

前は、紅い髪を隠すために大人用のキャスケット帽子をかぶっていたが、
サウスラルー南の海から帰って来てからは何かあったのか髪を隠さない様になった。

それはいいことだと思う。聞いてみたら約束をしたらしい。
くだん件の友達のおかげだと思うと、嬉しいと同時に複雑な気持ちになるけど・・・

けど、それ以外の服装は地味だ。

今の服装は真っ白いシャツに薄茶色の半ズボン、
銀色の留め具のついたサスペンダーに、
黒い長靴下にズボンと同色の柔らかい革靴。
それに今のシャルにあった子供用のキャスケット帽子。
前の大人用のものとは違って、紅い髪が帽子から零れ落ちているけど
前よりは髪を人目にさらすことを恐れていないみたいだ。

物珍しそうに、水路やゴンドラを見ているシャルに少し安心した。
まだ幼いのに大人の様なもの言いをするシャルが子供の様にはしゃいでいて、

ああこの子は普通の子供なんだ、と素直に思えた。

いつもは、子供なのに大人の姿に見えることがあったから、

安心した。

シャルを見てセリナ嬢に、似ていると思った。

性格が似てないからなかなか気づかなかったけど。

シャルの容姿はセリナ嬢に瓜二つだ。

けれど二人は親子でも、性格や瞳の輝きが違う。

シャルは俺の娘だ。血は繋がっていないけど親子であると胸を張って言える。

だから、これからシャルがセリナ嬢のように大人になっても俺は見間違えることはしないだろう。

シャルの腕を引いて、洋服店に入る。

店員にこの子に似合う服を持ってきてと、頼んで服をたくさん持たせてこさせた。

いきなりの事に目を丸くさせているシャルに思わず笑う。

とりあえず、せっかく可愛い容姿をしてるんだから可愛いカッコをさせましようか、といくつかの服を持たせてシャルを試着室に放り込んだ。

幼年学校の制服や、俺や店員が選んだ服を着たシャルはとても可愛かった。

・
・
・
・
・
・
・
・
絶対、嫁にはやらない。

九話 水路の都で買い物を（後書き）

これからも応援よろしくお願いします。
次回も頑張ります！！

十話 一癖どころか何癖もある友人達（前書き）

オリジナルな表現が入ります。OPの世界の貴族社会も捏造してま
す。

幼年学校は全寮制の寄宿学校をイメージしています。
説明の文章っぱいです。

十話 一癖どころか何癖もある友人達

SIDE：マーリン・ウォーロック

なんてくだらない。

少し前はそう思っていた。

ウォーロック家の恥にならぬように、
ウォーロック家の名誉を損ねぬように、
ウォーロック家の家名に恥じぬように、
ウォーロック家の、ウォーロック家の、ウォーロック家の、

それが、どうしたというのだ。

我が家は貴族という階級の中で伯爵位に位置している家。それだけだ。我が家が特異な能力を持っているのに世界政府に取りつぶしにされないのは“魔法使い”の血筋を引く唯一の家だから。
そして、私がその血を濃くひいているからだ。

周囲の人間はごまをすってくるか、私を腫れもののように扱って
るだけだった。

成り上がりの家系だからか、表には出さないが見下されているのも
知っている。

当主である父は傀儡^{かいらい}で、今は三人の姉上達がこのウォーロック家を
支配している。

その傍ら、私には次期当主への勉強や教育を施す。

私の自由を奪っておいて、いきなり、“最古の騎士”エーデルシュタインの次期当主になるであろう直系の孫が、キャメロットの幼年学校に来年はいると言う事を聞くと、私から家庭教師を外しその幼年学校に入れる手続きをした。

私の人生は、もうすでに姉達によってきめられているのだろうか……。それに気づいた時は、苛立ちと怒りと、そしてほんの僅かな諦めしか残らなかった。

本邸で一緒に暮らしている妹のカサンドラの事は従弟のケインに任せ、幼年学校に向かった。

そんな事があったから、どうでもいいと思ってたのに

「綺麗な目の色だね。リコリスみたいだ」

姉が仲良くなれと言った朝焼けの様な色の髪のエーデルシュタイン家の子女に言われ

「ん、気持ち悪くなんかないよ。その色は私の好きな色なんだ」

私が嫌っていた色を肯定された。

「お前、つまんねえ顔してたけどそんな顔もできんだな」

と、金色の先輩には太陽みたいな笑顔で言われ

「君は、噂とは違うんだな」

と、紫水晶の瞳の先輩は語った。

「先輩は先輩ですよね」

と飴色の髪をした後輩は言った。

カサンドラとケイン、姉上達しかいなかった私の心にいつの間にかいた。

気づいたら、利用するはずだったのに心を許している自分がいた。ウォーロックの人間ではなく己自身を見ってくれるのがこんなに嬉しいことだったのか・・・

最初は驚愕したけど、今はとても居心地がいい。こつというものを、幸せというのかもしれない。

「んっ・・・」

「マーリン」

なんだ夢だったのか、目を開けば逆さに映る紅い髪の少女。初めて会った時よりも綺麗になった。

「まあ、こんなにいい天気だったらお昼寝したくなるよね」

私が寝ていたのを見たのがそんなに珍しかったのかクスリと笑って、

「あのさ、トリスタンがお茶を御馳走してくれるそうだよ」

おや、珍しい。

「珍しいですね。彼がお茶に招待なんて、どうしたんですか？」

ああ、そのことかと彼女は頷いて

「前にマーリンもしたことがある。ワノクニのチェス、将棋で私に負けたんだよ。ガウエインとランスロットにも負けてたから、皆でお茶しようって話になって」

シャルロットに盤上遊戯で挑むってチャレンジャーですね。

私でも一回も勝ったことはありませんし。

ガウエインやランスロットも勝っているのを見たことが無いですし。

「まあ、たまには皆でお茶もいいでしょう。どこでするんですか？」

「中庭のテラス。美味しいスコーンとサンドウィッチ、いいアールグレイの茶葉が手に入ったらしくて、負けたことを悔しがってたね」

自分の事なのにシャルロットはどこ吹く風でひょうひょうと言って笑った。

「じゃあ、行きましようか」

お互いに顔を見合せて笑って歩き出した。

SIDE：シャルロット

何故か、制服が送ってこられた後お父さんに写真を取られまくった。お父さん曰く記念と約束らしいんだけど、誰との約束とは言ってく

れなかった。

いや、あの本当に誰なんでしょうか？

自分に知らない間に進められていく地味な恐怖を感じましたよ私は・

幼年学校に通い始めた時も家の関係でいろんな人たちに囲まれたし、普通の子供ならトラウマになりますよあれ。

いや、私は精神年齢が高かったし友人ができたからいいんですけど・

入学する時まだ入学まで時間があるからとお母さんの実家に預けられて、色々教え込まれた。

お茶の作法とか夜会でのやりわりとした拒絶の仕方とか、ダンスとか、あとは剣とか。

この家は“最古の騎士”と言われている古い貴族の家系で、跡取りにはこの家の剣術を習わせるのだが、お母さんの兄は子供を残さずに死んでいるために後継ぎは私しかいないのである。

そこからは凄かった。

指南役を務めている爺やに若い頃の御屋形様のように筋が良いと褒められた。

それからとても厳しい稽古をつけられた。

この修行で死ななかったことを元インドア派の私は生涯誇っていいんじゃないかと思った。

実家にいる間に夜会にも連れて行かれた。

最初の内は夜会や貴族の集まりで人がじろじろ私の顔を見ってくるのが、

奇異の目を向けてくるのが、ひそひそと陰口の様な事を囁く声が気味が悪くて、

顔に出さないまでもビビっていた私に、祖父であるアルトゥル・ルトヴィツヒ・フォン・エーデルシュタインはそつと支えて教えてくれた。

それらしい表情、それらしい言葉、それらしい仕草、そういった印象に人はついてくる。

だから背筋を伸ばして、前を向きなさい。

祖父の言う事は正しかった。

母親にそっくりすぎて祖父と母の間にできた隠し子が、

綺麗すぎて気味が悪いと囁かれても、俯くことだけはしなかった。

・・・女は度胸だ。

夜会は招待した方や身内に紹介されない限り踊りとかに参加しないで済むからから

壁の花になった。なのに。

長期休暇の時に招待された時もそれで終わるかと思ってたのに・・・！！

よりもよってブランデンブルク公が社交界で紹介しやがった。

私の実家はそれこそ世界政府が樹立した800年前に既に貴族としての地位を確立させ、

古き時代より世界政府と共に生きてきた家なのだ。

伯爵の位を持っているが実際は公爵の位を賜ってもいいくらいの名家で

初代の当主が公爵の叙勲を辞去して、伯爵の位を受け取ったのは有名な話だ。

しかし、それだけなら古くからある名家の一つで終わりだっただろ

う。

我が家が何故有名なのかというと最盛期の権力を維持しているからだ。

初代から始まる代々の当主が、辣腕、有能だった。

（策士だったと言い換えてもいい）。

それゆえに時が流れても莫大な力を持っているわけで、

またそれほど脅威がありながら今まで滅ばされず、

権力の縮小化もされなかったのは、代々の当主が政府を敵に回さず、また己らの地位を危うくせず、という相当の策士達だけであつたらだ。

めんどくさいことを！！

そして、ちらりとおじい様を見上げて後悔した。

やだ超怖いこの人。

碧色のアイズブルーにも近い色素の薄い瞳でブランデンブルク公を見ていた。

口元は笑ったまま。目が笑ってない。

周りの人たちは気付いていない。・・・自分の空気読みスキルを後悔した。

紹介された後は周りをどこぞの貴族や軍人、その他もろもろの子息に囲まれた。

おじい様とも引き離されてしまったし、マーリンやトリスタン、ガウェイン達とも遠い。

自分にかけられる夜会特有の長つたらしい装飾に満ちた挨拶にうんざりした。

美しいとか、麗しいとか何故にこういう輩は同じような事しか話さないんだろうかと、

現実逃避という名の考え事をしていたら、
名前を聞けなかったことに腹を立てたのか腕を掴まれてトンっと押された。

何考えているんだこいつ！？夜会の中、子女に八つ当たりするなんて！？

あ、やばい。これこける。

ドレスにコルセットと、高いハイヒールを履いているのだ。
いつもならこけないのにこれは床に叩きつけられる。

少しずつ近づいてくる床に思わず目を瞑ったら、誰かに抱きとめられた。

「大丈夫ですか？」

目を開くと、そこにいたのは淡い茶にも濃い金にも見える飴色の髪に空みたいに青い瞳、うっすらとしたそばかすのあるどこか子犬を連想させるような愛きょうのある男の子。
そこはかとなく純白そうだった。

私よりたぶん年下じゃないだろうか、と思われる。

その子は私の体を支えると人の少ないバルコニーまで連れて行ってくれた。

ここなら、おじい様から見えやすいし、
こちらにマーリン達も来てくれているから問題ない。

「ありがとう」

そう少しだけ微笑んで言うとその子の顔はトマトみたいに真っ赤になった。

あー、なんか癒される。

だって、すれてないもんこの子。

私の周りにいる奴って珍しい性格というか個性的な奴らばっかだし、いい子だこの子。

「あの怪我はしていませんか、レディ・エーデルシュタイン？僕はレイク・ランスロットと申します。助けるためとはいえ、抱きとめて申し訳ありません」

しかも礼儀正しいとは、将来有望の少年だ。

「大丈夫です。ミスター・レイク。助けていただき感謝しております」

お礼を言ったあと二人で話してたら、マーリン達も参加してちょっとした集まりになった。

レイク君は年上の人たちに囲まれて恐縮してたのを見て悪いと思ったけど私は顔見知りばかりで安堵した。

これがきっかけとなってレイク君と仲良くなるのはその時の私にも分からなかった。

トリスタンが悔しそうに声を出したのを聞き、思考の海から引き戻される。

レイク君もといランスロットがトリスタンに勝ったのを確認してから席を立つ。

マーリンを呼びに行ってくるとガウェインに告げ、歩き出した。

SIDE：ランスロット

学校で美しい人を見た。

その整った顔。

大輪の華の様に美しい顔。

さわり心地のよさそうな紅の髪は背中の中頃の長さで傷んだ所もなければ乱れた所も無い。

美しい顔だちに、長い紅のまつげ、弓形に整った紅色の眉、ばら色の頬、

珊瑚色の唇、それに青みを帯びた翡翠の瞳。

名前は知っていたエーデルシュタインの次期当主。

有名な貴族の子息に囲まれて笑っていたが目だけは笑っていないが、それでも美しい人。

それが酷く残念に思った。

最初の印象はソレだった。

他の人たちに囲まれていた時もそうだったからその時は気に留めなかった。

だけど、ある時見てしまった。その人が綺麗に笑う瞬間を

思わず目を見開いた。

悪名高いウォーロックの裔と有名な商人の三男、

軍人の次男と一緒に楽しそうに笑ったのを見て分かってしまったから。

他の人に見せる作り物の笑顔とは違う、それが貴女の好きな人たち

に向ける笑顔。

ずるい、と思った。

だって作り物の笑顔でも綺麗なのに、
本当に笑うとあんなに綺麗だなんて、

反則だ。

自分に向けられたわけでもないのに顔が火照っていくのが分かる。

同時にその笑顔が向けられる人たちが少し憎らしく思った。

すると僕が見ていることに気付いたのか、
くしゃくしゃの金色の髪に青紫の瞳をした先輩が僕を見据えてにやりと笑った。

あ、あの人性格悪い。

思わずそう思った。

そう思わずにはいらなかった。
それぐらいあくどい笑顔だった。

それから、あの人とは特に仲良くなれる機会の無いまま長期休暇に入り、

実家で過ごしていたら両親と一緒に夜会に招待された。

僕はまだ小さいからダンスなんか誘われるわけは無いのだけど、
興味があったから両親と一緒にいった。

あの人も結構な家の人だから会えるかと思った、打算が無かった
かと聞かれれば嘘になる。

僕はあの美しい翡翠の瞳にうつりたかったんだと思う。

苦手な夜会の類に出るぐらいには・・・

そこにいたあの人は、やはり人目を集めていた。

鮮烈な印象を与える鮮やかな赤い髪に翡翠の瞳の色に合わせた薄緑パールグリーンのドレス。

それを身にまとった彼女は美しかった。

ブランドンブルグ公が紹介した瞬間、むらがる子息たち。
囲まれて苦しそうだった。

あの時に声をかけたことを僕は誇ってもいいと思う。

それから、学校の後輩ということでもよく面倒を見てくれるようになった。

それから、先輩達との付き合いが始まった。

・・・ガウエイン先輩とは仲悪いまんまだけど。

十話 一癖どころか何癖もある友人達（後書き）

なんか説明文っぽいので、続編を出来るだけ早めにあげたいと思います。

ウォーロックという名字はとある小説のキャラから借りたモノです。
あと、学友の名前は円卓の騎士からとりました。

十一話 私の学友は愉快犯一名、腹黒一名、天然一名、わんこ一名（前書き）

ストッパーは私。

少しやってしまったかもしれない。

別の漫画の人物が出てきます。少しだけけど。

取り合えず主人公の友人関係は個性的な人物しかいません。

十一話 私の学友は愉快犯一名、腹黒一名、天然一名、わんこ一名

SIDE：トリスタン

初めてあつた時は、人形か妖精だと思った。

あの子は凄く綺麗だったから。

兄の傍にいる、ニンフやエルフの様に綺麗だったから。

綺麗な朝焼け色の髪に、ターコイズの様に煌めく宝石の瞳。

花の様な美しい顔は小さく、肌は雪の様に白かった。

スカートから覗く足は、すらりと長く。

足首なんかは片手で握れるくらいに小さかった。

手には古びた本があつて、それだけが風景とミスマッチだったのが印象に残っている。

俺は呆けたようにその美しい光景を見ていたが、その少女は誰かに呼ばれどこかに立ち去ってしまった。

俺がぼけつと突っ立っていたら、

兄のアーサー・カーランドが俺を呼びに来た。

「トリスタン！！お前何やってんだ！！客人が来るから、屋敷に居ろって言われていただろ！！」

ばあか！！とか言ってる兄の説教は聞き流して、じゃああの女の子は客人だったのかと、思った。

「、兄さん」

「・・・何だ？」

怒っていたからか息が乱れている兄に尋ねた。

「あの、女の子は？」

「はあ！？女の子って、お前会ったのか？」

ぎょっとしたように兄に驚かれた。

「会ったというか、見ただけ」

はあっと溜息をついた。

目をつむれば鮮明にあのターコイズの瞳が思い出せる。
酷く賢そうな目をしていたあの女の子。

「 あのレディはなあ、エーデルシュタイン伯爵家の次期当
主だ。父上にエーデルシュタイン伯爵が用があるから連れて来られ
たって方が正しいな」

呆れたように兄さんは話してくれた。

「・・・恋でもしたのか？」

「そうかもしれない」

そう、呟くと。

確かに未恐ろしいくらいに綺麗な子だったけどなあ兄さんはぼや

いている。

「諦める。身分が違う」

空気が変わった。冷たい斬りつけるような視線。

兄が家で次期当主の座を勝ち取ったのは甘いだけでは無いのだという証拠。

苛烈な性格をしているから勝ちとれたとも言っ。

兄さんの翡翠の瞳は冷たい氷の様に俺を見てきた。

「確かに、我が家は名家だ。普通の伯爵家くらいなら嫁でも、婿でも選べるだろう」

だがな、エーデルシュタイン伯爵家だけは別だ。

「あの家は、政府創立の以前から存在する。格が違うんだ」

そういう会話をしてすぐ俺は幼年学校に入れられた。

兄さんの差し金だっことはすぐに分かった。

だって、エーデルシュタインの子が通う予定の学校だったから、アーサーはあなたに甘いのよって皆が言ってた意味がよく分かった。

そう、兄は俺達弟には甘いのだ。

分かりにくくて照れ屋だけど。

「 、 「

声が掛けられて過去から今までに引きずり戻らせられる。

「何すんだ。マーリン」

「煩いですよ。お茶にすると言ったくせに自分だけ呆けて」

「いっそ、その頭潰して差し上げましょうか？」

笑顔で言うなこの腹黒。

マーリンのこの性格にもだいぶ慣れた。

初対面でこいつに驚かないで友好を深めていったエーデルシュタイン令嬢。

もといシャルロッテは凄いと思う。

ガウエインも最初にこいつにあつたとき引きつった顔してたしな・

・
ランスロットは何故か懐いてたけど。

「シャルロッテは？」

「彼女ならとつくに厨房に貴方が頼んでたお菓子を取りに行きましたよ」

貴方も早くいきなさい。

「わーったよ。じゃあ、持ってくるから」

ひらりと片手をあげ、それを告げ寄宿舎の方に歩いてった。

SIDE：ガウエイン

こいつって、黒いな……

トリスタンとマーリンの会話に眉をひそめた。

シャルロツテがいないところで口論することになっている所が二人の共通点か。

お互いにほのかにだけ好意を寄せてるのが分かるしな……

なんて言うか

「……不毛だ」

仲が良くせに恋敵同士。

お互いに認め合っているからこそお互いに引きやしない。

力量も互角。

勉強ではマーリンが勝ってるけど、トリスタンだって頭が悪いわけじゃない。

こいつらに惚れられたシャルロツテも不憫だけど、僕だって負ける気はない。

もしこの気持ちじゃ恋じゃないとしても僕が彼女の事を好きなこと。その想いには変わりがない。

この気持ちは無駄じゃないってことを知っているから、だから僕は、

「なあ、マーリン」

「なんですか？」

「負けないよ」

君にも、親友にも、^{トリスタン}負けない。

この気持ちは誰にだって負けやしない。

「ソレは、宣戦布告ととっても？」

「ああ、かまわない」

マーリンは感情を中に隠したのか、にこやかに笑いながら尋ねてきた。

紅蓮みたいに真っ赤な瞳を煌めかせて。

涼しい顔して、綺麗な笑顔で全部隠して、その癖その中身はその真逆な腹黒男。

けど、僕達^{トモズチ}に嘘はつかないことは知っている。
だから、付き合っていてられる。

「せ、先輩・・・」

おどおどしているランスロットには悪いけど、
君が思慕の念だか尊敬の念だか知らないがソレを抱いている彼女は
僕達の想い人なんだ。

だから、ね。

「ランスロット」

「は、ハイ!!」

そんなに怯えなくてもいいのにね？

ニツコリ笑って教えてあげた。

「容赦、しないよ」

真つ青になったランスロットと、呆れた顔したマーリンが印象的でした。

おまけ

SIDE：シャルロッテ

サンドイッチやスコーンをトレイに乗せて運んで行くと何故か空間が薄暗くなっていた。

行きたくないんだけど。

何というか暗雲？的なものが濃く漂っている。

ああ、ランスロットが暗雲的なものに飲みこまれてる。

しょうがない、可愛い後輩兼弟分の為だ、突入するか。

・・・凄い嫌だけど。

十一話 私の学友は愉快犯一名、腹黒一名、天然一名、わんこ一名（後書き）

トリスタンは好きと言ってるけどLikeの方の様な気がする自分でも認めています。LikeがLoveが分からないらしいです。あと、アーサーさんは名前だけちびちびと出す予定です。

あと、マーリンとトリスタンはミエル人です。

こんな主人公が書きたい。

戦国BASARAの名前の出て来ないモブ将兼美濃の国主、斎藤龍興に成り代わってしまった女性主人公。

斎藤龍興という名前だけど女性。男装した主人公。叔母の濃姫に似て美形。

斎藤家唯一のBASARAの能力者ということで生まれた時から男装生活。

半兵衛とは親友で、幼なじみで仲良し。義理の叔父の信長に戦々恐々。

しかも、転生主なので幼少時から神童と呼ばれる。

取り合えず叔父から美濃を守りつつ死亡フラグをたたき折りたい。そんな主人公の話が書きたい。

登場人物紹介 学生&幼少期バージョン

名前：シャルロッテ・アルトゥル・フォン・エーデルシュタイン
綴り：Charlotte・Arthur・von・Edelstein

髪：真つ赤な髪。前髪は垂らしてる。肩ぐらいまでのショートヘア。

瞳：大きくて垂れ目がち。色は青に近い緑色（光の加減で色が変わる）。

容姿：人形のように整っている。西洋の貴族のように華やかな顔立ち。

本人曰く体格は平均。実際は平均よりも小さい。

明らかに平均より軽い。昔の後遺症のせいか体重がつきにくい。

食べないとどんどん痩せていく体質。華奢。

性格：根は生真面目。飄々としてるけど友達や知人が少ない分、その人たちには優しい。あんまり隠せてないけどお人よし。理屈屋で頑固。海賊が嫌い、というよりも怖い。祖父に似たのか、何事でも決めれば何をも切り捨てられる。そして感情の制御を完璧に行える。気が長く滅多に怒らないが怒ると手がつけられない上に、非情に執念深い。嫌いな相手はとことん追い落とす主義。

備考：海軍本部大将青雉の義娘。エーデルシュタイン伯爵家の次期当主。

悪魔の実、自然系^{ロギア}ユキユキの実の能力者。

勉強は好きというか得意。何でも頭の中に入ってる（本人曰く知っていることを知っているだけ）。

運動神経自体はいいけれど、あまり積極的にやろうとはしない。幼年学校に入れられてから体力がついた。盤上遊戯や数独が得意。一番得意なのは囲碁。一応祖母に裁縫を習ったので得意。和裁も刺

繡もできる。専門学校に通っていたので料理の方が得意。歳の離れた親戚がいる。

名前：ユースタス・キッド

綴り：Eustass・Kid

髪：真つ赤な髪。原作の時みたいに髪をあげてない。

瞳：ツリ目、赤い色。

容姿：色白で強怖面気味のイケメン。

性格：良くも悪くもガキ大将。仲間には優しい。敵には容赦ない。

仲間を馬鹿にする奴にも容赦ない。夢を馬鹿にする奴はもっと容赦ない。

とにかく不器用。他人の事には鋭いくせに自分の感情には鈍い。

備考：島の悪ガキ代表。まだ悪魔の実は食べてない。

運動能力が異常にいい。勉強は嫌い、やればできる子。成績は悪いが頭は良い。

名前：キラ

綴り：Killer

髪：目を隠すぐらい前髪が長い。稲穂みたいな金色。

瞳：切れ長で青い目をしてる。

容姿：髪で顔がほぼ隠れているが、それで人に不快感を与えないくらいには整っている。

性格：クールでドライ。初見では伝わりにくい、中身は結構熱い。仲間は大切にするが、他人はあまり気にかけないようなタイプ。

親がいなかったからか、世の中と大人を冷めた目で見ている。

備考：キッドの参謀役。運動神経がいい。勉強は普通よりできる程度。

雑学や海での基本知識はばっちり。読書をするほうが好き。

名前：マーリン・ウォーロック

綴り：Merlin・Warlock

髪：肩のあたりまである銀色に近いアッシュグレーの髪。

瞳：切れ長で業火をはめ込んだような紅い瞳。目つきが鷹の様に鋭い。

容姿：鋭い印象を与える風貌だが、笑顔なのであまり気付く人間がいない。

穏やかな美形のイメージがついて回る。

性格：基本的に嫌いな奴には辛辣で結構なS属性。

さらりと毒を吐く。腹黒、笑顔で攻撃。

常に優しい笑みを引きながら、その目がちつとも笑ってない。

嫌いな相手とその他の扱いが明確。

備考：成り上がりの貴族の家柄。一族自体としての歴史は長いが貴族としての歴史は短い。

新興の家がこれまでの地位に昇りつけたのは代々の当主が抜け目のないやり手で、相当の策士だったから。何よりも能力を恐れられたから。元々、魔法使いの人間の血を引く一族。

他の貴族からは魔法使い、魔術師、wizardと恐れられている伯爵家の嫡子。

年下の従弟がいる。この中のメンツで一番軟弱そうに見えるが実は一番肉弾戦が強い。

名前：ガヴェイン・ソレイユ

綴り：Gawain・Soleil

髪：あまり整えていないせいで寝癖でくしゃくしゃの木漏れ日の光みたいに淡い金髪

瞳：いつも眠たげな青みの強い紫色の瞳。

容姿：色白。髪に目が行きがちで気付かれないがとても整った顔立ちをしている。

性格：マイペースで天然気味。

備考：この性格が原因で担任の先生に嫌われ一学年留年した。
本人は特に気にしていない。

頭いいけど、面倒なことが嫌いなためあまり頭を使うことが無い。
グランドライン
偉大なる航路でも有数の大商人の三男坊。

父親に将来の海軍上層部にコネを作ってこいと放り込まれた。
トリスタンは友人。

名前：トリスタン・カーランド

綴り：T r i s t a n ・ K i r k l a n d

髪：茶色に近い濃い金髪

瞳：大きな目の深緑の瞳

容姿：じつとすると二枚目。

性格：女性に優しい。喋らなければいい男なのにと評判。

やる時はやる男。恋愛には意外と一途だったりする。

へらへらして掴みどころがないがそれは一種の処世術だったりする。

本来の性格はとても情が深い。だからそれを嚴重に隠している。

備考：代々海軍本部に努めている家の次男坊。母親は名家の令嬢。

兄は優秀。

遊んでばかりいたらついにキレた父親に海軍士官学校付属幼年学校に放り込まれた（という表向きの理由がある）。頭が特別いいわけではないがとにかく要領が良い。

さぼるは遊ぶは教師はおちよくるはそのくせテストなどではいい点取って先生に嫌われるタイプ。

弓の腕前は歴代の卒業生たちの中でもトップクラスに入る。

名前：レイク・ランスロット

綴り：L a k e ・ L a n c e l o t

髪：淡い茶色にも濃い金髪にも見える飴色の髪

瞳：青空みたいな青い瞳。

容姿：目が大きいため小動物的な容姿。うつすらそばかすがあるため、見た目が幼く見える。

性格：礼儀正しく優しい。純情で素直。

備考：剣の名門レイク家の跡取り息子。純粹過ぎてこの子の前で悪事や意地悪を行うことが出来る奴は少ない。いじくったりおちよくるやつはいる。子犬っぽい。

名前：モルガン・ル・フェ

綴り：Morgan・lee・Fay

髪：背中の中ごろにまである鮮やかなブルネットの巻き毛

瞳：切れ長の鳶色の瞳。

容姿：きつい顔立ちをしている。肌も健康的。可愛いよりも綺麗。

性格：勝気でカッコいい。純情では無いがそこまでスレてはいない。婚約者に恋してるので彼の前では恋する乙女。

嫌なことにはシレッと仕返しを忘れないあたりイイ性格。

面倒見がいい。見て見ぬふりをしようとしてそれができない。結構、優しい。

備考：代々海軍本部に勤めている家の長女。トリスタンの兄とは婚約関係にある。

そのわりにトリスタンには容赦がない。頭もよくて要領がいい。運動神経もなかなか。実はガウエインの親戚。シャルロットの生活の人間味のなさに目を剥いてなんだかんだで面倒見てくれて友人になった。きつい言葉で誤解されることが多いけど実は凄くいい人だったりする。

名前：ギネヴィア・レオデグランス

綴り：Guinevere・Leodegrance

髪：長い緩いウェーブのかかった蒲公英色の髪。

瞳：淡い水色の垂れ目

容姿：優しい容貌の女の子。

性格：なんか、ぼわ〜んとしている。穏やかな性格。

多分マイナスイオンなんか出してる。

流される人みたく見えるがきちんとした芯を持っているため流されない。

結構何でも、おやおやまあまあで片付ける人。

備考：シャルロッテの遠い親戚。モルガンとは友人関係。運動神経おっとりしているようで結構いい。

頭もいい。というか、性格面が凄く良い。そのためか、成績表に凄く良い子です。とか書かれる。

十二話 女の子の友人もいますよ？（前書き）

女の子も出してみたかった。

なんか、全てオリキャラのみのオリジナル展開になって来てる・・・

十二話 女の子の友人もいますよ？

SIDE：シャルロッテ

「シャルも、あんな男ども何て放っておけばいいのに」

男なんて、みんなバカなんだから。

そう言葉を紡ぎ、綺麗な黒い巻き毛を煌めかせてにつこりと笑いながら

小首を傾げ、淑女にしか見えない態度のまま彼女は私に告げる。

「モル・・・、君の未来の義弟君がいるのにソレを言うの？」

私と同室の友。

モルこと、モルガン・ル・フェはそう言う。

「婚約者^{アーティ}は別格だもの。トリスタンなんてどうでもいいわ」

「モル、貴女・・・」

たしなめるように言う、ギネヴィア・レオデグランス。

蒲公英色の髪をした優しい容貌の子。

この二人が私と同室の友達だ。

「あー、もうギネヴィアはトリスタンのことあんまり知らないから・・・」

煩わしそうに、ギネヴィアに告げるモル。
眉根をよせている。

普段はお互いに性格が違うから馬が合うのか仲が良いけど、時々こう激突するのはいかなものかと思うんだけど。でも、時々意見をぶつけ合うから友情が続くわけで……。

「まあ、落ち着きなさい。二人とも」

いつも、だいたい私が仲介役になる。

まあ、それでも良いんだけど、二人と仲良いし……

あれか、修のおじ様と礼おじ様みたいな感じというのだろうか。まあ、二人が仲がいいなら、いつか。

そんなことを考えながら、二人の仲介に集中することにした。

こんな穏やかな時間の流れる毎日。

お互いの第一印象は果てしなく微妙でしたが、まあまあ愉快に過ごしています。

SIDE：モルガン

第一印象は綺麗な子、だったと思う。

クラスで一番とかそういう次元じゃなくて、飛びぬけていた子。

私達と同じ、白いシャツに群青色のリボantai、

チェックのはいった黒のワンピース、

プロシアンブルーに銀と紅のエンブレムとラインが入ったブレザー。

同じ格好をしている私達と埋没してしまうような服装なのに。
人の目を引きつける、何かがあった。

細い、華奢な身体。

細い首に支えられた精巧に作られた人形かアーティの家にいる妖精
の様な美しい顔。

燃えるような紅い髪。

見る者を引きつけるくらい鮮やかなのに、炎のような危うさを含む
ソレ。

それとは正反対の生命の元を象徴するような青みを含んだ翡翠の瞳。
肌は夢のように白く、滑らか。

私はこの子が人間じゃないと言われれば信じただろう。

それほどまでに浮世離れた雰囲気の子だったのだ。

凜と前を見据えてしゃんと背筋を伸ばしてただ立っているだけでも
視線を集める。

そんな、女の子なのだと。

（苦手な、タイプだわ）

そう思った。

話したこともないのに、そんな事を思うのはどうかと思ったけど、
一回係わり合いになったらその縁が一生ついて回りそうな気がした。

そんな第一印象。

SIDE：ギネヴィア

シャルロッテさんと初めてお会いしたのはエーデルシュタイン伯爵の主宰されたお茶会ででした。

私、ギネヴィア・レオデグランスの家はエーデルシュタイン伯爵家と薄くですが血縁関係があり。

それゆえに、そのお茶会に招待されたのです。

それに、エーデルシュタイン伯爵の直系の孫。

シャルロッテ・アルトゥル・フォン・エーデルシュタインの内々のお披露目でもあったようです。

母親であられるセリナ様と父親であられる海軍大将青雉様（当時の地位は少将であったので秘密の間柄だったでしょう）との恋で、生まれたシャルロッテさん。

遺伝子鑑定の結果。

列記としたエーデルシュタインの直系と分かった時は酷く騒ぎになったものです。

宮廷雀？

いやこの場合は何と云えばいいのでしょうか、

ロミオとジュリエットのような悲恋で生まれた子供。それについて皆が噂したものです。

「何故、あの二人が？」

「本当にこんな関係があったのか」

「父親には似ていない」

「気味の悪いくらい母親に

そっくりだ」

まあ、なんといいですか、聞いてて気持ち悪いくらい噂が駆けまわりました。

私のような遠縁にも聞きに来る方達がいたのですから。まあ遠縁だから聞きに来たのでしょうけど、本家に近い方達には聞けないでしょうから。

そんな噂なんてものともせず。

凜とした背筋と姿勢でシャルロッテさんは前を見据えていました。彼女にとってそんな噂は些事なことだったのでしょう。

だから、私の第一印象は前を見据える人でした。

学校で部屋が同じになってからは、確かにそうだけど、違う一面があることも分かりましたが。

基本的にはあまり印象が変わっていません。

SIDE：シャルロッテ

第一印象は果てしなく微妙だったが、あの二人との仲は良好だ。

色々苦労してきたけど、

此処へ来てよかったなと思うことがいくつかある。

それは、もちろん友人ができたこと、あの二人がいなければ馴染めなかっただろうし・・・

自分的には計算わたししつつくして本を読んでただんだけど、二人にはそれがとてつもなく異常に見えたらしくて、なんとなしにずるずると面倒を見てくれた。

それに、あの噂のせいであんまり人が近寄って来なかったのに、近寄って来てくれたので、嬉しかったりもした。

たしかに、私は人生再スタート気味だけど、

あんな気持ち悪い好奇に満ち溢れた視線を浴びて、嫌な気分を内側に完璧に押し込められるほど強くはない。

それに私が反論に使う言葉は、あの祖父の“ソレ”に似ている。

重みを積み込んだ“ソレ”に対して、私の覚悟では背負っていくものが重すぎる。

あの祖父の様に背負いきれるとは限らない。

もし、自分が背負いきれなかったのなら私はあの祖父に未熟者として見られないだろう。

それに、人を呪えば穴二つ。あまり気持ちのいいもの、ではない。

まあ、家の事や出自の事もあってなかなか馴染めなかったから、本を読んだら、いつの間にか二人に連れまわされるようになっていた。

まあ、ソレについては感謝している。

私としては、本の時間とか計算しつくしているのだけど

入学して少しの間に二人に異常といいきれられ面倒を見てくれるようになった。

二人とも兄弟がいるらしい。私は、妹扱い

なんだろうか？

歳は、貴女達よりも上なんだけどね・・・

十二話 女の子の友人もいますよ？（後書き）

今回出てきた子はこっそり紹介に追加します。

更新頑張ります。

十三話 その頃父親は・・・（前書き）

青雉を暴走させすぎたかも・・・

そして、ドレークさんとスモーカーさんは苦勞人で固定です。

話し方が少しへんかもしれません。

十三話 その頃父親は・・・

SIDE：スモーカー

女がよく使うようなデザインの淡いブルーの便箋に切手が張られたそれは手紙である。

まあ、ソレ事態ならたいして可笑しいことじゃない。

持っている人物が、こいつじゃなければな。

今、俺の目の前にいるのはにへらと笑い崩れた大将青雉の姿で、どうして俺が巻き込まれたのかが分かって溜息をつきそうになった。

だが、上官の手前、そんなことするわけにもいかない。

サボリ魔だが、海軍最高戦力だ。

それに、最低限の仕事は仕上げているのも知っているからな。

しかし、だ。

俺だって同期の奴が泣きついてこなければ、今は近づきたくない。俺の中の何かが、警報を鳴らしている。

だが、頼まれた以上声をかけなくてはならないだろう。

非常に嫌だが。

「何やってんすか？」

「・・・・・・・・」

その問いには答えずに、あいかわらずにへらと笑いながら手紙に目を落としている上司を殴りとばしたくなったが我慢する。

「何やってんですか？」

「・・・・？ああ、スモーカーか」

ようやく俺に気付いたらしく手紙から顔をあげた。

「何って、手紙を読んでるんだよ」

そりゃ、そうだ。

だが、俺はそういうことじゃなく、
なんでそんなに笑いながら読んでるのかを聞きてえんだよ。

「で、いったい誰から？」

この男の事だから何度か見たことのある色気のあるグラマラスな美女連中なんだろうが、
それにしてもこの便箋なんて可愛らしすぎるだろう。

本当に誰だ？

その疑問は俺を驚愕に落とす返答として帰って来た。

「シャルロッテ。俺の一人娘だよ」

「！？」

こいつに娘なんていたのかよ！？

それより、嫁はどこに行った、娘がいるのに女と遊ぶなどが、いろんな言いたいことがあったが封殺された。と、言うよりも捕まったと言う方が正しい。

俺は、もう二度とこいつが手紙読んでいる時に近づかねえ。

そう、決めた。

SIDE：クザン

淡い青色の紙面には、几帳面に整った字がちらちらと並べられている。

流れるような筆跡というのはこういうものの事を言うのだろうと自分の娘の事ながら感心した。

あんなことがあった、こんなことがあったと生真面目に。しかし年相応に書いて送る娘の事が愛おしい。

女の子の友達もできたそうで、それにも安心した。

男親として、友達が男の子ばかりとかちよつとばかり嫌だしね・・・

そここのところの考えは伯爵と同じ意見だ。

俺の娘を嫁にするなら俺の攻撃を受けて立っていられるような男じゃないと！

それを伯爵に言ったら、私の孫に手を出すやつは私を出しぬけるく

らいじゃないと、と言った。
俺も大概だけど、伯爵も大概だと思う。
だって、エグイしこの人。

笑顔の下で計算して、全てを知っておきながら何も知らない様な顔をして

自分の手を汚さずに全て手に入れる男だ。

外面がいいから気付かれにくいけど、中身は相当苛烈な策士。

権謀術数渦巻く貴族、政府の修羅場を全てくぐり抜けてきたその手腕は恐ろしい。

しかも、一番恐ろしいのは自分が行ったと気付かせないこと。

この人が本気を出せば政府のほとんども麻痺させれるからな……。

……シャルロッテ、嫁に行けんのかな？

思わず遠い目をしてしまった俺は、悪くはないと思う。

SIDE：シャルロッテ

前会った時から何かと面倒を見てくれるドレークさんから手紙が届いた。

手紙に書かれていたのは、

「大将殿をどうかしてくれ……」

その冒頭の文章を見た時に思わず、手紙をポケットに押し込んだ。

え、何？お父さん何やってるの？

何が悲しくて、朝から混乱されなきゃならないんだ……！

しかも、家族についての事で、

拳句の果てには泣きたくなるよ……！

でも、ソレをそう思ったのはつかの間の事で……

ポケットから取り出して、読み進め始めた手紙には娘の惚気が酷いと書かれていて、

さっきとは違う意味で泣きたくなった。

お父さんが私の事を褒めてくれたのは嬉しい。

でも恥ずかしさとかで泣きたくなるよ……！

何、これ！？何やってるの！？

このスモーカーって人が被害者じゃあないか……！

ひたすら、巻き添えを喰らった系……！

……恥ずかしい……！

恥ずかしくてどうにかなりそうだ……！

私があれば。年相応な精神をしてれば顔とか真っ赤になってるよ……！
地面をローリングで転げまわってるよ……！

ふう、少しだけだけど落ち着いた。

お父さん、わたし娘。

めっちゃめっちゃ恥ずかしいです。

とりあえず、スモーカーさんに手紙を書いて送りましょう。

この人に思いつきり迷惑掛けてるし……

後は、お父さんに伝電虫で電話しよう。

うん、そうしよう。

・・・嬉しいけどある程度の限度って必要だよね・・・

(学校の始まる前からこんなにやられるなんて・・・!!)
(

十三話 その頃父親は・・・（後書き）

スモーカーさんは一時間くらいほのけに付き合わされた感じ。似たような被害者が青雉傘下の部下に続出。

ドレークさんは手紙を書きました。この人も巻き込まれています。

シャルロットも傍から見れば何時も通りですが、

流石に分かりにくい方向でテンパって混乱してます。

この子、何時もなら床をローリングとか言いません。

自分で書いというんですが、この父親と祖父ではたしてシャルロットは結婚できるのでしょうか・・・

結構捏造だらけです。

何時も応援ありがとございます！！

十四話 卒業式のシーズンなのに・・・（前書き）

マーリンとシャルロットの話。

ただ、二人が話したりしてるだけ。

もう、半分くらいオリジナルの様な気がしてきた・・・

十四話 卒業式のシーズンなのに・・・

SIDE：シャルロッテ

「仰げば尊し、ねえ・・・」

我が師の恩と言える人が少ないのが欠点だ。

そうばやけば、マーリンも同じような顔でうなずいた。

「少ないですね・・・」

「少ないよねえ・・・」

士官学校に進級するための試験（付属の幼年学校だが進学のための試験はある）も終わり、

中途半端に気の抜けた二月。

卒業式の頃は日本なら桜の咲く様な季節だが、ここでは桜は咲かない。

ただ、海の色合いが変わるだけだ。

夕焼けに包まれ橙色に染まる教室。

マホガニーのずっしりとした机も、白い壁も橙色に染まっている。

夕日にキラキラとマーリンのアッシュグレーの髪が光るのが見えた。リコリスのような切れ長の瞳は夕日よりも濃く、それこそ煉獄の炎のように紅い。

男の癖に滑らかな肌は一部を除く女の子に羨望を浴びている。

口元には柔らかい笑みが浮かんでいるが、その笑みが本物ではないと知ったらマーリンに憧れている子達はどう思うのか。

まあ、どうでもいいと思った私は意外と冷たいらしい。

「ネルヴァ先生ぐらいだ、私が恩を感じている先生って」

「ランス先生ですか・・・」

「あの先生だけだ、私たちの事をきちんと等身大で見てくれたのは」

行儀が悪いと叱られてしまいかもしれないが肘をつきながらぼやく。窓から入ってくる海からの風が心地よい。

窓から見える海はきらきらと輝いて、まるで鏡合わせの夕焼けのようだ。

「まあ、悪名高きウォーロックの裔と貴族の中で最も権力のある“最古の騎士”エーデルシュタイン。それに軍の名門カークランド、剣の名家レイク、大商人のソレイユ、古の名家フェ、砂の王国とも縁続きの貴族であるレオデグランス。それに畏怖するわけでも、ごまをするわけでも、腫れもののように扱わず一人の子供として扱いましたからね」

そう続くマーリンの柔らかい声に微笑む。

君もそう言えばネルヴァ先生には好意を抱いてたよね。

そう言くと、まあ否定はしませんと声が返ってきた。

からかいがないやつめ。

「最初に見た時は何だこいつと思ったんだけどね」

「あ、それは私もそう思いました」

二人してクスリと顔を見合わせて笑う。

あれは、きつと、一生忘れない。

そんな衝撃^{インパクト}があった。

最初にあつた時は胡散臭いとは思えなかった。

柔らかなそうな明るい茶色の髪がベーターヴェンもかくやの鳥の巣のようで、

切れ長の瞳は分厚いビン底眼鏡で見えなかった。

身長は高いが猫背で身体が細いから強くも見えず、

ぐちゃぐちゃの白衣と啞え煙草がその印象に拍車をかけていた。

「それで、普通に授業始めたからね」

「自己紹介もしてましたけど、分かったことが名前だけでしたからね・・・」

「マーリンのあんな呆けた顔を授業中にみたのは初めてだったよ」

「シャルのぱかんとした顔もですけどね」

はははとお互いに笑い合っているけど、これが他のメンツに言わせると超怖いモノらしい。

わたし達は笑ってるだけなのになあと私が言えば、そうですねエとマーリンが相槌を打った。

そんな関係。

トリスタンは引き攣った笑みを浮かべ、ガウエインはいつもと変わらぬ表情、

ランスロットは泣きそうで、モルは視線をそらす、ギネヴィアはいつもと変わらない。

「それは、ともかく面倒だな」

「もう、書きあげてる貴女が言いますか？」

かざりとマーリンの男にしては長く優美な指が紙面をなぞる。

桜貝のような爪さえも綺麗だと思う。

普通に、綺麗なものを綺麗だと思っているから。

それを昔こぼしたら、顔を真っ赤にして怒られた。

ただ、私は綺麗なものを綺麗だといっているだけなのにな・・・。

「卒業式の答辞なんて面倒なものにきまっているんじゃないか」

そうきっぱりと言いつた。

SIDE：マーリン

紙をめくる音が私の耳に届く。

几帳面に整えられた文字の上を、確認するかのように、
細く真つ白な指がなぞる。

その色の白さと桜貝のような薄桃色の爪のコントラストがとても綺麗。

綺麗な人なのだと、見るたびに思う。

姿勢の艶やかさではなく、その姿勢や魂の在り方が美しいのだと私は思うのだ。

ほら、今だってこんなに綺麗。

細く白い指で髪をかきあげる仕種もペンを滑らす姿も綺麗。

ふとした当たり前の仕種なのにこの人がすると何でも綺麗に見える。

シャルがペンを走らす音だけが教室の中に響く。

他の方々に言わせると私とシャルの二人だけの時はありえないほど静かしい。

この人は仲がよくなって、自分が集中し始めるとほとんど何も話さなくなる。

私もそうだがシャルも饒舌に思われることが多いけど、根は寡黙な方なのだ。

仲がよくなったからこそその、この無言の空間に居たたまれなさを感じない。

むしろ、ウォーロック家の名前を理由にバカにしたり文句をつけてくるバカな奴らと話すよりも、シャルとの空間の方が大切に大事だ。

本当の仲間以外の有像無像の事なんて糞喰らえだ。

第一、息苦しいと思わなくていい、この時間が私は好きだったりする。

お互いに自分は相手に沈黙していても、それが嫌われず許される仲なのだと知っている。

だから、気軽に息が抜けるのだ。

今だって、私は本を。

彼女は書きものを。

お互いに影響がしないものを同じ場所で行っている。

それでも気にならないのだから、私は相当彼女に染ま^{シャル}ってきているのだろう。

まるで、たちの悪い麻薬のようだ。

否、麻薬よりじんわりと攻めてくる分、こちらの方がたちが悪いのだろうか？

なんて、そんなことを考えても、彼女の傍から離れたくないのだけだ。

伏し目がちな緑の瞳は、睫毛で影になって群青に見えた。
夕日の輝きにキラキラと光る髪。

思わず、手にとってみる。

さらさらしてて絹みたいだ。

そう思つて、手で遊んでみると、

「……マーリン。君、何がしたいんだ？」

紙に向かつていた青緑色の瞳がうるん気に見つめてくる。

そんな視線を魅せられても、綺麗だと思つてしまふ私は色々と末期なのでしょう。

貴女の色は、宝石みたいですね。

そうこぼしたら、いつもの表情でいなされたけど、耳だけが凄く赤かった。

シャルのその顔を見て、なんかキュンとしたのは此処だけの話である。

そして、だいたい私とシャル。

二人で揃つとこれに似たような会話が交わされるのは此処だけの話である。

十四話 卒業式のシーズンなのに・・・（後書き）

いつも、応援ありがとうございます。

これからも頑張ります。

お気軽にコメントしてくれると嬉しいです!!

あと、誤字脱字報告はしてくれたら嬉しいなあと思ってます!!

十五話 恋ってなにそれ美味しいの？（前書き）

マーリンが若干不憫というか貧乏くじを思いっきり引いた。
色々大人びていて勘が鋭い分、これから苦勞する予定・・・。

十五話 恋ってなにそれ美味しいの？

SIDE：シャルロッテ

恋とは何なんだろうか？

分らない。

それが、随分昔交わした会話の一部である。

恋とは、特定の異性に強くひかれること。

また、切ないまでに深く思いを寄せること。

恋愛のことを言う。

その意味は知っている。

けれども、本当に恋に落ちたことがないのだから分らない。

好きになると、恋をするのは違うのだろうか？

分らない。

大きくなってからはおちおち好意も伝えられない。

好きだとか言うのは好意の表れだが、恋情の表れではないと思うのだ。

至極、個人的な主張だけでも。

そう言うと、モルとギネヴィアは少しつまらなそうな顔をした。
その二名。そんなに私が恋に興味がないことが不満か……！

女性は三人そろえば姦しいというけども私はあんまりしゃべらない
しな……

二人が喋っているのに相槌を打つぐらいなのが、
女性は一人以上ならこんなに姦しいのだろうか？

「えー、つまないわよシャル！！」

「誰か好きな方はいないのですかシャル？」

不満そうな顔で見つめてくる二人にため息が出そうになったのを抑
える。

「恋がそもそも分からないんだからしょうがないだろう。そんなも
の、してみなきゃ。いや、落ちてみなければ分からない。だから、
理解できないのが当たり前だ」

そもそも恋は、分からない。

気付かない間に落ちているのが恋だろう。

私がそう言うと、二人とも「え、何いってんのこの子」

みたいな顔をされた。

私は、これ、馬鹿にされているんだろうか？

「マーリンはどんなのよ？」

「ガウエインさんやトリスタンさんは？」

金髪コンビと仲のいいマーリンを引き合いに出される。
ほっとけ！！

「普通に友人だ！それより、モルはアーサーさん、ギネヴィアはランスロットだろ？二人こそどうなのさ！！」

それは、幼年学校から進学して士官学校に入った皐月の頃。

木漏れ日の下で話した他愛のない話。

SIDE：ヒナ

ネイビーブラックの生地に白いリボン、白ラインのセーラー服に、黒いリボンの結ばれた同じ色の帽子。

私がまだ士官学生だったころから変わらないそのデザイン。

木陰の下、黒、金、紅の髪がキラキラと輝いているのが見えた。

セーラー服を着て、思い思いの格好で座っている三人組の女の子。

紅い髪の子は凄く嫌そうに、黒い髪の子と金の髪の子は瞳を輝かせて嬉しそうに。

学生時代特有の何て言うのかしらあの空気というか雰囲気。

綿菓子のようなふわふわの甘い空気。の中で、恋の話をしていた。

目を輝かせる二人の少女。

もう一人の少女は、うんざりとした顔をしている。

私の時にもあんな子っていたな・・・。

思わず顔がほころぶのが分かる。

時がたつても、女学生のこういったところは変わらないらしい。

「それより、次は黒檻のヒナ少佐の講義でしょ？私準備忘れたから、ゴメン！！」

ついに紅い髪の子が逃走した。

見てて可哀相なくらいにからかわれてたから、その気持ちは分からなくもないわ。

でも、その光景を見て、少しばかり懐かしい気分になった。

もう、戻ることのできないあの時代。

・・・、少しだけ羨ましく思ったのは自分だけの秘密だ。

ヒナ、沈黙。

SIDE：マーリン

恋に焦がれて鳴く蝉よりも鳴かぬ螢が身を焦がす。

まさか、自分がこんな恋をするなんて思ってもいなかった。

でも、気づいたら彼女の姿を目が追っている。

耳が彼女の声を探している。

気づいたら、彼女の笑顔が自分の一等好きなものになっていた。
いつもは冷静で大人びた顔が綻ぶ。
それはまるで春の木漏れ日の様で、眩しい光景だった。

それを見た時に、

ああ、私、この人のこと好きだ。

すんと胸に言葉とか感情とかそうつたものが降りてきた。

好き、すき、スキです。

貴女の事が好きなんです。
理屈も理論も理由も分からないまま私は恋をしました。

でも、貴女が好きなのは、違う人なんですネ。

それを、見たのは偶然だった。

図書室で手紙を読んでいる貴女。

見たことないくらいに嬉しそうに幸せそうに綺麗に笑った姿を見て、
負けました。

私達という時の笑顔とは違う。

肉親に向ける笑顔でもない。

動物と戯れる時に見せる笑顔でも、面白い事が起こった時の笑顔でもない。

貴女が一番綺麗に見える笑顔。

それとなく聞いたら幼友達からの手紙なのだと嬉しそうに笑って告げて。

南サウスの海シーにいるんだと、はずんでいる口調で。

悔しい。真っ先に浮かんだのはどす黒い感情。

会ったこともない人間に嫌悪感を抱いたのは初めてだった。

こんなに攻撃的で嫌悪感にあふれた感情をシャルの前で出しそうになるのは初めてだった。

（すぐに笑顔の下に取り繕ったけど）。

もしも、彼女がその感情に気付いていたのなら。

もつと話は簡単だった。

私に振り向かせればいい。

もしも、彼女がその感情に気付いていたのなら私はそうなるように努力しただろう。

でも、彼女は、シャルは気付いていなかった。

そんな相手に気付かれたら、もう友人としていられなくなる。

そんな状況になるのだけはごめんだった。

だから、好意をだしても好きだとか告白に類する言葉は出さなかった。

相談役についた。

そんなまま、現状を維持するだけの日にちだけが過ぎていき。

私、マーリン・ウォーロックは今日も今日とてシャルの相談に乗り、ガウエインと紅茶を飲み、トリスタンとは口喧嘩を発生させる。

そんな日常を送っているのである。

十五話 恋ってなにそれ美味しいの？（後書き）

いつもありがとうございます。

これから頑張ります。

あと、士官学校の制服は、幼年学校の制服とは違いセーラータイプです。

女の子は黒に近い紺に白ライン、リボン。

基本長ズボンですが、女子生徒は式典の場合は絶対にスカート着用です。

冬場は上のセーラーは黒に近い紺。

夏場は白に紺の襟。白ラインだけどリボンは赤か青。

革靴かスニーカー。

男子も似たような感じ。

帽子は付けても付けなくてもいいけど、式典には絶対に必要。

そんな感じ。

十六話 迫る陰謀？それなのに主人公不在（前書き）

シャルロットが主人公なのに出てきてない。

しかも、これ原作OPなのに半ば以上オ리지ナル展開だ！！

それでもOK！！

っていう懐の大きな方はどうぞ！！

十六話 迫る陰謀？それなのに主人公不在

SIDE：トリスタン

咄嗟に泣き付いた俺に帰ってきたのは冷たい眼差しと言葉だった。

「貴方馬鹿なんですか？数学ができない軍人なんて終わってますよ」

炎のような紅い眼が絶対零度の冷たさを帯びて、俺を見降ろしてくる。

いや、身長は俺の方が高いんだけど。

今俺、床に正座させられてるし。

しかし、いくらそんな目で見られてもこいつに聞かなきゃ分からないんだから仕方ない。

そうして俺は頭を深く深く下げたのだった。

そしたら、呆れたようにマーリンが溜息をつくのが分かった。

数学の練習問題の説明をするマーリンの声を聞きつつ、俺はほっと安堵のため息をついた。

こいつに今見放されたら俺終わる。

「まずはこれを変形させて、ここから……」

何がどうなっただと一緒のルームメイトなのは分からないが幼

年学校から一緒のマーリンことマーリン・ウォーロックはパツと見、人当たりがよく見えるけど実は自分に近づく人間を冷たく見極めているそんな冷めていてシビアで極めてドライな人間だ。

いつも、笑顔で特大の猫かぶっているせいで気付いてる奴は少ないけど。

そんな所までもたちが悪い。

最初はいけすかない奴だと思っていた。

事実最初の方はお互いに大嫌いだったのだと思う。

年下に大人げないくらいの嫌悪感を抱いていた。

そんな完璧主義で何でもこなすマーリンは意外と身内に甘い。

そんなことに気付いたのは結構前だったりする。

だがそれを口に出した瞬間、俺は色々と終わるだろう。

綺麗な顔で辛辣な罵倒を口にするマーリンの姿が目に見えた。

「聞いてるんですか？トリスタン」

不意に声をかけられる。

咄嗟に口に出たのはああ、だの、うう、とかの言葉で、思い切り呆れたように溜息をつかれた。

「・・・数学ができない軍人なんて聞いたことがありませんよ」

「分かってるから聞いてんだろ。俺は下っ端で終わるのはごめんだ」

「だったら、キチンと基礎ぐらい固めなさい。このままだと一生下っ端ですよ」

「うつ、・・・分かってる」

俺は頭が悪いわけじゃない。

ただ、数学ができないだけだ。

他の科目はまあまあ優等生だ。

しかし、一番苦手なのが軍隊と絶対に切り離せない数学だってことが終わってる。

物資の計算、部隊運用の計算、弾道の計算。

軍隊で偉くなるのは計算する量が増えるということだ。

だから、できないと軽く死ねる。

「で？ちゃんと聞いてますか？」

「おお、聞いている聞いている」

お前、怒らせたら怖エし。

内心の俺の眩きを聞きとったのか、

訝しげな顔で俺を見た後、教材に視線を落とす。

「じゃ、解いてみてください」

さっきの応用ですから、落ち着いたら普通に解けますよ。

「おう」

心なしか冷えてきた空気に触れ、気合を入れなおしてペンを握りなおした直後のことだった。

部屋のドアが弾け飛んだ。

部屋に飛び散るドアの破片と、とどろく様な轟音。

だが、ソレに驚くよりも俺がビビったのは

笑顔でペンを折ったマーリンがいたことである。

もう、やだこいつ超怖い。

SIDE：マーリン

目の前にいるこのバカスタンをぶん殴りたい。

私より年上なのに何でここまで基礎ができてないんだ・・・！

数字の羅列に頭を痛める。

要領はいいから教えたなら理解するけど、すぐ覚える分忘れやすい。

テストが終わると同時にほぼ忘れるから、意味がない。

こうゆう人間を殴りとばしたいと思うのは私だけだろうか？

いや、でも先生たちなら理解してくれそうな気がするのだけど・・・。

内心の苛立ちに蓋をしつつ、添削をする。

気分は赤ペン先生だ。（シャルが前、私達の勉強風景を見て言った言葉だ。何となく語呂がいいのでこういつときの表現に使っている）。

それに、私はあまり人に勉強を教えるのが得意ではない。

こういうのはハッキリ言うトシャルが一番得意なのだ。

しかし、昔それをしたらIt is the green-eyed monster which doth mock The meat it feeds on. になつたトリスタンと喧嘩した。

要するに嫉妬深いトリスタンと喧嘩になり、散々な有様になつたので、

教え下手だが、私が教えているのだ。

正直面倒くさい。

同年なんだから、ガウエインに聞きなさいと言つたら、

あいつは確かに数学できるけどマイペースで天然なせいで進まない
と答えられた。

それもそうだ。

納得して了承してしまった過去の自分が憎い。

それで、トリスタンに勉強を教えていたらドアが破壊された。

思わず、握つてたペンを折ってしまった私は悪くはないと思う。

SIDE：ガウエイン

僕の前で綺麗な顔をゆがませてマーリンが怒っている。

目は笑つてない。

それだけに怖いと言えるのかもしれない。

僕は人と感性がずれているらしいから全然怖くないんだ。

世間一般ではこういうのを怖いというのだろうか？

「何か言い残すことは？」

少年にしては艶やかな唇が弧を描く。

トリスタンがマーリンの後ろで顔を少しばかり青くしているのが見えた。

「特にないけど。・・・シャルロットが、マーリンのこと呼んでた」

こういう時は話をそらすに限る。

・・・めんどいし。

嘘は言ってないし。

そう言うともーリンは凄く速さで居なくなっていた。

僕が言うのもなんだけど、自分に正直だあいつ。

それに、ムカつくくらいに人の顔色を察するのがうまい。

表面上は怒っていたが僕が自分^{マーリン}がいたら言えないことがある。

それを見抜かれた。

氣い使われてるよなあ僕。

一応年上なのになあ。

「で、何があつた？」

青かった顔を普段通りに戻して、問いかけてくる親友^{トリスタン}。

こういうときは凄く頼れるのに、なんでいつもはああなんだろうか？

「面倒なことが起きそうだ」

自分にしても珍しく苦々しい表情になるのが分かった。

枯れてる大人の陰謀に、潤いのある子供を巻き込まないで欲しいよ。

十六話 迫る陰謀？それなのに主人公不在（後書き）

地震大丈夫でしたか。まだ小刻みに余震が続いています。
東北、関東の地域の方は特に十分に気をつけてください。

十七話 首謀者判明。しかし、狙う人物不明（前書き）

ほぼ完ぺきにオリジナル路線を突っ走り始めました。

あと、何話かの間にシャルロッテの血のつながった父親を出したいです。

彼女が海賊嫌いになった理由も書いてあります。

すこし残虐描写？というものもかいてあります（相当少ないと思いますが）。

それでもOKと言う方はどうぞ！！

十七話 首謀者判明。しかし、狙う人物不明

SIDE：シャルロッテ

夢を見た。

私の過去で、夢の中にしか出て来ない記憶を。

鮮烈で一生色褪せないだろう。

そんな、夢を見た。

森で遊んでたら悲鳴が聞こえた。

それに驚いて急いで、丘の上から見降ろしたら、真黒い海賊旗と紅い街が見えた。

聞こえるのは人の悲鳴。

砲撃、砲弾の音。ガラス窓が割れ、建物が崩壊していく音。

街が燃えている、家が溶けている、人が死んでいる。

綺麗な町並みは壊され壊され壊され壊しつくしたものをさらに壊した有様だった。

青空でさえ、紅く染まり。

全部、炎で紅く、煙で黒く染まって。

街は瓦礫で埋め尽くされていた。

壊れてしまった。壊された。

崩れて、燃えて、奪われ、崩壊した。私の故郷。

綺麗な自然にあふれていた街だった。

特筆すべきこともなかったけど、悪い所じゃなかったのに、全部壊れた。

お母さんの元に奔った。
自分の家族だったから。

マチだった場所にヒトだったモノが、あちこちにあって、叫びそうになった。

苦悶の表情に染まり死んでいったヒト。

私の事を虐めてきた人達もいた。

私の事を嫌っていた人達もいた。

私の事をどうとも思っていなかった人達もいた。

私の事を空気か何かのように扱った人達もいた。

そして、私の事を好いてくれた一握りの人達もいた。

皆、死んだ。

ヒトの形をしていなかった。

曲がって千切れて燃えて捻じれて挽肉の様な有様になっていた。

ソレを視界に入れて奔る速度をあげた。

頭を支配するのは死んだ人たちの事じゃなくてお母さんの事だった。
綺麗な金の髪をしたお母さん。

雪で花を作ったらきつとあの人の様な美しいものになるのだと思う。

こちらの世界で暮らすようになってから、海賊は怖いものだとは認識するようになった。

漫画の様に堅気の人間には手を出さない。

そんなの守るのは白ひげみたいな大海賊が酔狂な海賊だけ。

海と自由を愛し旅する海の男？そんなもの糞喰らえだ。

あんなのただの無法者の集まりじゃないか。

海賊。海の賊。海を駆ける掠奪者達。荒くれ者。

乱暴者。アウトサイダー。そんなもの大っ嫌いだ。
そんな危険で怖い奴らに、母を会わせてはいけない。
頭の中にはそれしかなかった。

だから、森から一目散に街はずれの我が家にまで突っ走った。
走ってるうちに気持ち悪くなって頭が痛くなって横腹が軋み、吐き
そうになっても走った。

走って走って走った。

そこにいたのは、赤くなって地面に倒れているお母さんと、

赤い刃物を握ったかいぞく。

「!!」

目が覚めた。

ドクンと心臓は飛び跳ねて、寝巻は汗でぐっしりとしている。

「最悪だっ・・・!!」

思わず吐き捨てた。

ゾクゾクと背筋に感じるのは悪寒と嫌悪感。

吐き気のするようなおぞましい記憶。

カタカタと震える手から視線を外す。

体が震えているのは気のせいだ。

だから、この吐き気やら嫌悪感は気のせいだ。

ベットから身体を降ろし、鏡を覗く。

そこに映っていたのは泣きそうな顔をした自分だった。

なぜ、長期休暇の初日からこんなブルーにならないのだろうか。

浮かない気分のまま洗面所で洗顔と歯磨き、髪の手入れ。

昔よりも伸びた紅い髪を首の後ろでゆるい三つ編みに編んで垂らす。飾りは濃い色合いの細い緑のリボン。

服装は制服じゃなくて、ベージュのリボンタイがついたオフホワイトのブラウス。

それに合せた紺のふんわりと広がるスカート。

かかとが低めの靴はブラウスに合わせた白。

薄手の上着を羽織り、意外と凝ったデザインのキャラメル色のトラंकを持つ。

朝食は船でだ。

部屋のドアノブに手をかけた所で

（あの夢を見る時って、大概悪いことが起きるんだけど・・・。）

ふと、それが頭の中をよぎった。

その予感が本物だったと知るのには船に乗ってからの事だった。自分の第六感が嫌いになりそうな瞬間だった。

SIDE：マーリン

「「気をつける」」

帰省する私達二人に、ガウエインとトリスタンは口をそろえていった。

「トリエットの馬鹿当主がお前とシャルを狙っている」

「シャルは女の子だからな。・・・お前が守れ。多分、他の奴らは当てにならない」

そのぶつきらぼうだが心配する声を聞いて、この間の二人の会話の内容を理解できた。

報告が回ってきたので知っていたけど、信じられない。

トリエットがウォーロックとエーデルシュタインを敵に回す。

そんな、命知らずの事が出来るなんて。

確実に姉上達とエーデルシュタイン伯は動いてる。

感じたのは呆れとほんのわずかの警戒心。

自分的には全然大丈夫なことで平気なことだった。

それでも青紫と緑の目をした友人達は私達の事を真剣に案じていてくれることが分かって。

なんだか、ほっとした。

それを素直に表には出せなかったけど。

たぶん、貴方達には付き合いが長いから薄らとは伝わっているんだろうとは思っ。

「分かってます。流石に私達につくメイドや使用人くらいなら平気でしょうけど。他にも乗客はいますからね」

どうにかしますよ。

そう言うのと、当然だと言葉を返された。

惚れた相手も守れないなんて男じゃねえぜと、にやりと笑って。

同じ相手の事が好きなのにそれでいて、

その人物と一緒に帰る人間に危機を伝えるなんて、

真っ直ぐすぎて馬鹿ですけど、嫌いじゃありません。

むしろ、そこまで真っ直ぐだから私の友人になってくれたというか。

しかし、私にはもったいない程の友人ですよ。本当に。

魔法使いの私には真似できないくらい真っ直ぐな人達。
ウォーロック

性格が真逆だから一緒にいるめるんですよね。

友人と言うよりも悪友という感じですけど・・・。

そうやって、ゆるりと口角をあげた。

「貴方達もお気をつけて。私達ではなく貴方達かもしれませんから。
ギネヴィア嬢やモルガン嬢を守って差し上げなさいよ」

「言われなくても」

開け放った窓からは、カーテンがめくれるほどの熱い風が吹いてくる。

ああ、夏が始まる。

十七話 首謀者判明。しかし、狙う人物不明（後書き）

いつも応援ありがとうございます。

皆様に質問なのですが、シャルロッテの武器を下の三つの中から選んで頂きたいのです。期日は4月1日まででお願いします。

1・レイピアと短い短刀

2・十字槍
ランサー

3・まさかの両手持ちの大剣

これの中から投票お願いします。

十八話 海の陰謀 上（前書き）

応援ありがとうございます。

これからも頑張ります。

アンケートありがとうございます。

結果は後書きに書いてあります。

十八話 海の陰謀 上

SIDE：マーリン

穏やかな波の海が見える。

陽光にキラキラと光るのはとても美しい。

それは認めよう。

しかし、それよりも静かに穏やかに過ぎていく彼女との時間が自分には嬉しい。

（二人きり。従者とハウスメイドはいるけど使用人だから関係ない。いつも、彼女は誰かというから二人きりで過ごすのは久しぶりだ）

椅子に腰を降ろして手紙を読むふりをして、向かい側で詩集を読む彼女の横顔を覗き見る。

初めて見た時よりも濃くなった青混じりの緑瞳が宝石のようにキラキラ光っているのを見た。

（シャルは可愛いけど、綺麗。髪の毛だって、朝焼けの色みたいだ）

普段はどんな視線にも気づく癖に、私達しかいない時は気付かない。頼られてると、信頼されていると思っていいいのは嬉しい。

けど、こう手放して信頼されているとなんか複雑です。

・・・じつと、見つめていても気づかれないのは良いんですけど。なんというか、面映ゆいというか。

“魔法使い”のウォーロックの人間が、こんな恋をするなんて信じ

られない。

青春。

そんな言葉、信じてなかったけど自身が経験するとなると笑えない。こんな傍から見れば青臭く若い、見てる方が照れるほど貴女に恋をするなんて！

そんな傍から見れば、思いつき青春なことを考えていると。

ツと微かに震動が伝わった。

そんな複雑な空間で、誰か来たのが分かった。

私達に敵意を向けてくる存在。

正確には私達の“家”に恨みを持つ人間の存在。

エーデルシュタインの従者パレットとハウスメイドは気付いていないから相
当の玄人だろう。

そんなのが分かってしまう自分に苦笑する。

敵が多い家に生まれるのにも困ったもの。

警戒はするにこしたことは無い。

部屋とこのフロア全体に僅かに漂わせていた魔術の霧。

俗に言うウォーロックの“魔女の霧”をその存在に気付かれない様に纏わりつかせる。

それにしても無粋に過ぎる。

シャルとの時間を邪魔するなんて、滅ばいいのに。

チツと舌打ちしたい気分になるけれど、それは耐える。

今、私は学生でウォーロックの“魔女”の姉上達とその庇護下にあるカーサとケインと違って

無害で脆弱なウォーロックの人間でいなければいけないのだ。

だから、我慢、我慢。

あとでたつぷりとこの時間と船旅を邪魔したトリエットの無礼者には思い知らせてやろう。

ウォーロックの魔法使いの恐ろしさを。

そんな物騒な考えを心に秘めたまま、席を立ち彼女の傍による。

エーデルシュタインの使用人たちには怪訝な顔をされたけど、そんな事は気にしない。

彼女の耳にそつと手をやり、内緒話をする様な形になる。

彼女に声を囁く時は、柔らかく、優しく、そして甘くする。

それが、いつの間にか自分で決めていたルールだった。

「シャル、」

本に視線を落としていた紅い頭が上にあがる。

長いまつげに飾られた宝石よりも綺麗な瞳が私を射抜く。

「なに？マーリン」

わざと囁かれたのに気付かれたのかボリュームを落として返事をされた。

「トリエットの事なんです」

「、分かった」

此处では話しにくいことだと理解したのか、席をたつ。

「展望デッキが綺麗なの？」

「ええ、シャルにも見てもらいたいと思ひまして」

物陰から感じる視線をわざと無視して、聞かせるようにいつもより少し大きく。

そして、手を差し出す。

「お手を、レディ」

「ありがとう」

私のちよつとしたおふざけに、にこつと笑って手を添える。訓練をしているのに細くて白い手。折れない様にそつと握った。

どんな貴女も素敵だけど、やっぱり貴女には笑顔が似合う。そして、わたしは貴女の笑い顔を見るのが好きです。

でも、これから話すのはドス黒い陰謀の話なんですよね。

ああ、トリエットなんて滅べばいいのに。

SIDE：シャルロッテ

見晴らしのいい展望デッキでマーリンに聞かされた話は
きな臭いというか陰謀とか暗殺とか黒いと言えないね、という
話でした。

おじい様からの手紙で一応の事は知ってたけど、此処まで馬鹿だとは思わないよ。
普通。

ウォーロックの跡取りであるマーリンを殺し、
できたらエーデルシュタインの次期当主である私を殺す、なんて。

それが失敗した時の事なんて思考の外にやってるんだから。

「笑えないね」と言ったら「笑うしかないの間違いでしょう」と言われた。

それもそうだと納得してしまった自分がいる。

間抜けここに極まりな出来事に巻き込まれる下っ端が哀れ極まりない。

「私達が自分たちの意思で選んだこと以外の事で、ソレに関係なく害意を持った相手に怪我させられたら相手の首がかつ飛ぶよね」と言ったら、「それも知らないでしょう」と返された。

取り合えず、笑いながら話す話じゃないねといったら
気付かれにくいからいいんじゃないですかとまで返された。

怒ってるというか不機嫌だよね、マーリン。

藪蛇は嫌だから言わないけど、ね。

「・・・私達のどちらもあわよくば殺そうとしてると、」

「そうですよ。腕は良いのに可哀そうですよ。あの暗殺者^{アサシン}」

「お馬鹿な老害のせいで!!」

最後は二人で笑いながら、海を眺めながら。

一応、気付いてるのを知られたら不味いということで
展望デッキという隠れる場所の無い開けた場所で、
顔と顔を近づけての内緒話風に、

カモフラージュと憐れみを籠めてクスクスと笑いながら。

でもこのシュチュエーションって君が14歳で私が13歳だからで
きる代物だよねと笑ったら、

それに私達が好き合ってるからできる代物でしょうと笑われた。

滅多に見せない本当のマーリンの笑顔で。

（不意打ち！確かに君の事は好きだけどね。誤解されるって！君、
好きな子がいるんだろ!!）

「君ね、私だから誤解されないけど、他の子にその笑顔で言ったら
誤解されるからね」

ほんの少しの照れと焦りを隠しながら、言つと。

「。」「」

小さな聞き取れない様な囁きを口にしたのが見えた。

「マーリン？」

思わず、聞き返すと

「・・・いやあご忠告をどうも。以後、気をつけますよ」

何もなかったかのようないつもの顔でひょうひょうと告げられた。

うん、何か隠してるだろう君・・・。

SIDE：XXX

全力で俺は不幸であると言いきれる。

視界になんとか入れることのできる、目に焼き付く様な紅い髪、銀に近いアッシュグレイの髪をした子供達眺めながら溜息を腹の中に飲みこんだ。

年齢に見合ったように笑う子供達。

その子供たちが中央貴族の間でも高貴な家柄であるとは一瞥して気づける人間は少ないだろう。

なんせ、ウォーロックとエーデルシュタインの直系だ。
普通暗殺しようとは思わない。

それなのに暗殺を頼まれた俺は貧乏籤を引かされたに等しいだろう。
要するに捨て駒。

エーデルシュタインやウォーロックは敵に回した時点で終わりなの

だから・・・。

それでも、組織が無くなっていないのは、泳がせているのだろう。

マジで、嫌だ。

逃げたい。

けど、逃げたら、名が下がる。
追っ手も仕向けられる。

逃げ道がない。

明日も見えない。

俺、この仕事が終わったら、田舎に住むんだ・・・。

白い大きな家に大きな犬を飼って、

純朴で純情なお嫁さんをもらって、子供は三人ぐらい。

男二人女一人で、息子の結婚式では泣かないけど、娘の結婚式では
号泣。

そんな、普通の人間になりたい。

多分、無理だけどな。

っ畜生！！

十八話 海の陰謀 上（後書き）

アンケートの結果です。

投票の結果。

レイピアと短剣になりました。

投票ありがとうございます！！

最後の暗殺者の方は次回ぐらいに名前を出してあげたいです。

作者は苦勞人が結構好きなので、何故かキャラが苦勞する羽目になります。

十八話 海の陰謀 中（前書き）

ようやく明かされる主人公の実の父親。

あと、苦勞する暗殺者はこれからも苦勞していく予定です。

十八話 海の陰謀 中

S I D E : X X X

暗闇の中、真下の一等客室特有の高級なベットに横たわり眠る子供を視界におさめる。

夜目が利く俺には灰色の髪が枕に広がり、
眠る顔は起きている時の大人びたものとは違って、
まるで幼子のような顔さえもくつきりと見えていた。

そのせいか、ズキリと何か広がったような気がしたが、
あえて無視し、慎重に手の中の武器を構える。

音を立てぬように、汗をたらさぬように、深く、慎重に。
ウォーロックの子供のか細く白い首に狙いを定める。

俺が依頼として命じられたウォーロックの跡取り息子の暗殺。
できるのならば、エーデルシュタインの子女も殺せと無理難題を吹
っ掛けられた。

無茶を言うなと唾でもはき捨てたい気持ちで胸がいつぱいだ。

世間一般で言う最底辺で生きてきた自分だから分かる勘。

第六感だの野生の勘だの言うらしいが、

これで助かったり命拾いしたことの方が多い。

俺は自分の勘を何よりも信じている。

その勘がとてつもなく、警報と警告を鳴らしている。

“きな臭い”、“危険”だと。

それでも逃げずに依頼を受けたのは前頭領が築き上げた看板に泥をつけない様にだ。

あの人死んで俺が面倒な扱いを受けているのだって知っている。だから、この任務は俺を捨て駒にするための作戦だ。

傲慢じゃないがあ組織で俺は一番腕がたつ暗殺者だ。
真つ向からいったら俺には敵わない。
だったら、不可能な任務を受け入れればいい。

クライアント
雇い主と組織の現頭領の思惑が重なったのだろう。
だから、こんな無茶で後で殺される依頼を俺に押しつけた。

至極、嫌な任務だ。
子供を殺すのが嫌いな訳じゃない。
殺せるし、慣れてる。
ただ、苦手なだけだ。

だから、この子供を見て胸が騒ぐのは気のせいだ。
気のせいなんだ。

SIDE：マーリン

アサシン
暗殺者に纏わりついた霧だけが、
私にそこに暗殺者が、人間がいることを伝えてくる。

正直、此処までとは思っていなかった。
霧を纏わせていなかったら私は普通に気付かないままに殺されてい

たのかもしれない。
そこまで、凄い技量。

気配の欠片もしない。
衣擦れの音も、呼吸の音すらしない。

この男が“オトナシ鳴無”と呼ばれている所以が分かった。
この男にかかればどんな人間も気づかぬ間に首を刈られて終わるだろう。

嫌な汗がジワリと背中に浮かぶ。

アドバンテージは相手にウォーロックの“魔女の霧”が纏わりついているだけ、

それ以外は向こうが圧倒的に有利。

ここまで無理難題を吹っ掛けられたのは何時振りだろうか？
ワンサイドゲームって自分がやられるとこんなに恐ろしいものなのか。

ふと、現実逃避めいたものが頭をよぎった。

この暗殺者アサシンは私を殺すのが目的で姉上とエーデルシュタイン卿が手を打っているとはいえ、エーデルシュタインの跡取りにして直系血族唯一の子女。

つまりシャルロッテの暗殺もできたらしろと言われている筈。

なら、私がここで食い止めないと、シャルが危ない。
自惚れじゃなければ彼女は私が怪我したり、死んだりすれば泣きますよね。

他人を中に踏み入れさせない癖に一旦中に入れた身内には

それこそ恐ろしく歯がとろけるほど甘い。

自分に厳しく他人に厳しいから気付かれにくいけど、未来の海兵には似合わないほど甘い。

仏頂面や作り笑いを浮かべることが多いのに、私達に甘く笑顔を見せる。

貴女を泣かせたら・・・。

ガウエインやトリスタン、ギネヴィアやモルガンに殺されますね。

シャルが泣くのを想像しただけなのに頭に浮かぶのは友人達の怒った顔。

ここで食い止めないとこの想像が現実のものになるとというのが理解できた。

なら、どうにかしますか。

相手に纏わりつかせている霧を少しずつ濃く重くしながら、見えない部分でこっそりと笑った。

SIDE：シャルロッテ

瞼をあげたら、懐かしい金色の髪が見えた。

その時点でこれは夢なのだと自分が納得した。

だってまだ悪魔の実を食べてない頃の自分がいるし、お母さんだって死んでない。

あれは何時だったか、自分の父親の事を聞いた時の記憶を夢みているのだと思う。

一度だけ聞いたお父さんじゃなくて血がつながった父親の話。

「お母さん。私のお父さんはどんな人なのですか？」

笑顔で聞く過去の私、此処からじゃよく見えない。

金色の髪に紅色の髪、髪の色や瞳の色しか変わらないほぼ同じ顔。歳を重ねることにお母さんに似てきている。

膝の上に乗つけた過去の私の髪を撫でながら、お母さんは口を開いた。

「ロツテと同じ真つ赤な髪に、綺麗な瞳の色。笑い方は豪快でお酒が弱いのにお酒が好きでねえ。最後に会ったのはもう何年も前かしら」

思い返しているのか綺麗に微笑みながら、過去の私に告げていて、

「お父さんの名前は？」

穏やかに進んでいく過去の話。
無邪気に尋ねる過去の私。

どちらももう戻れない過去のモノだった。

「
 シャंकスって言うのよ」

お母さんのその時まで聞いたことのなかった甘い声が耳に届いた瞬間、目が覚めた。
というよりも覚めさせられた。

ドオンとまだ遠いが士官学校の演習で聞きなれた砲撃の音によって。

海が揺れて、船が震動を反響させる。

そこまで揺れていないが音の大きさから考えて、結構な速さで近づいて来てるだろう。

ワンピースタイプのパジャマの下にデニムのホットパンツをはき、パジャマを脱いで、ロゴの入ったTシャツを着る。

ショートブーツに足を突っ込んで、最後に青チエックのロングシャツを羽織る。

おじい様の家に行くわけじゃないのだから動きやすくカジュアルな格好でも問題は無い。

むしろ、襲撃を受けそうな今、すこしでも動きやすい格好をしなければ。

メイドや従者バレットはもう起きているのだろう慌ただしく動き回る音がする。

それをあえて無視して実戦仕様のレイピアを左腰、貴族の女性が持つような飾りの護身用では無い刃が分厚く無骨な短剣を

右腰のベルトについたバンドにぶち込む。

この船には海軍士官学校の人間が多く乗っているとはいえ、実戦経験なんて上級生の演習の時にある位だ。

それに加えて学生以外の乗客の方が多い。

つまり接近を許したら酷いことになるということだ。

だったら付属学校で飛び級をしすぎたために飛び級の無い士官学校で

現在最年少記録を塗り替えて最高学年の私はどうしたらいいのだろうか。

士官学生で卒業したら士官ということが決まっているけれど、今は民間人でどうしたらいいのか分からなくて、がたがたと足が膝が震えている。

海賊は怖い。

全部壊して持つて行く。

昔の記憶がよみがえる。

背中を嫌な汗が流れていく。

それでも、自分で立ち向かうことを決めたんだ。

一回落ち着いて深呼吸。

一回瞬きをすれば、もう震えは収まった。

怖くないと言えば嘘だけど、今はすべきことがある。
前を見据えて、走りだす。

目指すのは甲板。

私は士官学生で能力者なんだから、甲板からなだれ込む海賊を迎え撃つ。

なだれ込むとする奴を能力で凍らせて、敵が動揺した所を一気に叩く。

もしくは、海軍が来るまで持ちこたえる。
そうしたら、私の勝ちだ。

十八話 海の陰謀 中（後書き）

いつも応援ありがとうございますこれからも頑張ります。

十八話 海の陰謀 下（前書き）

オリキャラがとても出てきます。

原作キャラのげの字ありません。

それでも、いいよ！！と言って下さる天使の様な心の持ち主の人はどうぞ！！

後、シャルロッテが主人公なのに不幸フラグ乱立で、ぼこられていきます。

彼女の明日はいずこ・・・。

それを言ったらマーリンも変なフラグ立ってるけど。

十八話 海の陰謀 下

SIDE：シャルロッテ

結果、意外とどうにかなってしまった。

一区切りついたと溜息をついた。

頬についているのは赤い血で、べたべたとして気持ち悪かった。

甲板は私の能力で白く凍っていて雪が降ったみたいになっている。所々赤く染まっている部分があるからロマンチックなものではないが・・・。

第一陣を凍らせて、それを逃れた相手を斬り伏せた。

淡々と刃を滑らせて、斬った。

一撃必殺で沈めるように、喉、肩、利き腕、足を狙って剣をはらった。

柔らかい人体に剣が吸い込まれていき、ぱつと真つ赤な鮮血が散った。

一応生きてはいるけれど凍っていたり、斬り伏せたりするから表わすとしたら屍累々？

何て学生に似合わない言葉なんだ・・・！！

内心すごくシヨックだ。

いつの間にか過去の非日常が日常になっている。

人を斬った最初の出来事は演習の時。

海賊に剣と殺気を向けられて咄嗟に実家で仕込まれた通りに体が勝手に動いた。

故郷が滅ぼされた時に赤色や錆ついた匂いに慣れたと思っていただけ、

すごく気持ち悪くて、握った剣から伝わる感触と流れ落ちてくる赤い液体が堪らなく不快だった。

というよりも、吐いた。

自分にも意地とプライドがあるので同級生の前では吐かなかったけど、

自由時間になった時に一人になれた時に吐いた。

中のモノを全部出して、胃液に喉が焼かれるくらいに吐いて戻した。空っぽにするまではいた。

気持ち悪かった。

手に残った感触もこびりついた赤い血も、赤い血の生ぬるい温度も、錆びた匂いも、それを、またかと思ってしまった自分ですらも気持ち悪かった。

手の感覚が無くなる位冷たい水をかけて、かじかむのも構わずに擦り続けた。

白から赤に手が染まってそれでも洗い続けて、誰かの手によって漸く水から解放された手は痛かった。

そこまで思い出した所で、急速に現実に戻される。

下卑た笑い声をあげる一人の海賊によって。

どんな事態だろうとどんな状況だろうとこの声だけは間違わない。

見覚えのある褐色の肌に赤茶混じりのこげ茶の髪。
黄色交じりの緑の瞳を歪ませて厭らしく笑うのは母を刺して苛めた
海賊だ。

忘れるものが、
忘れられるものが、
あの海賊団の、
壊した海賊の、
殺して奪って、
何もかも奪い取った憎い顔。
許さない。

「よお、久しぶりだなお嬢ちゃん」

蓋をして心の奥に隠してた感情が爆発する。
烈火のように燃える憎悪を胸に叫ぶ。

「っ貴様あああああああああああああああ!!」

本当は今こんな風に激昂してはいけないのだと分かっている。
トリエツトが仕組んだことなのだと理解している。
それでも、感情を上手くコントロールすることに定評のある私にも
止められない感情が存在する。

血が沸騰するような感覚。
視界が怒りに白く染まる。

相手の真正面から斬りかかり、腹部に衝撃。ぐるりと視界がひっくり返る。

「っかは、」

息が零れて、地面に杖で叩きつけられる。普通の杖なら私には効かない。

なら、この杖は、

「海楼石・・・！」

「そのとおり」

ギロツと睨みつけても、男は愉快そうに笑っただけ。苛立つ、ムカつく、腹立たしい。体が鉛の様に重い。

「だから、俺になにされようと抵抗何てできないってこと」

髪を掴まれて顔を無理やり上げられる。キツと睨みつけた。

「こんな風に、な」

床に触れていた手首が踏まれる。鈍い音がした。

「っい、！！」

喉まで出かかった悲鳴を呑み込む。

「ああ、ム力つくね。悲鳴ぐらいあげれば可愛げがあつていいのに。悪魔の実の能力者つてのはこうも化け物染みているのかい？・・・そうだね、まだ餓鬼だったお嬢ちゃんが能力で暴れられるくらいにはイカレているんだろうね」

ぐりぐりとねじるように髑るように足が手首を踏み続ける。

「っ、あああ、！！」

痛みに顔を歪める私を見て可笑しそうに、海賊はワラッタ。

S I D E : X X X

動いたのは俺だった。

ドオンと遠くで砲撃の音が聞こえたのをきっかけにか細い首にめがけて海楼石のナイフを振りかざす。

貰ったと思った。

そう、思った瞬間。

急にガクンと体が重くなる。

視界の隅に白い靄の様なものが見えた。

取り合えずターゲットに向かいナイフを投げつけてから、体を捻じり、逃れようとする。

体に纏わりつく白。

気持ち悪い。

靄のように体に吸いついてくる。

ワイヤーを投げつけようとした所で、白に絡め取られた。

重い、湿ってる。

鉛より重いんじゃないかコレ？

目の前に立つのは、アッシュグレイの髪に赤い目をしたウォーロックの跡取り。

冷たい視線で俺を見降ろしている。

うざったそうに髪をかきあげた。

あの少女と話していた時の穏やかさと幼さはどこかに消えてしまっ
たらしい。

鷹の様に鋭い目つきだった。

「・・・貴方が私の暗殺に来た“鳴無”ですか」

形こそ問いかけだが、これはもう俺が“鳴無”だと知っているなこ
の子供。

尋ねたのは、一応念のためと言う奴だろう。

「、ああ」

どうにか、動けないかと体をよじらせながらそう伝える。
どうにかしないと殺されるよな、コレ。

「貴方の所属していた組織が全部吐きました」

「・・・そうか」

裏社会は信用と秘密第一なのにそんな事まで漏らしたんじゃ、組織は壊滅させられていると考えた方がいい。

エーデルシュタインとウォーロックの逆鱗に触れたのだから、俺が今生きているだけでも奇跡に等しいだろう。

「で、俺を生かしてどうするんだ？俺は先代の頃ならともかく今はそこまで高くないぜ」

暗に俺が知っていることはお前たちが全部知っているのだと告げる。それを聞いて子供は愉快そうに笑った。

「頭の回転が速い人間は嫌いではありませんよ。　　気にいりました」

瞳が煌めき、月を背にしてチェシャ猫のように子供は笑う。

「姉上達やエーデルシュタインの翁に、暗殺者については一任されてるんです」

そう、独り言のように言葉を進める。

「・・・貴方は“鳴無”の名を捨て、ウォーロック家次期当主マーリン・ウォーロックに仕えなさい。そうすれば、貴方の拾い主、いや・・・組織の先代の名を汚さず、貴方が任務の時に殺された事にして生かしてあげましょう」

どうしますか？と瞳だけで問いかける子供。

そんなの決まっている。

「・・・分かった」

あの人の名前が守られるなら、俺はどうなってもいい。

「ああ、後・・・」

バキッと鈍い音がした。

目の前にいるのは拳を振り抜いた子供。

「シャルを狙った事はこれでチャラにしてあげますよ。一応・・・」
物凄く嫌そうな顔で赤い目が、俺を射抜いた。

SIDE：マーリン

部下に任せした後、動きやすい格好に着替えて、シャルの部屋まで走る。

駆けながら子供が持つにはごつくて重い二丁拳銃を腰の後ろにベルトで固定する。

安全策を取ったから私とシャルの部屋は対極の位置に位置していて、同じフロアなのに一回階段を下りて別の階段から登らなければならぬ。

しょうがないと言えばその通りなのだが、今はそれがとてつもなく煩わしい。

階段を飛んで、廊下を走って、階段をまた駆け上がる。

この僅かな時間でさえも煩わしい。

砲撃の感覚と船の揺れが大きくなっていくのを感じながら速度をあげる。

走って、シャルの部屋の扉をあける。

そこにはもうシャルはいなくて、死んだメイドと従者バレットしかいなかった。

あれ、可笑しいでしょ？

何でシャルがいないんだ？

何で、この二人が死んでるんだ？

シャルが殺したのはまずあり得ない。

“鳴無”でもないだろう。

じゃあ、誰が？

そもそも、何故私が狙われているのだと私達は思った？

エーデルシュタインを敵に回したら一族郎党皆殺しに近い扱いを受けるからだ。

ウォーロックだったら蹴落としてもそこまで強烈では無い。

報復だってエーデルシュタイン程、苛烈では無い。

まさか！！

「私が囹で、シャルロットが本命・・・！」

ウォーロックではなく、エーデルシュタインが狙い！！

確かに直系の後継ぎに恵まれてる私の家とは違い、シャルの家は直系はシャルだけで、

それ以外に跡取りになれそうなのは傍系の男子三人しかない。

トリエツトが自爆覚悟で狙ったのは・・・、

風を感じて咄嗟に横に飛ぶ、

頬に熱い感覚がして赤い血が頬から流れた。

「誰だ！！」

「あゝれ！？はずしちゃった？めゝんゝどゝくさゝいな」

影からむっくりと奇妙なシルエットが浮かび上がる。

オレンジ色のふわりとした髪に奇抜なメイクに服装。

その手に持っている物騒なものさえなければ、

まるでサーカスのピエロの様に見えたらう。

だが、その手に握られた大鎌を視界に入ればそんな愉快なものには見えやしない。

「死んでくれる？リユイル君はガバラのボスに雇われてるからさ」

くるくるくるくるとバトンの様に鎌を回しながら、私よりも小さい子供が笑った。

それにしても、ガバラ？

昔、シャルとした会話の中と新聞に出てきたような気が・・・。

否、それを思い出すよりも私が今すべきことは

「断固断りますよ。私の命は貴女にあげられるほど安い物ではありません」

銃を引きぬき、狙いを定める。

私が引き金を引くと同時に、鎌を構えたリュイルと名乗った子どもが突っ込んできた。

ええい、うざったい!!

早く終わらせて、彼女の所に行かないといけないのに!!
・・・なんだか、嫌な予感がするのです。

「そこをどけ・・・!」

「いゝやゝだ!!」

発砲した音と風切りの音が部屋に響いた。

十八話 海の陰謀 下（後書き）

応援ありがとうございます。これからも頑張ります！！

次回あたりは何人か原作キャラ出したいです！！

十九話 “トラウマ”の元凶（前書き）

主人公怪我してます。

海賊が外道です。

マーリンも大切な人（身内）に手を出されたら凄いことになりました。

少し、グロいかもしれませんが。

冷静な人が変な方向にキレたら怖いよなって話。

十九話 “トラウマ”の元凶

SIDE：シャルロッテ

ばきん。

きつと今の音を表現するのならこんな音。

足に蹴られていた手首が枯れ木の様な音を立てて多分折れた。

「、っつ」

思わず顔を歪ませた私に満足したのか海賊は笑う。

杖は私の喉元に押し付けたまま。

水につかったり溺れた時や海楼石を押し付けられた時に能力者に起こる虚脱現象。

今の私では指もあまり満足に動かせない。

そして、無理やり掴んであげられていた顔を思いつき叩かれた。頭がボールのように跳ねる。

「　　っ！！」

齒を食いしばり声を喉元に押し込める。

半ば意地でプライドだ。

この男の前で悲鳴も怯える様も見せたくない。

こんな　　で、　　な、XXXXXに自分の矜持を折るような真似なんかしてたまるか！！

「っち！！」

ソレに苛立つたのか、思いきりメインマストに叩きつけられた。もちろんすぐに杖は首に押しつけられる。

マストに叩きつけられた衝撃で背骨が軋み息がつまる。足がつかないからこの体制はだいぶ辛い。

髪を前よりも強く掴まれ視線を無理やり合せられた。

ギラギラと光る目の海賊が近づいてくる。

・・・吐き気がした。

「不公平だよなあ・・・」

眩く。

「俺はお嬢ちゃんの故郷に手を出してから、最悪だ。所属してた海賊団の船長はインペルダウンに送られちまうし、俺の乗ってた予備の船だけしか手元にやあ残らなかった」

ギリツとさらに強く杖が押し付けられる。
んなもの知るか。

「・・・そんなの、自業自得だろ」

思いきり杖を首筋に当てられて、首に負荷がかかる。

つまり、有り体に言えば私は今、首が絞められているに等しい有様。

杖で首を、むしろ気道での呼吸が圧迫される。

呼吸なんてできなくて、空気なんて身体には入って来ない。

ただ、気が狂うほどに苦しい。

まだ辛うじて動く手で、相手の杖を掴む腕を掴む。
どれだけの力で絞めているのか分からなくなって、
結局私の腕は相手に爪のあとをつけるだけで力なく横に落ちる。

しかし、それすら気に喰わなかったようで、さらに杖に力を籠められた。

口が酸素を求める金魚みたいに、パクパクと開閉する。
私の意思とは関係なしに生理的な涙が目の端に滲んだ。

ぽつり、ぽつりと頬を伝って涙が零れる。

ソレを見て、海賊“鮮血”のガバラは心底愉快そうにわらう。

わらう。

わらう。

わらう。

わらう。

それが昔、母を苛めた時の顔と同じで殴りとばしたくなった。

「化け物でも、涙なんて流すんだねえ」

死ねばいいのにこのXXXXX。

いやむしろ、殺してやる。

絶対に許してやるものか。

SIDE：マーリン

フォンフォンと回る大鎌に寄り添う風が生臭い血の匂いが充満した室内に吹き荒れる。

冗談でしょ？と問いたくなるくらい極悪なソレを持つのはオレンジ色のピエロ。

私よりも小さい体躯で大きな獲物を振りかざす。

「ひやはははははははははははは！！」

笑うオレンジの死神。

あえて射程距離内である懐に入り込むことで鎌をかわすと、相手もバックステップで距離を取った。

隙がない。

内心舌打ちをする。

体勢を立て直しながら、
せめてもの牽制に拳銃を発砲する。

死神の持つような禍々しい大鎌は滑るように動き、銃弾を寸断した。

ありえない。

「化け物・・・」

思わず吐き捨てる。

頬に滲む赤と額から滲む汗が混じって襟元に落ちていく。

いつもならすぐに拭うのに、今はそんな暇なんてありはしない。

「のー！リユイル君は化け物じゃーない。化け物つてのは、もっと強い人間」

隙を見せない癖にいやに大きなリアクションで感情を表すピエロ。
ああ、もう何なんだ。

「それ〜か、悪魔の実の能力者なんかのことを言う〜の〜だよ」
心臓が凍りついたような気がした。
それに気付かずピエロは言葉を続ける。

「特〜に！！クライアントの殺したい相手のシャルロッテだっけ？
ロ〜ギ〜アの能力者なんか人間じゃないよ。あ〜ゆ〜のが本当の化
け物だよ」

五月蠅い。

黙れ。

ふざけるな、
貴様になにが分かる。
人の大切な人を貶すな。

「・・・私は、ウォーロックの後継ぎです」

「そ〜だ〜ね〜、リユイル君もそうクライアントから聞いてるによ」
目を少し伏せれば幼い頃から仕込まれてきた、
常に冷静かつ怜悯な思考を保てという言葉がすぐに思い出せる。

けれど、その言葉は許せない言葉だった。

よりもよって、私の前でソレを言うかこの
あの方は化け物なんかじゃない。
が！

「知ってますか？ウォーロックの人間はある教えを生まれてからす

ぐに仕込まれる言葉があるのですよ」

「それで？」

「私は、その言葉を今まで忠実に守ってきました。しかし、その言葉を撤回します。私にも譲れないことぐらいある……！」

ぎろりと睨みつける。

奥の手である“魔女の霧”は使いたくなかったがしょうがない。頬を伝った血を媒体にして霧を発生させる、

相手の輪郭がぼやけるほどに霧が室内に巻き起こる。

霧が、鷹の、狼の、騎士の、蝙蝠の形を作っていく。

そして、肅々とピエロを包囲していく。

私の前で私の大切なもの^{身内}に手を出すと抜かすとはいいい度胸だ。

マーリン・ウォーロックの、“魔法使い”の身内に手を出すとどうなるのか教えてくれる。

どうせ、こんな仕事してるんだ、嘆く人間なんていないだろう？

その蛮勇は認めてやる。

・・・だからさっさと死んでくれ。

「
行け」

そう、霧の獣たちに号令をかけ、すぐに踵を返した。

後ろから狂気に満ちた笑い声が聞こえたけど、気にも留めなかった。それよりも、シャルの方が私の心を重くしめている。

恐らく甲板が見通しのよい場所だろうとあたりをつけて走りだす。

嫌な予感がした。

S I D E：シャルロッテ

ドン！！！！

海賊の船から火花が上がった。

激しい砲撃の音。

先ほど、この船の受けた砲撃の比じゃ無いほどの正確さと連続射撃。海が揺れ、波が起こり、船が揺れる。

船が傾き、拘束から解放される。

正確には、投げ捨てられた。

私が能力を使って凍らせた甲板を私は木の葉のように滑っていく。

身体は酸素を求めている、頭は酸欠でがんがんするし、視界は涙でうるんでいる。

首は痛くて、上手く呼吸は出来なくて、むせる。

ようやく息が吸えるのにひゅー、ひゅーと半ば喘息の様な感覚に陥る。

「ひっ、はっ・・・！！」

身体に力が入らなくて、砕かれた腕は痛覚もなくて、ただ重いだけ。呼吸は未だに満足にできないし、過呼吸みたいな有様になっている。

死ぬ。

今、とどめ刺されたら死ぬる自信がある。

あいつに殺されるのは死んでもごめんだけど。

そこまで考えた所で急速に黒に塗りつぶされていく視界の中、最後に見たのは、

あいつの船に砲撃をしかけている船の交差するカトラスに三本傷の
髑髏の海賊旗だった。

そんな、展開望んでないんですけど、神様。

私の事がそんなに嫌いなのでしょうか？

十九話 “トラウマ”の元凶（後書き）

応援ありがとうございます！！これからも更新頑張ります！！

マーリンも次回活躍する予定です。

そして、次には赤い髪の方を出したいです。
本当に。

二十話 海賊嫌いと魔法使いと海賊と（前書き）

少し明かされる昔の話。

ちよつと読みにくい分。分かりにくいかも知れませんが、
後、マーリンは男を魅せました。

少し流血表現があります。

二十話 海賊嫌いと魔法使いと海賊と

SIDE：シャルロッテ

一瞬、黒に塗りつぶされた私の視界は過去の記憶に支配された。世間一般に言う走馬灯。

走る馬のように場面が素早くグルグル回る。

私の意思は関係なく帰れない過去の記憶もよみがえる。

最初に目の前に出てくるのは私が思い出せる限りの昔の記憶。本に囲まれた畳の部屋と鬘鑠と背筋が伸びた祖父の姿。温かな陽光と、古い本と畳の匂い、それに囲まれた光景だった。

私は、前の父とも母とも言葉を交わした記憶がない。

昔から、父とか母とかに縁の薄い子供だった。

母は産後の肥立ちが悪くて死んでしまったし、父も私が一歳になるかの微妙な時期に死んでしまった。

二人とも、寒い季節に死んでしまった、らしい。

昔、そう祖父に聞いた。

それを聞いた時に私は、母が父を連れて行ってしまったのだと幼心に感じたものだ。

だから、私は今一、親と言うものがよく分からなかったりする。

祖父と祖母が育ててしつけてくれた。・・・幸福しあわせであったと思う。どこか、時代にそぐわなかったのは認めるけども。

私は、祖父が祖父だったせいか、元々そういう素養があったのか、やっぱり親がいないことが原因だったのか、年齢よりも相当スレていて大人びていて、子供らしくない子供だった。

親なしと笑われた時にそんな事を言った悪ガキを口撃で泣かせたりスレていて子供なのに大人の様な子供。扱いにくい変な方向での問題児だったと思う。

そんな、子供らしくない子供が一番欲しかったものは家族だった。祖父や祖母が嫌いだったわけじゃなくて、好きだったけど、家族とはなんか違う感じが幼心にあっただと思う。

例えば、日曜日の公園とか小学生の頃の参観日とか運動会とかで同級生や下級生の両親と手をつないでるのを見た時とか、凄い羨ましかった。

両親のいない私には手に入らない光景だったから。

幼心に自覚した。

誕生日プレゼントになにをもらっても一番欲しい物では無かったから。

自分は手をつないでくれる家族が何よりも欲しかったのだと。

それで自覚しても何ら変わることもなく日常を過ごしていた。

中学時代は結構やんちゃしてたトムと遊んだりなんたりしたり。

高校の後輩の静雄と折原が何度校舎を壊そうが

興味無かったので図書室で観察してたり。

そもそも校舎を喧嘩で壊すな。バカ。

後輩の門田を可愛がりながら、卒業してまた学生になって過ごして

私の人生はこんなもんなのかと変な方向に悟りを開きつつあった。
私は、世界で過ごす最後の日も普通に布団に入って寝た。

それで、目を覚ましたら赤ん坊になって別世界で、髪の色も瞳の色も変わってて、この世界での母親に抱かれてて、最初は訳が分からなかった。

それでも、初めて一緒にお母さんと暮らせて幸せだった。

親と言う人間に触れるのは初めてだったから。

欲しかったものだったから。

お母さんはシングルマザーで貴族の娘で、

私を身ごもって東の海まで逃げて私を産んだ。

お父さんと呼ばれる人はいなくても、

お母さんが未婚のシングルマザーってせいで白い目で見られてても、それでも何とかやっていけていて。

でも、私が悪魔の実を食べたせいで全部壊れて。

ほとんどの島の人が敵になって、お母さんも酷い目にあつて、
だんだん日常が壊されていつて、

故郷で最後に壊れたのがお母さんも含めたほとんど全部で。

漫画で見ていた時は死体なんて出て来なかった。

けど、ソレは漫画だからで。

実際には元いた世界よりも死の境界線が自分の傍にあつて、
それを無意識の間に乗り越えてしまった自分がいて。

結果的に故郷は壊れて、殆どの人は殺されて。

・・・血のつながった父は助けに来てくれなかった。

お母さんが一番大切に思っている人で、

お母さんに約束をした癖に一度も会ったことがない。

お母さんを助けに来るって言ったくせに、そう私はお母さんに聞かされたのに。

会いに来てくれると、お母さんに約束してくれたのに。

私の故郷を壊したのもお母さんを殺したも海賊で。

私の血縁上の父親は海賊で。

私を積み荷にしたのも海賊で。

結局、ようやく掴めた欲しかったものは零れ落ちて、壊されて。

一番大切にしたかったものだから、余計嫌で、許せなくて、駄目だった。

私が能力者になったから海賊が故郷に来たわけで。

私がいなかったらお母さんはまだ実家にいたわけで、すなわち死ななかったわけ。

じゃあ、それは私が間接的にお母さんを殺したことになるのだろうか？

そんなことを考えてクザンお父さんに引き取られてからずっと夜に泣いた。

でも、やっぱりお父さんはそれを知っていて、荒療治でそれを治してくれた。

手を差し伸べてくれたのだ。

そんな場面がとぎれとぎれに過去の感情まで含めてグルグルと私の中を回るのである。

お父さん、お母さん、お祖父ちゃん、キッド、キラ、マーリン、トリスタン、ガウエイン、モルガン、ギネヴィア、ランスロット。他にも一緒に厳しい訓練を乗り越えた同級生達。

扱いにくかったであろう私達を普通の子供のように扱ってくれた恩師。

皆の顔が脳裏に浮かぶ。

（あ、これ、本格的に駄目だ）

瞼を押し上げたらカトラスを振り上げたガバラの姿が見えて、また瞼を降ろした。

多分、あれ海楼石だから死んだなと思って。もう赤い色は見たくなかった。

カトラスが私の頭に振り落とされるまで、恐ろしい程長く感じる一瞬の中で、赤い髪の少年の顔がぱっと頭に浮かんだ。

有り体に言えば、キッドの姿。

え、ちょっと待ってよ。

ありえない。

普通は一緒に船にいるんだからマーリンとか、心配してくれてるであろうお父さんとか、多分さつき見えた船にいる血縁上の父親のことを思い浮かべるだろうに、

私の中で思い浮かんでくるのはキッドだけで。

・・・気付いてしまった。

気付こうとしなかった自分の気持ちに。
今、気づきたくなかった。
死にたくなってしまう。

昔から死ぬのなんて怖くなかった。
というよりも、故郷が壊された後、私の中の何かが壊れてしまった。
自分の死とか怪我とかの回線が焼き切れてしまったようなのだ。
怪我をするのも死ぬのも嫌だけど怖くない。
むしろ怖いのは海賊で。海賊しか怖くない私がいて。

それだから、今も死の恐怖を感じずにすんでいたのに、
この気持ちを理解してしまったら。
死ぬのに恐怖を感じてしまう。

死にたくないと言き叫びたくなってしまう。
また、会々と約束したのだと心が叫ぶ。

（何でこんな時に気付いてしまっただろう？）

「じゃあなお嬢ちゃん」

私に別れを告げる憎い相手の声。

振り落とされるカトラスが風を斬る音と、
甲板に響く一発の銃弾の音と、一瞬の悲鳴と、
抱きかかえられた感触と、何かぬるつとした感触が頬に落ちてきて。
瞳を開けたら、そこには私を庇って右目から頬にかけて血を流して
いるマーリンがいた。

SIDE：マーリン

毛足の長いカーペットを苦々しく思いながら、

最後の階段を二段飛ばしで駆け上がり、扉を吹き飛ばす勢いで蹴り開ける。

きっと、家の執事に見られたら苦い顔をされるだろうがそんなこと知るものか。

星が煌めくのがよく見える遮るものの無い甲板には折り重なるように倒れている。

切り傷が凍っている海賊の手下と、カトラスをシャルに振りおろそうとする海賊。

今更、銃を撃つても間に合わない判断してシャルの元に走る。

諦めたように瞼を閉じたシャルの瞳から頬に一筋の涙が伝っていくのが見えてかつと頭に血がのぼり。

シャルを守る。

それ以外に何も考えずにシャルの華奢な体躯を抱きしめた。

シャルを抱きしめた途端。

容赦なく振り落とされたカトラスに右目と頬をなぞるようにえぐられて、

想像を絶する痛みにも歯を食いしばる。

声は押し込め、シャルを抱く腕に力を込める。

乾いた銃弾の音と、聞き苦しい悲鳴が頭上から聞こえた。

シャルの頬に真つ赤な鮮血がぼたりと落ちた。

それが嫌に鮮やかで目に焼きつく。

瞼がふるりと震えて翡翠が私の顔を見る。

赤で染まっただけが目がうまく見えない。

シャルを安心させようと微笑もうとしたら失敗した。

元々白く滑らかな肌の血の気が引き青ざめていくのが見えた。

もう今はことごとく足元の海賊に何をされても

悲鳴なんて上げなかったらうシャルの喉から悲鳴が零れ出た。

「っあああああああああああ！！！」

シャルは、顔を悲壮な感情に彩り、目を見開いて、
恐怖に声が染まっただけで、ただ泣きそうだった。

「大丈夫です。だから、落ち着いて・・・！！！」

嘘だけど。

大丈夫なんて嘘。

本当は死ぬほどつらいし、熱いし、痛いし、気持ち悪い。

でも、貴女の方が心配で。

「嘘だ！！！」

がしっとシャツを掴まれる。

「だって血が止まらないよ!!?」

がたがた震えていて怪我してるのに自分の事よりも私の事を心配して、

私の右目に血を止めようとした手があつて、白かった手が赤く染まっ
ていく。

それは見たくはない光景だった。

「大丈夫です。顔だから軽い傷でも血が激しく噴き出しているだけですから」

嘘だけど。

震える彼女を抱きしめて、背後にいた男どもから隠す。

「それよりも、ちょっと眠ってて下さいね」

後で謝りますから。心の中でそう呟いて、視線を介して相手の精神や記憶に干渉する魔術のアイ・レイド一つ視経侵攻でシャルロットの意識を刈り取った。

「マー、リィ」

私に頭を預ける形で倒れこむシャルを顔を後ろの人物から隠す。

ギュッと抱きしめた。

「で、かの大海賊“赤髪”のシャンクス殿とその配下の赤髪海賊団が一介の学生や一般人しか乗っていないこの船に何の御用で?」

威嚇用の笑顔を纏いそう問いかけた。

腕の中で眠る彼女だけは絶対に守ると心に誓いながら。

二十話 海賊嫌いと魔法使いと海賊と（後書き）

いつも応援ありがとうございます。
これからも頑張ります。

二十一話 泣いた子供（前書き）

次回あたりで何故“赤髪”さんがいたのか説明したいです。
意図せずに泣かせたマーリンと色々ぶわぁとなって泣いたシャル。

多分スモーカーさんは苦勞人でタイミングが悪い。

二十一話 泣いた子供

SIDE：マールン

“赤髪”が“鮮血”を殺して立ち去った後、救難信号を聞いてやってきた軍艦は重症だった私達二人を医務室に送り込んだ。
で、今に至る。

目の前のベットに横たわるシャルを見つめる。
顔色が青白く呼吸も静かで微かな分、この人死んでいるんじゃないかと思えるから相当怖い。

医務室の白いベットに寝かされた彼女は私よりも重症だった。
左手首の粉砕。背骨のひび。打ちすえられた喉。いくつもある打撲。能力者は傷の治りが速いと聞いたことがあるが、
斬られるよりも打撲の内に残る破壊なんかを受けている。
きつと、これから大変だろう。

私は瞼の少し上から右目と頬にかけて斬り裂かれ、
眼球こそ残るものの傷跡もセットで残り、視力の回復は絶望的らしい。

シャルを守れたんだから無くてもいい。

そもそも、私は瞳を代償にシャルを助けたことを後悔していない。
逆に動かなければ一生後悔していたと思う。
だからいい。

むしろ、自分が心から恋い慕う相手を殺されずに済んだのだから。
私の右目はシャルに捧げたのだ。

これを、言うときつと泣きながら怒るから一生言わない。
墓場まで持つて行く秘密だ。

私はシャルのどんな表情でも好きだが笑顔が一番好きなのだから。

それでいいのだ。

「・・・シャル」

彼女の名前を呟く。

「
貴女と私。 あいつらに、見逃されたんです」

脳裏に浮かぶのは、あの夜の記憶。

シャルと同じ色彩の髪が異様な位鮮烈に目に焼き付いている。

「で、かの海賊“赤髪”のシャンクス殿とその配下の赤髪海賊団が一介の学生や一般人しか乗っていないこの船に何の御用で？」

笑みを浮かべて見栄を切る。

片手でシャルを放さないように抱きしめて、もう片方の手で銃を握る。

頬と右目からの血は止まらなくて、

シャルの服やうつすら白く染まった甲板に吸い込まれていく。

その一瞬の沈黙は永遠のように長く感じて、冷や汗が流れた。

ただそこに存在する^{ある}だけで此処まで人を恐れさせる生き物。

これが、“赤髪のシャンクス”。

新世界を皇帝の様に降臨する四皇の一人。

本当の意味での、海賊。

「っ、（やばいのに喧嘩売ったな）」

赤髪は私の顔を面白い物でも見るように見つめた後、笑った。

「俺が誰かを知ってて、そんな態度取れる子供はなかなかいない、面白い坊主だな」

「それはどうも・・・」

嫌な予感がする。

何となくだけど、この男にシャルを見せてはいけないと思った。だから、彼女を抱きかかえる手に力を籠めた。

「俺達がここに来た理由は、そうだなあ、面子の問題だ」

私が思ったことを歯牙にも掛けずに笑いかける赤髪。

私の腕が拳銃を持っているのに余裕だった。

・・・私が撃とうとしたとたん私がズドンか。

「だったら、深くは聞きたくありませんからさっさと船で帰った方がいいと思いますよ」

私もそれに気付かないふりをする。

「救難信号が出てますからこの船にはもうじき、海軍の軍艦が来ますら」

さっさと帰れそれを言葉に込めた。

「で、何でソレを俺らに教えるんだ？」

「この人を助けてもらった分の借りを返すだけです。
は嫌いですから」

海賊

それが、あの時の一幕。

あいつらが去った後。

私は軍艦が傍に来たことを視界におさめた途端に
緊張の糸がぷつぷつと切れ、ぶっ倒れた。

軍艦の到着が遅かったら失血死してた。

傷口が結構大きく裂けていて、なおかつ出血も派手だったから。

そこまで頭に蘇った所で、目の前のベットから掠れ声が起こる。

僅かに動くシートと、けぶるような睫毛が少しずつ開いていく。

彼女が安心できるように微笑んだ。

今度は作り笑いではなく本当の笑顔を。

SIDE：シャルロット

嫌な夢を見た。

それで目が覚めた。

目を開いた時に目の前にいたのはマーリンだった。

いつもと変わらないアッシュグレイの髪に、切れ長のリコリスみたいな赤い瞳。

微笑む顔も変わらなかったけどその目から頬にかけて真っ白い包帯に覆われていて。

あの嫌な夢は本当だったのだと突き付けられた。

だって、私のせいで怪我をした友人が……
それなのに、笑ってて。

私みたいに治る怪我じゃなくて傷跡が残る怪我なのに、マーリンは笑う。

「……なんで？」

言葉が零れ落ちた。

目が熱くなって、ぽたぽたと涙が零れ落ちていく。

どうして？ なんで？ ……助けたの？

ぐるぐると回るのは疑問と自分を助けたことに関する感謝と、自分の身を顧みなかったマーリンに対する痛烈な怒りで。

しかも、そのことで一生残る怪我をしてるのにへらへらと笑う。その事実には怒鳴りそうになる自分を諫める。

確かに君に助けられなければ私は死んでたけど、君はそんな傷を負う事は無かったのに。

能力者の私なんて普通の人間よりもすぐに怪我也治るのに。

どうして、なのか。

「貴女と同じ理由です」

そう。

私の心を見抜くようにそう穏やかに呟く。
苛立っている私を諭すかのように、そう。

ふざけるな、そう口を開こうとすると、
それをはぐらかす様に、

「貴女だって、友人を助けるために自分の身を投げ出すでしょう?」

言った。

「
ああ」

そうだ。

それでも、私は自然系ロギアの能力者だから生還ができる確率が物凄く高いからで。

普通の武器が私には効かないからで、大切な人を守りたいと思うからであつて。

「でも、私は」

そんなの、普通の人間の君達に押しつけたかったんじゃないのに。

「でもも、かかしもありませんよ」

貴女が何に責任を感じているのかは知りませんが、と言葉を続ける。

「私は貴女を守りたかった。それだけです」

包帯を巻かれてない手でシーツを痛いくらい握りしめる。
さつきから堪えようとしていた涙が涙腺を破壊する。

私の視界の中のマーリンの顔は歪みながらも、鮮烈に写りこんだ。

少し開いたドアに銀色が覗いたような気がしたけど、そんなのどうでもよかった。

涙が止まらなくて、子供のようにわんわん泣いた。

SIDE：スモーカー

赤い髪の子供が泣いている。

それは、子供なら当たり前の行動で。

それでも、この子供がそれをするのを見るのは何か可笑しい光景だった。

子供らしくない子供、俺はそう思っていたし、多分それは正しい評価だっただろう。

幼年学校、士官学校の両方とも最年少で通過した才媛で神童だった。

この子供の噂はよく聞いた。

曰く、エーデルシュタインきつての天才児、最年少海軍士官学生、大将の愛娘、エーデルシュタインの次期当主、他にも根も葉もない様な噂を聞いた。

それらに共通しているのは、子供が恐ろしく整った顔立ちと、酷く頭がいいこと、そしてあまり表情を変えないことぐらい。

それを裏切る位に泣く子供。

ぼろぼろと涙をこぼして、泣く。

立ち聞きするつもりも、見るつもりもなかった。

ただ、あの二人に伝える事があったから此処まで来ただけ、それだけだったんだ。

聞くつもりの無かった会話。

子供だって聞かれなくなかった会話だろう。

「ばか、マーリンのばあか!」

「な、泣かないで下さい・・・!!」

「君だって、っ私が、同じ、ことしたら怒るくせ、にっ!!」

ぽかぽか力の入らない手でもう一人の子供を殴る。

泣きながら、怒る子供。

・・・後で、伝えればいいだろう。

泣いてる子供も、多分泣かせるような行動をしたガキも、今は俺に入って来られたくないだろう。

そう思い医務室の扉から踵を返した。

子供は、どうやら海軍には向かないくらい優しいよう

だ
っ
た。

二十一話 泣いた子供（後書き）

これからも応援お願いします。

あと

マーリンは“赤髪”にシャルを会わせたらまずいと思った様です。

二十二話 上層部の暗躍（前書き）

シャルロット、名前に振り回されて不憫。

マールン、シャルロットと似たような理由に振り回されてる。

スモーカー、ドレーク、上層部に振り回されてちよい不幸。

・・・苦勞し過ぎな、登場人物。

二十二話 上層部の暗躍

SIDE：シャルロッテ

マーリンと私が“鮮血”のガバラの一味を退けて、退治したということになったみたいだ。

マーリンに詳しく聞いたところ“赤髪”は居なかったことになっていた。

私達の昇進が決まったらしい。

元々私達を通つてゐる士官学校を卒業した生徒は成績の振り分けで本部支部に分けられる。

そして卒業生には誰にでも准尉の地位が与えられる。

いつもいい成績を納めてAクラスにいる私達は所謂エリートと言う事で

卒業と同時に海軍本部准尉の地位につくんだけど、

私達はこの出来事で一階級昇進。

つまり卒業した後すぐに海軍本部准尉ではなく

海軍本部少尉の階級を与えられることが決定したらしい。

なんてこった。

頭に浮かんだのはそれだけで、

スモーカー少佐が行ったのにも気づかなかった。

これから縦社会に入るのに、そんなスタートダッシュしたくないと

思った。

ハッキリ言って心の底から。

一階級、せれど一階級。

怖い、嫌だ、そんなの要らない。

そもそも実家が伯爵家で父親が大将青雉で、腫れもの扱いされてたのが悪化する。

正直泣きたい。

お父さんもおじい様も好きだけど、なんだかなあ。

ああ、この現実を一言で表すのなら。

「・・・不思議なことなどこの世にはないのだ」

いや、不思議じゃなくても嫌なことってあるよね。

助けて、キッドー！

君ぐらいしか助けてくれそうで程良く部外者な友達がいらない！！

交友範囲が狭い？

ほっといてくれる！？

SIDE：マーリン

殆ど仏頂面のまま軽くテンパってるシャルを宥めて、部屋を出た。

さっき私の家の使用人（表向きのじゃなくて、裏向きの）から受け

取った連絡には、あのオレンジ色のピエロの死体が見つかっていない、と記されていた。

それは、あの重症のまま逃げおおせたという事で、冷や汗が流れた。海で死んでいるかもしれないが、それはない。

私の第六感がそう告げている。

絶対にあのピエロ女は生きている。

「っざけんな・・・！」

人の大切な人間を愚弄し、嘲った。

女の癖にピエロの格好をした可笑しな少女。

狂ってる。

人を細切れにしながらも楽しそうにワラッていたあの死神。

そんな人間が生きている。

（いやだ。というよりも、会いたくない。顔も見たくない）

アレは、私達とは別の次元で生きている。

人を殺すことに戸惑いを覚えない人種だ。

むしろ息をするように当たり前に人を殺して人の屍の上で過ごす様な人間だ。

それこそ“殺人鬼”や“猟奇的殺人者”とか“怪奇殺人者”とかそんな枠組みにおさめるべきかもしれない。そもそも、あれはなんだ？

私は、アレが化け物にしか見えなかった。

アレが化け物だと言ったシャルは人間にしか見えないのに。
アレは人外にしか思えなくて、シャルは人間としか思えない。

「・・・ああ、最悪だ」

髪をかき上げようと触れた手が、包帯に触れてげんなりする。

庇ったことに後悔も悔いも無いけど、泣かれてしまった。

泣かせたいわけじゃなかったのに。
泣き顔は嫌いなのに。

「トリス達に殺されますね、これ・・・」

そう、溜息をついた。

SIDE：ドレーク

不機嫌そうな顔をしたスモーカーが戻ってきた。

「どうした、スモーカー？」

眉間のしわが酷い顔になってるぞ。

「何で、あの子供のところに行かせた？」

「何でって、報告のためだ。ウォーロックとエーデルシュタインの

子供だからな……。彼女達を下手に扱えない。そんな事はしないとは知っているけどな」

上がうるさいんだよ。

そう苦笑すると、スモーカーはもつと苦い顔になった。

「青雉はそんなことしないだろ……」

「彼女の家や海軍じゃなくて政府が五月蠅いんだ。正

直、政府重鎮で最古の貴族の1つであるエーデルシュタイン伯爵家の次期当主が政府でなく、海軍に入ることを見かねて思っている人間も多い。それに、海軍が出した民間船に乗ったから襲われたと非難してくる人間もいる」

心底嫌そうな顔をしているスモーカーを尻目に、言葉を紡ぐ。
正直、俺だってこんな事言いたくない。

「海軍としてはこれ以上、不覚を取ることだけは避けたい」

「……それが、お前の判断か」

「一応、弁解させてもらうが、俺は昇進には反対したぞ」

卒業生が特例で少尉に昇進させるのなんてありえない。
そもそも、家のせいで子供が苦勞するなんて不幸すぎる。

名前のせいで、周りが勝手に色眼鏡で見て、
周りに腫れもの扱いされて、意見に振り回されるのが目に見えているから。

俺は反対した。

そんなことしたら周りの同期に腫れもの扱いされるだろう。

それでも、押し通された。

エーデルシュタインの名前はそれほど大きい。

「俺は、反対だぞ。
優しすぎる」

あの子供は海兵になるには甘くて

「俺だってそう思ってるが若手で昇進が早いとは言え、大佐一人が
上層部の決定に逆らえると思うのか？」

顔を見合わせてお互いに溜息をついた。

二十二話 上層部の暗躍（後書き）

青雉とかシャルを知ってる人間は昇進には関与してない。

あと、マーリンの喧嘩フラグが立ちました。

これからも更新頑張ります。

応援よろしくお願いします！！

二十三話 時は流れて海兵に・・・（前書き）

すいません。いきなり時間が吹っ飛んでいます。

この話の時間は原作の前です。

部下とか出てきます。

それなのに、主要メンバーの性格が変わってません。

それでもいい方はどうぞ！！

最後にいろんな理由もかいてるのでどうか最後までお願いします！！

二十三話 時は流れて海兵に・・・

SIDE：シャルロッテ

目つきが凄い事になっているトリスの鋭い一閃。
にこやかに笑いながらそれを避けるマーリン。

それでいながら激しく交差する腕。

素早く入れ替わる体と体。

その度に前髪を揺らす風と、えぐれる地面。

見つめるガウエインと、おろおろしているランスロット。

笑いながら野次をかけるモルといつもと変わらずにそれを見つめる
ギネヴィア。

それを私は呆れた顔で見ていた。

私は士官学校の頃と変わらないから慣れているけど部下はそうでは
なかったらしい。

ギョツとした顔で固まる私の部下達。

「・・・ジーク、エリザ。これはまだ序の口だぞ」

流石に不憫に思い声をかけると二人は漸く動き出す。

先に動き出したのは、ジークことシュトラウス・ジークフリード小
尉。

最近、自分の部隊に抜擢した若いながらも敏腕の若者だ。

腕は良いがそれを憎まれ、性格も一筋縄でいかなかったために

厄介者扱いされて各部隊で盪回しにされていたのを私の部隊に引き

抜いた。

「、それって本当ですか？」

まだ、固まったままのエリザを放っておきながら。

その藍色の目を困惑に染めて聞いてくる。

まだ、そういう所は青いと思いつつ答える。

「マーリンもトリスタンも利き腕使ってないし、頭突きとか寝技も使っていないからな」

二人が本気なら武器無しでも、この鍛錬場なんか吹き飛んでるよ。

そういうと、士官学校の同期以外で鍛錬場にいた他の連中がドンブくのが見えた。

いや、だって事実だし。
本当に。

「え、ちょっと待って下さい。本当ですか、シャルロット准将？」

そう少し青ざめながら尋ねるエリザこと、ダイアナ・エリザベート。
私の秘書だ。

流石に末席とは言え将官にもなると私だって秘書が必要になる。

准将クラスなら最低三人いるらしいが一人で十分だ。

彼女は若いながらも凄腕だし。

「本当だよ、エリザ」

「・・・ありえないです」

そう、呟いた。

「不思議な事なんてこの世には無いのだよ。大体、何で私達、キャメロット士官学校66期生の卒業者が少なすぎるのだと思う？マーリン達のこれに巻き込まれたり、巻き込まれる事を恐れてわざとダブって逃げたり、訓練についていけなくなったって嘘ついて退学したりしてる奴が多いから。上級生と下級生も巻き込んでだし、色々濃い人間しか残らなかったからね・・・」

そう言うつと

「准将達が、「悪夢の66期生」って言われてる訳がよく分かりました・・・」

ジークが零した。

まあ、私達、色々騒がしたし、荒らしたし、波立てたしな・・・。

「一つ勉強したろう？」

「まあ、そうですね・・・」

どこか、遠くを見る部下に苦笑した。

いや、普通の反応ってこうだよなという点で、皆すぐになれてしまっただけ。

SIDE：シュトラウス・ジークフリード

海軍の名門キャメロット士官学校。

その66期生は非才の人間が多く、現在ではほとんどが有能な海兵として

海軍に所属し海軍の屋台骨を支えている。

海軍史上最も有能な人材が豊作で見事な期生達だが、

しかし同時にキャメロット士官学校66期生は「悪夢の66期生」ともいわれている。

理由は多々あるが、主だった理由は、人を食ったような奇人変人が多く、

我が強く、手綱を容易に取らせない、基本的に我が道を通つ走る人間ばかりだという事。

このため「悪夢の66期生」の「悪夢」が、「66期」を修飾しているのか「66期生」を修飾しているのかは人それぞれであるらしい。

その悪夢の66期生の筆頭とされるのが、“呉藍”^{くれない}の異名を持つ我らが直属の上司シャルロット・アルトゥル・フォン・エーデルシュタイン准将その人であったり、その右腕で副官の“灰狼”^{はいろつ}ことマールン・ウォーロック大佐であったり、同じく副官の“魔弓”^{まきゆう}ことトリスタン・カーランド中佐であったりする。

他にもよく出てくる名前と言えは、“光槍”^{ひかりやう}のガウエイン・ソレイユ中佐であったり、最近婚約者であったアーサー中将と結婚した“鋼線”^{こうせん}のモルガン・L・F・カーランド准佐、動物系悪魔の実の能力者の“牙鋭”^{がえい}のゴルドベルグ・レオンハート大佐、なんかおどろおどろしい雰囲気を漂わせている“墓守人”^{はかもりびと}のヴィルヘルム・シユタイン少佐だったり、超人系悪魔の実の能力者である“悪夢”^{ナイトメア}のセティバーク・レティシア中佐、美人なのに恐ろしい“葬儀屋”^{アンダーテイカー}ル

クレティア・ローレン・ティエリア准佐、普通に穏やかな“慈愛”
のギネヴィア・レオデグランス大尉（66期生の最後の良心扱いさ
れることも多い）だ。

他にも濃いメンツは色々いるが割愛する。

色々、派手で有能すぎるメンバーばかりなのだ。

66期生の共通の特徴は二つほどあり、

一つは同期と仲がよく危害を加える者に容赦がないこと、
もう一つは敵を絶対に許さず潰り潰すこと。

意外に思われるかもしれないが一切何も計らなくても

団結している為に、上にむざむざつぶされること無く精鋭として全
員残った。

付け加えるならば海軍本部少将、中將が率いる部隊を差し置いて、
「悪夢の66期生」の筆頭に率いられた我が部隊は前半の海、最強
部隊である。

准将は最初に配属された部隊の上司の裏帳簿を暴露して昇進の足が
かりにし、

それから幾度の戦線で成果をあげてこの間の叙勲で最年少の17歳
で准将になった。

仕事も早いし、実は意外とえげつない実戦能力もあつたりする。

自然系悪魔の実の能力者で、二刀流を会得し、海戦能力もある。

他人からしてみれば、何この完璧超人？って感じの人だ。

この人の有能さを計りしれないが、

しかし、この人の一番凄いのはその濃いメンバーの全員と仲がよく
全員を一番いい形にひとまとめに出来る事である。

というよりもこの人の部隊が前半の海最強で
海軍の全部隊対抗戦でも上から数えたほうが早いのは、
有能ではあるが世渡り下手や、上司の手に負えない問題児を
きちんとまとめあげている部隊だからだ。
66期生も少ない数が部隊に所属している。

副官とか有能な部下に66期生が多いという文脈だけで色々悟つて欲しい。

SIDE：モルガン

私の友達は、最年少で海軍本部准将になった。

その子の名前はシャルロッテ・アルトゥル・フォン・エーデルシュタインといって

見事な正義を背負った有望な海兵だと言われている。

が、そんなの学生時代からの付き合いで
シャルの事をよく知っている人間達に言わせてもらえば、
あそこまで優しすぎて海軍に向いていない奴はいない、
もしくは理想的だし意外と潔癖だから心配すぎる海兵だ、という意見しかない。

真面目だし頼れるのだが、ほんのちょっとした所に現れる精神的な脆さが怖い。

真っ直ぐすぎて眩しすぎるから、見ててハラハラする。

だから、私達同期はシャルには内緒の同盟があったりする。

まあ、それは置いてシャルのことだ。

彼女は海賊嫌いの海兵としても有名で、いや確かにそれは正解なのだが…。

彼女が一番嫌いなのは海賊だが一番怖いものも海賊であるというのだから笑えない。

ソレに関して、酷く臆病だから絶対に勝てる勝負しかない。

負けない準備も努力も一生懸命する。

勝つ確率を上げる為に部下を死なせない様に。

だからこそ彼女は無敗にして前半の海最強と謳われる部隊を作り上げた。

だから、彼女が“天才”と呼ばれているのを聞く度に腹が立つ。

シャルの努力を知らない癖にその努力を才能と決めつけ

諦めていい訳の理由に使う、そういう奴らに深い怒りが沸き起こるのだ。

トリスとレオンとルクレティアが正面から、

マーリンを筆頭に捻くれてる奴らが裏でこっそりと色々やっていたらしい。

本当に誰よりもきちんとしているのに放っておけない友達なのだ。

後ろに部下がいるのなら、自分が死んで身内（大切な人間を指す）

が助かるのなら、

笑って首を差し出しかねない精神を持っているのだ。

そんなの危なっかしくて、放っておけないし、守られるよりも守りたくなる。

だから、私達は強くなったのだ。

話を聞いて苦笑している貴方にクスリと笑う。

「ねえ、私の旦那様^{アーテイ}。だから、私を友達から遠ざけないでね？」

貴方が私を必要としてくれるのは凄く嬉しいの。けどね、と言葉を紡ぐ。

「きっと、あの子、ほつといたら死んでしまう人間だから」

放つとけないの

そう言いきって、笑った。

二十三話 時は流れて海兵に・・・（後書き）

マーリンが大佐なのに准将の副官とか可笑しいだらっと思ってる方もいると思います。それは彼が所属された先で働く度に上司より手柄を立てて追っ払われていたからです。色々やらかすので問題児扱いです。ぶっちゃけ彼を御せるのなんて、あいっしかいねエとかいう理由でシャル（名前と自分が色々やったせいで地位はあるのに浮いてる存在でした）の部隊に配属したら今までの態度は何だったんだ？と聞きたくなるくらい素直に働くようになりました。

それから、有能無能問わず問題児を押し付けられるようになり、それらを全員有能に仕上げそして全員から慕われるようになりました（他の部隊が引き抜いても彼女の所にいたときは違います。やっぱり問題児ばっかです）。自分の有能であるが色々濃い同期メンバーの面倒なんかも受けているうちに、同期（有能ではあるので佐官が多い）の少なくない数が部隊に配属を申し出ていました。上の人間も、破れ鍋に綴じ蓋。もう、問題児（有能も含む）なんかあいつの配下にすればいいじゃんってことになって、部隊や副官には普通ありえない佐官ばっか。そんな感じです・・・。

二十四話 好きなのに、な（前書き）

幸せなキャラがいません。悲恋っぽいです。

シャルロットも不憫で可哀そうだし。

キッドも同上だし。

キラも二人の事情を知ってる分、キツイ。

少し、仄暗いそゝいった表現があります。
気付かない人はそのままいてください。

仕事の有給取って、初めてお父さんに我が儘を言ったシャル。
ということをお読みください。

二十四話 好きなのに、な

SIDE：キッド

「好きだよ」

何年かぶりに会った少女は昔の記憶と違い女と言ってもいい程成長していた。

身長は伸び、顔立ちは大人びたが相変わらず白い透明感のある肌をしていた。

もう、民間人ではなく海兵だったが。

それでも、こいつの笑い方も笑顔も俺の記憶通りのまま。
濃い群青にも見える緑の眼差しも変わらずに俺を見据えて、口を開いた。

明日の天気でも話すかのように投げ渡された言葉。

しかし、嘘じゃないのが分かる、真っ直ぐに澄んだ瞳。

直球に投げ掛けられた告白に思わずたじろいた。

時間が過ぎていく。時間だけが過ぎていく。

返事をしない俺が言葉を聞き取れなかったと思ったのか、

声と言葉がまた満足に家具も置いていない俺の家に響いた。

「・・・君のことが好きなんだ」

昔の記憶と変わらずに意志を秘めた眼差しで、俺が返事をするのを待っている。

酷い女。

俺がお前と敵対する道を、夢を選ぶのを選択するのを知っていて告白する。

なんて、酷い女なんだろう。

でも、それでもいいと思ってしまふ俺は相当の馬鹿らしい。

恋なんてした男は馬鹿な生き物なんだろう。

「・・・俺もだ。シャルロッテ」

あえて、愛称ではなく名前で呼んだとたんにはころぶ顔。

自分には似合わない表現だがまるで花が咲いたようだと思う。

俺はきつと死の間際までこいつの笑顔を思い描けるだろう。

恋なんて、きつとこんなものだ。

俺達は、自分達がお互いが、傷つく事が分かっているのに、恋をした。

こんなに想ってしまった。

・・・好きになってしまった。

だからお互いにこの想いは捨てられない、亡くせない、ごまかせない。

シャルはもう道を選んでしまっていて、俺は夢を追い掛ける。

きつと、昔とは違ってこの道は重ならないだろう。

永遠の平行線。

もしくは、捻じれなかった螺旋か。

それでも想いは幻想でも一時の気の迷いでもなくて、本気の想いで。

嘘じゃなくて、本物だった。

偽物じゃない、真っ直ぐな気持ちだった。
それだけは間違いなんかじゃねえ。

「キッド大好き。愛してる」

お互いに傷つく事だと分かってる。

手放したほうがお互いに傷つかないし楽なのだと理解しているのだ。

それなのに、手を離せない、目も外せない。

この感情と心に、嘘は付けない。

心の底から思う。

今はただ、目の前にいて俺の名前を呼ぶシャルロッテが愛おしい。

「シャル、好きだ。・・・愛してるぜ」

多分、それが引き金だった。

お互いの名前を呼んで、

指を絡ませて、

髪を撫でて、

抱き合って、

キスしあって、

力いっぱい抱きしめて、

愛を紡ぐ。

シャルの熱い吐息も、甘い熱を孕んだ声も、

うつすらと涙をためた瞳も、初めて見た。

歯止めも何もかもが吹っ飛んで、ただ我武者羅に肌を合わせた。

昔、写真で見た雪とほぼ同じ色をした白い肌は俺と同じように温かった。

お互いに何も言わなかった。けど、理解してた。

これが、最初で最後だと。

もう、昔のように戻れないのだと、知っていた。

だから、この時間だけは絶対に手を離さなかった。

そうして、暑い南の海サウスシーの夜、熱くけだるどこか艶めいた空気の中眠りについた。

南の海特有の強い日差しで目を覚ました俺に残っていたのは情事の痕が残る乱れたシャツに、淡い花の匂い、背中や肩にうつすらと奔る赤い爪痕。

傷跡がじくりと痛み。

心が軋む。

自分のものとは違う淡い花の匂いに包まれながら。

俺は、この痕が一生消えなければいいと、ありえない事を考えた。

(ひでえ女。一生お前の事、忘れられねえじゃねえか)

傍にいても笑いあうのもこの感情も。

当たり前すぎて気付けなかったなんて今更だ。

お前が好きだ。だから傍にいてくれ。

そんなこと、もう言えやしないのに。

昔のようにお前の隣りは俺のもの。
今更そんな事、言えやしないのに。

最後のチャンスはきつとお前が民間人として最後に会いに来た時。
海軍に入る直前のあの日までだったんだろう。

あの時、お前の震えるようなか細い声を遮って、
行くなと、俺の想いを告げて、

震えていた小さな肩と細すぎる手首を掴んで離さなかったら。

お前の横は俺の位置のままで、俺の横にお前はいてくれたんだろうか

SIDE：キラ

日が昇る前の早朝。散歩に出かけると久しぶりに友人に出会った。

目の前のベンチに座っている紅い髪の少女は昔の記憶とは違って
いて、

女性といってもいいくらいで、昔よりも大人に近づいていて、少し
戸惑った。

確かに昔の面影はある。

それでもやはり昔とは違う。

そう零したら、昔と同じ少し困った顔でシャルは言った。

君達もだよ。

その言葉に、違うと答えたかった。
けれどそれが本当の事だと分かっていた。

だからもう、なにも告げられなかった。

昔と同じようにベンチに腰掛ける。

このベンチと一緒に腰掛ける光景も、
ここから見える景色や吹き抜ける風も昔となんら一つ変わってはいないのに。

なんで、俺達は変わってしまったんだろう？

昔は三人でいられたのに。

昔は何も隠し事なんか無かったのに。

昔は変わらなくてよかったのに。

今は、もうその過去が夢のような日々だったのだということが分かる。

笑って、

遊んで、

悪戯して、

馬鹿やって、

笑い転げて、

また、遊ぶ。

そんな日常。

笑ってられた日常。

当たり前だった日々。

キッドと俺と、シャル。

三人で過ごせた黄金の日々。

でも、そんな日常にはもう戻れない。

キッドは海賊王になる夢を追いかけるのを決めて、俺はキッドの夢と一緒に追いかけるのを決めた。

そして、シャルは海兵になるのを選んだ。

父みたいに大きな海兵になりたいんだ。

そう、綺麗に笑った姿が脳裏に浮かぶ。

そういえば、昔からそうだった。

ハッキリと海賊が嫌いだと言いきった姿を思い出す。

家族を傷つけるから嫌い。

それだけだと言ったけれど、

何時もは綺麗に光る緑の瞳が暗く深く濁ったから鮮烈に覚えている。

いつも理由をばかすことが多いのに海賊が嫌いなことはハッキリと現して、

自分の感情を上手く隠すのに、海賊に関してだけは露骨に嫌そうな顔をしていた。

それでも、昔は三人でいられたのに。

いつからか、シャルとキッドの視線が自分に向けられるのと違うことに気付いた。

自分たちでは気付いていない癖に、ひどく温かくて優しくて穏やかな空気が流れてた。

多分、いや絶対にキッドはシャルの事が好きでシャルはキッドが好きなのに。

もうお互いに手を離す事しか選べない。

自分達が将来敵対することを知っているから。

キッドや俺は海賊になるのを決めていて、シャルは今最年少で准将になっている。

将来、お互いが敵として向かい合う構図。

お互いに譲れないものがあるからこそその別離。

もう、こうやって穏やかに話せる事は無いだろう。

「・・・キラー、これキッドに返しておいてくれないか？」

消え入りそうな小さな声と共に、首から紐を手繰りよせ、首に下げていたんだろう綺麗な刺繍の施された小さい袋を取りだした。

その口を開き、中に入っている物を俺の方に差し出す。

差し出されたそれは鈍い銀色に輝くおもちゃの指輪。

駄菓子屋で売っているような子供の懐にはキツくて高くて、綺麗に見える癖に、大人から見ればちゃちくて安っぽい子供の持つようなもの。

「これは・・・」

昔、キッドがシャルに渡したおもちゃの指輪。

でかくなったらもつとデカイ本物をやるよ、とキッドが笑いながら渡したもの。

まだ、もってたのか。

「これまでの人生で一番の私の宝物だったんだ」

そういつて、そつと俺の手のひらにソレを置いた。
それを見る目は大切なものを見る目だった。

「・・・そんなに大切なものなら、自分で渡せ。俺は渡さない」

そういつて、指輪を握らせるとクシャリと顔を歪ませた。

「　　これを持つてるといゝんな事を思いだしすぎてしまうんだ。それにこれを渡すために、これ以上此処にいたら、きつと私はキッドから離れたくないと思つてしまう」

涙を流さない癖に、泣いているような顔だった。

「普通の民間人のシャルロットならそれでいいんだろうね。けど、私はもう民間人でもただの女の子でも無くて、海軍本部のシャルロット・アルトゥル・フォン・エーデルシュタイン准将なんだよ」

そういつたシャルは泣きそうな子供の顔をしていた。
どうしようもなく途方にくれているような、そんな顔。

「　　それでも、俺はこれはお前が持つとくべきだと思
う」

俺はシャルの手をぎゅつと握らせるようにして、指輪を受け取らなかった。

海軍本部の若手でエリートとまで言われているこいつは、
やっぱり俺らの幼友達のまま、泣きそうな顔が昔の顔に重なった。

ねえキラー、ごめんね。ありがと、・・・君と友達になれて本当に良かった。

そう、キッドに言い残したであろう言葉の数々を俺に告げて

「 さよなら」

キッドが一番好きだと言っていたあの、笑顔で別れを告げられた。シャルには、「またね」も「また今度」も「また明日」も「バイバイ」も言われた事があつたけど「さよなら」を告げられたのは、初めてだった。

SIDE：シャルロッテ

お父さん達が私を行かせてくれたのは、知ってたから。お父さんは私がした最初で最後の我が儘と知って行かせてくれたのだと思う。

私は多分、生まれて初めて我が儘を言った。

これで最後になると決めたから。だから、最初で最後の我が儘を言うことを決めた。きつちりしようと自分で決めた。

初恋だった。

自覚は遅かったけど、宝物の様に大切にしまいこんでいた感情だった。

無意識に気付かないように隠していた心。

それに気付けたのは死にそうになった時で、命よりも君が頭に浮かんだ。

自分が傷つくと悟ってたから気付かないように無意識にセーブしていたのに、

彼に恋したことに気付く自分がいた。

・・・恋っていう代物^{もの}は、怖いぐらい優しく甘い気持ちだった。

私が初めて恋をしたのは、真っ直ぐな目をした君で。

海賊嫌いの私が私が海賊王になるのが夢の君に恋をした。

その時点でこの恋は報われない事を無意識のうちに理解してたのだと思う。

それでも、君の瞳とその心の真っ直ぐさに惹かれて、焦がれて、憧れた。

どうしようも無いくらい好きになってしまった。

君の事が大好きでした。

分かりにくい癖に酷く優しい所も、

真っ直ぐな瞳も、

頭を撫でてくれる力強い手も、

その太陽みたいな笑顔も、

全部。

全部好きで、愛してました。

多分、ずっと好きです。

好きなまんまです。

ずっとこの想いを引きずって行くでしょう。

だから、卑怯な私はお互いに敵になる事を知っていたのに想いを告

げました。

嫌な女です。

絶対に心に刻み込まれると分かっていたのに、言いました。きつと、私はキッドを、キッドは私を忘れられなくなったと思います。

それぐらい、お互いが傷つくのを知っていたのに止めませんでした。

私が思わずそんな事してしまったぐらいには大切な想いで、恋という感情を大切にしていました。

もう、敵にしかねないってことを理解しているのに、正直自分でも歯止めがきかなくて、傷ついてしまふのに想うのをやめられません。

チャリ、とベルが鳴る音に引き戻され、お父さんの背中中のベストを掴む。

自転車の荷台にはクッションがくくりつけられていて、二人乗りをして荷台に乗っていても思ってたほど痛くは無かった。

キーコ、キーコ、と音を立てて軽やかに車輪が回る。

南の海の明るいコバルトブルーの海の上に

白い銀でできた氷のレールを敷いて、青い自転車が海の上を走る。

時折、車輪がかたんとなる度に父の背中に寄りかかった。

地味にあちこち痛かったから、素直に背中を借りた。

キッドみたく温かった。

なんでもキッドに比べてる自分に思わず笑ったけど、海に映る自分は泣いているのか笑っているのか分からない歪な顔を

していた。

その自分の顔に、思い知らされる。

私は、どうしようもないくらい、キッドの事が

「好きなのに、な」

口からこぼれた言葉は小さくて、すぐに波に消えた。

二十四話 好きなのに、な（後書き）

本当に好きだから、夢があるのを知っているから、お互いに好き合
つてゐるのに手を離れた二人。

最後の言葉は、多分、そういうこと。

これから更新頑張ります。

二十五話 涙と宣戦布告（前書き）

いろいろ吹っ切れた片思い面子と、ようやく泣けたシャルロツテの話。

最初らへん、トリスタンが不憫。
それではどうぞ。

二十五話 涙と宣戦布告

SIDE：トリスタン

休暇から帰って来たシャルが変わった。

凄い勢いで書類仕事デスクワークをし始めて、

笑ってたけど、そんな時の表情が普段の表情と変わらない癖に、泣きそうで、辛そうで、悲しそうな感情をしているのが分かって、その表情に胸がざわついた。

確実に気付いているのは父親である大将青雉とガウエインにマリーン、

レオン、モル、ギネヴィア、ランスロット、ルクレティア、ヴィルレティ。

気付いているのか分からないのはドレーク少将を筆頭のまあまあ付き合いもある連中。

気付いていないのは66期生以外の部下に同僚って所か。

66期生の中で鈍い方に入る奴ら（野生の勘みたいなものはあるから、ある意味鋭いのかも知れん）もシャルがいつもと違うと感じ取っているらしい。

ああ、苛々する。

原因を隠そうとするシャルに。

気付いているのに何にもできない自分に。

「おい、シャル。ちょっと来い」

へらりと作り笑いをするシャルに、

俺のたいして長くもない堪忍袋の緒が切れた。

ガシツと細すぎる手首を掴んでもう使われてない資料室に押し込む。

「、一体、なにを」

少しばかり作り笑いが剥げかけたシャルを思いきり壁際の本棚に押し付け、

右手をシャルの顔の横にトンとついた。

ドンという鈍い音が狭い資料室に響く。

その衝撃で、もう使われていない古い資料が俺らの上に粉塵と共に落ちて来る。

時折、肩や手、腕などに当たる資料。

パラパラと落ちてくる埃にむせそうになったのか酷く苛立った様子で俺を睨みつける。

「トリス・・・!!君、何を、

!!」

それを遮って、告げる。

「シャル、お前なあ・・・!そんな辛いんなら、笑ってんじゃねえ!

」

表情が凍る。

目の前で見える見る内に固まっていくシャル。

「ははは。何、それ・・・何言ってるのさ、辛くなんかないに決ま

ってるよ。

トリス、何勘違いしてるんだい？」

どんな鈍い奴でも気付くくらいにあからさまに、ひきつった顔をするシャル。

それに苛立ちがさらに煽られた。

「笑うな！！俺は、そんな笑顔みたくなえんだよ・・・！！そんな辛い時に何でそんな顔するんだよ！？泣きそうなくらい、辛いなら笑ってんじゃねえ！！」

細い肩を抑えつけたまま、低く唸る。
びくりと押さえつけた肩が跳ねる。

「うるさい！！」

真っ白と言っても差支えのない肌が、怒りに煽られて淡い朱色に染まる。

作り笑いを剥がした顔は、泣きそうで辛そうな顔だった。

「ッ何も知らない癖に！！」

ほっといてよ！！」

苛立ちと怒りに彩られた顔は本当の感情が出ている分、
作り笑いよりもましだった。

握りしめられた拳。

キツとこちらを睨みつけてくる瞳。

作った表情より、

負の感情が込められていてもこの生きた表情の方が断然ましだ。

「ああ、そうだな。俺は、お前に何があったのか何てしりやしない」

「っだったら、！！」

「けどなあ、自分の目の前にいる女が辛そうで泣きそうなのに何も
しない男は、男の風上にも置きやしない。
なあシャル、
もう一度聞け、何があっただ？」

見る見る内に、現れる様々な表情。

困惑、怒り、疑問、悲哀、それらの感情が入り混じった複雑な顔。
瞳はうつすら涙が浮かぶ。

「ごめん、ね」

とぎれとぎれに紡がれる謝罪の言葉。

どうやら何も言いたくないし、尚且つ顔を見られていると泣けない
らしい。

不器用にも程がある。

俺はお前が幸せに笑ってくれるんなら、それで良かった。

それだけでよかったんだ。

お前が幸せになれるのなら笑ってくれるなら、

この想いを失くす事はできなかったと思うけど心の奥底にしまって
祝福できただろう。

俺は、お前が泣きそうなのなんて見たくなかった。

好きな女の泣き顔を見たい男なんているものか。

いつそ、泣いてくれれば・・・

泣いてくれれば、それを拭うことができるのに泣いてくれない。

そんな頑固な女に泣きそうになる。

お前に好きな人間がいるのは知っていた。
それが俺たちじゃなくて、別の人間だつてことも分かつてた。
休暇だつて会いに行つたんだなと、何となしに理解してた。
だけど、お前は泣きそうな顔をしていた。
何かがキレそうになった。

何で、俺じゃないんだろう。

どうしてマーリンでも、ガウエインでも、レオンでも無くても、
お前が泣かなければいけない傷つかなきゃいけない相手なんだろう。

ふざけんな！！

顔も知らない男に心中で叫ぶ。

シャルはお前なんかに渡さない。

シャルを泣かせたお前に渡してやるものか。

手を離れたお前にシャルの隣に居場所なんてくれてやるものか。

シャルが好きな相手なら我慢していたがこれからはもう遠慮なん
かしい！！

我慢なんてしてやるものか・・・！！

そうだ、これは宣戦布告。

絶対に、シャルは譲らねエ・・・！！

右手を顔の横から外し、手を伸ばす。

シャルの女性の平均と比べても華奢な体の背中に腕を回す。
ビクリと身体は震えたが拒絶はされなかった。

「、
」

口が動く。

だけど、ソレを聞きとる前に遮った。

「顔は見ねえよ。」

だから、黙って泣けばいい」

ジワリと目の淵から涙があふれ出していくのが見えた。

無言のまま胸元を掴まれる。

顔を胸元に埋められて、シャルの紅い髪がやけに鮮明に視界に映る。

「ごめん、」

シャルはそれだけ言うつと、幼子の様に声をあげて泣き始めた。
嗚咽と泣き声だけが部屋に響く。

女がこんな弱くなっている時に付け込むことを誰かに咎められてもいい。

俺は確かに卑怯者だ。

けどな、男が、心の底から惚れた女を慰めて何が悪いんだ。

誰にも文句を言わせない。

だって、俺はシャルの事が好きなんだ。

ずるずるとシャルの小さな体を抱き締めたまま腰を下ろした。

一層抱き締める腕に力をこめる。

ああ、畜生。

お前にも聞こえてしまいそうなこの鼓動を誰か、止めてくれ。

SIDE：マーリン

トリスの胸で泣いている貴女を見た。
横にいたガウエインも一緒。

泣いていた原因が分かった。
休暇を取った理由もなんとなく理解してたから。

あいつか・・・!!

手に持っていた書類を怒りで床にぶちまけそうになった。
自分の矜持がそれを妨げたけど。

「とりあえず、人払いで」

「・・・そうだな、マーリン」

人通りが少ないけど、我らが上司は泣かれているのなんか見られたくないだろう。

今だってトリスの胸元に顔を埋めて、トリスでさえも見えない様にしている。

地味に矜持が高いのだ。

誰かに見られてたなんて知ったら、海に身投げしかねない。

というか、ダッシュで崖から飛び降りることぐらいしてみせるだろう。

トリスもあれで繊細だから凄いことになりそうだ。

それにしても、私達は泣き顔なんて見たくなかったのに。
貴女に泣いて欲しくなんてなかったのに。

「、（ユースタス）滅びろ・・・」

思わずつぶやくと、隣にいたガウエインが呟いていた。

「泣き顔なんて、見たくなかったな・・・」

「　　そう、ですね」

そういう何かしんみりとした空気が流れて男二人で廊下に立つ。なんていうか複雑な環境だろう。

私が部外者だったら近づきたくない。

特定の相手に片思いしている若者。

うわあ、こう並べてみるとなんだかなあという気分になってくるんですけど。

「あ、トリスが抱き寄せた・・・!」

「い・・・!?!」

ギョツとして僅かに開いた隙間から覗くと背中にまわした手に力を籠めている。

おい、ちょっと、貴方は何してんですか!?

「ちよつと、僕、槍取ってくる」

いつもと変わらない表情のままガウエインは廊下から消えて、私一人だけ残された。

「・・・シャル」

ああ、クソ。

自分が情けない。

貴女の選んだ人間が貴女を悲しまずんだったら、
さつさとこの想いを告げたら良かった。

貴女に選んでもらえるように戦えば良かった。

「・・・取り合えず、私も参戦しますか」

容赦しない。

もう、誰にも遠慮なんてするものか。

書類をシャルの机に置くべく踵を返した。

書類を戦闘に巻き込むのは頂けない。

槍みたいに幅を取るものでは無いから愛用の二丁の銃は腰に収まっている。

いや、抱きしめたのには正直イラッとしましたし。

SIDE：シャルロッテ

目が痛い。瞼が重い。喉が痛い。

頭が重い。

正直、泣きすぎて耳鳴りやら何やらが酷い。

どうやら私は、泣き疲れて強制的に眠りに落ちていたらしい。

私にかぶせられていたのはトリスの“正義”のコートで、
私の顔が見れないように気を使ってくれたのだなという事が分かる。

（うわぁ、迷惑かけてる、私。というより、恥ずかしくて死にそう
なんだけど）

手鏡で見た顔は涙でぐちゃぐちゃで、目の周りは擦ったのか灰かに
赤い。

「取り合えず、顔を洗おう」

どこにあつたかところら辺の地図を頭に引つ張り出す。

人通りは少ないけど、誰かにあつたら嫌なのでありがたくコートを
頭から被せる。

これで覗きこまない限り、顔は見えない。

そうして、顔を洗って、執務室に戻る途中、
顔を窓に向けたら、人が飛んでいた。

What?

こんな事、本部でやるのは私の部下しかいない。

正確には、66期生ぐらいしかやらない。

できる人間はいるけど皆加減をするから滅多にない。

咄嗟に窓を開けて、身を乗り出す。

「君ら、何をしてるんだぁぁぁ!!」

叫んで窓から飛び降りた。

さっきまであつた、胸のもやもやもどこかに吹っ飛んでいた。

二十五話 涙と宣戦布告（後書き）

これからも更新頑張ります!!

番外編 I F 終末の未来（前書き）

シリアスです。

シャルの死の描写があります。

傾向分けするとしたら思いっきりバットエンドです。

お前、何縁起でもない事してんじゃ！！って感じのバットエンドです。

一応救いはある、と思いますけど、血の描写あります。
ぼかしてるけどスプラッタです。

グロい感じもあるかもしれませんが。
それでもいい方はどうぞ。

番外編 I F 終末の未来

あ、これ、死ぬな。

そんな戯けた事を考えた。

視界に嫌でも入ってくる空は憎らしい程に真っ青だ。

それとは真逆に真っ赤に染まりながら地面に転がってる私は色々酷いが。

（仲間達は逃げられただろうか）

血塗れになりながらそれだけを思う。

前半の海最強で新世界が舞台でも上から数えたほうが早いと言ったところで、

私達の部隊は最強でも最高なんかじゃ無くて、有り体に言えば、負けた。

ただ、“黒ひげ”に私の雪の能力が奪われなかったのは正直に言えば僥倖だ。

しかし私は、その代わりに死にかけている。

闇に地震ってふざけ過ぎだ。

何あの黒達磨の無茶ぶり。

厨二病にも程があんだろあんなの。

それでも、致命傷を浴びせてやったからお父さんか他の大将がやれば倒せると思う。

平成生まれの元インドア派の私にしては大金星だ。

まあ、そのせいで見事に死にかけている訳だけでも。
そして腹部も猛烈に痛い。背中も痛い。

右腕は壊れかけ。

左腕は感覚すらない。

特に左腕のミンチに成り掛けた肩の付け根の肉はぐちゃりとして、
うつすら白い骨が見えてる。

神経もずたずたで動かない。

右腕も左腕よりましだが似たようなモノだ。

そして一番ヤバイ腹部の傷は多分、これ傷が貫通してる。

もう殆ど壊れている右腕の神経を叱咤して、

感覚がもう殆ど無い指を腹部まで伸ばす。

すると指先を生温い液体が汚し、だらりと血が垂れた。

あ、致命傷だわ、これ。

そんな事を間抜けのように思った。

それにもう何も心が揺らされない私はどこか壊れているんだろう。
たぶん、きつと。

思わず溜息をつく。

すると喉が風邪をひいた時のように擦れた音を立てた。

思わず噎せる。

ゲホツという嫌な音と共に生温い鮮血が口から零れ落ちる。

ヒューヒューと可笑しな音を喉は奏でた。

これ、マジでヤバイ。

口には血と錆びの味しかなくて、
しかもその味すらどんどん麻痺して消えていく。
背中に寄りかかった壁の感覚もほぼしない。

口からは血液がぼたりと零れて、顎から伝って落ちていく。
それなのに、私にとうに感覚は無く。
ただ、凄く寒い。

能力者に、なってから一度も感じた事の無い感覚。

ユキユキの実を食べてから雪人間になった私は寒さなんて感じなくなつたのに、

何年かぶりに寒さに凍えている。

指も背中も何もかもが寒くて堪らない。

かたかたと体が震えだした。

寒い、寒い、寒い、さ、むい。

流石に、死にたいのかと聞かれたら死にたくは無いのだけど。

正直生きたいのかと聞かれたら、答えに惑う自分がいた。

その事に衝撃を受けた。

なぜなら、深い障害（貫通してるのは洒落にならない）を負ってまで
これからの人生を生きたいのかと問われれば、どうなんだと悩む自分
がいる。

死ぬ事が怖くないことの弊害がこんな所にあるなんて知らなかった。
生きる事に必要性を感じなくなっているなんて衝撃的すぎる。

自分の精神のねじ曲がりっぷりにはびっくりだ。

ああそれにしても。

今は、ただ凄く眠い。

だから、もう寝てしまおう。

瞼を下ろして、意識も飛ばしてしまおう。

もう、私は疲れてしまったんだから。

少しくらい眠ってもいいですか？
今まで、走ってきた分の時間ぐらい休ませて欲しい。
そうやって瞼を閉ざすと

「…おい」

声が聞こえた。

絶対に何があっても忘れられない声が、聞こえた。
重い瞼をこじ開ける。
そこにいたのは、私が一番好きな赤色で。

「……………、キッド」

やっと出た言葉はざらついていて、自分の思うように声も出なくて。
一言話す度に口の中に新しい血が生まれそれに喉が灼かれる。
げほりと喉の奥で嫌な音がした。

「っ、何、で？」

自分でもこんなに残ってたのかと思う。
言葉を紡ぐ度に零れ落ちる鮮血に喉を灼かれながらも問う。

「ど、し…て、きみが、此处にいる…！」

気管に血が入って死にそうだったけどそんなことどうでもいい。

左腕が動いたら思いっきり襟首掴んでひっ倒している所だ。
立ち上げられもしない今の私には不可能な戯言だけど。

「そんなもん、俺の勝手だ」

ああ、そりゃそうだろう。

君は海賊だ。海の賊。

海を自由に行きかう人間。

その中でも自由奔放で、天衣無縫で海が大好きで、海に愛された海の男。

私は此処まで自由で子供の様な真っ直ぐな目をした人間を見た事が無い。

そもそも世界を相手に取って遊んでいるような君だ。

そんなこと聞く方が無粋だろう。

「は、そうだね。君の勝手だ」

くくと喉の奥で笑う。

もう、それすら億劫だ。

正直、目もだいぶ霞んできた。

「なあ、シャル」

「なんだ、キッド」

こんな在り来たりで普通の言葉を君と交わすのは何時振りだろう？
まるで昔に戻ったみたいだ。

「来いよ」

「は、？」

「俺んどこに来いよ」

ぞくりとした。

寒気とかじゃなくその言葉に。

世界中の何よりも、誰よりも赤く、気高い目をした、赤の中の赤を纏う男。

“キャプテン”の異名を持つ海賊。

海の、賊。

夢追い人の、気高い言葉。

「お前がいれば、世界はもっとおもしれエ」

私が好きな真っ直ぐな目で、真っ直ぐな姿で手を伸ばされた。心を揺さぶれなかったかと問われれば揺さぶられたと答えられる。でも、それでも生き方が曲げられるものか。

「君、ふざけるなよ。」

君だったらどうする？」

そう答えるや否や突き刺さる短剣。

色々配慮してくれたのか腕前のせいかわ痛みは殆ど無くて、

ズプツと生々しい音と共に短剣が抜かれると、

もう殆んど酸化して赤黒く染まった地面に真新しい赤が散った。

私達はお互いに似てない様で似てるんだ。

生き様を変えない所とか絶対に自分の道を譲らない所とかそっくりだ。

そんな相手が、今更手を取れる訳がない。

自分の今までの生き様を否定するような事をする訳がない。

そんな真似して君の横にいられたとしても、
そんなことしたら“ ”は死んでしまう。

「だよな」

どこか、納得した声。

寄りかかっていた壁から地面に向かって倒れかかる体を
いつの間にか伸ばされていた片腕に支えられる。
もうすでに痛覚は無い。

しかし、傷口がスプラッタなんだが・・・。

それに驚いているうちにグイッと支えていた手によって
死に体の身体を引きずる様に立たされる。
じわりと白いベストがまた赤に染まる。

・・・よく生きてるな私。

そして、コートと体が私の血で汚れるのも厭わずに力強く抱き留め
られた。

目眩がした。

バカじゃないんだろうか、こいつ。

何で、いつもこうなんだ。

人が気を使っているというのに。

無神経で乱雑なくせに勘は鋭くて勝負所は絶対にはずさないそんな
男。

なんて、厄介な男なんだ！！

振りほどこうにも右腕はもう殆ど壊れてるし、
左腕はもつと壊れてるからそんなことできやしない。
ただされるがままに、顎を引つ掴まれ、
顔をあげられて、そのまま口と口とが重なった。
ただ触れるだけのそれは、血と錆びの味がした。

最後の口付けにしたら恐ろしく殺伐で物騒なロマンチックの欠片も無い代物。

だが、元幼友達同士だが所詮は敵同士。

海兵と海賊の私達にはそれがお似合いだろう。

悲恋のロミオとジュリエット何て柄じゃないんだから。これで、いいんだ。

「愛してんぜ、シャル。

お前は」

、先に逝って待つてろ。

ああ、ム力つくな。

人が縛りつけない様に言わなかった言葉を君はいとも容易く口にする。

愛している、何て死んでいく女に言う台詞じゃない。

一緒に生きる女に言う台詞だ。

死ぬ女に縛られてどうする。

死ぬ女を縛ってどうする君は。

「・・・ふっ、君が、早く来、たら追い返しっ、てやる!!」

わたし、は待つのは得意、だから、な。

瞼が落ちていく、感じられるのはもう君の抱きしめられている感覚だけで。

暗闇に閉ざされていく視界の中、ツウと涙が一滴零れ落ちた。

それだけ、
だった。

番外編ⅠF 終末の未来（後書き）

こういう終わり方もありかなと書いたもの。

出来ればハッピーエンドにしたいのでこういう終わりは無いと思う。

自分の生きざまを曲げたら自分で無くなるから手を取らない二人。

お互いにそれが分かってる。曲げたら、自分が“自分”じゃなくなる
こと、それが自分の矜持プライドに賭けて許せない。

それを曲げたら“相手”じゃなくなるから、こうなった。こうな
ってしまった。こうなるしかなかった二人。

・・・幸福にしてあげたいと思うので死ぬ気で頑張ります。

これからも応援よろしくお願いします！！

二十六話 異色の海兵、祭りの前（前書き）

いろいろ、オリキャラが出てきます。

むしろ、オリキャラ祭りです。

次は絶対、原作キャラ出します！！

あと、すっごくマーリンが黒くしかもドSっぽくなりました。
解せぬ・・・。

二十六話 異色の海兵、祭りの前

SIDE：シャルロッテ

「シャルロッテ」

トリス事件及び三つ巴演習場破壊事件から三日後。
久しぶりに見た彼女に声をかけられた。

「やあ、ルクレティア」

「・・・漸く、調子が戻ったね」

「うん。心配かけてごめん」

「まったくさ」

くすりと笑う彼女は美しい。

すっと通った鼻梁。

切れ長の薄紫の瞳。

きめ細かい白い肌。

少し褪せてはいるがそれを含めて美しい^{アッシュブロンド}灰金の髪。

女性らしい曲線を描く肢体。

私を知りうる限り二番目に美しい女性だ。

ルクレティア・ローレン・ティエリアという我が同期は。

だからこそ体のあちこちに残る生々しい傷跡と包帯が痛々しい。
左目の瞼は縫い合わされていていて隻眼。

首から右肩から下は真新しい包帯に覆われているうえに
左腕も手首から下を包帯で覆われている。

丈の短い、ともすれば水着のセパレートの上の様なチューブトップ
に、

骨盤の辺りではなくマイクロミニのデニム、
バックルのついた太めのベルトに

骨盤の辺りで穿くデニムの為の紐パンの紐が僅かに覗き。

そこからさらけ出された真っ白な肌には大小様々な縫い目の後が覗
く。

マイクロミニから伸びる長い脚にもあちこちガーゼや包帯が巻かれ
ている。

足元はショートブーツで、

胸にカモメのマークがついたタンクトップ型の上着を着ていなければ
いろんな意味で危険な格好だ。

まあ、そんな彼女の姿は彼女の能力が関係している事なのだけでも
そのせいで家庭環境が悪いわけだけでも。

傍にいた秘書のエリザが引き攣った顔をしている。

秘書に前線に出る海兵並みの度胸を望んだわけではない。

けれど、私の友人であるルクレティアの前でそんな顔をしないで欲
しい。

凄く腹立たしくなる。

ルクレティアが慣れているから余計に悲しくなるし、怒らない分私
達が怒るのだ。

「下がっていいよ」

「え？」

「だから下がっていいって言ったんだよ。・・・何度、言わせる気？」

人の友人をそんな目で見てんじゃねーよ、滅棒されないだけありがたいと思え、

さっさと退けって言ってんだよと言う気持ちを籠めて一瞥する。

ビクリと大げさなくらい肩を揺らした後、一礼して去っていった。

ふんと鼻を鳴らして向き直る。

ルクレティアは少し複雑そうな顔をしていた。

「いいの？」

「ふつ、後でフォローはしとくから大丈夫だ、問題無い。君の事をあんな怯えたように見られる方が私にとっては問題だ」

「ははは！こんな外見の私に言うのはそれこそ同期くらいだよ」

「・・・、笑うな」

ちつと舌打ちをするのを我慢して、警告する。

「で、何で声をかけたんだ、ルクレティア？」

そうして、彼女は口を開く。

S I D E：ルクレティア

目の前にいる宝石のような彼女は相変わらず綺麗だった。

まるで絹糸のように滑らかな炎の様に紅い髪に、同色の綺麗に整えられた眉。

仄かに色ぼつさを感じられるたれめの濃く群青にも見える翡翠の瞳。白い肌は透き通るような美しさだった。

一流の職人に魂を捧げられた人形の様に精密に整った顔。

海兵でも一般人よりも凄く細く華奢な体躯。

同期の中で一番綺麗だ。

全員に会った事が無いから言いきれないけど多分、海軍の中で一番綺麗だと思う。

貴族一と謳われるその美貌は伊達じゃない。

本人に言うともものすつごく嫌そうな顔をするから言わないけど。

私はどちらかと言うとこの子の容姿よりも性格の方が好きだし。

その彼女の服装はさりげなく父親である大将青雉と同じメーカーの女性物で合せている。

正義のコートは着ていない。

紺色の少し丈の長い、コートのようなデザインのジャケットを手に持って、

柔らかかそうな白のシャツに藍色に近い青のリボンを結び、それらに黒のキュロットスカートを合せて、

銀の留め金具のついた真っ白のニーハイブーツを穿いている。

絶対領域ってやつ？

よく分からないけど、別の部隊の男が頬を染めて熱く語ってた。

まあ、それはおいといて。

「実は、ね……」

SIDE：マーリン

窓から、話している二人を見つめる。

二人ともむさぐるしい海軍の中の鶴のような存在だ。

目の前にいるこの女よりも断然性格いいですし。

「なんか、ひどい事考えてない？」

「何でもないですよ、レティシア」

ニツコリと笑いを顔に張り付けながら、目の前に女に告げる。

コレの名前はセティバーク・レティシア。

他人の精神に潜り込みダメージを与えたり思考や行動を操る悪魔の
実の能力者で“ナイトメア悪夢”の異名を持つ女だ。

ベリーショートヘアの黒い癖っ毛に濃い藍にも見える黒色の婀娜
つばい瞳。

褐色の肌に、とある国の一族特有の複雑かつ華麗な入れ墨が入って
いる。

小さな顔立ちや瑞々しい肢体は色気のある美しさを揃えていて、
乱れたシャツから覗く鎖骨はくつきりとして、
細い癖に腰や胸にはしっかりとした質量がある。

誰が見てもどこか危うげな色香の漂う美女だ。

だが、私は大っ嫌いだ。
むしろ、殺してやりたい。

「・・・で、情報は？」

「君って私の事、嫌いだよね・・・」

むっとした表情で話しかけられる。
につこりと笑ったまま答えた。

「いえいえ、そんなことはありませんよ」

手を振って

「私はただ、貴女の事が大嫌いなだけです。」

いっそ、殺して差し

上げたいぐらいに」

SIDE：レティシア

口角をあげ、頬を緩めたまま、甘い声色で毒を吐く眼前の男。

うつすらと微笑を浮かべた顔は、甘い風情すら漂わせているのに、
纏う空気はひたすら冷たく、瞳は笑ってすらいない。

身内以外には鬼か悪魔の様な獣の本当の姿。

身内には徹底して見せない、“ウォーロック”の顔。

敵にはまわしたくない人間だ。

もうすでに敵に回してしまったのだけ。

「なんですかその怯えた顔？　可愛くないですね、」

こうやって、頬に触れる手は酷く優しい。

言葉は刃の様なのに恋人に触れるかのようにそつとした手つきだ。だから、それが尚更怖い。

それなのに、この男は笑う。

「・・・私は貴女が大嫌いです。そもそも、そちらが先に手を出した」

僅かに震える私を見つめる眼差しは凍てついている。

なのに、手つきだけはひどく優しい。

・・・きつと、計算してしてるんだろう。

吐息が交わり、キスでもするような近くまで顔を近づけられた。

「シャルがいなかったら、貴女なんかとつくに魚の餌にしますよ。あの人を、危険にさらした女なんて」

ああ、この男はこうなのだ。

人の区別が明白できつかりと付けるから、扱いの格差が酷過ぎるのだ。

自分が手に入れた宝物とその他全てを秤にかけても、なんの銜いも無く選ぶ男だ。

世界に身内が犠牲になるなら全力でどうにかするだろう。自分の身内の為に世界を敵に回すことも辞さないだろう。だから、それに触れる者は敵として扱う。

この男が家から出て手に入れた宝物の中で

触れてはいけないものに触れてしまったのに、

生きている私は運が良い、この言葉一つに尽きるだろう。

本当に偶然が重なって生きているだけなのだから。

「さつさと情報を渡して失せてください、レティシア。貴女と同じ部屋の空気をこれ以上吸うなんて、最悪ですから」

綺麗に微笑んだまま、ウォーロックの魔法使いはそう、言った。

SIDE：ヴィルヘルム

「よお、ヴィル!!」

そうやって俺の肩を叩く、人間。衝撃で眼鏡がすこしずれた。

「・・・お前か、トリス」

「おお。相変わらず生っ白いな!!」

そうやって、へらりと笑いながら声をかけてくる男。茶にも見える金の髪を陽光に透かしながら、笑う男。おちゃらけているように見えて、

実は一番二面性があるのを知ったのは何時だったか。

「まあ、研究班だから俺は」

「ふうん。そうか、どうよそっちは・・・」

にししと笑い方の種類を変えてがっちりと俺の肩を固定する。

おい、何をする貴様。

「ルクレティアとは、どうなんだよ？」

・・・こいつとは友人だが正直ぶん殴りたくなる時がある。
学生の時分からそのへらへら笑う横顔に
拳をぶち込みたいと幾ら思った事か・・・

「ローレン、か？」

「そーだ!」

ふむ、と掌を顎に当てすこし考える。

自分が望んではいなかった能力を背負わされた彼女と自分は幼なじみで、

初めて会った時の幼い自分は裏庭の片隅で泣いていたあの子を守ろうと思った。

それだけだったのだ。

己の小さな手では能力をどうにかする事は出来ないでも、涙はぬぐえると思ったから。

彼女を蝕む悪意や悪夢から少しでも彼女を守りたいと思った。

あの子のヒーローになりたかったのだ。

だから、半ば攫うように彼女を“ティエリア”の家から連れ出した。
あの家にはありえない環境だった。
一人娘を追っても来なかった。
冷え切った、家。

泣いていたあの子の涙をぬぐう手が欲しかった。
明るい世界を、優しい世界を、あげたかったのだ。

あいつは悲しみを望んだわけでも、不幸になっていい理由だってなかったんだから。

だから、俺は、あいつを幸福にしようと決めた。
それが自分のエゴだとしても、
ただ、無性にあいつの笑顔が
欲しかった。

「あいつとは、別にそんなんじゃない。
ただ、俺は」

「ただ？」

そうやって、俺は微かに微笑む。
守りたいと思った“彼女”は、今、心から幸せそうに笑う。
それでも俺の世界は鮮やかに色づくのだ。

「あいつが泣くのじゃなくて、笑顔が見たいだけだ」
そう。

俺、ヴィルヘルム・シュタインが海兵になったのは
“正義”とかそんな大層なもので無く。
泣いていた一人の女の子の涙の理由を変えたかった。
ただ、普通で在り来たりな幸福の中で笑って欲しかったのだ。

それだけだ。

二十六話 異色の海兵、祭りの前（後書き）

レティシアさんは触れてはいけない領域に入ってしまった。

あと、ヴィルだけがルクレティアのことをミドルネームのローレンと呼びます。

彼は自覚の無いリア充です。

番外編 過去話の小話集（前書き）

- 1 ・正義の解釈です。
- 2 ・ほのぼの親子です。
- 3 ・結構苦労してるオリキャラ達の
の三本です。

宜しく願います！！

番外編 過去話の小話集

1. “正義”を背負う

そう、これは簡単なお話です。

とある士官学校を卒業したばかりの新米海兵達が、自分達を、正確には自分達の“家”や“血筋”“能力”をうとまれてとある上官に嵌められ激戦地の前線に圀として置き去りにされたという事。

弾薬、医療品、睡眠時間は削られ、怪我人は増えていくばかり。それでも死んでいる人間がいないのは一種の奇跡。

それでも、絶体絶命。

味方が来るのは、最低でも三日後。

そんな絶望的な状況。

しかし、敵の目の前にいる海兵達は

体中返り血や自分達の血に染まりながらも、諦めていない。

ただ、ギラギラと光る鮮烈な何かを瞳に宿している。

一人、また一人と、崩れ落ちそうになりながらも、

己の獲物を手放さずに、崩れ落ちそうな体を味方に支えられながらも、

ただひたすらに前を向き、敵を射抜く。

それを恐ろしいと思ったのは他でもない敵。

自分達が優勢なはずなのに、それを覆されるようなその姿。

それも、そのはずだ。

彼女らと敵とは覚悟のほどが違うのだから。

連日の戦いで、あちこち傷だらけだった。
傷の無い人間なんてどこにもいなかった。

包帯やガーゼに血を滲ませながらも、
それでも、そこにいる全ての海兵は傷にも構わず自分の手に武器を
持って立ち上がる。

片目に包帯を巻いた女もいた、
頬に大きな裂傷のある男もいた、
肋骨と眼鏡にひびが入った男もいた、
手が上手く動かぬからと包帯で自らの獲物を腕に括りつけた男もい
た、
いつもの微笑をしまいこみ全力で敵をなぎ倒す男もいた。

真っ赤な髪を靡かせて活路を切り開く若い女性少尉もい
た。

彼女らは一丸となって獅子奮迅の戦いをした。

何故、そんなにと驚く人もいるかもしれない。
それは、なぜなのか

それは、そもそも、海軍の海兵というものの、全てが

守りたいモノを背負っている。

そんな、簡単な話。

それは、“正義”という言葉の名を借りて全員の胸の中にある。

だから、彼女達は知っている。

自分達が倒れたら、誰も自分の“正義”を護る者はいない、自分の“正義”がそこにあった事すらしるせやしないということを知っている。

だから、それを、自分の信念でもあるそれを守る為に彼女達は“正義”の文字を背負い武器を取った。

そんな人間が、こんな所で引く訳がない。

「皆、齒あ食い縛れ！！限界を超えるぞ！！」

その声に掲げられる武器。
歓声が戦場に響いた。

2・背中

こんなにも大きいのかと思う。

ふとお父さんの背中に寄りかかりながら、そう思った。

シュツと伸びた身長と比例するように大きな背中。

おつきくて、あたたくて、やさしい

この、背中に追い付くには後どれくらいかかるだろう？

「なに、シャル、どしたの？」

お父さんは、そうどこかほんわかした表情で問う。
胸がほんのりと温かくなった。

「・・・お父さん、甘えたら、駄目ですか？」

耳が熱い。きつと顔だって赤くなっているだろう。
いきなり体温が上がってすこし目眩がした。

少し、感覚が開いて優しい声が降ってくる。

「甘えるんなら、こうしときなさい」

ふわっと体が浮く。

咄嗟に伸ばした両腕はお父さんの肩に、体はお父さんの膝の上に落ちた。

大きな手のひらに頭を撫でられる。

くしゃりという音と共に、ぐしゃぐしゃになってしまったけど、
お父さんの嬉しそうな顔が見えて、否定の言葉を述べるのは憚られた。

だって、お父さん。

すつごく、うれしそう。

ねえ、お父さん。

私は甘えるのが下手ですけど、お父さんの事は大好きなんですよ。

お父さんはいつも誰かに頼られてるから、
今、甘えさせてくれて凄く嬉しいんですよ。

だから、ねえ、お父さん。

今日ぐらい、私に独り占めさせてくださいね。

ね、いいでしょう？

だって、私達、家族だもの。

ひさしぶりに一緒に過ごしましょう？

3・賭け、もしくは愉快犯の集い

それは、とある学生の一言から始まった。

「・・・賭けをしよう」

そう、言葉を発したのはゴールドベルグ・レオンハート。獅子^{レオン}の心^{ハート}の名を持つ。

毛先の痛んだ朱色と言っても遜色ない明るい赤混じりの金の髪に、
ツリ目がちの灰色をベースに緑や青の混じった虹彩、所謂ヘーゼルの瞳を持った少年だ。

ただ、褐色の肌も相まって人にひどく威圧感を与えるような容貌をしている。

まあ、そんな事に動じる人間は此处にはいないのだが・・・

「で、なんのだ」

ソレに乗る冷たい声。

その声の持ち主は、ガブリエル・ダンテⅡハウル。

位は低いが列記とした貴族家の長男。

家庭は大荒れだが、まあそれは今は関係ない。

藍色の髪に紫のメッシュ、海のような青い目をした少年だ。
本を読む腕を止めぬまま、そう問いかけた。

「あのじれったい、無自覚カップルが何時くつつくか」

その言葉にその空間にいた全ての人間の時間が止まった。

「まだ、くつついてなかったの!？」

ギョツとして、悲鳴のような声をあげたのは亜麻色のショートヘアに同じ色の瞳。

うつすらとそばかすが散った頬を赤く染めた、愛嬌のある顔立ちをした少女。

アリスだ。

「今のペースじゃ、一生かかっても無理だろ・・・」

それに、答えるのはエドワード・カンパーニユ。

アリスの双子の兄だ。

つんつんした髪に、凜とした顔立ちの腕白そうな少年。
どこか遠くを見て、諦めたように口にする。

「だから、すんだよ!」

「いや、無理だろ・・・」

「こうでも、しねえとあいつら一生くつつかねえぞ!？」

彼らは知らない。

誰よりも恋人らしい二人の関係が卒業しても変わらない事を・・・

その二人の名前は、ヴィルヘルムとルクレティア。

この二人の家が起こした事件に同期全員が巻き込まれる事を、

彼らはまだ、誰も知らない。

番外編 過去話の小話集（後書き）

応援ありがとうございます。

次回は、ちゃんと進めたいです。
これからも頑張ります！！

オリジナルキャラ設定（前書き）

時々、増えます。

七月七日追加しました！

オリジナルキャラ設定

主人公

名前：シャルロッテ・アルトウル・フォン・エーデルシュタイン
綴り：Charlotte・Arthur・von・Edelstein

異名：呉藍（くれない）

髪：赤よりも濃い紅い髪。よく紅蓮の炎とかにたとえられる。
瞳：たれめの青混じりの緑の瞳。光の加減で翡翠にも濃い群青にも見える。

容姿：貴族一と謳われた母譲りの美しい顔。

可愛い雰囲気なのに性格のせいかな凛とした印象を周囲に与える。
色白で、精巧に作られたような人形の様な美しい顔立ち。

まっすぐ伸びた背中に華奢で小柄な体躯。

身長は低めで体重は周りの平均を下げる程度には低い。

性格：飄々としてるけど友達や知人が少ない分、その人たちには優しく甘い。

根は生真面目。理屈屋で頑固。さらりと辛辣。

海賊嫌い、というよりも怖い。滅べばいいのに…。

情は熱いが、何事でもきちんと決めれば何をも切り捨てられる。

気が長く滅多に怒らないが怒ると手がつけられない上に、非情に執念深い。

嫌いな相手はとことん追い落とす主義。

海賊によって一回殺されかけてから死ぬことが怖くなくなった。
ネジが飛んじやった感じ。

備考：悪魔の身的能力者でレイピアとナイフの二刀流。

六式も多少こなす。

シャルロットの部隊

名前：マーリン・ウォーロック

綴り：Merlin・Warlock

異名：灰狼（はいろう）

髪：肩の辺りで一つに纏めた銀に近いアッシュグレー

瞳：切れ長で業火をはめ込んだような紅い瞳。実は目つきが悪い。

容姿：鋭い印象を与えるがいつも笑顔なのであまり気付く人間がない。

インテリ系美形。身長が高くガタイもいいが気付かれにくいスマートな体型を持つ。

性格：基本的に嫌いな奴には辛辣で結構なS属性。さらりと毒を吐く。

腹黒、笑顔で攻撃。常に笑みを引きながら、その目がちつとも笑ってない（気付く奴はほとんどいない）。好きな相手と嫌いな相手とその他の扱いが明確。意外と部下に対して面倒見がいい。

備考：この中のメンツで一番軟弱そうに見えるが実は一番肉弾戦が強い。

武器はごつい二丁拳銃。血を媒体に霧を操ったりすることもできる。

“魔女の後継者”だの“霧の魔法使い”等の二つ名もある。

密かに歳の離れた妹分を溺愛している。

名前：ガヴェイン・ソレイユ

綴り：Gawain・Soleil

異名：光槍（こうそう）

髪：あまり整えていないせいでくしゃくしゃな木漏れ日みたいに淡い色合いの金髪

瞳：いつも眠たげな青みの強い紫色の瞳

容姿：肌は白い。気付かれないが柔和に整った顔立ちをしている。

性格：マイペースで天然気味。口癖はどーでもいい。

気に入った奴と仲がいい奴以外はどつなろうが知らない。

嫌いな相手は無視するタイプ。ランスロットはなんか嫌い。

備考：トリスの親友で、モルガンの親戚。

異名の通り、凄腕の槍使い。イメージ的にはランサーみたいな感じ。

親戚が親友の兄と結婚した為に親友と遠い親せきになった。

ついでにCP9のメッセンジャー。海兵なのに裏稼業。

仲間を裏切るつもりは毛頭ない。

名前：トリスタン・カークランド

綴り：Tristan・Kirkland

異名：魔弓（まきゆう）

髪：毛先の痛んだ茶色に近い濃い金髪

瞳：大きな深緑の瞳

容姿：普通に整った顔の美男子。じっとしてると二枚目。喋ると二

枚目半。

いつもへらりと笑っている事が多い。眉毛は太っ、いや、凛々しい。

性格：女性に優しい。喋らなければいい男なのにと評判。やる時は

やる男。

恋愛には意外と一途だったりする。

へらへらして掴みどころがないがそれは一種の処世術。

本来の性格はとても情が深い。だからそれを嚴重に隠している。

備考：武器は槍の様な刃物がついたロングボウ。

基本的に遠距離では弓に近距離では槍に中距離ではその場に応じて

使い分ける。

弓の腕は凄く蟻の頭だつて打ち抜けるほど。

名前：モルガン・ル・フェ・カークランド

綴り：M o r g a n ・ l e ・ F a y ・ K i r k l a n d

異名：鋼線（こうせん）

髪：腰まである鮮やかなブルネットの巻き毛

瞳：切れ長の鳶色の瞳

容姿：きつい顔立ちをしている。肌も健康的。可愛いよりも綺麗。

性格：勝気でカッコいい。純情では無いがそこまでスレてはいない。旦那にぞっこんな新妻。ツンデレ夫×ツンデレ妻（夫にはデレデレ）。

嫌なことにはシレッと仕返しを忘れないあたりイイ性格。

なんだかんだで面倒見がいい。見て見ぬふりをしようとしてそれができない。

友人に優しい。面倒見がいい為の後輩や部下には慕われるあねご肌。備考：武器はワイヤーが仕込まれている鉄鋼付きのグローブ。

名前：ギネヴィア・レオデグランス

綴り：G u i n e v e r e ・ L e o d e g r a n c e

異名：慈愛（じあい）

髪：緩いウェーブのかかった蒲公英色の髪

瞳：淡い水色の垂れ目

容姿：全体的に柔らかで優しめ。

性格：なんか、ぼわ〜んとしている。穏やかな性格。多分マイナスイオンなんか出してる。

流される様に見えるがきちんとした芯を持っているため流されない。

面倒見がいい。結構何でも、おやおやまあまあで片付ける人。

備考：シャルロットの遠い親戚。モルガンとは友人関係。

運動神経おっとりしているようで結構いい。

頭もいい。というか、性格面が凄く良い。

武器は銃だが、基本的に仕事は事務や経理などなので関係なし。

名前：セティバーク・レティシア

綴り：Cetibergr・Laetitia

異名：悪夢（ナイトメア）

髪：ベリーショートの黒い癖っ毛

瞳：濃い藍に近い黒色の色香を含んだ婀娜っぽい瞳

容姿：褐色の肌に、とある国の一族特有の複雑かつ華麗な入れ墨が入っている。細い癖に腰や胸にはしっかりとした質がある。どこか危うげな色香の漂う美女。

性格：結構苦労したせいかわ、どこかしらねじ曲がってる。怖いもの見たさで見えて痛い目にあう。正直、外面は良いけれど内面は複雑怪奇の一言に尽きる。

備考：超人系悪魔の実の能力者。

学生時代のとある出来事でマーリンに蛇蝎のごとく嫌われている。

名前：ガブリエル・ダンテ＝ハウル

綴り：Gabriel・Dante＝Howl

異名：影斬り（かげきり）

髪：綺麗な藍色の髪に派手な紫のメッシュが入っている

瞳：二重の海のような青い目

容姿：肌は白く、身長は高いが体型は細い。常に仏頂面。顔が整っている分残念。

いつもシルバークセをちゃらちゃら付けている。

性格：普段から冷静で結構図太い。淡々とツツコムストッパー。

若干ツンデレかもしれない。継母が大嫌いな為に家族関係の話は禁句。

自分の家族を話題にあげられようものなら毒舌と皮肉で確実に潰す。

備考：武器は基本的になたの様な二振りの分厚いナイフ。

あちこちに仕込んだナイフやボールも使う。彼の手にかかればペンさえも武器と化す。

ヒョロつちく見えるが実は同期に笑顔でジャーマンスープレックスをかけるぐらいの猛者。

身軽で、忍者っぽい戦い方をする。ゆえに影斬り。位は低いが列記とした貴族家の長男。先妻の子供で、後妻との関係は相当悪い。

継母に毒を盛られたりしてたので毒の耐性がある。

名前：アリス・カンパーニュ

綴り：Alice・Campagne

異名：まだない。

髪：さらさらの亜麻色のショートヘア

瞳：大きな同じ色の瞳

容姿：うっすらとそばかすがある白めの肌。愛嬌のある顔立ち。身長と胸はあまりない。

二卵性の為に双子の兄のエドワードには似ていない。

性格：普通の一言に尽きる。一般常識を持ち合わせていて平均的にいい性格である。

色々ぶつとんでる66期生の中での普通の象徴。

しかし正義感はずいぶんとあり暴走した兄の唯一のストッパーなのでやっぱり普通ではないのかもしれない。

備考：武器は支給された基本装備。

ウォーターセブンのパン屋の娘。海軍士官だけど、戦闘には出ずに裏方作業が多い。

事務雑務担当。航海術の練習もしてる。

名前：エドワード・カンパーニュ

綴り：Edward・Campagne

異名：解体屋（クラッシャー）

髪：亜麻色のつんつんした髪

瞳：キリッとした亜麻色の瞳。

容姿：凜とした顔立ち。顔立ちは平均よりも少し整っている程度。健康的に日焼けした肌。身長と体型は普通に平均びつたり。実は隠

れ怪力。

性格：普段は真面目でおおらかで優しいし部下も気にかけるいい上司だが、どうしようもないシスコン。アリスに手を出すやつはジェノサイド。一回キレると頭のねじがぶっ飛んだみたく怖い事になる。備考：武器は大型のレンチ、スパナ、ドライバー等の工具類。人を殺すのではなく壊す人間。関節破壊と化してくるので超ヤバい人。何時も海軍のマークの入った繋ぎを着てる。

アリスの双子の兄。実家のパン屋は兄夫婦が継ぐ。

妹のいるマーリンと、妹のいる同期と一緒に妹同盟を組んでいる。

名前：ルーカス・マクシミリアン

綴り：L u k a s ・ M a x i m i l i a n

異名は特になし

髪：濃いピンクの短髪（猫っ毛）

瞳：暗めの紫、垂れ目

容姿：白めの肌、ちゃらい印象を与える整った顔立ち。175cmで細い。

何時も何本かのピンで前髪を止めてる。おしゃれなコック。

性格：甘めの外見とは裏腹に結構な皮肉屋。若干のフェミニスト。

心の壁は高い。仲間にはへたれてる分、仲間以外には結構酷い。

昼行燈に見えて頭がキレるタイプ。油断するとやられます。

備考：海軍士官学校を卒業している為に本部准尉の位持ちのコック長。

本人はデザートとか繊細なものを作るのも好き。武器はトライデント

名前：シュトラウス・ジークフリード

綴り：S t r a u s s ・ S i e g f r i e d

異名：ない

髪：癖のない濃い茶色の髪

瞳：藍色の瞳

容姿：平均以上に整った顔。たれめ気味。
性格：一筋縄ではいかない。曲者（この部隊の中ではまだまだだけど）。

備考：武器はサーベル。

名前：ダイアナ・エリザベート

綴り：D i a n a ・ E l i s a b e t h

異名：ない

髪：淡い茶色の髪ロング

瞳：コーヒープラウンの瞳

容姿：可愛い系の可愛い子。普通に美人。

性格：ちよつと融通利かないけどいい子。若干ビビリ。

備考：若いながらに有能な秘書。戦闘能力は皆無。

シャルロッテとは違う部隊

名前：ゴルドベルグ・レオンハート

綴り：G o l d b e r g ・ L e o n h e a r t

異名：牙鋭（がえい）

髪：あちこち跳ねている毛先の痛んだ明るい朱色混じりの金髪

瞳：ツリ目のヘーゼル（灰色をベースに緑や青の混じった色）の瞳

容姿：褐色の肌。精悍に整った顔立ち。男前と言ふ表現の方が似合う。

身長は201cm、ガタイもいい。ラテンっぽい感じの人。

性格：面倒見がいい兄ちゃん。男前。おちゃらけて見えるけど根は生真面目で仕事もきっちりやるタイプ。面倒見がいい為に部下から慕われる。女性と子供には優しい。子供好きなので自分の目つきで避けられてへこんでる所もある可愛い人である。

備考：動物系悪魔の実の能力者。それはある種の男のロマンである。

武器は全長5メートルほどになる鋼鉄製のメイス。

赤のシャツに黒スーツ、目つきの悪さも相まって裏の仕事の人にしか見えない。

ガープ中将の部下。

名前：ヴィルヘルム・シュタイン

綴り：Wilhelm・Stein

異名：墓守人（はかもりびと）

髪：天然パーマ気味の癖のある黒髪。

瞳：色素の薄い灰色の瞳。視力が低いせいで目つきが極めて悪い。

黒ぶちの眼鏡着用。

容姿：白いを通り越して青白い幽霊みたいな肌に、常に不機嫌そうだが極めて整った顔立ち。身長198cm。しかし、ひよろつとしている為にそこまで高く見えない。

性格：博識で、結構責任感のある性格。研究を一番に位置付けている為に邪魔をする人間の扱いは結構ひどい。意外と容赦のないSなマッドサイエンティスト。研究が絡むと性格が変わる。自分が異質である事は理解しているので色眼鏡で見ずに、一緒に卒業した仲間には甘い。

備考：66期生以外の人間に死体愛好家だと噂されている。ネクロフィリア

昔、生身の女に興味は無いとぼつさり告白相手を切り捨てたから。

それは実は昔からルクレティアしか見ていないという深層心理の表れ。

ルクレティアと幼馴染で無意識だが研究を除けば彼女を一番に位置づけている。

同級生から言わせて貰えばさっさとくつつけて感じ。

武器は大きな十字架。

Dr・ベガパンクの研究班に所属している。

名前：ルクレティア・ローレン・ティエリア

綴り：Lucretia・Rollen・Tiara

異名：葬儀屋（アンダーテイカー）

髪：灰がかった金色をした長い髪

瞳：ぱっちりとした二重の薄紫の瞳

容姿：凜とした鼻梁。色素の薄い肌に、長いけぶるような睫毛。

すつきりとした輪郭。女性らしい恵まれた体型。

普通に美人なのだが、体のあちこちに大小問わずに傷跡がある。

左目が見えない為に隻眼。

性格：普段はおとなしいし、66期生の中でも良心的な存在。大抵の事では怒らない。しかし、きれると能力を駆使して大暴れするためにたちが悪い。

備考：武器は薙刀と棺桶の中の…。暗くて狭い所が苦手。

自分は望んでいなかったが、悪魔の実を食べ能力者となった。

その為に親から虐待を受けていた。

ヴィルことヴィルヘルムとは幼なじみで大切な存在でヒーローの様な存在。

さつさとくつつけよこいつら。

スモーカー大佐の部下。

名前：レイク・ランスロット

綴り：Lake・Lancelot

異名：湖の騎士

髪：淡い茶色にも濃い金髪にも見える飴色の髪

瞳：青空みたいな青い瞳

容姿：うっすらそばかすがあるために見た目より幼く見える。

が、小動物的な感じは抜けて、凜とした印象を与えるようになった。身長が伸びたし、鍛えているから胸板とかも堅い。普通にカッコよくなった。

この話の中で一番正統派美形。

性格：礼儀正しく優しい。純情で素直。いい後輩。

しかし色々濃い先輩達に可愛がられたせいか、強かで黒い一面が現れる事も。

備考：武器はクレイモアと呼ばれる大剣。その効力はエグイ。
Tボーン大佐の部下、大尉。

マーリンとバトルした戦闘狂の暗殺者

名前：リュイル（偽名）

綴り：R y u i r u

異名：気狂い道化師
クレイジー・ピエロ

髪：柔らかそうなオレンジ色の髪

瞳：赤にも見える紅茶色の瞳

容姿：ピエロの化粧をしているので気付かれにくいがとても整った造形をしている。

身長は高めで、体はがりがりに細い。分かりにくいけど女の子。

性格：血を見るのが好きな戦闘狂。自傷癖がある。

戦うの大好きで斬るのも大好き。しかし仕事でだけ、普段はスイッチが入らなければ借りてきた猫のように大人しい。基本は気まぐれな自由人。

備考：武器は死神が持つような大鎌。

絶体絶命の状況で自分に勝ったマーリンの事はお気に入り。

服装はピエロやサーカスの劇団員染みた格好が多い。

現在はフリーの暗殺者として仕事中。仕事成功率は低い。

腕は良いが気まぐれも多いから。

本当はある貴族の忌み子で本名はXXX・トリエットという。

ただいま暗躍中の苦労症の元暗殺者

名前：ゼロ・ロッソ

綴り：Zero・Rosso（本来の名前は捨てたのでこれが今の本名）

異名：元鳴無、現影無

髪：真つ直ぐな毛質の闇色の髪

瞳：切れ長の赤みのかかった錆色の瞳

容姿：一応それなりに整った容姿をしてる。

イケメンと言うよりも男前みたいな感じの顔。

高めの身長に引きしめられた鞭のようにしなやかな体。

見えない部分は結構傷だらけ。

性格：一本気な性格で真面目で頑固。真面目で頑固な性格が故の苦労症。

女、子供を殺す事に自分でも気付かない程度に抵抗がある。

自分を拾ってくれた前組織の頭領に忠義を感じている。

自分が売られたとはいえ、一応前頭領の置き土産である組織の面目を保ってくれたエーデルシュタインとウォーロックには頭が上がる。

備考：武器は肉体であったり、暗器であったり、その場にあるものだったりする。

現在、革命軍に潜入中（偽名で）。

二十七話 祭りの前の小休止（前書き）

やっぱりオリキャラばっかです。

これからも更新頑張ります。

二十七話 祭りの前の小休止

SIDE：シャルロッテ

ガシャン、と陶器が割れる音が廊下に響いた。

私の目の前には真つ青な顔をした三人組がいて、後ろにはもつと顔を青くしたまだ若い小さな見習いがいる。珍しく羽織っていた“正義”のコートは花瓶の水で濡れて、頭からは水と一緒にちらほらと赤いモノが流れていた。

「す、すいませんでした！！」

そう言つて猛スピードで逃げていく三人組。
訓練でもそれぐらい走れ馬鹿者。

・・・顔は覚えたぞ。

手袋で額に触れると白かった手袋が赤に染まった。
うわぁ、結構気に入っていたのに。

「だ、大丈夫ですか！？」

うん。

逃げなかったのは及第点だ。

「」

大丈夫だと伝えようとして開いた口は、とある声に遮られた。

「お前、何やってんだよ」

声をかけてきたのはレオンで、
増えた上官の姿にまた見習いが硬直したのが気配で分かった。
それはそうだろう。

まだ見習いの海兵が大佐と准将に挟まれるなんて悪夢でしかない。

女でさらに小柄な私はともかく、

レオンは2mの長身で目つきの悪さと褐色の肌、赤いシャツにダークスーツ。

裏稼業の人間にしか見えない上司とか恐怖の対象だろう。

割れた花瓶と濡れた私、泣きそうな見習い。

大体の状況が読めたのだろう、大きく呆れたように溜息をつかれた。

「何となく分かったぜ……」

じゃあ、何で立ち止まったまんまなの？と口を開こうとした時、視界が変換した。

目の前から見習い君が消える。

俵担ぎにされてるのか私。

「ッ!!?」

「こいつの書類をこいつの執務室にいる淡い茶色の髪秘書に渡してくれ」

「わ、分かりました!失礼します!」

ダツと床を蹴る音がして、
見習いが立ち去った事が分かる。

「レオン、降ろせバカ!!」

私の静止の声をよそに、
人気の無い廊下を緩やかに歩み始める。

「駄目だ。お前、絶対医務室に行かずに処理すんだろ」

「医務室には自分で行くから、早く降ろせ!!」

こんな姿、他人に見られたら死にたくなるって!!

「お前、そんな事言つて学校の時行かなかっただろ。だから、絶対に俺は降ろさん」

何年前の話をしてるんだ君は・・・

「せめて、人気の無い場所を通つてくれ・・・」

善意からの行動に悪意を籠めた罵倒なんてできずに、内に抑え込む。
口から零した最後の言葉は呻く様な頼みだった。

ドナドナの仔牛ってこんな気持ちだったんだろうか・・・

SIDE：レオンハート

無抵抗になって静かになったシャルの身体を担ぎなおし、医務室に向かう。

軽い、軽すぎる。

こいつまた、夜抜いて仕事してやがったな。
この身長なのにこの軽さはねえだろう。

何で胸が小さくねえのか謎だ。

夜抜いたらすぐに体重が変動する体質なのに、何時もどうして無茶をするのか。

どうせ書類仕事の区切りがよい所までとか嘯いて無茶したんだろう。
副官の癖にマーリンとトリスタンの野郎見逃してるじゃねエか。

いや、秘書の奴が無理させたのか？分からねえけど。

医務室のドアを開けて長椅子に座らせる。

本気で珍しい事に、誰もいなかった。

もしかすると、さつき港に帰って来た中將の軍艦ふねに呼ばれたのかも知れん。

325

応急処置というかこれぐらいの処理なんて学生時代に慣れてるとい
うか…。

青春の園のはずなのにパツと思い浮かぶのが血なまぐさい思い出って

青春時代にふさわしいのだろうか？

今更だけだよ。

まあ、今はシャルの治療をするだけだが。

「なあ、シャル」

「何だい、レオン？」

流石に無断では悪いと思ったが居ないんじゃないだろうが。
さっさと治療道具を拝借する。

消毒液を手に取り消毒を開始しながら、疑問を口に出す。

「お前^{ロギア}って自然系だよな」

「そうだよ。・・・珍しいかい？私に言わせれば幻獣種の君の方が珍しいけどね」

そう、こいつは自然系の筈なのだ。
それなのに花瓶で怪我してる。

可笑しいだろ。

ガーゼを額に張ってテープに固定する。
一日したら取っても平気だろう。

「俺の事は今は至極どうでもいい。お前さ、能力なんてめったに使わないし剣士として十分に強いから、知っている奴は少ないけど確かに自然系だろ」

「なら、何で無効化できないんだ」

語り始めた口は止まらない。

「だって、可笑しいじゃないか。お前は自然系なのにそんな怪我をするんなんて」

俺がそう言うと、シャルはフツと目を伏せた。
そして、口を開く。

「レオン、君は私の能力を覚えているか？」

「能力って、・・・確か雪だよな？」

「そう、『雪』だ。ねえ、雪は水が掛るとどうなると思う？」

俺の顔を見上げながら、そう問いかける。

「そんなもん、溶けるに決まって・・・」

「そう、溶けるんだ！」

きつぱりはつきりと言い切るシャル。
嫌な予感がした。

「まさか・・・」

「そのまさかだね。私は普通の能力者なら影響が無い雨やかかる水にもろに影響を受ける。本物の雪の様に溶ける事は無いが、水に極端に弱いんだ」

それこそ、砂の能力者のサー・クロコダイル氏並みに、

「だからさ、レオン。これは黙っというてね。敵をだますにはまず味方からをするようにって言われてるんだ。 信頼してるよ」

そう言つて長椅子から立ち上がる。

ちらほら襟が赤くなっているコートを羽織った。

「後、治療ありがと。実は痛かったから助かった」

ぺろっと少し舌を見せて笑う姿は幼くて、不覚にも目を奪われた。
あの、笑顔は卑怯だ。

黙らざるを得ないじゃないか・・・！

結局、俺、レオンハートはこいつには敵わないのである。

おまけ

「シャル！？その怪我どうしたの！？」

お父さんにばれないように早退届をかいで、

半休（有給を使う事にした）にしたら、玄関でお父さんに発見された。

しかも、怪我のせいで呼びとめられた。

「・・・レオンに治療してもらったので平気です」

「へえ、レオン君かあ」

あの、お父さん。目が笑ってないんですけど。

私は雪だから影響も受けませんが、部下の人達凍えています。

どうしよう。

ゴメン、レオン。

君の命、明日まであるのか分かんない。

・・・いざって時は成仏してくれ。

本当にゴメン。

二十八話 前夜祭、最後の仕度（前書き）

現在原作三年前です。
結構シリアスです。

これからも頑張ります。

二十八話 前夜祭、最後の仕度

SIDE：シャルロッテ

一目見た時に、これは夢なんだと思った。
だって、君がいる。

手で触れられる位置に君がいる。

現実ではそんなことはないを知っているのに心が、トクンと鼓動を刻んだ。

口の中が緊張で乾く。

上手く声が出るかどうか、分からない。

けど、声をかけなければ、

こんなの、もう現実ではありえないんだから

「・・・キッド」

夢だって自分でも分かってた。

それでも、声は微かに震えてた。

手だって震えていたかもしれない。

それぐらい、嬉しかった。

夢だって知っていても嬉しかったんだ。

どうしようもないくらい好きなんだから。

どうしようもないくらいに好いて惚れて、愛おしい相手がいるんだから。

緩みそうになる視界の中に、

「なんだよ、シャル」

そう、笑う君がいる。

思わず、抱きついた。

大きな体はごつごつして力強くて逞しい男の人の体だった。

そんなキッドの髪や体からは、南の海サウスパルの海の匂いがして、
そんな些細なことにも涙がこぼれそうになる。

しあわせでなけることを、はじめてしった。

私は君のおかげで、幸せだった。

自然な笑い方も思い出せた。

嫌いな色も、君の色だから好きになれた。

傍にいてだけで、幸せだった。

ずっと、君の傍にいたかった。

本当は離れたくなかったし、手だって話したくなかったんだ。

そう、どうしようも無いくらい君が好きだ。

ぶっきらぼうで、乱暴で、そのくせ変に繊細で、優しい君を、

ユースタス・キッドの事を本当に私は、どうしようもない、くらい

．．．．．好き、なんだ

夢だから言えなかった事が、口から零れ落ちた。

言いたかったのに、現実では言えなかった事。言っではいけなかった事。

夢だから言えた、私の本音。

その言葉に、君は口を開いて

「

、

。

」

待って、まだ、覚めないで。

だってまだ、君の言葉が聞こえない。

君の声が届かないんだ。

白く染まる視界の中で、記憶通りに笑う君がいた。

目が覚めた。

白波に揺れる軍艦^{ふね}の寢室のベッドの上で。

波の音が聞こえる。

幸せな夢だった、けれど、

正直、嫌な気分で胸がいつぱいだった。

夢で幸福すぎる夢を見るほど辛い事は無い。

もう、戻れない事を知っているのなら尚の事。

もうあの頃には戻れないのに、あんな夢を見るなんて最悪だ。

手を取ることも、傍にいる事すらできないっていうのに。

神様とやらは私の事が嫌いらしい。

幸せすぎて不幸な夢を見せるのだから。

心臓の上のシャツを痛いほど握りしめる。

これ以上ない最悪な目覚めだ。

「最悪・・・」

そう吐き捨てた。

頬に触れる雫には気づかないふりをした。

S I D E：レオンハート

ひよっこりと紅い頭が執務室のドアに顔をのぞかせた。
手には薄茶色の紙袋。

翡翠の瞳は少しばつが悪そうな色をしていた。

「よお、シャル」

「おはよ、レオン」

執務室でシャルは持ってきたリンゴを剥いている。

・・・何故、兎型なんだ。

俺の表情に気付いたのか彼女は口を開いた。

「怪我人にはうさぎリンゴなんだ」

・・・それ、お前ん家だけじゃね？

「お父さんが、風邪引いた時に切ってくれたんだよ。・・・懐かしいな」

そう、ぽつりとこぼしたが、自身の発言に気づいて顔が強ばる。
引き攣った顔だ。

「・・・レオン」

「なんだ？」

「ごめん、ね」

手元に視線を向け、俯く、姿。

それは萎れてしまった向日葵を想像させた。

「バアカ、謝んなよ」

笑って、言葉を紡ぐ。

そうでもないかと、こいつはずっと引きずるから。

分かりにくいけど情が深い女だから。

自分に物凄く厳しい人間だから。

こうでもないはずと、それこそ自分が納得するまで謝り続ける
だろうから。

「でも、・・・レオン、君」

やっぱりばつが悪そうな困り顔をしている。

そういう顔は嫌いじゃないけど、場合による。

今はそんな顔をさせる場合じゃない。

「いいんだよ。それに、怪我はしてねえ」

・・・実はお前が止めてくれなきゃヤバかった事は伏せておく。

男つてのはカッコつける生き物だから、な。

それが本気で惚れた女の前なら尚更だ。

お前、自覚してねえかもしれねえが極上のイイ女なんだ。

「けど、」

「そんなに俺に謝りたいんだったら、俺とデートしようぜ。それでチャラだ」

絶対に断るだろう事を口にする。

ジョークだと冗談だと否定できる段階で、

実は堅物で根は生真面目なお前なら否定するだろうと踏んで、それなのに。

「・・・分かった」

「は？」

「私の艦隊は、今日の昼からある任務につく。それが終われば、時間が開く」

間が抜けた顔を晒す俺を尻目に、

身内にしか見せない素の無表情気味の顔で淡々と告げる。

シャルが持ってきた紙袋の中のリンゴがいやに鮮やかに見える。

「・・・そしたら、デートしよう」

俺は思わず、シャルの顔を凝視した。

これ、俺の夢ん中の幻想なんじゃという疑惑を籠めて。

SIDE：アリス

「エーデルシュタイン准将」

「アリスか・・・」

そこには、メインマストに堂々と腰掛け、

学生の頃から伸ばし始めた紅い髪を潮風に靡かせながら、

海を眺めている彼女がいた。

群青色にも見える濃い翡翠の瞳を細めながら、

夕日が沈んでいく橙色の海を、ただ、ひどく懐かしそうに見つめている。

「准将は、よせ」

そう振り向きもしないままに一言だけ声をかけて、ただじっと夕日と海を見続けている。

その、背中が酷く寂しそうに見えたのは気のせいだろうか。

「じゃあ、シャルロッテ。いったいどうしたの？」

これは異常だ。

ワーカーホリック
仕事中毒の気があるシャルロッテが何もせずに、海を眺めてたそれが
れているなんて・・・！！

「何でもないよ」

やっぱり振り向かないまま彼女は言う。

何時もは大きく見える背中がやけに小さく見えた。

「ただ、」

「ただ？」

その言葉に首をかしげた。

「急に夜が来るのが怖くなった」

そう、ようやく振り向いた彼女の、瞼はうつすらと赤くて、まるで

・

泣いた、みたいだった。

「いや、正確には夢を見るのが怖い」

そう微笑^{わい}う、顔は今までに、見た事の無い顔だった。

とても、複雑で、感情という感情が絡み合って、混ぜこぜになった。そんなどうしようもない顔。

「馬鹿、みたいだろう？」

自分でもどうしようもない、と分かっているのだと続ける。

ギョツと胸を抑える仕種をした。

その俯いた顔は、表情を窺う事すら私に赦さなかった。

けど、泣いているんじゃないかとも思えた。

それぐらい悲痛な響きを伴った声だった。

もっと、あなたの誇りや何か^{プライド}が低ければいいのに。

そしたら、あなたのことを全力で守ることだってできるのに。

あなたは、なまじ、何でもできる器用貧乏^{オールマイティ}な人間^{ひと}だから。

人に弱みを見せる事も愚痴る事も出来ないくらい高いプライドの持ち主で、

頑固で実は意外と生真面目で堅物な性格の人間だから。

自分の感情を自分でどうにかしようとする。

確かに、大半をどうにかできるのは知っている。

それでも、
頼って欲しいと願うのは余計なお世話だろうか？

けど、言葉に出せたのは、

「明日は“火拳”との交渉なんだから・・・、早く休んで」

そんな言葉しか言葉にできなかった。

SIDE：キッド

気が付いたら、目の前にお前が見えた。

長くて真っ直ぐな紅い髪に、群青色にも見える翡翠の瞳が細くて、白くて、守りたくなるような儂い姿。

これは夢だと思った。

全部、夢なのだと理解した。

だって、もうお前は俺の手の届く場所に居ないんだから。

それなのに、手の届く位置にお前がいる。

泣きそうな瞳をしたお前が傍に居る。

「・・・キッド」

震える声で俺の名前を呼ぶ、お前。
微かに震えながらそれでも、俺の名前を呼んだ。
真っ直ぐに、昔の様に、変わらない声色で。

「なんだよ、シャル」

それが夢だと分かっているけど嬉しくて、俺は、笑った。

笑うと、何故か抱きつかれた。

胸に顔を埋めるようにして抱き留められる。

髪や体から漂う花の匂いが鼻孔を擦った。

甘いように儚い香り。

この身を感じる柔らかくて温かい感触は、大人なのだとはつきり分かる。

泣きそうな笑顔で笑う、お前。

俺に抱きついたまま言葉を紡いだ。

「

私は君のおかげで、幸せだった。

自然な笑い方も思い出せた。

嫌いな色も、君の色だから好きになれた。

傍にいただけで、幸せだった。

ずっと、君の傍にいたかった。

本当は離れたくなかったし、手だって話したくなかったんだ。

そう、どうしようも無いくらい君が好きだ。

ぶっきらぼうで、乱暴で、そのくせ変に繊細で、優しい君を、
ユースタス・キッドの事を本当に私は、どうしようもない、くらい

．．．．．好き、なんだ

「

夢だと、思った。

俺に都合がよすぎる言葉。

夢だと思うのに、その言葉の響きには本気の感情が感じられて、
動揺した。

それでも、構わず口を開いた。

お前に言えなかった事が、俺にだって山ほどある。
言うのが遅すぎた事も山ほどあるんだ。

「
、
」。

白く染まる視界の中で、泣きそうな顔で笑うお前がいた。

夢を見た。

どうしようも無いくらい、幸福で、しあわせな。

そして、どうしようもなく、不幸で、ふしあわせな。

そんな、胸糞の悪い夢を見た。

二十八話 前夜祭、最後の仕度（後書き）

いつも、応援ありがとうございます。

オリジナル過多の連載ですが頑張ります！！

二十九話 海の上のFastnacht 上(前書き)

タイトルのFastnacht「ファストナハト」はドイツ語でカーニバルを意味しています。

暗躍するマーリン。

交渉は、どうなるのか!?

二十九話 海の上のFastnacht 上

SIDE：ガブリエル

「…、というわけで“火拳”のエースを七武海に勧誘する訳ですが、手筈通りをお願いします。ええ、当初の計画で結構です」

電伝虫を片手に何やら書類に書き記しながら通信室を陣取るマーリン。
にこやかな様子が怖い。

につこりと笑っている癖に、その笑顔は肉食獣を髣髴させた。
有り体に言えば、獰猛な本性を隠しているということ。
マーリンの二つ名って“灰狼”。

所謂、灰色の狼だからなあ。

うん。誰が名づけたのかは知らないがあつて。

何かを察したのか、うつすらと睨まれた。

お前、いつも笑顔な分、ギャップが激しいんだよ。

「ええ。では明日。いざという時は頼みます」

ガチャリという音とともに、電伝虫を下ろした。

灰色の髪に傷跡の残る紅い瞳の美丈夫は僕を見据えてくる。

「で、悪だくみは済んだのか？」

「悪だくみとは人間きが悪いですね、ガブリエル」

くくくつと喉の奥で笑う今のマーリンの姿を見たら、悪の組織の首^ボ領を連想すると思う。

それぐらい、悪い顔をしていた。

あれだ、ワイングラス片手に高みの見物をする黒幕が見せる笑顔みたいな、そんな感じ。

「…じゃあ、何なんだよ」

僕は苦虫を噛み潰したような顔をしてたと思う。

面倒なことに巻き込まれそうなんだから、それぐらい怒ってもいいと思う。

「頼まれた仕事と、念のためのちょっとした保険ですよ」

そう、笑う。造作のいい顔立ちも相まって、

その笑顔は本部の後方事務担当の女性にきゃーきゃー言われるほどの人気があるが、

同期の人間に言わせれば一言で表せる。

胡散臭い。

「シャルは、エーデルシュタイン准将は知ってるのか？」

「ガブリエル、貴方って律儀ですね。昔みたいにシャルって呼んだら良いのに」

シャルもきつとその方が喜ぶのに

そんな勝手な事を抜かして、ひょうひょうとした様子で告げる。

黙殺した。

そんな事はとつくの昔に知っている。

腕に仕組んだワイヤー仕込みのシルバーアクセサリーが音を立てる。いらつとした。

「余計な御世話だ。で、言ったのか、言っていないのか、どっちなんだ？」

「おお怖いですね。そんな目で見ないでください。言うべき事はきちんと伝えましたよ。というよりも頼んできたのはシャルの方からですし」

・・・あいつが？

ええ。私の方がこういうの得意だろつと言って、頼まりました。

「だったら、別にいい」

「ええ、それは何よりです」

目の前で笑う男は相変わらず読めない。

不愉快だが、一応、僕らに嘘をつかない事は知っているから、悪い事でも不利益な事でもないのだろう。

目の前の男から踵を返した。

そろそろ僕は持ち場につく時間だ。

背中に一筋縄ではいかない男の視線を感じながら僕は扉を開けて外に踏み出した。

SIDE：エドワード

夜が明けた。

今日も天気は快晴。

すがすがしい陽気になるだろう。

んーと伸びをする。

見張りで夜が明けるのを見届けた為に、正直眠い。
だるいし、疲れてる。

昼までの間でも正直、僅かでもいいから寝ておきたい。

太陽が黄色く見えるし。

“火拳”との交渉の時間までにまだ間があるし。

よし、そう決まったら寝よう。

ハンモックが俺を手招きして待っている。

そう、船室に向かって踵を返そうとしたら、

「エド。ちよつといいですか？」

声をかけられた。

この軍艦^{ふね}の？2のマーリンに。

呼びとめられたからには面倒な事に組み込まれたんだろうなと腹をくくる。

こういう時の決断が大切なんだ。

「・・・なん？」

俺、見張りだったから寝てえんだけど、とじと目で見つめたら。

「この笛持って、ミズンマストの見張り台の中で寝ててください」

「何で？」

銀の笛を受け取りながら聞く。

何の変哲もないただの笛なのだが…。

仕掛けもなにもない緊急を知らせるための笛を手中で弄びながら尋ねた。

「“火拳”との交渉が破談に終わったら鳴らして下さい」

あ、そういうことが。

「成程。これを鳴らせば、通信室まで届いて其処に居る奴が近くの軍艦に知らせんのか」

「ええ、その通りです。鳴らしたら、すぐに戦闘に参加して下さい」

そう、澄まし顔で告げる。

「アリスは・・・？」

「アリスも含めてですが、女性陣の多くは中で防衛と医務室を手伝って貰う事になってます。中なので外より大分安全ですよ」

「それならいい。じゃあ、俺は上に居ればいいんだな？」

「ええ、責任重大なのでお気をつけて」

プレッシャーをかけんな馬鹿。

すみませんね、性分です。

結構本気で言う俺とシレッと返すマーリンは顔を見合わせて笑った。

SIDE：マーリン

「それで、“火拳”のエース。返事はどちらだろうか？」

そう、問いただすシャルの後ろ姿。

小さな背中に、白い“正義”のコートを身につけているのを見るのは久しぶりだ。

「俺を、七武海に…？」

「ああ。最終勧誘だ。イエスと言ってくればすぐに世界政府が君達の懸賞金を停止する」

黒い髪に雀斑が散った愛嬌のある顔をした“火拳”を視界に納めながら、

彼女の斜め後ろに立っている私とトリスは相棒である武器の確認をした。

交渉が決裂しても、すぐにシャルを守るように。

「それって、どんな条件が付くんだ？」

そう、すこし考えるように尋ねる“火拳”。

嫌な気分だ。

「最初に送った手紙に書いてあったはずなのだが……」

そう、溜息でも出そうな顔（同期から見たらだ）で、告げた。

「そうだな、君達に対するメリットは未開の地及び対海賊限定の略奪行為が特別に許される「敵船拿捕許可状」を所持できる。そして、その収穫の何割かを世界政府に納付することが義務づけられているが七武海に加盟した海賊は政府からの指名手配を取り下げられ、それまでの懸賞金も抹消される。

それに付属する海軍側の条件としてはマリージョアに時折開かれる会議に出る事と、強制召集がかかれば海軍側で参加する事ぐらいだな」

そう手を顎にやりながら、相手の出方を待っている。

「それ以外にも、俺は特典を貰えるのか？」

「まあ、条件にもよるが多少の融通は利く。Mr・ドフラミンゴはある興行に手を出しているし、Mr・ジンベエは魚人アローンの解放を望んでそれもなされた。現実と人道からかけ離れていなければ、多少の事はどうかできることは保障しよう」

「へえ、」

そう笑う“火拳”の顔は、海賊らしく悪どかった。
嫌な予感がした。

グイッと腰の辺りをひき寄せられて、

シャルと“火拳”の顔が近づく。

「じゃあ、あんたを貰えるか？」

ぶっ殺す。

こめかみに青筋がぶつつりと浮かぶのが分かった。
この海賊だけは、ここで叩きつぶす。

横に居たトリスや他のメンバーも同じことを思っただけ、武器を引き抜く音が響いた。

二十九話 海の上のFastnacht 上(後書き)

これからも更新頑張ります!!

二十九話 海の上のFastnacht 下（前書き）

傷口を切り開かれて荒れる主人公。

本人が吹っ切れたと言いつても、一年たつてないし、治つてゐる訳もないし、致命傷喰らうよなつて話。傷口に塩が何か塗り込まれた感じ。

そら、色々キレるよ普通つて話です。

あと、エースは結構真つ直ぐで、無邪気な分、ひどいことしてもケロッとしてそうなイメージがあります。

意図せずに踏み込んで欲しくない所に直接ふれてくる。そんな感じ。主人公、海賊かつ、エースみたいなタイプは大っ嫌いです。

多分、ルフィはもっとアウト。

海賊でなければ多分まし。

二十九話 海の上のFastnacht 下

SIDE：シャルロッテ

忌々しい。

ただ、それだけが頭に浮かんだ。

得に頼まれた任務が嫌だった訳じゃない。

ただ頼まれた時にこんな奴だとさえ分かっていたら、どうにかして断っていた。

それだけの話。

目の前に立つ、黒髪の男。

オレンジ色のテンガロンハットに前をあけたシャツ。短剣のついたハーフパンツ。

海賊には見えない、雀斑の散った愛嬌のある顔立ちに人懐っこそうな笑顔。

まあそれだけだったらただの好青年だろう。

しかし、目が駄目だった。

正確にはその目の中にある光が駄目だった。

真っ直ぐな目。

前を見据えている瞳。

そっくり、だった。

写真では気付けなかった。

それ。

だからこそ、苛立った。

あいつじゃないのに、その目で私を見るな。

声をかけるな。

嫌だ。ヤメロ。思い出させるな。

嫌いだ嫌いだ嫌いだ嫌いだ嫌だ嫌嫌だ嫌いだ嫌い嫌い嫌いだ。

ガリガリガリガリガリガリガリ、ナニかを削るような音が耳に木霊する。

幻聴だ。

そんな自分にうんざりする。

日に焼けた黒い髪。

（あいつは、燃える炎の色だった）
真っ黒な瞳。

（あいつとは正反対の色。それなのに眼差しはそっくりで）
にこやかな表情。

（あいつは、ぶっきらぼうだったけど。偶に見せる笑顔が好きだった）

正反対なのにそっくりで苛立ちが胸にあふれそうになる。

それでも、我慢した。

叫びそうになるのも、殴りかかりそうになるのも我慢した。

仕事で此処まで来ているのだから。

“火拳”を此方側に引き込むために来ているのだから。

忌々しいと思つても、

自身の感情で全てを台無しにする訳にはいかないのだ。

黒手袋グローブを付けていたのを幸いに思つた。

爪を立てても手に刺さらない。

幾ら握りしめても血が流れないのだから。

「まあ、条件にもよるが多少の融通は利く。Mr・ドフラミンゴはある興行に手を出しているし、Mr・ジンベエは魚人アーロンの解放を望んでそれもなされた。現実と人道からかけ離れていなければ、多少の事はどうかできることは保障しよう」

「へえ」

それで、答えは？

そう、口を開こうとした。

かくんと体が、“火拳”ひけんのエースに引き寄せられる。愛嬌のある顔と、苛立つほど似た眼差しが近づいた。

「じゃあ、あんたを貰えるか」

なんで、同じ目で私を見るんだ？

黙れ黙れ黙れ黙れ！！

ああああああああああああああああ！！

私の前で喋るんじゃない！！

その目を持って、私の前に現れるな！！

手に入らなかったものを、与えようとするな。
もう、私は選んだのに。

いらないから、全部消えてしまえ。
お前の言葉なんか聞きたくない。

がしゃん、と頭の中で何かが碎ける音がした。

反射的に手が動いた。

パシンッと乾いた音が船上に響いた。

SIDE：エース

ジンつとした痛みと、振り抜かれた手。

ざわめく声。

武器を引き抜く音があちこちで聞こえた。

その音で、ああ、叩かれたのか。

そう理解した。

さっきまで俺に何の価値も見出していなかった緑の瞳は激情に彩られている。

綺麗だと、ただそう思った。

新聞の写真で見た時、綺麗だと思った。

実際に見た時は人形みたいな女だと思った。

そして今、この女は俺の事を見ちゃいない、という事に気付いた。

燃える炎みたいに紅い髪。

群青色にも見える翡翠の瞳は鏡のようで、感情は窺う事は出来ない。緩やかに結ばれた口元は、やんわりとした会話の拒否を表していた。輪郭もシャープで、滑らか。

顔を形成する部品は小さく綺麗に整って素晴らしい位置に配置されていて、

本当に人形の様だった。

感情を内に封じ込めて、感情を表に出していなかったのだから。綺麗な造形をしている分、人形に見えるのも無理はない。

そんな女の感情を、心の奥底に封じ込めた心を、俺の一言で、引き摺り出した。

それが憎悪だとしても、それは覆り様の無い事実。

苛立ちだったとしても、憎悪の感情だとしても、俺の事をこいつは今何にも重ねずに見た。

初めて人を重ねずに俺を見た。

これはそうとう愉快かもしれない。

「気安く触れるな、海賊が」

吐き捨てるように、話す目の前の女。

どうやら、俺は目の前の存在の逆鱗に触れたらしい。

ピリっとするほどの殺気。

前髪の隙間から覗くキラキラと輝いている瞳。

淡々とした口調なのに、荒れた言葉の羅列。

「いーのかよ。俺にそんなことして？」

からかうように言葉を被せた。

七武海になるように交渉しに来たのにいいのかよ、そんな揶揄。

「海軍将校が欲しいだの、そんな戯けた言を言う海賊を政府の上層部に当たる七武海に加入させる…？」

ひらりと身を翻して、俺の腕の中から消える。

軽やかに俺から離れて行った。

そして、女は部下に背中を任せながら、笑った。

不敵に、ふてぶてしく。

そして、大胆に。

「寝言は寝て言え“火拳”。そんな、不安定で不都合な条件を此方が飲める訳がないだろう」

そう言つて剣の柄に手をかける。

その姿を見て、四肢に力を入れながら俺は言った。

「だろうな。…でも、知ってるか？」

首を僅かに傾け無言で続きを促す女に、俺は続けた。

「…海賊は、欲しいモノを必ず手に入れようとする強欲な連中ってこと、！」

拳を振り抜いた。

剣が迎撃した。

戦いが始まった。

二十九話 海の上のFastnacht 下（後書き）

主人公も、色々あるんです。

泣いても忘れられなくて、覚えている事で辛くなっても忘れたいものとかも持つてる分、ひどい。荒れるし、外に出さない分、内がガタガタ。

この子結構メンタルが弱いかも知れません。

これから頑張ります！！

三十話 祭りの後始末（前書き）

難産でした…。しかも短いです。

次回は、絶対に原作キヤラを…！

今回も出てるけど、なんか違うような気がするんですよ…。

三十話 祭りの後始末

SIDE：ガウエイン

「ム力つく」

淡々としていて感情のこもっていないようで、その実、激情を無理やり押し込め、溶かしこんだような冷たい声が僕の耳朵を打った。

目の前の執務机^{デスク}。そこに腰掛けている華奢で小さな彼女は、大輪の花の様に美しい顔^{かんはせ}を、怒りで淡い朱色に染めながら吐き捨てた。

燃えるような紅い髪に、群青にも見える翡翠の瞳。瞳は冷ややかに机の上の手配書を見つめ、椅子に引つかからない様に胸の辺りまである髪を一つにまとめ上げ、報告書を片腕で書きあげている。

でも、珍しい事に周りにも分かるほど苛立ちを籠めた感情を露わにしている。

その証拠に報告書をかいていない手は、彼女の心境を表すかのようにトントントントンと指が一定の間隔で机を叩いていて、苛々していることと混乱していることを周りの人間に知らせていた。

しかし、僕は彼女が、シャルが怒るのも無理もないことだと思う。大嫌いな存在である海賊の男に、あんなことをされたのだ。

僕は男だからシャルの気持ちを深くまで計る事は出来ないけど、何となしに嫌だったのは分かる。

シヨックでもあっただろう。

敵味方問わずいた場所、甲板であんなことされて凄まじく嫌だった

のだろう。

今、この場所。

正確には海軍本部所属軍艦スレイプニール号。
船内の艦長執務室は大荒れだ。

シャルの荒れた心模様のせいかな何時もならどんな時でも保っている能力制御が外れかけ、執務室の中は極寒の大地の様な恐ろしい有様になっている。

本人も箍がぶっ飛んでいる事に気付いているのかこの三日間というものの執務室に籠りつきりだ。

部屋の中は冬島の様な冷気が漂い。呼吸をするごとに刺す様な冷気が肺や喉に突き刺さる。

何時もは落ち着いた雰囲気執務室は、そんな空間になっていた。

しかし、僕はこの状況でも寒いと感じない。

むしろ、少し暑い。

その原因は分かっている。

それは僕の両隣りに居るこいつらのせいだ。

マーリンとトリス。

笑顔だがなんかキレかけのマーリンと不機嫌な顔を隠そうとしないトリス。

そして、その真ん中に無気力な僕。

執務机には超不機嫌かつ苛立ちをため込んだシャル。

三人とも周りには当たらないから、まだセーフだけど、ため込んでいるのは明白だ。

カオス・スペース
見事な混沌空間だ。

自分とこいつらに關係が無かったら絶対に避けて通るような空間だ。

溜息をつきそうになった。

厄介な事をしてくれるよ本当に。

SIDE：シャルロッテ

鼻先を火炎がかすめた。

空中を真つ赤な大輪の花が彩る。

綺麗だが見惚れるような状況ではない。

地獄の業火の様な火炎は空中で渦を巻き、焦げたにおいを残して消える。

一息をつけるような時間は無く。間髪をいれずに次々と焰が現れ、襲いかかる。

トンつと地面を蹴り、ひらりと身をかわす。

白兵戦になっているからか、お互いにお互いしか狙わない。

味方を巻きこむような卑劣な奴ではなかったらしい。

それにしても威力は低いとはいえ、避けてばかりはいられない。

白銀の氷を作り出し相殺する、ジュワリと耳障りな音と共に大量の水蒸気が巻き起こる。

甲板を蹴り体を空に身を躍らせ、マストを足場に宙を駆ける。

火拳の腕と私の剣が交差する度に巻き起こる雲の中、私達は戦った。

お互いの船が隣接しているから、お互いに大技は使えない。

能力の相性もあり、だんだんと膠着状態に陥っていく。

空気の焼ける匂いと空気が凍る匂いが辺りを漂う。

何度目かの交錯。

敵船は離脱の体勢に入っていた。

阻止しようと体を前に押し出した、瞬間。

唇に柔らかい感触が触れた。

目の前には黒い瞳と雀斑の散った頬。

唇の感触は一瞬。

しかし、一旦私の思考回路が止まるのには十分だった。

反射的に体は反応する。

戦闘が終わり掛けとはいえ戦っていたのなら尚の事。

海軍で鍛えられていた体は反撃をしかける。

利き腕に握っていた武器を振り抜く。

風切り音を響かせてレイピアが火拳の喉に迫る。

肌一枚を裂いてかわされた。

返す剣で払った一撃も前髪を幾筋が斬るだけで交わされる。

目の前の男はその後、笑って……

* * * *

「ム力つく」

報告書を書く為に、思い返してみたけれど、ム力つくとしか言えやしないものだった。

海賊にキスされました。なんて、報告書にかける訳がない。

七武海への勧誘には失敗して、拿捕もできなかったなんて、最低だ。

火拳の能力で帆を燃やされて追尾できなくしたうえで逃げられた。死人は出なかったけど、怪我人はいたし、このスレイプニール号も結構ボロボロになってしまった。

マーリンに頼んでおいた援軍の軍艦に、怪我人を運んでくれるように頼み。

ある程度の始末が済んだあと、上層部^{うえ}に電話で大まかに報告。報告書に詳しく書くと伝え、ウォーターセブンのガレラカンパニーに修理の依頼をしてくれるように頼んだ。

ユニエスロビーに向かう軍艦があつたので途中まで動向を願っていた。何時の私達なら、返り討ちに出来るから平気だけど、船が舵やマストが壊れてないとはいえボロボロの状況で航海は危険すぎるから。

そこまで、仕事をし終えたのが三日前。

能力が荒れているのが分かったから、引きこもったのも三日前。これは多分、時間しか解決してくれない。

片付かない仕事と火拳への苛立ちを籠めて溜息をついた。

ああ、やっぱり海賊なんて訳が分からない。

理解不能だ…………。

三十話 祭りの後始末（後書き）

船内は大荒れの様子です。

そりゃあ、女の子があんな真似されたらキレるよ、普通って感じ。
W7では、多少元に戻っていると思います。

では、これからも応援よろしくお願いします！！

特殊番外編 竜華零様とのコラボです（前書き）

今回はコラボ作品です。

作品をお読みになる前に、以下の注意点を。

- ・このお話は、竜華零様の「魔法世界興国物語」白き髪のアリア」（ネギま！の二次創作作品）とのコラボ作品です。
- ・このコラボ作品と本編は、話の展開上関係ありません。
- ・コラボがお嫌いな方は、お読みにならないことをお勧めいたします。

以上の点をご了承いただいた上で、どうぞ。

特殊番外編 竜華零様とのコラボです

今回は竜華零様とのコラボ作品です。
詳しくはまえがきを見てください！

それでは、どうぞー！！

『空から魔女が降って来た！！』

SIDE：トリスタン

それは現実的に考えたら唐突かつありえないような出来事だった。
しかし、悲しいかな現実離れな出来事には慣れている（主にマーリンとかマーリンとかマーリンとか俺とか涼しい顔して意外とガウエインとか本気で時々シャルとか）。

少しばかり悲しいことだが…。

まあ、当時は楽しんでやってたし、悪い思い出だらけてわけじゃないのだが・・・。

今はそんなことはいい。

今日は島の海域に入ったのか安定した気候。いい風。

絶好の航海日和だった。

そう、だったのだ。

確かに奇想天外な偉大なる航路には空からモノが降ってくることだ
つてあるだろう。
グランドライン

しかし、女の子が降ってくるなんて俺は聞いたことがない。
つつかそんな事あつてたまるか。
しかも、幼く稚^{いとけな}い女の子なら尚更だ。

「じゅ、准将！！空から女の子が！！」

あちこちでそんな声上がる。

そんなことより、落ちてくる子をどうにかしろよ！！
海兵だろ、お前ら！！

年下の子供。しかも民間人を護らないでどうする！！

「邪魔だ、退け！！」

右往左往している奴らを退けて、少女が落ちてくるであろう場所に
までダッシュ。

空から落ちてきた小さな体をしっかりと抱き留めた。

軽い女の子とはいえ衝撃が俺の腕にのしかかる。

「ッ……！！」

落ちてきた衝撃でふんわりとワンピースのすそが広がる。

少女のぱちりと瞼を開き、珍しい位綺麗な異色の双眸が俺を見据える。

意識がしっかりしているのを見定めて支えた所で武器を持ってない
か確認してから、甲板に降ろした。

長いストレートの白い髪に、赤と青のオッドアイ。

妹と同じ年くらいの少女。

華奢で、大切にされていると一目で分かる少女が何故、空から降っ

て来たんだか。

「え、あ、誰ですか…？」

警戒をさせてしまった少女に、ため息が出そうになった。

…確かに、知らない場所で行きなり知らない奴らの中に放り込まれたら誰でも警戒するな。

「…海軍本部所属トリスタン・カーランド。地位は中佐でエーデルシュタイン准将の副官。君は？」

「あ、の」

疑問を口に出そうとしたのだろうか、少し口を開いたのが見えたが構わず続ける。

…流石につるし上げ状態でこんなことをさせたくないと思った妹と、この子が同じ年くらいだからなおさら。

スパイとか、能力者の可能性は殆ど無いし、それにシャルはこの船で一番強い。

複雑な事に、…好きな女の子が自分より強いって、なんかこうなあ…。

ああ、でも今はそんなことを考えている場合じゃない。

不安そうな顔をしている子を、放っておくわけにはいけない。

上手くないと思うけど、笑顔を作った。

せめて少しでも不安を減らしてくれるように。

怖さを感じさせないように。

「ああ、周りをこんな知らない大人ばかりに囲まれてたら上手く話せないな。失礼した。…君をこの軍艦^{ふね}の一番上の人の所に連れて行

くから、ついて来てくれ」

そう言つて、周りに何か言われる前に少女を船内にエスコートした。戸惑いながらも付いてくることが分かる。すまない、そう思わずつぶやいた。

SIDE：レティシア

空から女の子が降つて来た。

そんな奇想天外。

目を疑うようなほんとの話。

トリスタンが甲板に激突する前に慌てて抱き留めた時に少女に対し、てなんのリアクションもしていないから武器になる様なものは何も持っていないかったのだろ、とは見当がつく。

あんなひらひらした薄着の格好で武器を仕込める訳もないし。

あんな細腕で戦えるわけがない。・・・能力者でなければ。

空から落ちてくる時点で普通とは言い難いけど、多分民間人だ。

そうだとすると、何故、空から落ちてきたのかは分からないけど。

何となしに、マーリンかシャルロットのどちらかが絡んでそんな気がする。

・・・もしかしたら、両方。

大体、66期生しか知らないことだけど、最後に全員で乗り越えたのが演習じゃなくてマーリンが異界から呼び寄せた物体とのガチン

コバトルだったくらいだ。笑えない事に、マジな話。

最後に演習じゃなくてそういう事を乗り越えるのが66期生の66期生たる由縁で。

ほら、最後の試練がこういうのが笑う所だ。それは置いといて。

空から降りてきた女の子は、不安がらせないようにトリスタンがどうかしようとしているみたいだし・・・（女の子なのだからモルガンや私やアリスに任せればいいのに、どうやら奴も認識しているのか分からないけど表面に出してないだけで動揺と困惑にはまっているのだろう）。トリスタンが担当するのなら、あの子供は放っておいても平気だろう（実はひっそりと彼は普通に常識人だ）。

それに愉快で楽しみな事があるし・・・

「あの、余裕の顔がどう崩れるか・・・。見ものだね」

くすりと笑みを口に張り付ける。

銀に近いアッシュグレイの髪、業火をはめ込んだような紅い目を持つ冷酷この上ない男は何を思うだろうか。

「しかし、いい所の娘さんに見えたけどなんで空から？」

私は他人に言われるまでもなく自分の性格がひん曲がっているのを知っている。

しかし、子供を巻きこむほど性根は腐っていない。というか、そこまで曲がっているなら海兵にはなっていない。だから、こちらから子供をどうかしようとは思わない（まあ、ないと思うけど敵なら話は別だ）。

子供は事故か何かに出会って空から落ちる羽目になったのだらう。だって、スパイや敵ならもっとスマートに侵入するだらうし。計画や行動がお粗末すぎる。

「まあ、どうにかなるでしょ」

この軍艦ふねに乗っている奴らの大半は、なんだかで甘いし、優しい。

あの子も悪い様にはならないだらう。

・・・マーリンやガブリエルを筆頭の奴らが何かしなければ。

（此処から三人称タイム）

海軍の軍艦には、貴人をもてなすための部屋が存在する。やんごとなき血筋や地位の高い方々とデリケートな仕事の話をしたりするのにも使われるのだが・・・

まあ、それはさておき。

その貴人をもてなすための部屋。

士官たちには貴賓室と呼ばれているその広い部屋に二人の人影があった。

白と青を基調にした上品な壁紙に、優美な曲線が施され構成された天井。大きな暖炉とそれに花を添えるマントルピースには細やかな花や鳥の姿が彫り込まれている。つい先日、温暖で安定した気候に突入した為に暖炉に火は入っていなかった。陽光を浴びて輝く、艶

やかに磨き上げられたイスやテーブル、飾り棚などの調度品も華麗過ぎず武骨に過ぎない上品な装飾を施されたアンティークなものばかりだ。

その中心部に、テーブルをはさんで対峙した人影が存在した。

「アリア、すまない。・・・マーリンがあんな事をするなんて・・・

」

自身の目の前にある小さな人影にもう一人の人影。

燃えるような紅い髪に、青に近い翡翠の瞳のどこか儚げな雰囲気を持つ美女。

シャルロッテ・アルトウル・フォン・エーデルシュタイン准将が憔悴と謝罪の感情を顔に浮かべ頭を下げる。

それに、慌てたのはもう一人の人影。

彼女の紅い髪と対になるような真っ白い髪に、赤と青のオッドアイ、髪と同じように白い肌。ふんわりとしたレースとフリルのワンピースに包まれた華奢な体躯。将来の美貌を確信させる愛らしい顔立ちの少女。アリア・アナスタシア・エンテオフュシアという名の異世界の女王である。

「あ、謝らないでください」

わたたと慌てて、動作を起こす。

「いや、それでもあれば、軽率な私の責任だろう」

「でも…シャル姉様。マーリンさんは…」

そう、堂々周りになり掛けている空間をノックが遮る。

「すまない。…入って来てくれ」

そう彼女が声をかけるとオークで作られた重厚な造りのドアが開いた。

焦ったのか少し乱れた身なりで、一人の青年が入って来た。

SIDE：ガブリエル

だから何がどうしてこうなった…

僕がドアを開けて目に入って来たもの。

1・紅い髪でいつも冷静沈着な我らが上官シャルロッテ・アルトゥル・フォン・エーデルシュタイン准将

2・空から落ちて来たという謎の白い髪の少女

3・上記の二人が謝り合戦してる空間

・・・可笑しいだろ。

ひかえめに言っても可笑しいぞこれ。

何だ、この状況。

僕にライフカードはないのか・・・!?

此処は、海軍所属艦船スレイプニール号。

海軍将校エーデルシュタイン准将が艦長を勤め、部外者には見せられない軍事機密情報が溢れている、列記とした主力軍艦だ。

その中の部屋（貴賓室）に空からふってきたという、武器も戦闘能力も有りそうに無い白い髪の子。

見せたらまずいものがない部屋に通すのなら食堂や甲板でもいいはずなのに……。

何故貴賓室？

民間人を奥深い場所にある貴賓室に入れてどうするんだ、機密情報を見てしまったらどうするんだ、場合によったら、最悪何年か幽閉閉じ込めなきゃいけないのに……

「ガブリエル、わざわざすまない」

そう、僕の方に視線を向けてくる准将。

「……この子をどうするんですか？」

指を指すのは行儀が悪いし、嫌な行為だがせずにはいられない。そもそも僕は、この子の名前すら聞いていないんだから。

「ああ、……この子は私の妹分のアリアという子なんだが、落ちてきたのは、その……」

一瞬、目を伏せて言いにくそうに、しかししっかりと告げる。

「マーリンが呼び寄せたらしい……」

ああ、やっぱり。

そんな言葉が頭を刺激し、学生時代の、様々な奇跡^{ミラクル}込みの馬鹿騒^{バカ騒}ぎが頭をよぎる。

思わず、額に手をやり、天井を仰いだ。

ジーザス……。

神様はどうしてこういう騒動を引き起こすのでしょうか？

SIDE：シャルロッテ

目の前には何かを納得したらしい表情をしたガブリエルとちょっと困った顔をしているアリアがいる。

ガブリエル、アリア、すまない。

多分、この騒動の原因は半分くらい私に責任がある。

でも、マーリンの事を甘く見てた。

アリアにあいたいなあって言っただけで術式を組むとか思ってたなかったんだ…！

しかも、女王になって魔法球の中で家族と休暇中だったんです、なんて言われたら、アリアが気にしなくても私が気にするわ！むしろ、罪悪感で胸がいっぱいだ。

トリスタンはマーリンの説明を聞いて、静かにぶちぎれマーリンと

船内鬼ごっこをしている。まあ、トリスタンは・・・冷静になつたら戻ってくるだろう。ならなくてもマーリンが適当に爆発させて来てから戻ってくるだろうし。

有能だし、いい子たちなんだけどなあ・・・。

ああ、頭が痛い。

けど、頭を抱えたらアリアとガブリエルに心配かけるしなあ。

「ガブリエル」

「なんですか？」

「一つ伝言を頼んでいいかな、マーリン達に……」

お互いに顔を見合わせて苦笑いした。

ガブリエルが呼びに行っている間、しばらくアリアと話していると、ノックが響く。

ドアを開けるとマーリンがいた。

どうやらガブリエルはトリスを宥めに行ったらしい。

・・・彼の今季のボーナス査定は後で上方修正しておこう。
苦労掛けるし、進行形で・・・。

「で、お呼びで？」

頭の隅でそんな事を考えながら、顔をマーリンの方に向ける。

大仰な仕種で礼をするマーリンは、どこかおどけていて、空気が緩んでいくのが分かる。

やっぱり、私にもつたいないくらい有能だわ。

「トリスはどうしたのさ？」

「置いてきました」

「そうか」

一応、分かり切っている事を確認する。

マーリンもそれに乗った。

空気が読める副官だ。

「アリア、マーリンに紅茶とお茶菓子を入れてきてもらっけど何がいい？」

マーリンのいれる紅茶は絶品だよ、そう、イスに腰掛けているアリアに聞くと

「え、じゃあ、ミルクにあう紅茶がいいです」

いきなり話の矛先が向かってきたからか、驚いたようにアリアが答える。

驚いてる顔も愛らしい。

こう、なんというカリスとか猫とかの小動物みたいだ。

「分かりました、お嬢さん^{レディ}」

マーリンがアリアに笑いかける。

それに僅かに頬を赤くしたアリアが、可愛い。

清楚な美少女（ふんわりとした服装のせいでもあるんだろう今日の格好は可愛い上に大人っぽいデザインだ）アリアとお腹は真っ黒だが外見は眼鏡をかけたインテリ系美形のマーリンがこうして向かい

合う姿は正直目の保養だ。

アリアに分からない様にじっと見つめてみるとマーリンに尋ねられた。

・・・鋭いな、やっぱ。

「どうしました？」

心底、訳が分からないといった表情で尋ねられる。

眼鏡の硝子越しに見る紅蓮の瞳が怪訝そうに見つめてくる。

マーリンにつられたのかアリアまで怪訝そうな顔だ。

「...いやあ、私の可愛い妹分と頼れる部下はお似合いだなあ、と」

沈黙が痛い。

無言の視線が突き刺さる。

視線だけで体に穴が開きそうだ。

マーリンには昔から好きな子がいると聞いた事があるし、アリアも女王とは言え年頃の女の子なんだから好きな子もいるかも知れないけど、お似合いだなあと思ってしまったのだ。

ソレを口に出した、その結果がこれだけだ。

「「シャル」姉様・・・？」

静かな声が部屋に響く。

静かなのが余計怖い。

「・・・・・・・・御免」

特にマーリン。

微笑みながら怒るな、怖いから。

え、何？自覚してやってるから大丈夫？

・・・私が大丈夫じゃないのだけど。

アリアもだ。

そんな顔しても愛らしい顔立ちをしてるのだから怖くないよ。
むしろ可愛いし。

なあ、マーリンもそう思うだろう？

SIDE：マーリン

今日も今日とて天然たらしな上司兼幼馴染兼同僚で私の片恋相手の
シャルは年頃のお嬢さんリトルレディを言葉だけで真っ赤にしてみせた。

本人は無自覚に褒め殺すうえに本心から言っているのだから、質が
悪いと毎回の事ながら思う。

意識するのは言われた相手で、本人は本当の事を言っているだけな
のに、と首を傾けるのが常の事。

それでも、嫌えないのがさいっこうに卑怯だと思う。

まだ赤い頬をした異世界の魔女を視界に納めて、そんな感想を抱く。
あちらの魔女とこちらの魔法使いはなかなか違うものらしい。

私達魔法使いはそこまで可愛らしくない。

そんなことも考えつつも手はお茶の用意をしている。

貴賓室でのお茶会と言えば中々本格的なものだが、ここにはある意
味シャルの身内しかないのだ。なら、あまり礼儀作法を厳しくし
ないでいいだろう。お茶会は楽しむモノだ。そう思い。用意した白

の皿にはイチゴのたっぷり乗ったケーキ、他のプレートには紅茶のための砂時計や砂糖、ハチミツ、ジャム。

まだ顔が赤い事に触れず、白磁に青で花が描かれたティーポットを傾ける。

「何の紅茶？」

「マリージョア御用達のアッサムです。シャルの好きなストレートでも美味しいですが、アリア嬢の好きなミルクにもあいますよ」

それにうつすら嬉しそうな表情を浮かべたシャルをこっそり見つめながら、ポットとそろいのティーカップに赤みの濃い色をした紅茶を注いだ。

湯気と共にほのかに香る茶葉の匂い。

妹分がいるせいか柔らかくて優しい表情をした姿。

それは、海軍にしては珍しい幸福で平和な一幕で。

その優しい表情^{かお}が見たかった。

海に出ると神経を尖らせるからその表情^{かお}が見れなくて、張りつめた神経を休ませるためにシャルがぼんやりと呟いた事を実現させた。

・・・まあ、トリスタンには怒られたし、アリア嬢にも迷惑かけたし、シャルも困った顔をしたけれど、後悔はしてないんですよ。此処だけの話ですけど。

海の上、嫌いな海賊を追いかけている時特有の張りつめた顔を、緩めて年相応の顔をしている。正直可愛い。こればかりは任務と関係の無い、彼女の大切な子や人にしかできない芸当^{わざ}だから、そういう

意味ではアリア嬢を呼んで良かったと思う。

自分では想い人の表情を少し緩める事が出来ないのは悔しさがあるけど。

海での仕事なら、しょうがない。

彼女は海賊が大嫌いでどうしようもなく怖いものだとは認識してるのだから。

こういうのは部外者じゃないとためなのだ。複雑な事に。

だから、どうにかシャルを休ませたくてアリア嬢を連れてきた。

戻す時は時間軸も合せるように術式は組み上げている。

そういった点では、問題ないはずだ。

「と、言うわけなんですが」

「お前、素直じゃねえな。それ、絶対にシャル誤解してるぞ・・・」

「いやですねえ。ツンデレなトリスにそんな事言われるなんて・・・」

「あほ。俺はツンデレじゃねえよ」

はははと笑うと、呆れたように返された。

こつんと肘で頭を叩かれるおまけ付き。

こんなことができるのは同期で同僚で友人だからだとしか言えない。

「ですから、協力お願いしますよ。みなさん？」

殆どの船員が集まっている食堂で告げた。

貴女は知らないでしょうが、貴女が思っているより貴女は慕われて

いるんですよ？

まだ、気付かないでくださいね？

SIDE：アリア

マーリンさんに紅茶を入れてもらったお茶会の後、シャル姉様に手を引かれ、民間人でも見学OKな船の中を見せて頂きました。姉様の部下の皆さんへの紹介も兼ねてですが……。

ちなみにあのイチゴのケーキを作った厨房の皆さんは、料理長のルークことルーカスさんを筆頭に元海兵士官候補生の方が多いそうです。

何でも、学生時代の外での演習で料理の大切さと貴さを思い知った結果だそうで……。

あのマーリンさんが苦虫を潰したような顔になったので男性側は相当ひどかったそうです。

わざわざ、美味しい料理の為に東の海の海上レストランに弟子入りしたのだと、

姉様がこっそり教えてくれました。

……どれだけ酷かったんでしょうか？

女性陣は相当美味しく作ったらしいのですが……。

それにしても何時まで登ればいいのでしょうか？

分かりませんね……。

「アリア、大丈夫かい？こういう軍艦って鍛えられている大人（15歳以上）を基準にした作りだから、結構きついと思うんだけど」

「いえ、大丈夫ですよ。シャル姉様、私はエヴァさんに鍛えられているんですよ?」

カンカンカンと軍艦の後ろに備え付けられたタラップを踏みながら上に登っていきます。登り終わると姉様はキィと音を立てて、重そうな鉄色の扉を開け放ちました。そこには最初に私が落ちてきた甲板があつて、綺麗な茜色の空が海をキラキラと輝かせている光景が現れました。

「これが、本物の海だよアリア。そして、世界で一番偉大で美しい女だ^{ひと}」

船乗りは男も女も関係なしにこの女に恋をするんだ。

そう、子供の様に微笑んで告げる。

手招きをされ、綺麗な眼差しは私に海を見るように促す。

沈んでいく夕日。

水平線が広がり、眩い光が海を彩る。

赤から群青色に変わりゆく美しいグラデーション。

これが偉大なる航路。^{グランドライン}

船乗りの愛す世界で一番美しい海。

「綺麗・・・」

そう呟くとシャル姉様は、嬉しそうに笑みを深めました。

「だろう?」

* * * *

そして、夜の帳が下り綺麗なお月さまが辺りを照らす、そんな夜でした。

静謐な夜にふさわしい様なふさわしくない様な輝きが甲板に零れ落ちます。

「此処に描くは、異界の門。繋ぎ止めるは我が魔力。契約は此処に成る。礎は我が血、異能の力。顕現せよ。我が命に従い開け放たれよ、其の真名は　　。主の命に従い扉を開け」

「はあ・・・」

何か紅い色と黒い色で甲板に描かれた魔法陣が火花を散らしながら淡く煌めきます。

使い魔らしき黒のナニかを扱いながら何語か分からない呪文で術式を練り上げていくマーリンさんの姿がそこにはありました。それを眺めながらため息をつく姉様の姿も・・・。

「よかったね。帰れるようになって」

「はい、良かったです。ガウエインさん」

そう言つて、ガウエインさんに頭をなでられます。

くしゃくしゃの金髪に、青紫の瞳。
にゅっと伸びたスマートで細い体。
女性よりも整った容姿に、似つかわしくない無表情がトレードマークです。

「子供は親元に居るのが一番だしね。今度は陸地に居る時において、カワイイ魔女さん？」

それだけ、こっそりと私に告げると踵を返してトリスタンさんの元に向かつていきました。

「っガウエインさん!？」

内心、驚愕します。

姉様とマーリンさんの配慮で私が魔女であることは知られていません。

いくら姉様の仲間だとしても初対面の方に暴露してはいけないのですから。

それをあの方は見抜いてきました。

流石、姉様の仲間というべきなのでしょうか？

い、いえ・・・動揺している訳ではありません。

ええと・・・何と言いましょうか。

驚いた・・・そう、驚いたただけなのです。

「アリア」

そう柔らかく名前を呼ばれます。

白くて細い指が私の髪に触れました。

「目をつぶって、こちらを見なさい」

その声に従って瞳を閉じます。

優しい手がゆっくりと髪を梳いていくのが分かります。

髪がゆっくりとまとめられ、ぱちんと音を立てて何かが髪にとりつ

けられました。

「・・・シャル姉様？」

「もう、目を開いていいよ」

ゆっくりと瞼を開くと、どこか満足げな表情をした姉様の姿がありました。

そして、私を見つめてぽつりと、

「うん、かわいい」

な、なぜ、この人は面と向かってこんな恥ずかしい事が言えるのでしょうか？

逃げるように視線を泳がすとマーリンさんと目が合いました。彼はゆっくり首を左右に振ると、親指を立てました。

それにちよつとイラッとしたのは此処だけの話です・・・

（此処から再び三人称タイム）

金色の月が頂上に坐した頃。

魔法陣の術式が完璧に整った。

「それじゃあ、息災で」

ゆっくりと魔法陣の中央に当たる部分に移動する白の少女に、紅の海兵は名残惜しそうに告げる。

白の少女は、それを笑顔で返した。

「シャル姉様もですよ？」

「・・・善処するよ」

白の少女の髪につけられた銀の髪留めバレッタが月明りにきらりと光る。

「アリア嬢、シャル。そろそろ始めてもいいでしょうか？」

「はい、マーリンさんもありがとっございます」

「・・・ああ、始めてくれ」

「わかりました。アリア嬢、始めますよ」

灰色の髪の青年が、歌の様な言葉を発するとふわりと魔法陣から光があふれ出す。

言葉が紡がれるにつれて、だんだんと強い光がその場を支配していく。

青年が最後の韻まで唱えると、パチンという音が鳴り響き。

魔法陣と白の少女が消えた。

「私より、君の方が大変だろうに。不器用すぎるんだよ、あの子は」

呆れたように心配してるのを隠すかのように紅の海兵は呟く。
しかし、灰色の青年とその同僚たちは、

((いや、どっどっどっどっだと思っ))

全員で内心、突っ込んでいた。

特殊番外編 竜華零様とのコラボです（後書き）

今回は、白き髪、のアリアさんに来てもらいました！！
また、機会がありましたら共演させて頂きたいです。
では、此処まで読んで頂いてありがとうございます！！

三十一話 水の都（前書き）

なんか、ガウエインが真っ黒になりました。
あれえ？最初の設定と違う事に・・・。

三十一話 水の都

SIDE：シャルロッテ

賑やかで美しい街だ、と来るたびに思う。
水の都の名前は伊達じゃない。

キラキラと水路は煌めき、水音は漣のようで、海とは違う風雅さがある。

先ほど久しぶりに会い運転を買って出てくれたヤガラの手綱を持つ傍らの男に声をかける。

「…助かったよ、パウリー君。ヤガラは可愛いし頭もいいから好きだけど、私は運転が下手だから」

「ニッー!!」

「ああ、そうだね。君もありがとう」

返事は帰って来ないけど、声をあげたヤガラを撫でる。

「これくらい、別にいいけどよ。意外だな、お前運動神経いいのに」

「自分でも驚いたよ。…馬とかになら乗れるんだけどね」

「俺は、お前がよく分かん…」

馬に乗れる癖に運転ができねエとか、貴族って何なんだ・・・

唸るような声をあげて、呻く。

そんな男をちらりと眺めながらも無視し、視線を街に投げかける。

「しかし、何度来ても綺麗だな」

「だろう！」

この町の職人は皆、この町が好きだ。

この傍らの男も例外でなく、お日様みたいな笑顔を見せた。

「人はみんな楽しそうだし、子供はキチンと笑えてるし、水水飴も美味しい」

温かな陽光と風を浴びながら思わず呟く。

「他の島も皆、こんな風に温かかったらいいのに」

それはどうしようもないことで、とてつもない事だった。

実際はこの島の様な場所の方が多いのを知っている。

この島だって綺麗に見えるけれど年々アクア・ラグラの水害が増し
ていつていることだって知っている。

それでも、ここはこんなに温かい。

「ままならないなあ……」

「…そういうもんだろ」

くしゃりと頭をかき撫ぜられる。

ぶつきらばうだけど、酷く温かい手だった。

ごつごつとした職人の、手。

「容赦ないね、パウリー君」

「逆に手加減する方が、お前は気にするだろ」

そうだね、そう呟いた。

「マーリン達部下達もね、気を使ってくれるのが分かる分、逆に氣を使うよ」

出そうになった溜息を喉の奥に押し込める。

「だろうな。それよりも、いいのかいなくて」

「会計方と船大工、副官がいるから今はいなくてもいいんだ。査定が終わったら、アイスバーグさんとかを交えて意見交換と値段交渉その他諸々をするようだけどね」

「だから、顔見知りの俺がお前と居てるのか」

「本当は私がやるべきなんだけど、軍事機密だからさ。それなのに、准将は少しは休んでくださいってほぼ全員に言われて追い出されたい、なんだかなあ……」

「愛されてるな」

「愛は嬉しいけど、仕事がしたいよ」

そんなこんなで私とパウリー君の昼はだらだらと過ぎて行く。

SIDE：ルーカス

あいつの**仕事中毒**^{ワーカーホリック}は死んでも治らないような気がする。

書類仕事をしすぎて、マーリンやトリスにストップをかけられているのを見るとそうとは思えない。これは、船員ほぼ全員の意見だ。

将来、仕事し過ぎて過労死すんじゃないの？という意見すら出るくらいなんだから。

しかし今回、あいつがこんなに仕事をするようなのは、火拳のせいだ。

何時もなら、そこまで仕事しないで済むのにあいつが船体に損傷を与えたから…

軍艦^{ふね}が、火拳のエースとの戦闘で走行には問題は無いとも言ども、海上で船大工でドックもなし材料も少し足りないとするとちと厳しい位に損傷したから、側にあった島。

ウォーターセブン、略すとW7に急遽立ち寄ることになったのだ。

その時点で報告書が増えた。

火拳を七武海に勧誘する様だったから通常業務より仕事が多かったのに。

その時点で俺らの火拳に対する印象は底辺にまで落っこちた。

最初からそんなに高くなかったけどな！うん。

まあ、それでW7にまで来たんだからというわけで俺らコックが、まあ正確には厨房関係だが、食料の補充に繰り出したのだ。

水水肉とか特産品とか調味料達^{調味料}が買える…！！

「でも、これだけ買っても金曜だからカレーなんだよな……」

海上での曜日感覚を身につけるためとはいえ、ねえ？

「水水肉のカレーにしよう」

うん、そうしよう。

せめてバリエーション付けないとやってられん！

ヤガラに頼み、船にまで運んでもらう。

損傷があるとはいえ、食料貯蔵庫と冷蔵室は無傷だし。

積荷を降ろして、宿に帰ろう。

シャルロットは厨房は借りれるような場所を借りてくれたし、

怪我した奴らは報告を受けつけにきた二隻の船で帰らせてるから、

コックが少なくても問題は無い。

そして、船のあるガレーラのドッグに向かう途中、くしゃくしゃの金髪が裏路地に入ってくのが見えた。あれは、多分、もしかしくても

「今のガウエイン、だよな？」

あいつ、何やってんだ？

天然気味の同僚が路地裏に入っていったのを思わず凝視した。

結構な付き合いだけど、未だにあまり分からない。

そつ、言葉が思わず零れ落ちた。

SIDE：ガウエイン

見られたかな。

目立つピンク色の頭をしたルーカス、もといルークが水路を遡っていたのを見て、思わず嘆息する。

ドアドアの実でとある場所に移動した後の僕の様子を訝しく思ったのか、

CP9の暗殺者、ロブ・ルッチに尋ねられた。

「いや、なあに。同僚に路地裏に入っていく所を見られたかもしれない」

そう言うと、不愉快そうに目の前の男は眉を寄せた。

「馬鹿野郎」

誰にだ、と言葉にしないまでも探り出し、殺してやろうと思っているのだろう。

まあ、これがいつなん時、自分の災いに成るのが分からない職業なのだから当たり前か。

「ルーカス・マクシミリアン。庶子とはいえどランドバルド公夫妻が溺愛してる息子だから手を出さない方がいいよ。…それに、僕も黙っちゃいない。手が滑って君を殺してしまうかもしれない」

そう、うつすら微笑むと、心底不愉快そうに舌打ちをした。

「ふん、まあいい。それで、お前は何をしに来た」

行儀悪く足を組む目の前の男の眼前に黒い封筒を懷から取り出し、差し出す。

「メッセンジャー^{ぼく}が来るんだ。仕事の話以外の何物でもないに決まってるだろう？」

「うるせえ、社交辞令だ」

「君、社交辞令なんて仕えたんだ。後、ソレは読んだら燃やせ。僕はそろそろ戻る」

腰を預けていたソファーから立ち上がる。

背を向け、扉に歩を進める。

ドアノブに手が触れた所で、声をかけられた。

「おい、ガウエイン・ソレイユ」

「何だい、ロブ・ルッチ」

僕は振り向かない。

相手もそれを気にしない。

「あいつらは、知っているのか？」

十中八九、シャルロツテを筆頭の66期生を指しているのだろう。

普段の僕なら、答えない問いだった。

それに答えたのはただの気まぐれ。

「皆は知らないよ。教えてないし。何より知る必要がない」

鋭い奴らや野生の勘で生きているような人間が多いから、そういう

奴らは僕がそう思っているだけかも知れないけど。皆、一線を越えると優しいから知らないふりをしてくれてるのかもしれないけど。

「それに、」

「？」

「何よりも僕が許さない。あいつらは、こんな所に来るべきじゃない。だから、知ることを僕は許さない。それゆえに知る筈がない。知る前に僕が　　するんだから。」

皆は陽だまりの中に居るのがふさわしいんだから。此処まで来るのを僕は許さない。

「そうか……………」

「じゃあ、僕はこれで。後、ロブ・ルツチ。いい加減に弁^{わきま}えろ、次はお前を殺す」

はははと笑いながら扉を開け、外の階段を降り始めると、化け物め…、という声が聞こえた。

知ってるよ、そんなこと。

三十一話 水の都（後書き）

ガウエインはあくまでメッセンジャーなのでCP9の一員ではありません。

応援ありがとうございます。これからも頑張ります

三十二話 閑話 彼らは今（前書き）

いつも、応援ありがとうございます。

今回は、主人公がパウリーと一緒に居る間の時間軸になにが起こっていたかです。

まあ、あれです。話の裏側的な・・・

では、どうぞ！！

三十二話 閑話 彼らは今

SIDE：トリスタン

「生きてる…?」

そう、不思議そうな声が聞こえた。

「ああ」

自分のものとは思えない擦れた声。
瞼をあげると女の顔が見える。

「何で、メリー。お前がいるんだ」

自分は負傷者と付けられた船員を副官として指揮して、直属の上司ではない上官の艦隊の上に居たはずだ。それなのに、なぜ本部の海兵のメリーが、アルメリアが此処に居るんだろう。

目の前の女はアルメリア。名字は無い。童顔気味の可愛系の顔に、赤毛、正確にはブラウンに赤みのある色に金混じりの緑の瞳、どこかシャルに似た色合いの髪と目を持つ海軍士官女医。俺らの士官学校同期で二年の時から医療コースに進んだから免許を取るのに時間がかかることもあって、海軍の組織としては二年後輩になるという地味に複雑な経歴を持つ女だ。

「え、覚えてないの?」

「何がだよ…、そもそも、俺はなんでここにいる。知っているなら、教える」

起き上がろうとすると、体全体を使ってベットに押し戻された。

おい、お前も女だろ。慎みを持てばか。胸が当たってんだよ。

ふにゅんとした柔らかい感触が胸板に押しつけられる。

…流石に動けねえよ。俺にどうしろつーんだ。

「今は、麻酔が効いてるけどあんたは海王類に負わされた傷とその毒でぼろぼろなのよ!!」

半ば、悲鳴のような声だった。

ああ、そうか、俺は……

「、直属の上司じゃない上司を庇ったんだっか」

本部に戻る途中、海王類の群れ？群れというか何と言うか、数匹以上と戦闘になったのだ。

新世界の軍艦から徐々にDr・ベガバンクの研究結果によって海楼石が船底に取り付けられ海王類に察知されないようになっていたが、まだ、全軍艦にそれが取り付けられている訳じゃない。その結果、まあこういう風になったわけだ。

「どうして？」

「ん？」

「ねえ、どうして庇ったの？」

メリーが体を俺の上からのかした後、俯きながら言葉を零す。

僅かに肩は震えていた。

「あんたが怪我しなくてもよかったじゃない。違う部隊なのに……、その上官の副官だっていたんだから、あんたが庇う事なんて無かったのに。なのに、どうして？」

「海兵のセリフじゃねエな。……死ぬ気は無かったから問題ないし、怪我だって重要な器官や血管はしてねえだろうが」

そんなこと、

「自分でも、分かってるわよ！！ 海兵として駄目な考えだったことも、病人も怪我人に貴賤も上下もつけちゃいけないのに！ 医者として失格だったのに！ それでも、……心配だったのよ！！」

ぼろりと大粒の涙が碧の瞳から零れ落ちる。

それがいやにゆっくりと見えて、ぎよつとした。

「な、！馬鹿！！、何で泣くんだよ！？」

若干焦りながらも麻酔がキレてきて鈍痛のしてくる腕で涙を掬う。初めてまじかで見えたメリーの顔は本当に微かにシャルの面影があった、思わず息を飲んだ。

やべえ、似てる、色合いが似ているのは昔から知っていた、それよりもなんで目元や泣き方がこんなに似てるんだ！？こいつはシャルじゃないのに……！

「……あんたのことが、
ッ大事だからに決まってんでし
ようー！！」

がちやり、どこか間の抜けた音が空間を動かす。
叫んだメリーと俺はギギッと錆ついたような音を立ててドアの方に首を向ける。

するとそこには、俺が庇った上司X・ドレーク少将と、見舞いに来てくれたのであるうルクレティアにヴィルが固まった表情で俺達を見ていた。

空気が固まる。

それを破ったのはルクレティアだった。

「あー、その、邪魔してごめん。ごゆっくり」

ぱたんと音を立てて扉が閉じる。

傷口が痛むものにも構わず、思わず叫んだ。

「……誤解だあああああああ!!」

SIDE：ヴィルヘルム

どこか、叫び声の様な声を聞いた気がした。

しかし、どうしよう。

同期の知らなくてよかった一面を見てしまった。

僕は明日からどんな顔をして、あの二人に会えばいいんだろうか？
思わず、ずれてもない眼鏡のフレームに触れた。

頭が痛い。

「……一回、出直そう。それでいいだろ、ローレン」

「そうね、そうしましょうヴィル。私あの空気の中突入する度胸は無いわ」

ローレンも同じことを思っただけらしい。
米神に指先を当てている。

「ドレーク少将も、一旦出直したほうがいいと思います」

「
今、戻ったらさうとう気まずいと思いますし……」

思わず二人で声を揃えてしまった。

ドレーク少将は、僕らの声を聞いて苦笑いした。

何故、僕らはトリスの為にこうフォローに回らないといけないんだろうか……

メリーもだよ、自分が後で気まずくなるのに……
なんだかなあ……

SIDE：ルクレティア

同期とか友人の告白（正確にはもどき）を聞いてしまった時の対応ってどんなものがあったってどう対処をすればいいんだろうか、我ながら思わずそんな間抜けな事を考えた。

空気が凍りつく。

思わずドアを半ば反射的に閉めた後、側に居たヴィルとドレーク少将と立ち去ってしまった。

嗚呼、どうしよう。

明日から、上司のスモーカー大佐がローグタウンに勤務するから移動する様なのに、私、メリーと気まずいままいかなきゃいけないわけ……！

鈍い鈍痛がして思わず米神に手をやった。

本当にどうしたらいいか分かんないし、頭痛いし。

側に居る二人もお互いに頭が痛いという表情をしている。

（といっても、ドレーク少将はしょうがないなといった顔で、ウイルスは苦虫をかみつぶしたような仏頂面を悪化させたような顔をしていたけど）

出そうになった溜息を飲みこんだ。

メリー、あんたがトリスの事、ずっと好きなのは知ってたけど、トリスも変な所で鈍感だから気付いてないのも知ってたけど、病室で思いのたけを叫んでどうするのよ…。

でも、きつとトリスは気付いてないわ、と友人の前途多難の恋を思った。

なんで、あいつなんだろう。

好きな相手がいる相手に惚れるのはきついだらうに。
今度こそ溜息が零れ落ちた。

SIDE：エドワード

いつも眠そうな瞳をキラキラと幼い子供みたいに輝かせて、一心不乱にペンで様々な事を書き込んでる隣の同期兼凄腕航海士はおもちゃで遊ぶ子供の様な嬉しさをにじませた顔をしていた。

こいつは間違いなく海図にかけては天才だ。「生きた海図」だの異

名がつくのも分かる。

それぐらい、綺麗で非の打ちどころのない海図を書く。

天性の才能だけで無い努力をして、航海士になったそんな奴。目で追うようになったのは何時だっただろう。

所々で跳ねた淡い緑の髪は、どこか春を連想させて、思わず手にとってみたくなる。

手元の紙面に数値や記号、海図を書く為の情報を書く為に目を伏せているのを見ると、髪と同じ色の睫毛は長くけふる様に目を縁取っている。

可愛いなあ。俺の妹の次に。シスコンの俺がそう思うくらいには可愛い同級生だ。

アニウス・デイという海軍本部中尉の航海士は、すげえ可愛い。

まあ、俺が惚れているからかもしれないが…

「アニー」

「うっ……此処の海流がこうだから…こうなるんだよ」

ガリガリガリとペンが紙面を泳ぐ。

島の海図を実際にかくにはフィールドワークが必要だからと、この島、ウォーターセブン出身の俺が案内する事になった。……こいつ目を離すのが怖いし、海兵の癖に戦闘能力皆無だしな……。

「…それ以上、歩くと落ちるぞ」

流石に襟首を掴んで止める。

言っても聞いてないだろうし、これ以上歩いたらマジで落ちるしな。

こいつ海図かいてる時、めっちゃ集中してるから直接こうでもしないと聞きやしねエし。

「ッ・・・!!何するんだよ」

キツと目じりを上げて怒られた。

怒り顔も可愛い、と思うなんて俺も大概馬鹿になってるなあ。

痘痕も笑窪ってやつ、それとも恋は盲目だろうか、恋する男は馬鹿ばっかだ。

「…アニー、落ちるぞ」

「え？」

そう言うのと、怒った顔から一変してきょとした顔で俺を見上げてくる。

そのキョトンとした顔が年相応で可愛くて喉の奥で笑った。

「…お前、やっぱりそういう顔した方が可愛いわ」

「はあ!?!いきなり何言うんだよ!?!」

カッと先ほどの怒りとは違う赤に頬が染まる。

リンゴみてエだ。

肌が白めだから赤が映える。

「何って、本音の吐露？」

俺がそう言葉を紡ぐと、さらに目の前の航海士は真っ赤になった。耳まで赤い、首筋も朱色だ。

かわいいなあ、にへりと頬を緩めたら怒られた。

事実を述べてるだけなのにな、そういったらさらに怒られた。

・・・そういう所もひっくるめて好きなんだけど。

ソレを言ったら、関係が終わるような羽目になるので口を閉ざした。

三十二話 閑話 彼らは今（後書き）

新キャラのアルメリアには結構重大な血縁関係があります。そして、恋愛に関しては不憫です。

そして、同じく新キャラの航海士のアニーことアニユス・デイは竜華零様から頂きました。これからも大事に使わせて頂きます。

これからも、呉藍の雪を宜しく願います！！

三十三話 牙銳の大佐の苦悩（前書き）

前に言つてたとおりのデートの話。

色々、大変な大佐と吹っ切れようと頑張る准将。

そしてナチュラルにくつついてる同期二名。

三十三話 牙鋭の大佐の苦悩

SIDE：レオンハート

好きな奴に冗談で済ませれる範囲でデートに誘ったら、OKされた件について。

え、まじ？

思わずぽかんとしてしまった俺はきつと悪くない。

シャルナリのジョークだと思って日常業務に従事してたら、任務から帰って来て休みの目処がたったシャルに三日後に約束のデートだからなと軽く告げられた。

思わずシャルが帰った後、これは自分の都合のいい夢だと思って、上司のガープさんにちよつと気合入れてくれませんかと殴ってもらって、

ぶん殴られた痛みで夢か夢で無いかを判断してしまったくらいだ。

そのせいで俺の顔の右側は湿布がべしりと張られている。

待ち合わせ場所の傍に居る人達になんか好奇の瞳で見られている。

俺は目つき悪くてデカイから俺が視線を向けた途端、視線をあから様にそらされる。

そんなに堅気に見えないのかと学生時代にまだ友達じゃなかったシャルに聞いたら頷いた後、堅気には見えないけど強そうには見える、と少しずれた答えが返ってきた。

その返答にいいい……と思ったのは此処だけの話。

こいつ実は抜けてるといつか天然だなと思ったのが最初の友達付き合いのきっかけ。

第一印象は、正直に白状すればあまりよく覚えていない。ただ、紅いなつと容姿で判断したように覚えている。

第二印象は頭のいい奴。

あいつがテストの順位で一位から陥落したのを見た事がない。第三印象が実は天然じゃんこいつ。

ここまで、俺の中で印象が変わった人間は他にはいない。
……いや、ある意味、マーリンもか。

それは、今は置いておこう。学生時代は危険地帯だ。楽しい思い出もあるけど迂闊に思い出すと寒気と怖気が波状攻撃が襲いかかってくる。大体学生時代の最後の全員協力が黒いナニカ退治だった時点でなんか大分おかしい。

「俺の学生時代って、」

正確には俺らのだけど、普通じゃ無さ過ぎるぜ。

「普通じゃなかったけど、楽しかっただろっ」

どちらかと言えば高音の声が耳朵を打った。

振り返ると紅い髪に、青みを帯びた翡翠の瞳。

人形のように整った顔立ち。

待ち人がそこに居た。

「待たせて、すまないね。レオン、準備に戸惑ったものだから」

そう答えるシャルの声は耳に入らなかった。

「お、お前ッ！髪、どうしたんだよ!？」

背中よりも長かった紅い髪はぱつさりとショートカットにされていた。

「…まあ、色々あったんだよ」

その言葉にシャルは苦笑いをした。

SIDE：シャルロッテ

足に纏わりつくマキシ丈のワンピースの裾を気にしながら、
レオンとの待ち合わせ場所に急ぐ。

今日はいたサンダルは革靴やブーツと違って可愛い繊細なデザインだ。

太陽の光りに目を細めながら、人の迷惑にならない程度の速さで人の間を駆ける。

短くした髪が視界の隅で揺れた。肩につくまでに短くした紅い髪。あいつが綺麗だから伸ばせばいいといったから伸ばしていたけど、丁寧に手入れもしてたけど、火拳との戦闘で痛んでしまったし、あいつとはもう一緒に居られないし、実質失恋した様なものだし。思いきってざっくり切ったのだ。

そうなんだけど。

今日一緒に出かけるレオンはソレを見るなり、驚いた声を上げたのだ。

君、自分の声の大きさ知ってる癖に・・・

「いいから、早く行こ」

「でもよ、」

「人の視線が痛いし・・・」

「すまん」

私の声で冷静になったのか、私の手を引いてエスコートしてくれた。さりげなく歩幅とか歩くスピードを合せて人ごみから守ってくれた。

なんだろうか、このむず痒さ。なんだろう、これ。

訳分かんないし。

取り合えず落ち着ける場所に行こうという話になって、

この間レオンが見つけた裏路地の目立たないコーヒーショップに入った。

古いが温かみと不思議な気品のある店内。落ち着いた色合いの装飾品。

懐古趣味なのか古い物を大切に使い続けているのかはよく分からないが古めかしい蓄音機からはこれまた古いジャズのナンバーが流れている。

・・・いい趣味だ。

高価とも上品とも言えないが落ちつける空間。

知らずに溜息をついた。

「で、何があつたんだよ？」

頼んだコーヒーストレートで飲みながらレオンが尋ねてきた。
大雑把に見えるが実は優しい奴なのだ。

こちらにも、エクスプレッソを飲みながら答える。

美味しいな…、豆を後で買えないか聞いてみよう。

「まあ、色々あるんだが端的に言えば…」

「言えば…？」

「失恋をした」

ゴフツという音とともに目の前のレオンが噎せた。
おいおい大丈夫かい？

「お前が！？」

「そう、私が」

口を乱暴に拭きながら驚愕の眼差しを向けてくるレオン。
なんか、悪い事をしたなと思う。

「で、何で俺なんだよ」

他に失恋の憂さ晴らしなら他にも人間はいるだろうが
そう言うレオンに口を開いた。

「だって、君は慰めたりしないだろう?」

「.....」

思い当たることがあったのか黙り込む、男。
悪い事をしたなと思いつつも言葉を紡ぐ。

「大雑把なように見せかけてさ、実はマーリン張りに線引きが厳しいだろう?」

だから、君を選んだんだ。

慰めてくれるわけでも、優しくしてくれるわけでもない君を。
今は君ぐらいドライな人間が側に居る方がいい。

沈黙が落ちる。

散々悪い事をした自覚はあるので文句は言えないけど、今帰られたらキツイなと思ったけど、彼自身が帰ろうとするなら引き留めようとは思わなかった。

「.....ごめんね」

「何を勘違いしてるのか知らんが、早く行くぞ」

「へ?」

思わぬ言葉にぼけつとすると男らしいごつごつとした骨っぽい手を差し伸べられた。

「これはデート、なんだろ?一人でデートも何もあったもんじゃないだろうが」

「レオン。君、」

「うるさい黙れ、異論は認めない」

がしつと乱暴に手を引かれ立ちあがらせられる。

「早く行くぞ。ケーキ食って服でも見て、夕飯は居酒屋で飲むからな」

これは大雑把で乱暴だけど、気を使ってくれてる。

「分かった」

思わず、頷いていた。

SIDE：エドワード

今日も今日とてアニーことアニヌス・デイのお伴をしている、俺ことエドワード・カンパーニュ。アニーは今日は海図用の製図ペンとインク、資料を探しに行くらしい。

海軍で支給されんじやんといったら、ムラがあるから自分の目で見ないと信用できないらしい。俺ら戦闘員が、支給された武器以外の愛用の武器を選ぶのと一緒に。

これが早めに終わったら、一緒に街を回る約束をしている。
要するにデートだ。

アニー本人が気づいていなくても。

デートって言ったらデートなのだ。

「アニー、どうだ？」

「うー……、ペン軸がもつと細いのがいいんだよ……」

訂正。

今日も早めに終わりそうにない。

この凝り性め！

でも、そう言う所も好きなんだ！

文句あつかコラ！

「アニー……、あれシャルじゃないか？」

「准将？」

アニーにも教えてやろうと指で指示した先には手をつないだシャルの姿が……

（え、誰と？）

思わずぎょつとして目を凝らすと、それが誰かが分かった。

シャルと手をつないでいるのはゴールドベルク・レオンハート。

俺らはレオンって呼んでる66期生の同期。

金混じりの赤い髪に色の黒い肌が目印だ。

後、目つきの悪さも特徴の一つに挙げられる。

つか、ちょっと待て、

「マジで!？」

店内の視線が集まっていたが思わず叫んでいた。
俺、くつつくとしたらマーリンかトールリス辺りだと思ってたのに!!

SIDE：フルボディ

んな、聞き辛い会話をすんな。
思わずそう思った。

紅い髪の綺麗な女性は儚げな、朱に金の混じった髪の男は複雑そうな顔をしていた。

あんまり聞こえないが、女性の方がどうやら失恋をしたらしい。
で、俺が見た感じ男の方は女性に片思いしているのだろう、酷く複雑そうだ。

動揺したりなんだろうしながらも女性に気を使っているようだ。

うわぁ、片思い。そんなの報われないと知っている筈なのに想い続けれるってことはどうしようもなく女性の事が好きなんだろうな、この男。

俺の不躰な視線に気づいたのか、ぎろりと睨まれる。

それでいて、女性には気づかせないという器用なまねも披露された。

「（あ、俺、詰んだかも）」

あれは肉食獣の目だ。

結局俺は最後まで何もなく過ごせた。

男は女性の手を引いて店から出て行った。

あの二人が出て行ったあとで気づいた。

あの二人上官だ。

女性はエーデルシュタイン准将、男はゴールドベルグ大佐。
「悪夢」の66期生のメンバーである。

・・・やっぱり、俺詰んだかも

SIDE：レオンハート

あの後、ケーキバイキングに行ってケーキ食いまくって、
ウィンドウショッピングして、雑貨屋に行って、
アイスパーラーでアイスを買って食べて、飲みに行った。

まるで、恋人みたいだ。

思わず自嘲した。

バカみたいなのだ。自分が。

シャルは俺の事を友人としか思っていないのにどんな形であれ頼って
くれた事が嬉しくて。

浮かれたのだ。

自分でも自棄になっていたとも言える。

シャルも自棄になっていたし。

飲み始めて酔ったことでネジがお互いに吹っ飛んだのか失恋記念だ

！！といったの間にか飲み比べにまで発展し、店内の人間をほぼ潰した辺りでシャルが潰れた。

そこで、酔いの覚めた俺が店主に謝って酔い潰れたシャルを背負って店を出た。

「（ああ、星がきれいだ）」

出来るだけ背中のシャルを揺らさないようにしながら、帰路につく。吐いた息は酒の匂いがした。それにゲンナリとする。

「っ・・・？」

「だいじょぶか？」

むくりと置きたシャルはこくと頷いた。うつらうつらとしてるのか、こっくりこっくり船をこぐ。こんな無防備なシャルは見た時が無い。

「レオン、」

「あんだよ？」

「・・・君みたいな人を好きになればよかったな」

「?!?!??」

ドスつと小さな頭が背中に当たる。
・・・寝息も聞こえてきた。

寝た、らしい。

ふざけんなや、と叫びたくなる。
どうしようもない位の感情が渦巻いた。
俺をこれ以上、どうしたいんだ。バカ。

「畜生が、襲っちまうぞ」

そんな事言っても、何もできないんだが。
ため息をひとつついて、シャルを背負いなおした。
シャルの住居まではまだ遠い。

三十三話 牙鋭の大佐の苦悩（後書き）

蛇足ですが、シャルの住居は父親と公私混合したらずいから別之家に暮らしてます。父親の家に土日や祝日は帰るのであんまり一人暮らしという気がしないそうです。

三十四話　その後の各々の行動（前書き）

かるゝく貧乏くじを引いた大佐。
見舞いのシヤル。

いっば引いて冷静に見てる父親。
それを知らないから騒ぐ周り。

三十四話 その後の各々の行動

SIDE：レオンハート

なぜ、こうなった。

それは俺が思ってもいいことだろう。

食堂で前後ろ左右斜め、同期生にさりげなく包囲された。いつも助け船を出す事が多いマーリンやヴィルも何食わぬ顔で包囲網に加わっている。

お前ら、容赦なさすぎるぜ・・・。

こりゃあ他人から「悪夢」の66期生って言われる筈だ。しれっと相手を嵌めるんだから！

周りも何かを感じとったのかそそくさと席を立って行く。しばらくすれば、同期しか俺の周りにはいなかった。

飯の味がしねえよ。

不気味な沈黙が俺らの間に巻き起こる。

口を急いで動かし、皿を空にした。

皿を運ぼうと立ち上がるうとしたら両肩に手が乗った。

ガタンッと無理やり席に乘せられる。

「おいっ！」

「あれ、大丈夫かレオン？」

ふふふと笑いながらガウエインが告げる。
それにマーリンも追従した。

「立ち眩みでしょう。食器を戻しがてらお冷^{ひや}を貰ってきますから座
ってなさい」

眼鏡をかけた美形で人気のあるマーリン大佐は笑顔だったけど、
眼鏡の奥の紅い目はこれっぽっちも笑っていなかった。
お前、怖えよ。
きつと思わずそう思った俺は悪くない。

ガウエインもいつもの鉄面皮を崩して、微笑している。
怖えよ！

何か企んでるだろ、お前ら！！

マーリンが俺の食器を持って席を立つ、逃げ出そうとしたら、
いつの間にか側に来ていたガブリエルとモルガンに体を押さえられ
た。

動けねえ。

不機嫌で容赦がないガブリエルと微笑んでいるモルガン。
さりげなくモルガンは関節をかけている。

鬼か、お前は。

その分、ガブリエルの方がまだましだ。
重圧が出てるけど関節を抑え込んでいる訳じゃねえからな。

そして、斜め前に座っている。ピンクの髪の男。
ルーカス・マクシミリアン、通称ルークは気の毒そうに視線をそら
した。

おい。

ついでにヴィルことヴィルヘルムはこちらに興味なさげに飯を食っていた。

どうやら巻き込まれたくないらしい。

レティシアも普通に料理を食べていたがこの騒動に興味はあるらしくちらちらと俺に視線を向けてきている。

何故、こうなった。

俺は再度そう思った。

めんどくさいことに逃げられそうにない。

おそらく追求されるのは二日前の事だ。

同期の誰か。多分ここにはいないエドかアニーに見られてたんだろう。

多分、非番だった同期以外の海兵にも見られてるな。

で、シャルが髪を切ったことも合わさって、噂が流れたのか。

俺とシャルが付き合ってる、とか俺がフツタとかそんな所の。

信憑性が高くて、実際見た奴もいるわけだから。

この集まりというか包囲網に巻き込まれたってわけか…。

…面倒だ。

少なくとも事情を伏せて、マーリン達に説明しなければ帰らせてもくれないだろう。

そこまで考えて俺は溜息をついた。

この昼は長くなりそうだ。

SIDE：シャルロッテ

「お前っ、髪はどうした!？」

包帯を巻かれて、病人の格好をしたトーリスにさえも叫ばれた。

トーリスは大きな緑の瞳を見開いて、ぎょつとした顔をしていた。そして、皆と同じ事を言う。

そんなに私が髪を切る事があれなのだろうか？

「切った」

一言でぽつりと答え、手元の果物を切る作業に戻る。

オレンジとリンゴの皮を剥きながら、次に来るであろう質問に備えた。

皆と同じことを言うてくるんなら一言目はあれに決まっている。

「なんで!？」

「イメチェンだ」

大体の奴はこうきっぱりと無表情で言い切ると二の句が継げなくなる。

トーリスもそれは同じな様で、何度か口を開閉させた後、口を閉ざした。

それでいいのだと思う。

私生活に突っ込んだ理由を一から十まで教えるほど私は開けっぴろげじゃない。

そもそも本当の理由なんてこの状況で言えるわけがない。

「で、怪我の経過はいいのか？」

話を元に戻す。

私が病室に来たのはトリスの怪我の経過を聞きにだ。

副官だから業務の見通しの修正なんかもしなければいけないから、業務の修正の打ち合わせときちんとしたお見舞いも兼ねて連絡を入れ、アポを取って此処まで来たのだ。

「メリーに聞いたんじゃないの？」

「メリーにも聞いたがお前の治療力は異常だから本人にも聞かなければ駄目だ」

学生の時、全治三週間を一週間で治してただろ、と呆れたように返すと、

気まずそうに視線をそらされた。

「まあ、こちらとしては好ましいのだが…」

「へ？」

ぽかんとした顔で見つめられる。

こういう時、美形は得だと思う。

茶色に近い濃い金の髪に深い緑の瞳。高身長に低めのテノール。

いつもへらへらしてるから三枚目に見えるが、実は相当整った顔をしている。

まるで、絵本の中の騎士みたいだと言ったのは同期の誰だったか・・。

こんな間のぬけた表情でもカッコよく見えるのは傍から見ればずるいの一言だ。

「好ましいって？」

「その字の通りだが？」

早めに傷が治るのは復帰できるという強みになるし、仕事に穴も開きにくい。

人柄もその就業態度や今回の人命を優先させた行動なんて、素晴らしいの一言で。

好ましいといしか言えないだろう。

そういうのを言外に含めて言ったのだが、沈黙が落ちた。

じわりじわりと目の前のトーリスが赤くなっていくのが見えた。

SIDE：クザン

あの子が髪を切った。

長かった髪はもう肩ほどの長さまでしか無い。

思わず驚いて深い紅い色の髪を切った娘から理由^{わけ}を聞き出した。
気まずそうに小声で答えた娘の顔はほんのりと苦かった。

大事にしてた髪を切った。

その理由は失恋。

ありきたりって言えばありきたりだけど、自分の娘にされると笑えない。

失恋の相手はあの紅い髪に紅の眼差しをした南の海の子だろう。
基本、心を他人に開かなかった少女時代の娘が初めて手にした友達。
たしか名前はキッドだ。……名字は覚えていないが。
娘の話にはよく登場した名前。

娘が諦めて手を離すしかなかった、人。

娘は相手を好きで、相手も娘が好きだったのに。
二人とも自分たちで気付いてしまった。

一緒に居られない事に。

きっと、それを人は哀れというのだろう。

だから、二人とも手を離れた。

好きな癖に・・・、相手の為に、

娘がもう少し聡くなくて、キッド青年が少しだけ真っ直ぐじゃなかったら。

きっと娘とキッド青年は二人とも幸せになれたんじゃないか。

俺は時折、そう思う事がある。

だから噂になっているゴールドベルグ・レオンハート大佐には少しばかり同情した。

この間、一度接触してるから、大体の想いは分かっている。

娘は気付いていない、大佐の気持ちに。

こういうのは男の方が察せられる場合もあるのだ。

失恋をした娘はその気持ちを知らずに彼に頼んだんだろう。

彼女の副官達は、そういう時には駄目だと知っていたから。

だから大佐を選んだ。口の堅い、自分を慰めない人間を。

きっと大佐も、それに乗ったのだ。

だから、噂になっているそれはデートでも何でもなくて。

シャルの為に大佐が一肌脱いで少しでも吹っ切れる手伝いをしたんだろう。

俺はそうだと思う。

だから俺は、とりあえず否定しておくことにした。

「・・・違つと思つよ」

これからの二人の関係の為にも俺は否定しといた。

三十四話 その後の各々の行動（後書き）

次回はエースが白ひげに戦ったと聞いて、驚くシャルとか。
任務で南の海へGO！な部隊の面々を書きたいです。
次回も頑張ります。

三十五話 嫌いな存在（前書き）

シャルロットの嫌いなものがまた増えました。
いや、表面化しただけかもしれない。

この話は革命家に否定的な事を言っています。
革命軍の人が好きな人はご注意ください。

三十五話 嫌いな存在

SIDE：シャルロッテ

革命軍なんて死ねばいいのに。
むしろ、滅びろ。

塵に帰れ。

思わずそう思った私はきつと悪くない。

頬に当たるのは、焼けた人と焼けた島の煤を纏った風。
目に映るのは、焼けて、崩れてぼろぼろになった町。
どこか、私の故郷と重なる光景。

子供が泣いている。

（昔の私の様に）

悲鳴が聞こえる。

（助けられなかった人の）

助けを求める声がする。

（手を掴めなかった人の）

手を伸ばさなければ。

（昔とは違うんだから）

助けなければ。

（昔の私と同じ子ができてしまう）

守らなければ。

（その為に力を求めたのに）

庇護が与えられる子供に私の様な惨めな体験はさせてはいけ
ないのだ。

（あんな怖い目にさせるもんじゃない）

「総員、集合！」

海軍仕込みの腹式呼吸で、命令を下す。

「今から任務に向かう！人命救助が第一だが、邪魔をする敵は切り捨てろ！！」

そう、正直私はキレている。

激怒している、とも言える。

腸が煮えくりかえっているのだ。

本気で怒ると思いが逆に冷静になるんだけど。

「ガブリエル、モルガンの班は軍艦ふねを中心に救助された人々を保護！
！できるようなら軍艦ではなく陸に簡易救護所を作れ！一人でも多くの人を救え！！」

あくまで私達にかされたのは人命救助の命令。

一人でも多くの人を災禍から引つ張り出し、救う事。

革命軍もつかまえるのなら捕まえるとも言われたけど・・・。

「トリスタンとガウエインの班はこの混乱に乗じる犯罪者を捕縛！
革命軍も含めてインペルダウンにぶち込んでしまえ！」

だったら、言われた通り捕まえるだけだ。

ああ、ムカつく。

「マーリンと私の班は首謀者を追う！何かあったら中将達の指示を仰ぐこと、いいな！」

私はこの惨劇を赦せない。

これを引き起こした人間たちが赦せない。

この国の人達から当たり前な日常を、在り来たりな毎日^{ヘイウ}を、合った^{ユメ}筈の未来を、奪った奴らを赦せない。

しかも、この惨劇を引き起こしたのが革命軍とは笑わせる。
人々の自由を謳い、平等を謳う、革命軍。

その結果がこれとは、
片腹痛いにもほどがある。

「（こんなものが世界を革命する？…ふざけるなよ）」

ギリリツと噛み締めた。奥歯が軋む。

この国は、確かに多少治安が悪かった。

けれど、そこには最低限以上の人々の営みがあったのだ。

それを無視して、テロを起こして、それを奪って、革命？
なにそれ、新しい冗談^{ジョーク}？

笑えないし、ふざけてるんだろうか？

嗚呼、ムカつくな。

もう本当にありえないんだけど。

市民に被害が起こっている時点で、私はこんな奴らを認めない。

「
行くよ！！」

SIDE：マーリン

「私は革命家が海賊と並ぶくらいに嫌いだ」

そう伏し目がちに呟いたのは、目に鮮やかな紅の髪をした海兵^{ひと}。普段は翡翠色の瞳は長いまつげの影で群青色に染まっている。

「……なぜですか？」

思わず、尋ねていた。

次の任務には革命家が絡むから。

不確定要素は出来るだけ排除しておきたい。

「…革命家なんて、どんな高尚な理由があろうとも結局は法を犯した連中でしかない。何も知らない善良な市民たちは彼らの名を聞いただけで恐ろしがるだろうし、怯えてしまうのが普通で当たり前。彼らは無法者たちが捕まっていないという事に恐怖を覚えるだろう。もしかしたら自分だけではなく自分の大切な人間。例えば家族、恋人、友人を何の理由もなく奪われるかもしれない。と。だから、その為に私達海兵がいるんだ」

謳うように言葉を紡ぐ。目の前の美しい、女^{ひと}。

翡翠に青が混じった美しい瞳、雪の様に白い肌、薔薇の花の様に紅い唇。

これで煉獄の炎の様な髪が黒かったら、どこかの国の童話だな。そんなふざけた事を考えた。

そんなわけで彼女は革命家を嫌っている。

いや、彼女は革命という手段自体を否定している訳ではない。

例えば、この世界のどこかで王が民を虐げている国があつて、国民がその暴君を打ち砕くのなら“よし”とするだろう、市民自身が自分達のために立ち上がるならそれも構わないだろう。

だが、それを大きな意思として世に広めようとするのが嫌いだ。

彼らはいったい何を基準に、自分たちの行動を“正しい”
と言うのか。

そう、呟いた声が残っている。

「具体例を上げると今、ドラゴン率いる革命軍は“政府を倒そう”
なんて事をしている」

「ええ。世界の敵ということになってますよね」

「うん、そうだね。彼が掲げている“政府を倒す”という目標は凄
いよ。良きにしろ悪きにしろさ。けど、普通の市民はそれが正しい
ことかどうかなんて、知らないし分からないだろう。きつと知った
ところでそれが何？と思う人の方が多いだろうし。例えば、そんな
人達が何も知らないのに革命によって今の生活が変えられた。血の
流れない革命は存在しない。それ故に、そのごたごたのせいで国が
荒れ、治安が悪化するだろうね。そうなれば、今まで守ってきた家
族が危険になるかもしれない。そんな満足してる一般の市民の人達
にとって与えられる変化なんて必要だと思っのかな？」

「そんなの、必要無いでしょう」

そうだ。

普通に暮らしていくんなら、そんなもの必要無い。

「その通り！実際にはそんな変化なんて必要としない人の方が
多いんだよ。今の“政府”が何か隠している、そんな事実があるけ
どきちゃんと世の中は回っているからね」

あ、そうかとそれで納得した。

彼女は自分の考えていく事に横やりを入れられるのも嫌いだし。自身の行く末や生活を他人に歪ませられるのも嫌いなのだ。

それが他人にも言える事だろう。

勝手にそんな事されたらたまらない。

「そもそも、革命家という生き物。奴らは秩序を混乱させる唾棄すべきテロリズムを持っている。それに、歴史上に革命が真の意味で成功した例は存在しない……」

そう言つて、彼女は微笑んだ。

SIDE：レティシア

燃える炎が頬を撫ぜる。

眼下に写り込む町は、ただただ赤く、紅に染まる。

熱風が暴れていて、はたはたとシャツの上に羽織った民族衣装が揺れる。

それを構わずトンつと地面を蹴った。

ぐるりと視界を反転させながら、地面の上に着地する。

目的の対象はあたりを見まわして発見した。

そう、目的のモノは革命家であろう人間の死体。

亡骸のシャツを裂き、亡骸の心臓に手を添えた。

まだ生温かい体の傷口には鮮やかな血が溢れていて、手のひらを赤に染める。

能力を行使するためとはいえ、

亡者を愚弄しているようなこの行為はあまり好きじゃない。

犯罪者といえども死者を冒瀆し、乏しめる行為だと思っからだ。

一度目を伏せ、短い黙祷をささげてから能力を発動させた。私の手を通して、亡骸の記憶が頭の中に入り込んで来る。それはお世辞にも辛くないと言い難い。

損傷が激しいからか、大きなノイズ混じりの代物。膨大な量の記憶。

濁流にも似たそれは酷く辛いものだった。

記憶と感情までもが流れ込んでくるからだ。

それにこの能力は生者と違って亡者の記憶は操作出来ない。今回の使用方法は相当なデメリットの多い使用方法なのだ。

他人の記憶を自分の中に入れるほど気持ち悪いものは無い。自分が他人に浸食わたしひとされていく気分。

この気味の悪い能力で私という人格は理解される事は少ないが、理解しようとしてくれる人がいるというのは報われる事だと思う。

この実の前任者は孤独に耐えきれず自殺したから。

私は恵まれている方だろう。

記憶の渦に飲み込まれかけたのか、ぐらりと膝をつきそうになる。

咄嗟に伸ばした手がごつごつとした手に掴まれた。

その手に支えられ体制を整える。

「大丈夫ですか？」

私の腕を掴んでいるのはマーリンだった。

いつもの笑顔じゃなくて真顔の。

紅蓮の瞳にほんの僅かに何かを滲ませている。

「平、気。ありがとう」

「そうですか」

それはよかった、と呟いて私を立たせてくれた。
燃え差しの炎からさりげなく庇うように。

「ねえ、あんたって私の事嫌いじゃ無かったけ？」

「殺したいぐらいには嫌いですけど、一番嫌いって訳ではないですよ」

飄々と表情を変えずに言う。
けれど、それは凄い事で

「私の事、凄い目の敵にしてたのにね」

「…まあ、色々心境の変化の様なものがありましたね」

「ふうん」

そういえば、マーリンと含みもなく他愛の無い会話するのは何年かぶりだ。

まるで、昔に戻ったみたいだった。

「で、記憶は読み取れましたか？」

「うん。やっぱり、あんたら二人と上層部の判断と一緒に」

「やはり、下位組織が先走って暴走ですか」

呆れたような顔でマーリンは眼鏡のフレームに手をやった。
滅多に見ない頭が痛い、といったような表情だ。

「で、ここからが重要なんだけど……幹部が来てるみたい」

「尻拭いにですか？ 解せませんね」

考え込む、マーリンに私は軽く告げた。

「まあ、偶々此方に来る用事があつて近くにいたから、
火花が燃え移る前に厄介事を終息させに来たつてとこでしょ。

間に合わないなんて知らずに。

しかも上陸した後、島が包囲されるなんて思つて無かつたのね。

南の海の革命家、イナズマって人間は」

三十五話 嫌いな存在（後書き）

革命って、それに満足したり生活してる人達は起こされたら迷惑な事ですよね。

正直に言つと革命なんて上手くいったのは少ないし、参加してない人がとばかり喰らうものですよね。ってことを主人公に言わせてみました。

三十六話 シザーハンズと呉藍の准将（前書き）

革命家に限らず、何か一つでも大きな夢を持ってる人って、書くの難しいです。

なんか、イメージと違うかもしれませんが宜しくお願いします。

あと、イナズマさんってシザーハンズっぽいですね。
見た目。

三十六話 シザーハンスと呉藍の准将

SIDE：イナズマ

最初に一言だけ言わせてもらう、と目の前にいるうつくしい海兵^{ひと}が静かに口を開いた。

たおやかな肢体。細部にまで行きわたる上品さと気品がある仕種。ほそい、華奢な体やどこか良家の子女を思わせる貴族的な容姿。

腰に挿した柄頭に蒼の宝石を埋め込み精緻な拵えであしらわれた細身の銀の剣。

宝飾用の様に見えるが見る者が見れば一目で実用的な戦闘用の剣と見てとれる。

それが恐ろしいほど不似合いだ。

正義の海兵というよりも蝶よ花よと育てられた娘と言われた方が真実味がある。

そんな剣よりも花が似合う白雪姫の様な美女が口を開いた。

「私は、君達の様な革命家というものが嫌いだ」

「……それは」

「…何故、君達革命家は、別段、気にしていない人や認識していない人や知らないでも生きていけると思っている人の方が多いのにそれを無視して“秘された記録”を暴こうとする？革命軍幹部の君に尋ねよう。“今”の何が悪いのか。“昔”を政府が隠した事が何が悪いのか。“それ”を隠すことで混乱が無くなり、ある一定の秩序が生まれた。その事実を、君達は否定するのか。既存のものが当た

り前だと思っていて、何も知らない“一般人”の事を考えているのか」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ねえ、革命は『何のために』、『誰のために』？」

くすりと微笑みながら、歌うように節をつけて言う。
静かに耳を打つ、それは痛烈な皮肉。

「私には君達が好き勝手に暴れているようにしか見えないね」

「それは、違う！」

それは絶対に違うのだ。

私達は、
違う！！

「違わない。“一般人”から見れば君達なんてそんなものだ。君達の行為によって“関係もない一般人”の人生や生活が失われていくのだから。なあ、君は、革命軍は“世界を革命”して人を救うのを目的としているのだろうか？ だったら何故、蔑ろにする。

自由を謳い、平等を謳う、革命軍。 答えろ、革命家」

「蔑ろにはしていない、と言っても君は信じないだろうな」

冷気が明確な殺気を伴い、首筋に刃物でも突き付けられているような感覚が身を襲う。

もうこの問答は無用ということだろう。しかし、私は一つだけ思わず苦笑した。

ここまで、敵である海兵と話したのは初めてだ。

多分、これから先にはない出来事だ。続けて言葉を紡いだ。

「世界規模の体勢というのは大きく、根本から変えなければ意味がない。しかし、大きいものを変えようとすると波や渦が生まれる。革命には全く無関係な人々を巻き込んで、私達がした事の影響を受け、苦しみ、死んでいく、人間がいるのを知っている。恨まれていると知っている。それでも私達は前に進む。諦めることは絶対にならない。そんなことは私達の犠牲になった者に対する最大の冒涇だ。この道の為に弾き飛ばした人間に、誓ったのだ。犠牲も、絶望も、飲み下して事を成す、と」

この道の為に積み上げてきた、全ての人間に対する誓い。
その思いはこの胸にある。

ゆっくりと戦闘準備を整えながら、笑みを殺して、見栄を切る。

「私は世界を革命する」

その言葉に、翡翠の瞳は鮮烈な光を宿す。

貴族的な容姿に不似合いな、似合っているような寧猛な笑みを描く。

「上等」

その言葉が、最後の引き金だった。

SIDE：シャルロツテ

風が耳障りに屈折する。

しょきん、とハサミが閉じられる音とともに。

ハサミをかわし、受け流し、迎合させながら前に詰める。
剣とハサミがぶつかり合い火花が散る。

・・・良品で名剣だから刀身は歪んではないだろうけど、
与えられた衝撃が腕をしびれさせてくる。

これだから、男はずるい。

私だって海兵として鍛えているし、簡単に負ける気もないけれど、
性別の違い、その身体能力の差異は簡単に埋められるもんじゃない。

まあそれだけなら、戦術で計略で埋められる。
いや、埋めてみせるけど。

にいと口角を緩め、地面を蹴りとばす。
ハサミの腕を振るうには近すぎ、迂闊に戦闘が出来ない距離に走る。
計算していた通りに懷に潜り込んだ。

首を串刺しにしてやろうと、剣を突きだす。
避けられない、筈だった。

しかし、首元を狙ったそれは弾かれる。
どうやら無理やりハサミを振るったらしい。
ピリッとした感覚が首に生まれる。

お互いの首に紅い一筋の線が引かれた。
迫るハサミをもう片方の武器である短剣、もつとも刃は分厚く切っ
先は鋭い肘の長さまでもある、で防いで、射程距離圏内から飛びの
いた。

首からはだらりと紅い血が流れ始めている。

「・・・残念」

サングラスの下、見えない瞳がこちらを見据える。
警告の様にしゃきんと、またハサミが鳴る。

「お互いにだよ、シザーハンス」

ふゆると冷気を纏わせながら、双剣（一つは短剣だが…）を構えなおす。

さて、どれが最善で自分に有利だろうかと頭を回す。

ここで、勝つまで粘るのもよし、マーリン達が来るまで防戦に徹するもよし。

私には時間と選択肢は無数にある。

しかも、どの選択肢を取っても、どう転んでも、この勝負は、

「しかし、勝利は私達^{われら}のものだ」

海軍の勝ちだ。

まあ、君はさっさとインペルダウンに案内しよう。

そこで、この島の人達に贖い続けてくれたまえ。

それが捕まえられた君に出来る唯一の償いだ。

革命家、イナズマ殿？

三十六話 シザーハンズと呉藍の准将（後書き）

主人公のシャルロッテだって強いんですよ。と書いてみます。

一応、軍艦を率いてる身なので普通に海軍の中でも強いんです。

能力の相性が噛み合えば、自分より上の強さを持つ人間とも互角に戦えます。

次回も頑張ります。

次は何故、下っ端が暴走したかの訳が説明されます。

三十七話 隠された裏側を覗き見る（前書き）

こんな事があるのかもしれないという事。

どっちが正しいのか。

全てが分かったのが事件後だったのが惜しい所。

大きな組織の裏側はちらりと見ただけですが、黒に近いものがありました。

そんな話。

三十七話 隠された裏側を覗き見る

SIDE：シャルロット

革命家達をインペルダウンにぶち込んで一息をついていた時、話された出来事のせいで私は爆弾で襲撃された気分になった。そんなブルーな私の心境を無視しても事は起こるのだ。もう、なんだかねえ・・・って感じた。

「何故、下位組織が暴走したのか、分かりましたよ」

何時もの笑みを顔に描いたまま、軽くマーリンは告げる。業火の炎の様な深紅の瞳はこれっぽっちも笑っていない。

「正確にはレティシアが記憶を“見た”のですが」

「…レティが見たなら、確かな事なんだろうね」

有無を言わさないマーリンの口調に私はそう、告げるしかなかった。髪を耳にかける。

そして、尋ねた。

「それが公表されていないって事は、そういうことなんだろう？」

理由が公表されていないってことはどうしようもない裏があるという事だ。

しかも、政府や“上”にとって都合の悪いこと。胸糞の悪い事があるのだ。

しかも、今回私は裏を知っている。

「ええ、そういうことです」

「じゃあ、執務室で聞こう。・・・此処じゃまずいだろっし」

こんなのは誰が聞くとも知れない資料庫で話す会話では無い。
一定の位以上の士官にしか貸し出せない資料を手に取り、
立ち上がると、マーリンに資料を取られた。

おい。

手持無沙汰になった私の慥然とした顔に気付いたのか、
マーリンはにつこりと笑みを深めて、

「私は貴女の副官ですから」

言い切られた。

心なしか、先ほどよりも本気の響きが籠っているような感じがする。
口元が僅かに引き攣るのを感じる。

マーリン・・・？

「人目につく中で貴女の側にいるのに貴女に荷物を持たせるわけに
はいきません」

にこにこ人懐っこい笑みを顔に張り付けて微笑むマーリン。
やんわりとした言い方なのに、拒否を認めない強さがあつた。
髪をかきあげ、文句の言葉を飲み下して、告げる。

「じゃあ、執務室まで頼むよ。マーリン・ウォーロック大佐」

「仰せのままに、シャルロツテ・アルトゥル・フォン・エーデルシユタイン准将」

わざとらしく、畏まっていつてみたら、しれっと返された。

それに若干、へこんだ。

この男、そつがなさすぎる。

S I D E：レティシア

「能力を使つた後の精神的にぐったりしたレティちゃんの姿を見るたびにボク、楽しくなるわぁ」

医務室で、特殊な嗜好をもつ軍医は笑った。

本来のハニーブロンドの髪じゃない、染色してマーリンの様な色にした髪。

眼鏡の奥の紅茶色の瞳が愉快そうに細まる。

そんな姿も気にならない程度に顔は整っている。

美形の特権だ。

しかし、ムカつく。

その笑いを誰か崩して欲しい。

思わず居やしない神に祈るくらいにはムカつく顔だ。

冷やかな視線で見詰めてもただ愉快そうに笑うだけ。

……相変わらず、腹がたつ。

ダーガー・ベンジャミンという男は。

「うるさい、ダーガー。さつさと薬を寄越しなさい」

そう言葉を投げ付けると、ダーガーは大袈裟な仕種でそれに答えた。

「なあ、レティちゃん…ちゃうやんなあ？ちゃんと言わなあかんでボクとの約束やん」

……あれが、約束なら世界は約束で満ちているだろう。

そんな無茶苦茶なものだった。

けど、目の前の滅多にないイントネーションで話す男は言わないと動かないだろう。

今までの経験が告げている。

一つため息をついた。

「……………、イー　い」

「ボクが聞きとれる声でゆうてな」

「……………ベニー先輩」

「その言わせられてる感もかわええよ、レティちゃん」

あんたが言わせてんでしょうが！

「ほい。…医者に言わせてもらえば能力を使うのやめて欲しいんやけどな」

男にしては細く長い指が処方箋をつまむ。

取りだされたそれを手に取った。

「…そんなわけにはいかないでしょ、馬鹿」

「使ったびに体調崩すのか？ マーリンくんになんか言われとるんだったら、ボクが言ったつてもいい。…無理やり使わされとるんなら医者としても男としても許せへんねん」

落ち着いた口調だからこそ、冷たさが際立って目立つ。

この男の本質は、冷たい。見かけはひどく温かく見えるのに。自分の認めたものしか受け入れようとしない質のせいだ。けれど、一旦懐に入れてしまったら、この男は暖かい。

質の悪い二重人格の様な性質を持つ男。^{たち}

この純粹過ぎる思考を持つ男は、私にとっても暖かさを与えてくれる。それもこれも皆、性質が悪い。

この男は、変な所で子供みたいだ、と思う。
変な所でひどく真っ白で真っ直ぐで。

好きなものを好き、嫌いなものを嫌いと言える。
欲しい物は諦めないし、そもそも諦めるという考えがない。
そして、

（好きなものを取られるのが死ぬほど嫌い）

思わず目を伏せた。

私はどうやら好きなものに含まれているらしい。

「無理やり使われてるわけじゃないから、…大丈夫よ」

「ふうん。…まあ、ええわ」

フツと目の前の男は笑う。

「けど、マーリンくんに個人的にお話できたわ」

「はっ？」

「安心しいや。レティちゃんには関係ない事やから」

安心できない・・・。

はっはっはと笑い声を上げるこの男が怖い。
久しぶりにこの男を恐ろしく感じた。

SIDE：マーリン

背筋に悪寒がした。

・・・嫌な予感がする。

「マーリン？」

「え、あ…すいません。先ほどの事です」

「大体想像はついてるよ」

そう苦笑して彼女は髪をかきあげた。
何よりも紅い髪がキラキラと煌めく。

「ドレーク少将も何かに感づいているけど、何も知らされていない。これは私もそうだよ。中将以上でないと教えてもらえないみたいだ」

なあ、マーリン。

「レティが見たのは、見てはいけないモノだったのだろうか？」

それは問いかけというよりも確認で。

私の一瞬のリアクションで、それは悟られてもう、彼女の中では確信になっていた。

「…は、い」

真っ直ぐな瞳を見ていらなくて視線をそらす。

この人は、誰よりも聡い癖に誰よりも真っ直ぐな目を持っている。それはとても好ましい事だけど、時々純粹過ぎて見つめられなくなる。

誰よりも老成してる癖に、子供の真っ直ぐさを持ち続けているのだ。

時々、その翡翠の瞳に飲みこまれそうになる。綺麗で純粹で真っ直ぐな、ソレに。

「じゃあ、上官命令だ。

忘れろ」

あっさりと彼女が告げる。

それが至極当たり前の事のように。言葉を紡ぐ。

私の少し驚愕した顔を見つめながら、言葉をつづけた。

「上の人間しか知らない事を知っているのはまずい。下手をすれば消される。それに予想もあるんだ」

「それは……」

思わず、声を荒げる。

しかし、反論をする前に流された。

「異論は認めない」

「……わかりました」

「……うん、ありがとう」

はにかむ彼女を記憶に刻みながら。

レティシアに教えてもらった情報を脳内で繰り返し続けた。

彼女はどこまで知っているのだろうか？

あそここの島の領主が島内の見目の良い子供を攫って（買って？）奴隷にしていた。

それを親も黙認。黙認出来なかった親は追い出された。

それを知った若い革命家が激怒し、立ち上がった。

その結果、島は燃やされ、海軍が来た。

領主は死んで、革命家は監獄に送られた。

子供たちは保護され、保護施設に送られた。

そんな事実があったのだ。

笑えてくる。

こんな事は表に出せない。

海軍が気付けなかった事実を革命家は知って行動したのだ。もし、コレが知られたら民衆は何を思うのだろう。

だから、きつと、忘れた方がよいのだろう。

私がいもし上層部にいたらこんな事を知っている下っ端はいらない。消されはしないとは思っけど、確実に目をつけられる。

そんな面倒な事は御免だ。

（革命家よりも海軍が事実早く気付けていればコレを隠さずに済んだのだろうな）

ふと、そんなことを考えた。

三十七話 隠された裏側を覗き見る（後書き）

先輩の言葉使いが似非だと思いますが気にしないでください。

そして、これからも頑張ります。

三十八話 ブルーな准将の話（前書き）

意外ともろいメンタルの持ち主。

自身で選んでるけど、それだけじゃ割り切れないものもあるよね！

三十八話 ブルーな准将の話

SIDE：シャルロッテ

笑って倒れた男の血に汚れた、小さくか細い子供に手を伸ばした。

細いというにはやせ過ぎであちこちぼろぼろな体。

さんばらのこげ茶色の髪に、擦り切れた衣服。

細い首に取りつけられた古びた首輪に巻き付いている錆つき綻びかけた鎖。

何時から、ここにいたのだろうと背筋がぞくりとした。

貞子の様な前髪から僅かに覗く鳶色の瞳は何の光も写っていないかった。

痛烈な既視感。見覚えのある姿。

私の人生の中で一番おぞましいの記憶のふたが開く。

“早く助けなければならぬ”と心と過去の私が言う。自分の経験で分かる。

この子供は、壊れかけている。
だから、思っただ。

この子供は昔の私だ。

お父さんに助けられる前の、私なんだ。

腕を伸ばして抱き留めた。

痩せっぽつちで骨でこつこつして、羽毛の様に軽い体に泣きそうになる。

どうして？

子供が、こんな目にあうの？

何故、踏み躪られなきゃいけないの？

私にはただ、子供を抱えなおすことしかできなかった。

目が覚めた。

どうやら、仮眠室で寝てしまったらしい。

仮眠室特有の硬いベットから起き上がり、のろのろと着替える。
執務室に向かう前に顔を洗う。

蛇口を閉めて顔を洗う。洗面台の姿見の中の女は酷く青白い顔をしていた。

血の気の失せた顔。青ざめた唇。

・・・ひどい顔だ。

「っう・・・！」

気持ち悪い。

腕を洗面台にひっかけたような形で膝をついた。
目眩がする。

あのような光景が夢に出てくるといつもこうだ。

どうしようもなく、弱くなる。

何拍か目を瞑った後、立ち上がる。

姿見に映る女の顔は、泣きそうに歪んでいた。

どうにか、顔色を治した後、執務室に入る。

「おはようございます。准将」

「・・・おはよう、エリザ」

綺麗に整えられた長い髪を背筋に流した綺麗な女性。
秘書のエリザベートだ。

につこりとした笑顔が輝かしい。

「はい。朝食は先ほどドロシーが持って来てくれました。准将がお目ざめになったので今から紅茶を入れますね」

こついう事が簡単に注文できるのが上級士官のいい所なんだろうか。
焼きたてのクロワッサンと目玉焼き、ツナサラダにデザート代わりのヨーグルト。

・・・美味しそうだが、食べきれんだろうか。
自分で持ち込んだアッサムの茶葉のいい匂いがする。

「ありがとうございます・・・今日のスケジュールは？」

「ええっと、本日の業務は・・・」

ぺらりと書類をめくる音が部屋に木霊する。

朝食を見苦しくない程度の速度で食べながら確認を取る。
ちよっと詰めないと厳しいが昼休みは長く取れそうだ。

「昼はちよっと、人に会いに行ってくるよ」

「はい、わかりました」

時間を私が絶対に守るのを知っているからだろっか。
間髪をいれずに首肯された。

「じゃあ、今日も頑張ろうか」

SIDE：おツル

「シャルロッテ、言わなきゃわからないよ」

「・・・・・・・・」

ぎゅうつと黙ったまま、ズボンの布を掴む。

うつむいた姿は普段の凜とした態度とは違い酷く儚い。

とてつもなく脆く、弱い姿。

それを周りに悟られずに人払いしてみせた手腕は素晴らしいものなのだろう。

この花盛りの少女が身につけるものではないが。
身につけざる得なかったもの。

どちらにせよ、本来の心根を知っている人間にとって、痛々しいとしか思えない。

仮面をつけるのが上手くなった。

笑顔で、相手を退けられるようになった。

そんなもの、普通に生きていればいらないものだろうに。

漸く、覚悟が決まったのか、ぽつりと言葉をもらす。

「おツルさんは、」

俯いたまま、視線を上げようとしない、シャルロッテの言葉を待つ。
幾拍かの沈黙の後、言葉を紡ぐ。

「迷ったりはしないのですか？」

ようやく絞り出したのであろう声は、か細い。

「・・・どうして、こんなんでしょう？お互いに守りたいものは同じ筈なのに。手を取り合えず、血を流しあう。・・・その結果、守りたいものが傷ついて、死んでいく」

淡々と、淡々と自身の思った事を呟いていく。

「守ろうとして、自身の犠牲をいとわない。 あの革命家
も、そうでした。守りたいものを、守って、笑いながら倒れた所を
捕縛しました。・・・人道的に見れば、正しい事をしてたのに」

今日、初めて真正面から見た瞳は僅かに潤いを帯びていた。

「それから夢を見るんです」

「夢？」

「革命家に助けられた、血濡れの子供の夢を」

仄暗い光を宿したまま、シャルロッテは続ける。

「あの子供はあの革命家おとこに助けられて、救われました。それなのに、
私が奪いました。子供の救世主たいうを奪いました。 取り上げまし
た」

すくわれたことにとってのたいようのおおきさをだれよりもしていたのに。

泣きそうな顔で、笑う。

「壊れかけた初対面と。それを知った時の子供の目が目にこびり付いて離れないのです」

ねえ、おツルさん。

「助けられなかった海兵と、助けた革命家。どちらが正しいのでしょうか？」

シャルロットは笑った。

綺麗に整った顔に自嘲にかたどられた微笑みをのせて。

「だったら、お前は どうしたいんだい？」

「どうって・・・？」

「そこまで知っても、海軍（こい）にいるのなら、もう決めているんだろう？」

そつと頭をなでてやる。

それに少し伏し目がちになる。

「泣きたいのなら、クザンにしてあげ」

「でも・・・」

「でも、じゃないよ。少しはあの子に父親としての行動をさせてあげ」

また、俯いてしまったシャルロットの頭を撫でる。

「シャルが頼ってくれない、と嘆いていたからね」

真っ赤な耳をした少女はぐっと黙って、そのまま頷いた。

三十八話 ブルーな准将の話（後書き）

この小説の海軍の将官は一定の地位以上だと執務室の横に仮眠室（小さいシャワー室兼トイレ）があります。注文すると、食堂の料理をデリバリーしてくれます。

それと、前話で彼女は予測はあるけど知らないと言っていました。が、それは嘘です。捕縛する時に目の前にいたので全部知っています。部下を巻き込まないためにあえて知らないふりをしていました。

これから更新頑張ります。

三十九話 人間墓穴を掘ると大体こんなん（前書き）

最初の方にはちよつと自爆したシャルとなんだかんだで面倒見のいい先輩がいます。

したたかな人になつた人もいます。

表現的にはセーフなはず・・・。

では、どうぞ！！

三十九話 人間墓穴を掘ると大体こんな

SIDE：シャルロッテ

今、すごく穴が欲しい。

むしろ穴をよこせ。私を埋めてくれ。

そつ目の前の医者に零すと、医者は笑い。

「シャルちゃん、落ち着きいや」

これでも飲んでと、暖かい液体の入ったマグカップを手渡された。
白い湯気が液体から立ち上る。

「…ありがとう」

「どーいたしまして。それより飲んでみて、自身作やねん」

のほほんとした声にマグカップを傾ける。

白い液体は思った以上に甘かったけど、舌にちょうどよく温かく、
喉越しもいい。

普通に美味しい。

というか、これ・・・

「ミルク、だよね・・・？」

「おん。ホットミルクや。はちみつ入りの」

けたけたと、笑う医者の方。

「神経を穏やかにする成分がミルクには入ってるし、色々疲れとる様に見えたシャルちゃんには調度ええと思ってな」

「…そんな風に見えた？」

「開口一番に穴が欲しいなんて言われたら、察せられるわ。この子、疲れてんねんなあ…ってことぐらい」

うつ、グウの音も出ない。

全部本当の事だし。事実だし。

「まあ、ボクは先輩やし、頼ってくれたんは嬉しいけどな」

「それはどうも……」

ぼつりと言葉を落とすと、先輩はにんまりと口角を上げた。

殴りたくなる位には、イラッとする顔だ。

「どーせ、デレた自分を冷静に思い返して、テンパったんやろ？」

八割あたり。

つまり、殆ど凶星。

「デレてなんかない……！」

「でも、父親に会いに行ったんやろ？」

「うつ……！」

言い返せない。

というよりも何でそこまで知っている！？

「そりゃ、ボクに不可能はないし」

そんなの、知らないんだけど。

「まあ、ウソやけど」

誰か、あの男をぶん殴ってくれ。
すっごい、イラッとする。

「嘘か・・・」

「それが、ウソかもしれんけどね」

どっちだ、馬鹿。

「まあ冗談はさて置いて、何で来たん？シャルちゃんなら、他の場所の子も歓迎されたと思うんやけど？」

「何でって・・・」

心底不思議そうな顔をして、尋ねてきた。
本当に何故？みたいな疑問を含めた声色で。

「一番鋭いマーリンが貴方のことを苦手だからですよ、ベニー先輩」

さらっと、答えたら。

一瞬キョトンとした後、爆笑された。

それに、こちらがキョトンとした。

「っあははははっはっは！ーマジで！？そんだけの理由で此処に来たん？」

「そうですね、何か問題でも？」

「おおありやん！ー！」

さりげなく、カップが取り上げられ、机に置かれる。
トンッと腰掛けていたベットに押し付けられた。

「ボクがこんなことするって、問題があるやん！」

SIDE：ベンジャミン

可愛い容姿（普段は澄ました表情が多いから綺麗系だと思われるけど）の、後輩を押し倒してみた。

きょとりと見上げてくる蒼緑の瞳が愛らしい。

誰が見ても、目を奪われる。

そんな、整った容姿をしている。

「・・・えっと、何でしょうか？」

心底、不思議そうに尋ねてくる。少し高めの澄んだ声。
紅い髪が白のシートにぱらりと広がっている。

「何って、押し倒してるんやけど？」

「ベニー先輩…、ふざけ過ぎですよ」

少し眉根をよせて、困り顔。

その顔も可愛い。

けど、押し倒された女の子のリアクションじゃない。

動揺はしてないけど、困惑はしてる。

そんな感じ。

「ふざけてへんって言ったら？」

「やられる前にやります。けど、先輩」

しれっと恐ろしい事を投げつけて、言葉を紡ぐ。

貴方、嘘つくの下手ですよ。

真っ直ぐな瞳に射抜かれた。

「なんで、・・・そう思ったん？」

「目が、違います。私はそんな目の人が戯れにこんなことをするとは思わない。それに、」

「それに？」

「私を誰だと思っているんですか？」

これは誰だ？

少なくともボクはこんなに冷たい光を目に宿した後輩を見た事がない。

「私、シャルロッテ・アルトゥル・フォン・エーデルシュタインはあの家の後継者ですよ？コレくらいのこと見抜けないなんて、ありえません」

歌うように軽やかな声。

花の綻ぶような美しい微笑み。

ただし、鋭い刃と甘い毒を備えもった。

したたかな貴族の後継者の姿。

「そっか」

シャルちゃんの上から退いて、椅子に腰かけなおす。
シャルちゃんもむくりと起き上がった。

「・・・残念ですね、貴方の目は私、好きなんですよ」

「冗談やろ？」

につこりとてつもなく綺麗な笑顔で言われるがどきりもしない。
実はとてつもなく意外な一面を知ってしまったからだろうか。
したたかな女の子。

「友達の目の色に似てるんですよ」

それなのに、その言葉の時だけ普通の少女の様に笑う。
さっきの笑顔よりも今の笑顔の方がいい。

「だったらマーリン君に頼めばいいんじゃないんちゃうん？」

その言葉に、瞳の色が濃くなる。
ぞくりとするような感覚。
飲みこまれそうな位、深く、鮮やかに輝く。

「マーリンには頼みませんよ。・・・似てるようで真逆です」

「だから、ボクなん？」

「はい。それに、貴方はレティが好きなんでしょう？安全牌です」
まいった。

この後輩には敵わない。
思わず、ひらりと両手をあげた。

SIDE：マーリン

「で、貴方達は何やってるんですか？」

紅い髪と、染色した髪が医務室にいた。

「世間話し」「」

お互いになつこりと微笑む。

薄ら寒いと思ってしまったのは私だけだろうか。

「じゃあ、先輩。そろそろお暇しますね」

「おー、また来てな」

ゆるりと挨拶を交わし、シャルは部屋を出ていく。追いかけてよとすると、背後から声が掛けられた。

「マーリン君」

「なんですか、先輩？」

「レティちゃん。次、へこましたら殴んで」

ぞつとするほど温かみが抜けた声で。

弾かれるように振り向くと、その声の主は笑っていた。なあ、マーリン君、

「ボクだって、怒ることぐらいあんなんで」

「……肝に銘じておきます」

そう返すと、先輩は笑って背を向けた。

私は、ふと思う。

私達の世代の上下はこんななづか・・・！それは今更どうしようもない、事実だった。

三十九話 人間墓穴を掘ると大体こんな（後書き）

ちっちゃい頃から貴族みたいに裏表激しいところにいたら、こんな一面あるよねって話。

あと、先輩、レティに意識してもらう為だけにレティが一番苦手なマーリンのように銀髪に染めたという裏設定があります。

これからも頑張りますね。

四十話 第六感で何かを感じる事ってあるよね！（前書き）

ちよつと、いやな感じのエースがいます。

お前も人と重ねてんじゃないって感じ。

恋をしたことに気づいたらこういう奴って真っ直ぐだよなってことを言いたかった。一般市民から見たら、凄く荒っぱいけどね！！

四十話 第六感で何かを感じる事ってあるよね！

SIDE：エース

隣で眠っている女の赤毛（といってもくすんだ赤茶という色合いだ）に触れてみる。

痛んでいるのか途中で引っこかり面倒になって腕を引っ込めた。これも違う。

あの女の髪はもっとさらりとしていた。そこまで、考えてげんなりする。

紅い色を見るたびに、あの海兵と重ねている自分があるとさらに自覚したからだ。

炎の様な紅。^{あか}

鮮やかに世界を彩るまあかな色。

太陽が水平線に吸い込まれ、染まる。その時の色。

あのあかは何で出来ているのだろうか。

いくら紅くても赤黒い血の色じゃない。

一片のくすみの無い透き通るようなあか。

最初は宝石の様だと思った。

ルビーとかスピネルの類の赤い宝石。

でも、実際にそれを手に入れてみると、気にいらねエ。

記憶の中のあの海兵と^{おんな}少しも重ならない。
むしろ宝石の方がくすんで見えた。

嫌気がさす。あのあかは拙い^{ます}。

怖気がするほど、美しい。

それは認めよう。

どうしようもなく綺麗だった。

キラキラと輝く髪の色。

目を奪われる、紅い色。

手に入れたくなる、紅い色。

目に焼けついて離れない。

普段なら、笑ってごまかせるのにごまかせない。

あかを見るたびにあの海兵の面影が浮かぶ。

気に喰わない。

知っているからだ。本能的に理解したからだ。

あの女の目には対峙でもしない限り俺は映らない。

俺があかを見るたびにあの女を思い出しても。

あの女は炎を見ても俺の事なんか思いださねエだろう。

炎の俺に焼き付けさせるなんて、すげえ海兵^{おんな}。

そんな冗談が冗談で無くなってもう何か月なのか。

俺には分からない。

ただ、どうしようもなく。

欲しい。

あれが欲しいと何かが蠢く。

手を伸ばしても届かないだろうと知っている。

そんなこたあ、とうの昔に知っている。

それでも、手に入れたいと望むのは、

俺が海賊だからだ。

手に入れがたいものこそ、欲しくなる。

行く手が険しい方が楽しくなる。

その険しい過程を踏破した後の方が気分が高揚する。

何より、すぐに手折れる花よりも

高嶺の花を手折る過程までの方がやる気が出る。

そんな男たちが海賊と呼ばれるからだ。

まあ、なんだ海兵さんよ、厄介な海賊おじいに目をつけられたと諦めてくれ。

俺は、逃がすつもりはまったくねえんだ。
だから、覚悟はしておいてくれ。

海賊は欲しいモノは確実に奪おうとする生き物だってことをさ。

SIDE：シャルロット

「・・・なんか、寒気がします」

そう呟いたタイミングが悪かった。

それだけだと私は断言する。

それが久しぶりにお父さんやおじい様と夕食を食べている時でなければ、

何事も無く終わったことだった。

しかし、実際には夕食の時にそれを言ってしまい。

過保護な二人の手によって、ベットに寝かされている。

磨き抜かれたマホガニーのサイドテーブルには水差しとコップと菓
が並べられている。

溜息が零れそうになった。

「何でこうなるんだろう」

「御屋形様は、お嬢様のことを大切に思っておいでですから」

しれっと返したのはメイドの一人。

マリンフォードのエーデルシュタイン家の館で働いている若い女人
だ。

丁寧な所作でおでこに乘せられたタオルが変えられる。

「・・・それでも、限度があるだろうに」

「シャルロットお嬢様。御屋形様は貴女を手中の玉のように思っ
ておいでです。そして、お嬢様はエーデルシュタインの列記とした後
継者です。これぐらい心配してしかるべきですわ」

それに答えたのはメイド長のホン・ラン。

若い頃は相当の美貌の持ち主であったであろうと分かる理知的な顔
立ちをしている。

白い髪に涼やかな目元。

仕事も素晴らしい腕前で、理想的な人だ。

「ラン・・・」

思わず、声をかけると。

「何より、一度何の前触れもなく御屋形様達の前でお倒れになった前例がありますから」

凄く、手厳しいけど。

ひつくつと口元が思わず引き攣る。

そんな若干薄ら寒い空間を切り裂く様な声がした。

「シャルロッテ、具合はどう？」

「お父さん……」

ナイスタイミングです！

言葉に出なかったけど、内心そんな感じだった。

「ラン、下がって」

私の心境を察したのか、黒い眼差しを伏せて、しとやかに頭を下げた。

側に控えていたランの部下のメイド達も頭を下げる。

「承知いたしました。何かあればベルをお鳴らしくください」

頭を下げたまま、ランは言う。

「あと、クザン様。お嬢様をあまり疲れさせないでくださいまし」

若干下がったトーンで言った後、ランとランの部下は静かに退出し

た。

やっぱり、ランはお父さんを認めさせていないらしい。
今度こそ、私は溜息をついた。

四十話 第六感で何かを感じる事ってあるよね！（後書き）

これからも更新頑張ります。

後、メイドのランさんはシャルロッテの祖父の幼馴染という誰得な設定があります。

四十一話 海兵でも驚く事は・・・普通にある。(前書き)

性格がひん曲がった医者と曲がっているようで意外とまっすぐな異母弟。

煙に巻かれた能力者と気付かずに祝福する上司。

そんな話。

四十一話 海兵でも驚く事は・・・普通にある。

SIDE：マーリン

「貴方ほど性格の悪い医者を私は見たことがありませんよ」

そう吐き捨てると、目の前の医者にはやりと笑った。

私と似て否になるあかの瞳が猫の様に輝く。

医術のテンサイ、Mr・マッドの異名を取る医者はびくともせず、口を開いた。

「ボクもマーリン君みたいな性悪見たこと無いわ」

(どこがだ・・・)

少なくとも、かぶった猫の大きさならどっこいどっこいだ。
げんなりとしつつも声を出す。

「あの女を手に入れる為に髪まで染めて、捕まえた酷い男が何を言いますか」

「それなら、しゃあないやん」

欲しかったんやもん。

くすくす笑いながら告げる男に怖気を感じる。
欲しいから、自分の手に落ちてくるように仕組んだ底意地の悪さに笑えない。

「マーリン君かて、止めへんかったくせに」

「止める必要が無かっただけです。貴方には関係ない」

「お馬鹿やなあ。…大切なものは目に見えへんのに」

キミ、いつかきつと大切なもの取り落とすわ。

そう、医者が笑った。

医務室から出て、廊下を歩く。
最悪な気分だ。

士官学校の時分から、あの医者は変わらない。
何でも知っている癖に何も知らないふりをする。
いつそ、頭でも打って死ねばいいのに。

大切なものを取り落とす？

そんなの、

「もう、体験してますよ・・・」

あの時に、手を伸ばさなかった自分のせいで。

あの時、臆病だった自分のせいで。

あの人の心は完璧に件の赤毛のものになってしまった。

まだあの人が、気付いていなかったあの時なら、

何かがどうにかなったかもしれないのに。

自身の気持ちが叶うとかそういうわけなくて。

あの人があの赤毛に縛られないで。

あの人が泣かなくてよかった未来があつたかもしれないのに。

「馬鹿馬鹿しい」

今更、そんな仮定^{IF}の話なんてしても意味がない。

それなのに、そんなおろかな事を考える私を貴女は笑うでしょうか？

嗚呼、でもこんな仮定こそが・・・

「ありえないのに」

頭を振って、気分を入れ替える。

ありえなかった結果を考えるよりもあるかもしれない未来を考える方が有意義だ。

・・・絶対に。

SIDE：ベンジャミン

「あゝ、おもしろいわ」

くすくすと喉の奥で笑う。

猫をあんなに簡単にはがすとはまだまだだ。

甘っちょろくて笑える。

あの異母弟^{おとう}はまだ完璧に非道で冷酷にはなれないらしい。

『・・・何を笑っているのですか、ベンジャミン』

透き通る様に美しいのに冷たい声が受話器から伝わる。
琥珀の瞳を持った女性は手厳しい。

思わず苦笑した。

「ボクの異母弟おとういは、まだ甘ちゃんやなあと思ってる。アンヌ異母姉ねえさん」

『私に言わせれば、貴方達二人とも甘いですが』

「ボクは家を継ぐ資格ないし、マーリン君は異母姉ねえさんが業としてるんやろ」

そうでなきゃ、あの子はもつと冷たかったわ。そもそも、あの子を何に使う気やねん。あの子は、ウォーロックであって普通の一面も手に入れられた子なんに。そう吐き捨てた。

ボクはあの子が普通の子の様に笑えるのを知っている。
それは、あの家では奇跡の様な事で。

『 貴方は確かに私の血縁おとこですが、ウォーロックの血を引いていないでしょう』

今のは家の事に首を突っ込むなという意味だった。
冷たく釘をさしこまれた。

あの子をどうするつもりなんだろうか。

・・・まあ、ウォーロックの姓を持っていないボクには何もできないだけだ。

「せやね、異母姉^{ねえ}さん。ボクは入り婿^{ねえ}やった父さんの妾^{ねえ}の子やもん」
そう笑うと溜息をつかれた。

『…マーリンにあまり干渉しないように。あの子は貴方みたいに悪食ではないのです』

「ひどいわあ。ボクはマーリン君程、悪食じゃないんに」

ボクは、エーデルシュタインの子供に恋をするほど無謀じゃない。そう告げると冷ややかな声に返された。

『…本当は異母弟^{マーリン}の事が好きだった女子^{おな}の自覚していない気持ち^{おな}を当人に諭さずに手折って自分のものにした貴方がそれを言いますか』

「えゝ、ボクはそんなこと知らんよ。レティちゃんがボクを選んだんやもん」

『…相変わらず、性悪ですね』

選択肢も与えなかったくせに、と異母姉^{ねえ}さんの声が呆れたように呟く。

自覚させたらあかんかったから、しゃあないやん。

絶対に欲しかったんやもん。始めて欲しいと思った女の子なんやもん。

喉まで出かかった声を押し込む。

「…こうでもせんと生きてられへんかったし」

『でしょうね』

間を開かずに淡々と突っ込まれた。
腹の奥で何かが蠢く。

ボクが苦勞したんはキミの家のせいやろうが。
苛立ちを籠めて、舌打ちをした。

SIDE：シャルロット

その言葉を聞いた時、思わず目を丸くしてしまった私は悪かないと思う。

・
・
・
・
・

コレくらいの沈黙が部屋に落ちた位の爆弾だったから。
完璧に予想外なダークホースだった。

「
すまない、なにがどうしてそうなった」

「私もわかんない・・・」

不思議そうな顔をするレイシアにため息をつきたくなった。

心なしか、頭痛がするような気もする。

家や仕事関係では感情を表にほぼ出さない私にこれだけダメージを
与えるとは、

・・・66期生とその上下の学年は灰汁が強いうえにキャラが濃い
奴が多すぎる。

ため息を押しこんで、尋ねた。

「で、レティ。何でそうなった？」

君、あの人の事嫌いじゃなかったっけ？
そう尋ねたら、

「苦手なだけで嫌いではなかったけど、いつの間にか付き合うこと
になってて」

自分でも心底、理由が分からないというような不思議な声色わげだった。
そんなレティにあきれた。

でも、まあ、人の色恋沙汰に首を突っ込むのは避けたい。全力で遠
慮しよう。

そんなことをつらつらと考えていたのに、気付いたら

レティ、君は

「・・・しあわせ？」

そんな言葉が零れ落ちてきた。

私の言葉に驚いたようにレティの綺麗な瞳が見開かれる。
それに、私は

（あ、まつ毛長いなあ・・・）

そんなことを思うくらい混乱していた。

「
しあわせよ」

そう言って、僅かに笑みを浮かべた顔はなんの銜いも含みも無くて、
綺麗で。

今まで見た中で一番、幸福そうだった。

「そう、ならいいんだ」

それを見て、私はようやくほっとした。

これなら、レティは平気だと思った。

あの人はレティの事が好きだから、絶対に守るだろう。

歪んでて捻くれてるくせにそんなところだけ真っ直ぐで。

どこかマーリンに似た面影のあの人。

レティが退出していくのを見届けて、私は夕刊の新聞を手にとった。
今は書類がひと段落ついて昼休みが流れた分の、中休み中なのだ。
だから、仕事に関係のないこともしてOKだ。

読書は時間的に無理だから活字は新聞で補おうと経済面を流し読み
して、一面を見た。

心臓が止まるかと思った。

『“火拳”のエース、白ひげの配下に!!』

なんじゃ、そらあ。

思わず、じつと記事を見つめていると内線がなった。

どうやら、私の休憩はこれで終わりらしい。

やっぱ、死ね火拳。

そして、私の十二時間ぶりの休憩を返せ。

四十一話 海兵でも驚く事は・・・普通にある。（後書き）

実家から戻ったら部下にお付き合いの報告をされた上司と、煙に巻かれた部下、全部に気づいてる医者、気付いていない異母弟。

全部知っていて言わない医者と知らないけど何かに気付いている上司と何も知らない異母弟。全員たちが悪いという話。
全員何らかの形で不幸を背負ってる。

これから頑張ります！！

四十二話 再び時は流れる（前書き）

前話の三年後の原作始動チヨイ前くらいの時間軸。
彼女が彼を名付けた。
そんな話。

四十二話 再び時は流れる

「で、あるからして」

「しかし、それは時期尚早では？」

「こんなにも、多く出るからには早に手配せねばなるまい」

「・・・まずは、賞金額と、二つ名をどうするかだ」

「（めんどくさい・・・）」

先ほどからどうとうめぐりの会議にポーカーフェイスを決めながら、内心眉を思わず寄せた。

正直わずらわしい。どうでもいいのに。

舌打ちをしそうになったが、貴族の娘らしくないと喉の奥にひっこめる。

海軍将校としても普通の女としても行儀が悪いだろう。

しかし、面倒だ。

会議がこんなに実りもなく滞るのだったら、部下達に任せた下士官の訓練に参加したかった。

今年はなかなかふてぶてしく、肝の太そうな輩が多く入ってきたのだ。

まあ、それは別にしごき倒す気満々なのだから別にいいのだが・・・。

体のいい問題児兼厄介者収容部隊になっている気がする。
多分、いや絶対にそうなんだろうけど。

「（マーリンの言うとおりに変わってもらえば良かったかもしれない）」

内心、会議でばれたらまずいことを考えながら、手配書に使われる写真候補に目をやる。

もうはるか昔の記憶の中の面影と僅かに重なる写真があった。
麦わら帽子に目の下に傷、手配書の中では珍しくにかりと笑う海賊だ。

「ブランニュー大佐」

「何でしょうか、エーデルシュタイン少将」

とある海軍将校が、海賊になって。

私は准将から一階級上の少将になった。

今までの海軍史上最年少だそうだ。

私はもう二十歳なのに最年少。

三年前は准将だった。

手がらがあるのに昇進が三年間なかった（叙勲だの、臨時賞金やはされたけど）。

その理由は私が年若だったのと、若輩者に少将に多大なる責任を背負わせるのはどうなんだ、という優しい方々の否定と、率いる部隊の別称の為だ。

私の率いる部隊名は海軍本部第13艦隊。

別名、問題児の楽園、天下無用の問題児集団、死神隊である。

実力がある癖に性格がひん曲がってる、一筋縄ではいかない連中が

ぶち込まれる所だ。

その手綱を握っているのが、私。

まあ、対外的にはそういうことになっている。

噂では私は問題児の主でスレイプニールの王様らしい。

一番背景が分厚くて地位が高くて血に価値があるから、そう思われているのだろう。

私は一人では全てをまともにまとめあげることが出来ないから、大分親愛なる部下達には頼っているし。

一人で出来るのは書類を書いたり、下士官の訓練を指導したり、やっぱ書類仕上げたり。

そんなもんだだけだ。

一人一人に、絶対に、一番力が引き出せる位置にはどうにかしてでも座らせてるけど、

部下が一番力を引き出せて使える位置に引っ張り上げて、させるのは上司として普通の事だし。

ふむ、こう思い返して考えても、特に誇るべき事じゃないな。

「・・・まだ二つ名も賞金額も決まっていない写真を見せてくれ、君達ばかり熱中して私は真面目にそいつの顔を見ていないんだ」

そういうと、ブランニュー大佐は慌てて、まだ二つ名も賞金額も選定していなかった海賊の写真と資料を私に手渡した。私に問われるまで私の分の資料がなかったことに気付いていなかったらしい。

僅かに瞳を緩め、怒るかどうか考えたけど。

別に私の部下じゃないんだから知らない。

特に何かを告げるわけでもなく資料に目を落とした。

正確には、落そうとした。

写真に目を奪われた。

遠い昔に見たことのある面影を色濃く残した端正な顔立ち。
燃えるような真っ赤な髪。

この手配書じゃ見えないけど、真っ直ぐな光を帯びた紅の瞳。
夢を笑い飛ばす人間を笑い飛ばしているような、口元。
メイクやらなんやらが変わっているけど、これは、

キッドだ。

「こいつは、南の海のユースタスという海賊なのですが、
サウスブル
格で民間人に多くの被害を与えています」

説明を加えてくる大佐の声も耳に上手く入ってこない。

どこか遠くで耳鳴りがした。

ひゅっと喉が僅かに軋んだ音を立てる。

瞳の瞳孔が僅かに開くのが分かった。

しかし、どうにか感情を相手に悟られてないくらいには
ポーカーフェイスは上手くなっているらしい。

面白いくらいに気付かれない。

こんなに心が動揺して揺れているのに気づいてもくれない。

あいつなら、気付くのに。

そんなことを考えた自分に毒づいた。

あいつはもう海賊で敵だ。

自分の甘ったるい嗜好が嫌になる。

「 、でしてな」

ブランニューの声を横切つて封じ込めた。

「 “ キャプテン ” ・キッド」

「 はっ・・・?」

心底分らないと言つた表情のブランニューを筆頭の会議の人員を視線で黙らせる。

こいつには、コレ位の名前じゃないと釣り合わないだろう。
夢を馬鹿にされなければ、民間人に被害をほぼ与えない夢追い人。
生粋の海の男。

「 この海賊は、ユースタス・ “ キャプテン ” ・キッド、これくらいの名が似合いだ」

「 きゃ、キャプテンですか?」

「 そうだ。資料を調べてみたら、夢と船員を馬鹿にされなければ懐の大きい男の様だ。ならば、キャプテンの二つ名を与えても遜色あるまい」

会場が一気にざわめくが、否定的な意見は出ない。
決まりだな。

資料をブランニューに返す。

「 ど、どちらへ・・・?」

「修練場。部下が待っているの。後は悪いがそちらで決めてくれ」

それだけ告げて踵を返す。

もう会議は終わっていても可笑しくない時間だったこともあってか、それとも私があの中で一番上司だったからか、

文句を言われることは無かった。

後は裏方の事務の方々に賞金額を決めてもらった方がよろしかる。

この地味にテンパった思考を落ち着けたいというもくろみもあつたけどな。

四十二話 再び時は流れる（後書き）

次回はマーリンを出します。

全力で彼を・・・したいです。

次も頑張ります!!

四十三話 実は結構追い詰められてる（前書き）

お互い実はいっぱいいっぱい二人の話。

優しすぎて貧乏くじをひく上司と、煮詰まってる部下。

思考回路は空回って、暴走中そんな感じ。

四十三話 実は結構追い詰められてる

SIDE：シャルロッテ

会議室を出て、しばらくはゆっくりとした歩幅で歩いていた。曲がり角を曲がり、会議室が見えなくなって、人がほとんど通らない廊下になった。

廊下を音を立てずに駆け出す。

そうとう、気持ちが悪い。

ガラス窓に映る自分の顔は真っ青だった。

ある意味、予想道理。

どんだけ、メンタルが弱いんだ。豆腐も真っ青だ。

昔の、何も守れなかった子供よりも強くなった。

強くなった

はずなのに。

私は、こんなにも脆いんだよ！！

「（何で、どうして、なん、で、ドウシテ。君は・・・海賊になんて、なったの）」

思考はそればかりを考えて空回る。

「（知っていたくせに！君が海賊になれば、私と敵になるってことを！！）」

知っていたくせに！！

支離滅裂な思考だと分かっている。
めちゃくちゃな思いだと知っている。
叫んではいけない言葉だって、分かっている。

それだけど、思わずにはいらなかった。

だつて、ずるい。
ずるすぎる。

自分は夢に生きるくせに、人の事をがんじがらめにして離さない。
ずるいんだよ！！
卑怯者が！！

心の中で嵐のように思考が揺れる。

視界が歪む。

いつのまにか目には涙が滲んでいた。
手で乱暴に瞼を拭う。

動悸が激しくて、目眩がした。
ぐらぐらと世界が揺れる。

取り繕った感情は、取り繕えていなかったみたいだ。
終わったと思っていた恋は、終わってなんかくれなかった。

畜生。

なんで、なんだ。

なんで離せないんだよ。

なんでこんなに私は弱いんだ。

なんであいつが、手配書に現れたことだけでこんなに惑うんだよ。

海軍として、海兵として思っちゃいけないことなのに。

そんな感情を抱いてはいけない奴なのに。

そこまで思った時、心臓がわしづかみにされた気分になった。

私はまだ、あいつのことを慕っている。

そんな事に、気付いた。

背筋が凍った。

あいつは敵なのだ。

しかも、滅多にいない豊作のルーキーの筆頭。

敵にしかならない奴なんだ。

あいつと戦う時があったとして、私は、あいつに剣を向けられるのか……？

分からない。

その答えにゾツとした。

思わず口を押さえる。

悲鳴のような嗚咽が喉の奥から漏れた。

……こんなの、こんな考え、海兵として失格じゃないか。

咄嗟に目に飛び込んで来たドアノブを何も考えずに引つ掴む。

古い資料室に飛び込み、扉を勢いよく閉めた後、ずるずると冷たい床に座り込んだ。

はじめて、じぶんのことをこわい、と思った。

SIDE：マーリン

あの人を探すために指揮権をガウエインに渡した。

ガウエインも会議の内容を知っていたのか、何も言わずに指揮権を

受け取ってくれた。

後で、何か奢ります。

そう言ったら、彼はにやりと笑った。

わかった。

それだけ答えて、彼は下士官と部下達をしごきに向かってくれた。寡黙気味なのに、こういう所が同性から見ても文句なしにかっこいい。

こういう時、何も聞いてくれない人間は私は好きだ。

カッン、カッンと皮靴で廊下を走らずに競歩の速さで歩きながら、限りなく薄く広げた“魔女の霧”で辺りを調べる。

あの人はどこだろう。

強い癖に、弱くて、弱い癖に、誰よりも強い人。

最初は強いと思っていた。

だけど、その人は誰よりも優しく誰よりも強いのに脆い人だった。アンバランスさにはらはらして見守ろうと決めていた。

それなのに、

どんなところでも、目が気がつくとおの人の姿を探してた。

耳が、あの人の声を探してた。

驚愕したけど、それでもいいと思った。

守りたいと、初めて思えた人だった。

涙を拭ってあげたいと、笑っていてほしいと、心の底から願えた相

手だった。

初めて、自分の横に居てほしいと思った人だった。

誰よりも幸せになつてほしいと希^{こいねが}う、女^{ひと}性。

私が好きな、ひと。

それなのに、あの人は別の人が好きで。

それを知っていてもあきらめられなくて。

それを打ち明けることもできなかったのに。

こうも、ずっと一人の事を思っている。

いつか、自分の事を想ってくれないかと浅ましい想いを胸に抱いて。

「（馬鹿らしい・・・）」

今だって、傷ついていると知っていて、慰めようと思つていると同時に、

弱みに付け込もうとも考えている。

自分のこういうところが嫌いだ。

慰めようという友人への思いと、えげつない事を実行してやろうという思いを同時に考えられる思考。

自分のその節操のない思考方法。友人以外ならいいのに、極めて私の思考は平等だった。

大切にしたいと思つている友人にさえ、無意識にしている時もある。それが大嫌いなのだ。

「（・・・考えるな）」

今は、速く、行かなければ。

きつと、苦しんでる。

器用な癖に、不器用な人なんだから。

好きな人に泣いてほしいと思う男はいない。
人気が無いのを確認して、霧のサーチに引っかかった場所に向かってダッシュした。

四十三話 実は結構追い詰められてる（後書き）

自分の事をこわく思ったのは、自分が助けられたのは海兵の父なのに、海賊のキッドに手を出せないと気付いて、父を裏切っていると考えたから。

自分の事が大嫌いになりそうな勢いです。

これから頑張ります！！

四十四話 マーリンの告白（前書き）

実は色々ギリギリだったマーリンの話。
結構必死。

*少女マンガっぽい感じ（作者的に）。
苦手な方はご注意ください。

四十四話 マーリンの告白

SIDE：シャルロッテ

友人^{マーリン}が、ぽつりと零す。

「優しすぎて、傷つくのが怖くて、自分を表に出せないんですね……」
しみじみと告げる言葉のひとつひとつに追い詰められていく。
なぜなら思い当たる節の方が多いからだ。

「貴女は新しい恋でもしてみたらいい」

真っ直ぐに赤の瞳が私を射抜く。

昔、側にいた、あいつの赤の瞳と重なる。

心臓を鷲掴みにされてしまった。

・・・逃げられない。

「恋によって得られる情愛を思い出しせばいい。その感情に、喜びも親しみも愛情も感じたでしょう？」

真剣に見つめる赤の瞳から目が離せなかった。

マーリン・ウォーロック。私の部下であり、同期の友人で、同僚でもある男。

結構長い付き合いだが、こんな事に軽口をたたく男ではない。

何故、だ。わからない。なんで逃げられない。

押さえつけられている訳でもなく、自由なのに。

何故体が動かない。冗談だろう、不自然だ。こんなに私は弱かった

か。

「それは、知っている。だけど、私は」

全部、あいつに渡してきた。

そう言うともーリンの方が辛そうな顔をする。
見たくなくて視界をそむけた。

私は恋によつて得られた暖かさも、優しさも、知っている。

それを失くした時の寂しさも知っている。
だから、もう欲しくない。あの寂しさをもう二度としたくない。

……笑うしかない。

呉藍の少将と呼ばれ、海賊に氷の女王と呼ばれても、結局は女々しい女なのだ。

酷く自分が気持ち悪い。どうして、こんな、醜すぎる。

正直、気持ち悪い。吐き気と怖気が止まらない。

「私だって、そんなこと知っています」

じゃあ、なんでそんなこというんだ。

その言葉を紡ごうとした唇に当たる、若干乾燥した柔らかい感触が。
目に映るのは、真紅の瞳。

な　　ん　　で

「ひっぱたかれても、罵られてもいいです。
れて構いません」

抵抗してく

ただ、真つ赤な瞳が熱を持って私を覗き込む。
手が頬の横に添えられた。

その手はひどく柔らかくて、優しい、それなのに、

「私と、恋をしてくれませんか」

戯れでは無いと、知らせるような真剣な声色だった。

SIDE: マーリン

歯を食いしばった。

そうでもない、泣いてしまっただった。

それぐらいの気持ちの吐露だった。

（お願いです、どうか私を見てください。あの海賊と比べないでください）

その言葉は声にならずに消えた。

[illegible]

私はこの人に恋をしている。

そしてこの恋は、この想いは秘密にしておかなければならなかった。

不毛すぎる、想いで気持ち。
どうしようもない、想いだった。

この人は、ただ一人に心を捧げている。
この人が愛しているのはこの人を愛することができないであろう海賊
で。

それでもこの人が愛しているのはその海賊で。本当は海賊もこの人
を愛していて。

私がどれほどの言葉を捧げても、きっと、この人の心には届かない。
そんなこと知っているのに。

知っていたのに。

気が付いたら、キスをしていた。

いつも真剣な光を帯びた緑の瞳は、見開かれ。
ただ、呆然としている。

ふらりと震えながら彼女は口元に手を当てた。
無自覚に体が後ずさっている。

無理もない。

いきなり部下であり友人である男にそんなことされたのだ。
動揺を悟られてもなんら恥ずかしいわけではないのだ。

罵られても、殴られても、構わない。
それでもいいから、こうしたかった。
それでもいいから、一度でもこうしたかった。

どうしても自身の想いを伝えなかった。

呆然と目を見開いて、動けないでいるシャルロツテの頬に手を添え

る。

ふれた頬は暖かくて、柔らかくて、滑らかだった。

びくりと肩が揺れたのを目にしなかったふりをして、顔を近づける。

泣きそうなくらい綺麗な翡翠がこちらを見据えてくる。

何時もなら透き通っている瞳は、僅かに涙にうるんでいた。

（あ、やっぱり綺麗な・・・）

これから、拒絶されるか否かによってもう見られないかもしれない瞳だった。

これが世界で一番美しい。

一番綺麗な色なのだと思う。

そのようなつくしいあおがかったみどり。

それを静かに目に焼き付けた。

ごくりと、緊張で喉が鳴る。

冷や汗が背中を静かに伝って落ちていく。

一拍置いて、言葉を投げかけた。

「私と、恋をしてくれませんか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8295n/>

呉藍の雪～海兵さんの奮闘記～

2011年10月7日10時39分発行